なぜ私はムスリムなのか

イスラムを信じるための証拠

理神論への答え

ジャネル・タスラマン

娘のメリハ・タスラマンに捧ぐ

目次

序文……7

第 1 章　クルアーンと宇宙……11

1-1 始まりがあった宇宙……12

1-2 膨張する宇宙……19

1-3 ガス状の段階にあった宇宙……24

1-4 終わりのある宇宙……27

1-5 設計された宇宙……32

1-6 相対的な宇宙……38

1-7 対照に基づいて築かれた宇宙……45

1-8 太陽と月……48

第 2 章　クルアーンと地球……51

2-1 地球の層……52

2-2 守られた天井……56

2-3 地球の形状……61

2-4 天に上昇するように……64

2-5 山とその根……66

2-6 境界を超えない海と海底の暗闇……69

第 3 章　クルアーンと生命……77

3-1 呼吸の始まりと朝……78

3-2 雌蜂……80

3-3 雌蜘蛛の家……86

3-4 混合液体の一滴……89

3-5 子宮の壁にぶら下がること……94

3-6 子宮内での増加と減少……98

第 4 章　歴史からの印……100

4-1 人類の歴史……101

4-2 クルアーンと考古学：サバ族の例……106

4-3 メッカの征服……110

4-4 ローマ人の勝利……116

4-5 ファラオの遺体……123

4-6 トーラーと旧約聖書（タナハ）の他の書物における印
……130

4-7 福音書における印……144

4-8 クルアーンにおけるイエスとマリア、およびアポクリファ（外典）
……162

第 5 章　ムハンマドの分析……178

5-1 ゼロ地点から歴史上の大役を担うまで……179

5-2 ムハンマドは「嘘つき」であるという主張……186

5-3 ムハンマドは「精神疾患者」であるという主張…192

5-4 ムハンマドは「神の使徒」であるという主張……202

5-5 クルアーンのスタイルとムハンマド……208

5-6 現代技術を用いたクルアーンとムハンマドの言葉の比較
……218

第 6 章　フィトラ（人間の本質）からイスラムへ……227

6-1 自然な欲求からイスラムへ……229

6-2 生得的な道徳観からイスラムへ……240

6-3 理性からイスラムへ……265

6-4 意志からイスラムへ……270

6-5 意識と自我からイスラムへ……273

第 7 章　イスラムと意味……279

7-1 どうすれば人生は意味あるものになるのか？なぜ私は創造されたのか？……280

7-2 私はどこへ向かっているのか？-カリスマ・金銭・性欲の追求-
……285

7-3 孤独からの解放：永遠に共にいてくれる存在……294

7-4 「神なんて、宗教なんてどうでもいい」と言う人々
……303

7-5 意味、善、正当性、美の共存……309

第 8 章　クルアーンとそれが築く思考様式……325

8-1 正義……326

8-2 思想の自由……330

8-3 統治の原則……338

8-4 戦争倫理……343

8-5 弱者を守る……351

8-6 科学的思考と動機付け……362

8-7 環境意識……376

8-8 クルアーンの意図的な沈黙……380

第 9 章　　神の存在と名称を伝えるクルアーン……386

9-1 神の存在を礎に確立される宗教とメソッド……387

9-2 神の名称を介して神を知る……392

9-3 宇宙から学ぶ神の名称とクルアーン……394

9-4 フィトラから学ぶ神の名称とクルアーン……401

第 10 章 保護されたクルアーンと数学的尺度……408

10-1　保護されたクルアーン：フルーフィズムと数学
……409

10-2　クルアーンの構造における対称性とリング構造について
……422

10-3　宇宙と語句の調和における数学……435

10-4　語句の調和における数学……462

10-5　クルアーンにおける「偶数と奇数」に基づく尺度
……505

補足：来世を信じるための礎……539

あとがき……554

序文

　私たちは、彩り豊かな美しい世界に目を見開いた。大空が広がり、草木や動物が育ち、愛する人々がおり、幾多の芸術や技術に溢れるこの世界は、何と生き生きとしていて、何と胸躍ることだろう！しかし、それが何になるのか？人生は短く、私たちも、愛する人々も、いつかは死の暗い扉を潜る。そんな中、私たちの脳裏にはすぐに、「私たちはどこからここに来たのか？」「私たちをここに連れて来たのは誰なのか？」「誰が私たちにこの手、この足、この目を贈ったのか？」「私たちは死ぬとどこへ行くのか？」「これですべてなのか？」「その先はないのか？」「この胸の奥底から迸る問いの答えはないのか？」という問いかけが浮かんでくる。

　その答えは、ある。胸の奥底から迸るこれらの問いかけに、答えはあるのだ。クルアーンは、それに最良の答えを示し、端的にこう語る。

－あなたたちを創造したのは、高い偉力と叡智を備え、無始無終の、慈愛深く慈悲深い神である。神のおかげで私たちはこの世に生を受け、あらゆる恩恵を享受し、愛する人々がいる。この世は試練の世である。この宇宙に在る一切を無から創造した神にとって、それらを再び創造するのはごく簡単である。死は通過点であり、決して終焉ではな

く、再び創造されることも夢物語ではない。神は来世で、神が愛し、そして神を愛する被造物たる人間に再び恵みを授けると約束した。注意せよ、私たちは来世で、現世の行為により審問を受け、それにより裁きを受けるのだ…。

はたしてこれらは根拠のない主張だろうか？空虚な夢だろうか？胸の中で燃え上がる願望を鎮めるために、私たちは自分を欺いているのか？何がその証拠なのか？本当に、ムスリムであるための堅固で確かな理由はあるのか？クルアーンが神から送られたことを証明するにはどうすればいいのか？

本書では、こうした途方もなく重要な問題を取り上げ、次の問いに答えようと努めた。

「私はなぜムスリムなのか？」

この問いへの答えは、私たちがなぜここにいるのか、何をすべきか、どこへ向かっているのか、愛する人々と死別した後に再会できるのか、できないのか、という問いへの答えである。これらよりも重要なことがあり得るだろうか？こうした問いへの答えを示すことは、クルアーンが神から送られたことを信じるべき理由を示すことであり、私は本書を通してそれを実現しようと努めた。

本書では、ムスリムであるための合理的な証拠を集めた10のメインテーマを10章にわけて分析した。そのうちの（さらにはサブテーマの）どれか1章だけで、ムスリムで

あるために十分たり得るものもある。そして、ここで着目すべき極めて重要な事柄は、この様々な理由のどれもが同一の結論に導くよう作用していること、つまり「総体的な状況」を導き出す作用を持つことである。

私はこれまで参加してきたテレビ番組やセミナー、学生たちとの対話の中で、イスラムを信じるための証拠を示すこと、その証拠を分かりやすく説明することの重要性を何度もかみしめ、本書を執筆することが重要だと考えるに至った。本書には、これまであなたが見たことのある証拠もあれば、本書で初めて目にするかもしれない極めて独特な証拠（フィトラ、つまり人間の本質についての章など）もある。

本書で証明しようと努めた事柄は、イスラムの何らかの宗派や学派に特有の信仰ではない。ムスリムを名乗るすべての人に共通しているのは、クルアーンは神から授けられたという信仰であり、それがイスラムの支柱になっている。そのため、イスラムに自分の居場所があると感じている人は誰でも、本書で示す証拠を活用することができる。

本書を読んだ後は、あなたの判断に任せたい。私たちは自分を騙しているのか、それともクルアーンが神から授けられたことを信じるための、つまりムスリムであるための健全で確固たる証拠はあるのかということを。

本書を執筆するにあたり、多くの友人がそれぞれの専門分野に関して本書に貢献して下さった。その中には、アルペル・ビルギリ氏、フルカン・オズチェリキ氏、イスラフィル・バルジュ氏、メフメト・オクヤン氏、ムサ・ブダク氏、オメル・ウルジャル氏、ヤシン・カラ氏、ザフェル・ドゥイグ氏がいる。この友人たち全員、このほかにも本書の執筆に貢献して下さった方々、そして本書を手に取って下さったあなた方読者の方々にも感謝申し上げたい。コメント、批評、提案があれば、私のウェブサイト www.canertaslaman.com までお寄せいただきたい。

第１章

クルアーンと宇宙

私たちは目を見開くと、果てしなく広い宇宙の中にいる自分を見い出す。宇宙は巨大で、驚愕的なまでに壮麗で、星、太陽、月があり、魅惑的な美しさを持つ。私たちも宇宙の一部であり、宇宙に関する視点は自分自身に関する視点と密接に関わっている。イスラムが神から送られた宗教かどうか判断しようとする者が着目することのできる分野に、宇宙に関する（宇宙学）イスラムの視点は何かというものがある。このような重要なテーマにおいてイスラムの視点を知り、検証することは、イスラムについて判断を下そうとする者にとって特に肝要な論題であるといっても過言ではない。

クルアーンはムスリムに、宇宙を精緻に観察し、宇宙で起きている現象から結論を導くよう促す。宇宙に関する知識に宗教上の価値があることは、一度でもクルアーンを読んだことがある者ならすぐに気付くメッセージである。クルアーンは、宇宙を観察するよう促しつつ、宇宙に関する重要な確言を示している。宇宙に始まりがあること、宇宙が設計されたこと、いつか終焉を迎えることは、宇宙に関するクルアーンの重要な確言の例である。宇宙に関する私

たちの知識は、人類がクルアーンに出会った 7 世紀に比べて大きく進歩した。宇宙は、どの時代にもなかったほど発達した望遠鏡により観測された。宇宙に送られた宇宙船による新たな発見もある。現代の私たちが持つ知識は 7 世紀の人々が得られるものではなかったものの、クルアーンに記された数々の確言が正しいことを示しており、本章ではそれらを論証していく。クルアーンに記されたこのような驚異的な確言もさることながら、クルアーンがその啓示の時代と環境における誤った認識を含んでいないことも重要である。「私はなぜムスリムなのか」への答えとして本章を構成するのは、宇宙に関してクルアーンが説明している内容である。

1-1 始まりがあった宇宙

イスラムの、唯物論・無神論そして多神教との間の最大の違いの一つに、宇宙は創造されたものであるという確言がある。

バカラ（雌牛）章 2-117：天と地を創造したのは神である。かれが一つの事を望めば、ただ「為れ」と言い、そしてそれは為る。

創造されたものという思想により、宇宙が存在しなかった瞬間と、後に創造されたことの動きがあったことから、宇宙には始まりがあったという論が提唱されている。カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスは、先に存在したのは神なのか、宇宙なのかという問いは理想主義（この言葉により特に一神教を指していた）と唯物論の間に横たわる最も核心的な問題であり、哲学者たちはこの問いに対する答えによって大きく二手に分かれ得ると述べた[1]。唯物論・無神論を擁護する者は、先に存在したのは宇宙であって、後から偶然この宇宙に現れた人類が神を想像の産物として捏造したと主張する。一神教は、先に存在した神が宇宙を創造したと述べる。その結果として、唯物論・無神論と一神教を決定的に区別するこの問いを、同じ意味を持つ二つの問いに引き下げることができる。

1.先に存在したのは神か、宇宙か？

2.始まりがあったのは神か、宇宙か？

二つ目の問いにおける神の始まりとは勿論、人間の思考の捏造の産物としての「神」という発想に始まりがあったことを意味している。これはつまり、「神」は想像以外の何物でもないという存在認識（唯物論・無神論的存在論）

1 Karl Marx and Friedrich Engels 著, Études philosophiques, 訳者： Sevim Belli, 出版元：Sol Yayınları, İstanbul, 1997, p.22

を擁護している。この基本的なテーマにおいてどちらの論題が正しいかを理解するには、宇宙に始まりがあったかどうかという問いが肝要である。極東の宗教でも、宇宙は無始であり、始まりを持たないという視点が主要である。クルアーンの「創造された宇宙・始まりを持つ宇宙」という確言は、宇宙に関する数々の確言の一つであるだけでなく、存在認識に関する核心的な確言でもあり、イスラムと、他の異なる見解を区別する重要な要素である。

もしハムレットの「存るか無いか、それこそが問題だ」という台詞を、唯物論哲学のイデオロギーが自らの哲学を言い表すために模倣するとすれば、おそらくこうなるだろう。「宇宙は無始であるかないか、それこそが問題だ」と。宇宙には始まりがあったという科学分野の最初のデータはエントロピーの法則とともに示された。エントロピーの法則は、熱力学の第二の法則としても知られ、特に 19 世紀後半のルドルフ・クラウジウスの研究により明確に提唱された。この法則により、エネルギーが常に高可用性の形式から低可用性の構造へと変化することが述べられている。つまり、宇宙では無秩序性が常に増大しており、それは一方向的で不可逆的な過程である。アーサー・エディントンは、エントロピーの法則は全ての自然法則の中でも最も重要な地位を占めると語った。エディントンは、宇宙に関する諸理論は、マクスウェル方程式、さらにはそれまでに行われたいくつかの実験と調和せずとも正確であるチャ

ンスはあり得るが、エントロピーの法則と矛盾すれば、正確であるチャンスは皆無であると述べている[2]。一方向的な過程は、終わりを告げる伝令である。人間の老いの過程も、エントロピーの増大も同様である。科学界ではまず、エントロピーの法則と宇宙における無秩序性が常に増大していること、永遠に続くことのないこの過程が宇宙の終わりを必然的なものにすることが理解された[3]。本来この結論は、宇宙に始まりがあったことも意味する。その内容の要約は次のとおりである。

1- 宇宙におけるエントロピーは、不可逆的に常に増大している。

2- それによると、宇宙ではいつか熱力学的平衡が成立し、熱に死が訪れる。つまり、宇宙は無終ではなく、終焉を迎える。

3- 過去が無始であるとすれば、宇宙には熱力学的平衡があるはずで、運動はないはずである。

4- 目下、運動は続いている。

---

2 Arther Eddington 著, The Nature of the Physical World, Macmillan, New York, 1929, p.74

3 哲学ではまず、キンディーやガザーリーなどのイスラム哲学者が、宇宙には始まりがあったはずであるいうことを、「永遠」という概念を分析するなどの思考により示した。しかし、多くの人々にとって難解なこの論証は哲学分野にとどまり、宇宙に始まりがあったという論証は、エントロピーの法則により、科学的データを用いることで初めて可能になった。このテーマの詳細については拙著「ビッグバンと神」を参照されたい。

5-　つまり、宇宙は無始ではない。なので、宇宙は始まりを持つ。

科学者たちは、エントロピーにより宇宙の終わりは必然的なものであるという課題に集中してきたが、宇宙に始まりがあったことが必然的なものであるという課題には十分に着目してこなかった。しかし、科学・哲学・宗教の分野における議論にとっては、宇宙に始まりがあったかどうかということの方が重要である。宇宙に始まりがあったという発想の最も強力な科学的裏付けは、1920 年代に端を発するビッグバン理論により行われるようになった。1920 年代にベルギーの物理学者、ジョルジュ・ルメートルとロシアの物理学者アレクサンドル・フリードマンは、アインシュタインが発展させた一般相対性理論に基づいてビッグバン理論の礎を築き、後年この理論を裏付ける多くの証拠が提唱された。拙著「BIG BANG AND GOD」では、なぜこの理論が科学的・哲学的な基準から的確な理論であるかを、この理論が観測データで裏付けられていること、その確固とした数学的構造、代替的なあらゆる見解に優るその特徴などに基づいて示そうと努めた[4]。ビッグバン理論が提唱された後は、私たちが観測する宇宙の始期の計算や、その始期から後の過程に関してより詳細な知識が得ら

4 Caner Taslaman 著, Big Bang ve Tanrı, 出版元：İstanbul Yayınvei, İstanbul, 2017

れるようになった。今や、私たちがいる宇宙に始まりがあったかどうかでなく、この始まりが一体いつであったかということが議論の的となっている。最新のデータはこの始まりが 138 億年前であったことを示している。この理論によると、宇宙は非常に高温の、非常に濃密な点として始まった。その始まりにおいては全ての星、そして私たちを構成する全ての原料がこの非常に小さな点の中にあった。クルアーンが、かつて全宇宙（クルアーンは全宇宙を「天と地」と呼んでいる）が一か所にあるという状態が存在したことに注意を促していることは、宇宙論に関するクルアーンの驚異的な表現の一つである。

アンビヤ（預言者）章 21-30： 否定する者たちは、われらが天と地が一体だったときにそれらを分けたこと、全ての生物を水から創造したことが見えないのか？それでも彼らは信じないのか？

この節で、天と地が始めは一体であったことが、アラビア語の“ratk”という言葉で表されている。この言葉は組み合わさった状態で融合することを表す。クルアーンのこの節のアラビア語の“fatk”という言葉は分離するという意味である[5]。宇宙の始まりにおいて全てが一体だった（ratk）時期があり、その後分離（fatk）が起きたのと同様に、太

5 Ragıp el-İsfahani 著, Müfredat, 訳者：Abdulbaki Güneş, Mehmet Yolcu, 出版元：Çıra Yayınları, İstanbul, 2010, p. 413, 777.

陽系と地球の原料が一体であり（ratk）、その後（約 45 億年前）太陽系、他の惑星、そして地球が現れたという分離（fatk）が起きた段階もあった。この節は、この二つの状況のうち一つのみを指しているとも、両方を指しているとも考えられる。ビッグバン理論が正しいことは、宇宙にある衛星と望遠鏡から送信されるデータによって証明された。ビッグバン理論が提唱される前、人類は、宇宙の全てが一体であり、その後分離が起きたことの科学的な論証を持たなかった。太陽系が一体の状態から分離することによって成立したという科学的理論も、クルアーンの啓示から 1000 年以上経ってから打ち出された。こうした知識を科学的データから乖離して、思考によって得ることは不可能だろう。では、宇宙を観測する巨大望遠鏡と衛星が宇宙に送られる 1300 年前に生きた預言者ムハンマドは、全てが一体だった状態から分離によって天と地が現れたということを、どうやって語ることができたのだろうか？ムハンマドが人々から衛星を隠し持っていたと言う者はいるだろうか？宇宙論にとってこれほど重要な事柄が正しいということが口から出まかせの推測であると言うのは、道理に合わないことではないだろうか？

　現代宇宙論は、クルアーンが確言する「始まりのある宇宙」を裏付けるのみでなく、クルアーンが述べるとおり、宇宙にあった全ての原料が一か所にあった状態から分離が起きたことも事実であることを肯定する。クルアーンのこ

の節の「それでも彼らは信じないのか？」という言葉も意味深い。歴史もこの指摘が正しいことを認め、全ての証拠が示されたにもかかわらず、信仰しない人々の多くは否定し続けた。宇宙の始まりがあったことデータが示しているにもかかわらず、唯物論者・無神論者は頑なに信仰せず、クルアーンにおいてこの節以外の類似した驚異的な文言が正しいことが証明されているにもかかわらず、クルアーンが神から送られたことを否定し続けた。

1-2膨張する宇宙

宇宙の全てを上から眺めることができるとすれば、私たちはおそらくまず、「宇宙は膨張している」と言うだろう。非常に高温の、非常に濃密な一点は、138 億年前に膨張し始め、その時から膨張は絶え間なく続いている。あなたは、本書を読み始めた時からこの瞬間までの間に一層膨張した宇宙に生きているのだ。宇宙が常に膨張していることは、宇宙に関する数々の知識の一つであるだけではなく、一部の物理学者にとっては宇宙に関する最も重要な知識である。

宇宙が膨張していることが判明したことで、何千年にもわたり哲学史・科学史で激論が交わされてきた思想史の非常に重要な問いに答えることが可能になった。「宇宙は限りなく永遠に広がっているのか？それとも宇宙には境界が

あるのか？」という問いに対し、哲学者と科学者は次の三通りのアプローチを示したと言える。

アリストテレスを含む第一のグループは、宇宙には不動の境界があると主張した[6]。

ニュートンを含む第二のグループは、宇宙は境界を持たず永遠に広がっていると述べた[7]。

カントを含む第三のグループは、理性ではこのジレンマを解決できないと語り、不可知論的立場を取った[8]。

多くの人々が解決不能だと考えたこの問題において、1920 年代にアインシュタイン方程式に基づき、ジョルジュ・ルメートルとアレクサンドル・フリードマンがそれぞれ独自に、宇宙は理論上膨張しているはずであると述べ、これが転換期となった。それから短期間のうちに、ハッブル宇宙望遠鏡の観測によりこの現象が観測上も正しいことが確認された[9]。あらゆる観測や発見が行われ、それらがこの現象を裏付けた。アリストテレスが考えたように、宇宙に不動の境界は存在しないこと、ニュートンが考えたように、境界のない宇宙というモデルが正しくないこと、カントが考えたように、この問題が解決不能ではないことが

---

6 Aristotle 著, The Complete Works of Aristotle, Jonathan Barnes, New Jersey, 出版元：Princeton University Press, 1984, On The Heavens, Bk, I, Ch, 9.

7 Newton 著, Philosophical Writings, 編者： Andrew Janiak, Cambridge, 出版元：Cambridge University Press, 2004, p.23

8 Immanuel Kant 著, The Critique of Pure Reason, 訳者： J.M.D. Meiklejohn, Chicago, William Benton, 1971, p.135-137

9 Stephen W. Hawking 著, Zamanın Kısa Tarihi (A Brief History of Time), 訳者：Sabit Say and Murat Uraz, İstanbul, 出版元：Doğan Kitap, 1988, p. 47-53.

判明した。宇宙には、常に膨張する動的な境界があるのだ。これほど重要なこの現象について、クルアーンは、科学的な裏付けがなされる 1300 年前に次のように述べている。

ザリヤート（撒き散らす者）章 51-47：われわれは宇宙をわれわれの威力により築き、確かにそれを膨張させている。

この節は、宇宙と膨張とを関連づけるのみでなく、宇宙が常に膨張していることも伝えている。この一文は名詞文であり、アラビア語文法で進行形を表している。

この節で「膨張させている」と訳された言葉の主要な本当の意味は「膨張させる」である。ガザーリーも着目したように、基本の手法の一つは「反証がない限り、第一の意味こそが基本であるが、それを妨げる要素があれば比喩が生まれる[10]」。

この節で膨張させる者と訳される“musi”という言葉には「力を十分に備えた」「寛大な」などの意味もあるが、それらは第二の、つまり比喩的な意味である。宇宙が膨張していることが理解できない翻訳者はこの比喩によりこの節を訳している。そうした意味はさておき、第一の意味とし

10 Ebu Hamid el-Gazzali 著, el-Mustasfa, 訳者：H. Yunus Apaydın, 出版元：Klasik Yayınları, İstanbul, 2019, p. 514

ての「膨張させる者」を強調し、天が神によって膨張させられていると述べた人物にタビウーン（ムハンマドの教友に会ったことがあり、彼らと関係を築いた者）のイブン・ザイドがいる[11]。こうしたデータがありながら、この節の意味が現代において変化し、昔はこんな訳はなかったと非難することは、どんなに言い繕っても、言葉を知らないことと同じと言える。

私たちは、科学が示すデータにより、宇宙に不動の境界がないのと同じように、私たちが境界のない永遠の宇宙に生きているのではなく、宇宙には常に膨張している動的な境界があることを知っている。このことを 1920 年代より前に語った書物はクルアーンである。ムハンマドは天体物理学者であり、優れた装備の望遠鏡を砂漠に隠し持っており、そうして宇宙が膨張していることを発見したと言える者がいるとは考えられない。それに、宇宙が膨張していると口から出まかせで言っても微塵も説得力がない。しかし、クルアーンが伝えるように、クルアーンを啓示した者、宇宙と人間を創造した者の言葉であれば、それがクルアーンに記されているのはごく自然なことである。

---

11 宇宙が膨張していることが判明する前に、この節が宇宙が膨張していることを表していると述べたクルアーン解釈者たちがいる。Kadı Beydavi 著, Envarü’t Tenzil ve Esrarü’t Te’vil, 第 4 巻, 訳者： Şadi Eren, 出版元：Işık Yayınları, İstanbul, 2011, p. 267; Fahreddin er-Razi 著, Mefatihu’l Gayb, 第 20 巻, 訳者： Suat Yıldırım, Lütfullah Cebeci, Sadık Kılıç, 訳者： Sadık Doğru, 出版元：Huzur Yayınları, İstanbul, 2002, p. 386; İbnu’l Cevzi 著, Zadü’l Mesir Fi İlmi’t Tefsir, 第 6 巻, 訳者：. Abdülvehhab Öztürk, 出版元：Kahraman Yayınları, İstanbul, 2009, p. 17.

この例をもとに、頻繁に投げかけられる次の問いにも答えたい。その問いとは「現代科学によって発見された多くの現象をかつてクルアーンが伝えているのなら、なぜムスリムはそれらの発見をしていないのか？」というものである。そう問いただす者は、科学的発見や科学的手法の性質を知らないと言える。クルアーンで直接的に言明されていることでも、科学者たちはその因果関係を解き明かし、多くの場合、発明された道具を用いて必要な段階を経て発見に至る。クルアーンが数語で言い表した真実に科学的手法を用いて至るには大抵、何百年、さらには何千年もの科学的蓄積をつぎ込まなければならない。例えば、宇宙が常に膨張していることを発見するには、アインシュタイン方程式が成立し得る下地が整うこと、それを踏まえてアインシュタインが方程式を打ち出すこと、光学の進歩により望遠鏡が発明・開発されること、ドップラー効果など、望遠鏡での観測に用いられる科学的知識が提唱されること、また、何億ドルもの予算を費やしてハッブル望遠鏡を製造することなど、多くの段階を経なければならなかった。段階を経る途中で、宇宙が膨張していることの発見と同じように、全く予期しない結果が導出されることもしばしばある。科学の手法とその性質により、科学的手段を用いて諸々の段階を経ることは必然的なものになる。クルアーンは、現象について直接的な表現をしつつも、その現象を科学的に解明するための方程式や望遠鏡などの手段は示して

いない。クルアーンは科学の書物ではないが、その重要な文言には科学的テーマに関係するものがある。なので、クルアーンを読む者がなぜクルアーンが指し示す現象を科学的手法により発見できなかったのかと問う者は、科学的手法の性質とクルアーンの直接的言明について考慮していない（できていない）。「宇宙の膨張」に関するクルアーンのこの節を考察しつつここで説明したことは、現代科学とクルアーンの関係に関する他の多くの事例にも通用する。ここで発するべき筋の通った問いとは、ムスリムはなぜ、科学に携わるようクルアーンが呼びかけているのに、科学的進歩を遂げることができなかったのか、というものである。ここで咎めるべきはクルアーンでなく、ムスリムである。

1-3 ガス状の段階にあった宇宙

宇宙の初期に現れた粒子から水素とヘリウムの原子が形成された。今も宇宙に最も多く存在する原子はこの 2 つである。観測可能な宇宙の 4 分の 3 は水素、4 分の 1 はヘリウムである。鉄や炭素などの原子は宇宙の 100 分の 2 を構成している。水素とヘリウムの大きな特徴はガス状であることである。宇宙の膨張の過程において、これらガス状の原子が重力などの自然法則の影響で圧迫されて星が形成され、その後星が経た過程で酸素、カルシウム、鉄など宇宙

の 100 分の 2 を形成する他の原子が形成された。つまり初期の宇宙はガス状であり、現在私たちの目に映る全宇宙と全生物は、神が据えた自然法則の枠組みによりこのガス状の段階が変化した状態である。初期から後の段階において、太陽系と太陽系の内側にある地球も、ガス状の原子が圧迫を受けるなどの段階を経て形成されたものである。ガスの圧迫と濃縮による形成の過程は、宇宙の初期とその後に限った現象ではなく、宇宙で恒常的に続いているものである。クルアーンは、ガス状の段階を経た後に宇宙と地球が形成されたことに着目させている。

フッスィラ章 41-11：それから、ガス状の宇宙に向かい、宇宙と地球に「望もうと望むまいと、来い」と言った。両方とも「望んで来た」と言った。

クルアーンの節に見られる非凡な現象（奇跡）はどれ一つとして、その非凡な現象を見せるため、人々の知らないことを伝えるため、いつかその価値を理解させるため、奇跡を示すためだけに語られているのではない。クルアーンが 1400 年前に指摘した事柄の価値が現代科学により理解されることは「奇跡」だが、クルアーンのこうした節が啓示された目的は無論、それ以上のものである。クルアーンの節により神が私たちの目を向けさせる現象とそこから得

られる教訓も重要である。クルアーンの節の驚異的な表現は重要な事柄に関連している。例えば、この節にあるように宇宙と地球にある全てのものが以前はガス状の浮遊する原子であったこと、その後地球にある何百万という植物、動物、色とりどりの風景や音楽がこのガスの状態から変化して形成されたことを深く考えると、「これほどの生物や芸術作品が現れる前の原料だったこのガス状の段階から、これら全てが偶然の産物として形成されたことはあり得ない。この単純なガス状の段階からこれら全ての生物や芸術作品を形作る潜在性を意識的に据えた神は、この過程によりその力と業を示している[12]」という考えが浮かぶ。クルアーンのこの節は創造のすばらしさを示し、深く熟慮させるという重要な役割を果たす一方、クルアーンの啓示から1000年あまりを経て科学的に理解されることになる知識を伝えることで、その驚異的な特徴を示している。

クルアーンが人類に出会った7世紀、ムハンマドが生きたアラビア半島と世界の他の地域では、宇宙と世界に関して誤りであると現代ではすぐに言える事柄が多くまかり通っていた。世界が雄牛と魚の上にあったなど、今日では誤りであることが至極明らかな数々の宇宙論が謳われていた。クルアーンが7世紀の科学的水準、あるいは理性のみを働かせるのでは知られ得ない事柄を伝えていることを把

12 このテーマに関して、拙著「Allah'ın Varlığının 12 Delili」で示した4番目の証拠である「宇宙の可能性の証拠」を読むことをお勧めしたい。

握することほどに、クルアーンが当時のその地域の誤った信仰が伝えていないことを理解することも重要である。

1-4終わりのある宇宙

宇宙論に関するクルアーンの最も重要な言明の一つは、地球、太陽、星、つまり全宇宙が終わりを迎えることである。これは、クルアーンの多くの節に広く見られる見解である。クルアーンが啓示された時代、この非常に重要な言明が正しいことを示す科学的な裏付けはなかった。事実、当時の不信仰者たちがこのことに異論を唱えたことが、クルアーンの次の節から見て取れる。

サバア章 34-3：不信仰者たちは、「宇宙の終わり（時）は我々に来ない」と言った。言え、「いや、感覚で認識できない物事を知る主に誓って言うが、それは必ずあなた方にやって来るだろう」と。

フッスィラ章 41-50：彼らに苦難が降りかかった後にわれわれが恵みを味わわせれば、彼らは「これは私のものだ！宇宙の終わり（時）が来るとも思わない。主に帰されても、絶対にかれのもとに私のためにもっとすばらしいものがあるだろう」と言う。われわれは不信仰者たちに必ず彼

らがしたことを知らせ、必ずあの厳しい苦難を味わわせるだろう。

　クルアーンで、宇宙の終わりはアラビア語で「時」という言葉で表される。多くの人々はトルコ語で宇宙の終わりを「キヤメットの時」と呼ぶ。キヤメットとは最後の審判を意味する。これは、クルアーンにおける「時」と「キヤメット」という言葉の用法に適していない。クルアーンで「時」とは、宇宙の終わりを意味する言葉である。キヤメットとは立ち上がることを表す言葉であり（礼拝するときに立った状態でいることも「キヤム」という）、死後によみがえること（立ち上がること）を指す。この 2 つの概念は相互に関連しているが、それぞれ異なるものである。

　宇宙を表面的に見る者は、父親、祖父、祖父の祖父の存在を目にしたこの宇宙の構造が静止しており、変化することがないような感覚に捉われる。クルアーンと人類が出会った 7 世紀の当時、地球と宇宙の終わりが来るというのは信じられないことだった。地球が宇宙を飛んでいる物体であることを知らなかった当時の人々は、足元で堅牢に見える地球と、この巨大な宇宙がいつか無くなるということを信じられず、不可能だと思って抗議した。クルアーンの多

くの節で、否定されたこの終わりが来ることは避けられないと伝えられている。

ムルサラート（送られるもの）章 77-8：星々が消されたとき。

インフィタール（裂ける）章 82-2：惑星たちが飛び散ったとき。

　現代物理学が現れるまで影響力を持ったアリストテレス物理学によると、星々は無始に輝いており、永遠にそうであるはずであった。祖先の全員が星空を見ていたことを聞いていた人々にとって、いつか星々が消えるという言明は信じがたいものであった。神が宇宙を創造したことを信じる人々は、星々を創造した神にとって星々の終わりをもたらすことは容易であることを理解し、このことに対する不信仰者たちの異論に答えを示した。しかし、この論を裏付ける科学的発見はなかった。それでも今日、私たちは星の内部構造を知っており、星が水素をヘリウムに変化させることで存在していること、この過程が永遠には続かないことがわかっている。今日、クルアーンの「ムルサラート章」8 節で伝えられているように、いつか星の終焉が訪れること、光が消されることを否定することは、誰にもできない。

タクワール（包み隠す）章 81-1：太陽が回ったとき。

太陽も星であり、他の星々と同様、終わりを迎えることは不可避であり、現在の状態を永遠に保つことは不可能である。太陽の終焉を指すクルアーンのこの節に、ムハンマドの時代に不信仰者たちは異論を唱えたかもしれないが、今日、科学的データを知る者ならこの節を否定することはできない。

ワーキア（出来事）章 56-4：地上が大きく揺れたとき。

タクワール章 81-6：海が沸いたとき。

全ての星と太陽が終焉を迎えることが理解されれば、星である太陽に属している地球が終焉を迎えることも理解される。クルアーンで、地球の最後は大地震の光景に喩えられ、山々が無くなり、海が湧き立つ地震の様子が伝えられている。地球の内部は高温のマグマ層で満ちている。巨大地震で海を含む多くの場所からマグマが迸ることが予期されている。この過程で「タクワール章」6 節が伝えるとおり、湧き立つ海というのは予期される光景である。

宇宙全体が終焉を迎えることも明らかである。宇宙は常に膨張しており、この膨張が永遠に続くことはあり得ない。最後に重力が膨張を止めてビッグクランチ（大崩壊）と呼ばれる終焉が訪れるか、膨張を続けた結果ビッグリップ（大粉砕）あるいはビッグチル（大凍結）のうちのどれかが起こることで、全宇宙が終焉を迎えることは避けられない。あるいは私たちが知らない全く別の終焉のシナリオが待ち受けているだろう。地球と宇宙の終焉がどんなものかは議論されているが、終焉が不可避であることは議論の余地はない。クルアーンの宇宙論に関するこの大きな説は、今日では議論されていない。宇宙論に関するこれと同じようなクルアーンの文言の重要性を理解するためには、クルアーンと人類が出会った 7 世紀のメッカとメディナに行くことを想像しなければならない。そうすることで、当時のこの地域でこれらの説を口にすることがどれほど驚異的なことかが、より一層理解できるだろう。

ムハンマド章 47-18　彼らは、宇宙の終焉（その時）が自分たちに不意に訪れることを待っているのか？その予兆はすでに訪れている。それが彼らに訪れてぶつかったときになって教訓を得ても、何の役に立つだろうか？

観測可能な全ての天体と宇宙の終焉が訪れることを理解することは、多くの観点から重要である。例えば、太陽を誇張するあまり、クルアーンが啓示された時代とそれ以前に太陽を神格化する人々もいた（現存する神道でもその信仰がある）。また、地球と宇宙が永遠に続くと思い込み、永遠に地球上で魂が転生するという信念に基づく多神教を生み出した人々もいる。地球と宇宙に終焉が訪れることが判明したことで、どの時代にも唯物論者・無神論者が主張してきた論説とともに、多神教社会における論説も誤っていることも理解された。

また、クルアーンが伝える終焉の光景から人生を方向づけるために引き出す教訓もある。その光景が示すものにより、私たちがこの地球からいつか去り行くように、地球自体もいつか無に帰すこと、死んで終焉を迎えるこの地球で得られる利益が神に向かうことを阻んではならないことも伝えられている。クルアーンは、まず地球と宇宙の終焉が訪れることを一つの段階として伝え、その後蘇らせられること、審判の過程があり、来世の生活があることが告げられる。クルアーンが告げるこれらの段階から、地球と宇宙が終焉を迎えることを理解することで、クルアーンが説く来世への信仰も強化される。

1-5 設計された宇宙

宇宙が設計されたことを示すデータが、クルアーンにおける神の「Kadir, カディル」（偉力ある）、「ベディ」（Bedi、例無くして創造する）、「ハビル」（Habir, 最も通暁している）、「ムサッヴィル」（形作る）などの多くの名称を裏付けることは、第９章で説明する。神の多くの名称が裏付けられていることを宇宙の設計に基づいて理解することは重要である。また、宇宙が設計されたことは、クルアーンの宇宙論に関する説であるため、宇宙が設計されたことが理解されると、このことにおけるクルアーンのその説が正しいことも明らかになる。このテーマは「神の存在を示す 12 の証拠」（ALLAH'IN VARLIĞININ 12 DELİLİ）などの拙著の中の数か所で取り上げた。この拙著の主要な問いは、「神は存在するか？神の存在を示す証拠は何か？」であるといえる。本書の主要な問いは、「イスラムは神が送った宗教なのか？」「イスラムが神が送った宗教である証拠は何か？」であるといえる。「神の存在を示す 12 の証拠」では、宇宙に基づいて神の存在を証明するために宇宙の設計に言及した。本書では、クルアーンの宇宙論に関する言明が正しいことを示し、イスラムが神から送られた宗教であることを示すために重要であることから、このテーマをサブテーマとして取り上げた。しかし、このテーマはこれまで執筆した拙著で取り上げたので、このタイトルのもとではこのテーマが本書の主要テー

マとも関連していることを示し、かいつまんで述べるにとどめておく。

イブン・ルシュドは、宇宙における設計に基づいて神の存在を裏付けるための証拠は、クルアーンにおけるこのような思考の土台であることから、「クルアーンの証拠」であると述べた。イブン・ルシュドは、このような裏付けを「イナーヤ」（神の助け、恵みを表す）「イフティラ」（創造されることを表す）の証拠と呼んだ[13]。どの時代にも、宇宙が創造されたことに基づいて宇宙の創造主に至ろうとする活動の例があったことがわかっている。これに対する異論も、ほぼどの時代にも存在した。特に、ここ数百年で、神の存在を否定し、宇宙が自発的に存在していること、その中の全てが設計されることなく偶然に相互に重なることで現れたことを述べる唯物論者・無神論者の思想家たちが極めて大きな影響力を持った。それとともに、特に20世紀に科学分野で行われた発見により、どの時代にもなかったほど確固たる形で、宇宙が設計されたことを示す論説が提唱されるようになった。

例えば、現代科学のデータにより、地球上に生物が生まれたのは宇宙におけるファインチューニング（精緻な調整）によることが判明した。それらの新しいデータに基づいて、設計の証拠を類推に基づくのみでなく確率の計算な

13 かつてのイスラム思想家たちは、宇宙が無から創造されたことを証明しようとする「宇宙論的証拠」を打ち出し、設計に基づく論証はその後塵を拝した。

どの数学的アプローチによって示すことも可能になった。まずファインチューニングの精緻性を知ることが、この事柄におけるデータがいかに際立っているかを理解するために重要である。例えば、こうしたファインチューニングのたった一例である弱い核力が 10^{100} の 1 でも変化すれば、生物の出現に必要な分子が成立しなくなる。また、10^{100} という数値がどれほどの値であるかをしっかり把握できないと、これがいかに精緻な調整であるかを理解することはできない。1 ㎠の狭い領域には何百万という原子があり、これらの原子には陽子、中性子、電子が含まれている。このことから、地球がこれらの粒子よりもいかに遥かに大きいかが想像できる。また、平均的な星は地球の何倍も大きく、銀河系には何千万という星があり、それらの周囲にも何兆という惑星がある。宇宙に何千万あまりの銀河があることを考えていただきたい。そしてその全てにどれほど多くの原子があり、その原子を構成する陽子、中性子、電子などの粒子があるかを想像していただきたい。ファインチューニングのたった一例を表すのに用いた 10^{100} の 1 という確率が、全宇宙にある全ての陽子、中性子、電子、さらにこれらの数よりも遥かに多い光子の合計を大きく上回る数の粒子の中のどれか一つが無作為に引かれる確率であることを思うと、それが驚異的なまでに精緻な設計であるかが理解できる。

地球にある全ての砂漠、砂浜、海にある全ての砂の中のたった１粒を隠した後に、それら全ての砂から無作為に１粒を選ぶ人が隠された１粒を発見するとする。その確率ですらどれほど低いかは、誰もが理解できる。そして、宇宙にある全ての陽子、中性子、電子、光子の中から特定の１粒を、１度だけ選ぶことに生物の出現がかかっていることを考慮してみよう。その確率すら、生物の出現に必要な弱い核力の値を得るためのファインチューニングを表す 10^{100} の１よりも高い。

さらに、10^{100} の１という確率は、現存する数多くのファインチューニングのうちの一つにすぎない。生物の出現が、宇宙における数多くのファインチューニングが全て実現することで可能になることに注意する必要がある。というのも、これらのうち一つでも欠ければ、生物の出現は不可能になってしまうからだ。確率の計算の観点から、このような状況において全ての確率が合一することでこそ目的が実現する確率が生まれることを忘れてはならない[14]。こうした生物の出現を可能にするファインチューニングが無作為に存在することで、これらのファインチューニングが意識的に計画されたという見解が一層明瞭に説明可能になる。低い確率が有意な目的を実現するよう選択される背景に何らかの意識があるということを、本来誰もが日常的な

14 このファインチューニングに関するさらなる情報は、拙著「ALLAH'IN VARLIĞININ 12 DELİLİ」（神が存在する 12 の証拠）の 6 番目と 7 番目の証拠で読まれたい。

経験から知っている。例えば、あるケースがあり、そのパスワードがとても複雑なこと、つまり無作為に開けようとして開く確率が極めて低いことを考えてみよう。誰かが不正な手段を使わずにこのケースを開けたとすれば、その人物がケースのパスワードを意図的に使ったこと、つまりこのパスワードを使う過程が無作為でないこと（計画されたこと）がすぐに理解できる。この確率が無作為に的中することは期待できないが、パスワードを知る人物ならこのパスワードがどれほど複雑であろうとケースを開けたとしても驚くに値しない。つまり、低い確率が目的（生物と人間の出現）を実現するためにあることの背景に意識があることを、本来誰もが日常の多くの経験から知っているのである。結果的に、この論証で用いた論理的アプローチに、日常生活で私たちが用いる論理的アプローチとの違いはない。

カマル（月）章 54-49：われわれは確かに、全てを計って創造した。

　つまり、宇宙に関して増えた私たちの知識は、宇宙が設計され、宇宙に非常に精緻な尺度が据えられたという説をどの時代にもなかったほど強固に裏付けることを可能にし

ているのである。これは、クルアーンが宇宙論に関して言明している重要な事柄である。

1-6相対的な宇宙

サジダ章 32-5：（神は）天から地まで、諸々の事物を統べる。その後、あなた方が数えるところの 1000 年に値する 1 日／1 時期でかれの許へ昇る。

マアーリジュ（階段）章 70-4：天使たちと霊は、5 万年の長さの 1 日／1 時期でかれの許へ昇る。

多くの人々は、時間はどこででも誰にとっても同じように経過すると考えている。そのことを考慮すると、クルアーンのこれらの節が人間の知能にとってどれほど根本的な理解の変化をもたらしたかは歴然としている。クルアーンは、「日／時期」（yevm）という概念が状況によって変化すること、「1 日／1 時期」がある場所では 24 時間、ある場所では 1000 年、1 年で 5 万年に相当し得ると述べている。何世紀もの間「一体こんなことがどう可能になるのか」という異論が上がったであろうこれらの節が本来いか

に重要な事実を示しているかが、ここ数百年で判明した[15]。

ニュートン力学は 20 世紀初期まで優勢を保った。ニュートン力学の理解によると、宇宙と時間は相互に異なるものであり、絶対的であった。時間とは、宇宙のどの場所でも、歴史上のどの時代にも、重力、速度、それそのものの中で成る現象から独立して流れる、どの観察者、宇宙のどの地点にとっても同じ形で通用する、絶対的で普遍的な存在構造を持つものであると考えられていた。ニュートンが描いた宇宙の像は、実験と観察によって優れた調和を見せ、常識とも合致していたので、大きな異論も唱えられないまま自然科学や社会科学、哲学や神学までほぼ全ての研究分野に著しい影響を及ぼした。19 世紀末の科学者の多くは、宇宙論における基本的な理解はもはや変化することなく、ただ詳細において新たな知識が得られるだろうと考えたにすぎなかった。この理解は 20 世紀初期に揺さぶられ、物理学において非常に重要な出来事が起きた。アインシュタインが提唱した相対性理論により、物質とエネルギーが統合され、また宇宙と時間も統合されたのである。こうして、前例のない形で統合された、動的で全てが作用し合っているという宇宙像が提唱された。この理論の最も重要な哲学的・神学的結果は、時間が（科学的に）相対的であることが示されたことである。アリストテレス物理学と

15 Kuran Araştırmaları Grubu 著, ‘‘Kuran Hiç Tükenmeyen Mucize’’, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2020, p. 67-73

ニュートン物理学における絶対的な、それ自体の中で成立する現象に左右されない「独立した時間」という概念は、この理論により、速度と重力の影響を受ける「相対的な時間」という概念に取って代わられた[16]。

時間の相対性を理解するために、次のような思考を試すことができる。三人の兄弟がいるとする。その中の一人が地球に残り、一人が地球よりも質量の重い木星に暮らし、一人が光速に近い速度で宇宙船に乗って旅をするとする。しばらくしてこの三人兄弟が一同に会すると、地球に残った者が最も年を取り、木星に暮らした者と光速で旅した者はもっと若いことが見受けられるだろう。というのも、質量がより重い場所でも速度が速い場所でも時間の経過は遅くなる。このことを理解する者にとって、時間の流れが異なる地点で違いを見せることに注意を促すクルアーンの節は、少しもおかしくない。しかし、多くの人々と同様、時間が全ての者にとって同じように経過すると思い込んでいる者にとって、これらの節の意味を把握することは難しい。

時間が相対的であることが判明すると、神と宇宙の関係をよりよく理解できるようになる。宇宙の始まりから現在までの 138 億年という期間に対して人類が地球に現れてから現在までの期間がいかに短く、宇宙の大きさに対して地

16 Caner Taslaman 著 ''MODERN BİLİM, FELSEFE VE TANRI'' p.65-66

球がいかに小さいかを強調することで、地球と人類には何の重要性もないと言う者に、時間と宇宙の相対性が理解されたことからそうしたアプローチがなぜ誤っているかを示すことができる。というのも 138 億年という期間の長さと宇宙の今の大きさは、もし宇宙と時間の概念が絶対的であり、神がこの宇宙の時間と空間に支配されていたとすれば、そうした結論を示したかもしれない。しかし、相対性理論が示すように、宇宙と時間は相対的であり、今述べた期間と空間的な大きさが異なる別の尺度においてはあまり重要でなく、そのため期間の長さと空間的な大きさをもとにした何かの重要性について結論を出すことはできないと言える。また、時間の相対性を理解すると、何千年も前に死んだ者が来世の生活まで何をするかなどといった「絶対的な時間」の概念をもとにした問いに対し、時間の相対性に基づき、こうした問いが時間に対する誤った認識によるものであることを説明しつつ答えることが可能になる[17]。

カーフ章 50-38：本当に、われわれは宇宙を、地球を、そしてその両方の間にある物を 6 つの時期（yevm）で創造した。われわれは全く疲れなかった。

17 Caner Taslaman 著 ''MODERN BİLİM, FELSEFE VE TANRI'' p.65-66

クルアーンに登場する「yevm」という言葉が時期という意味であること、24 時間に相当する時期である地球上の 1 日も意味するこの言葉が別の長さの時期も意味していることを理解することは、クルアーンにおける「6 つの時期（yevm）」での創造を意味する説を理解するためにも重要である。この宇宙が様々な時期を経て現在の姿になったことは事実である。宇宙の始まりにおいてまず重力、その後他の力が相互に分離し、そしてヒッグス粒子が物質に質量を与えた。宇宙の始まりにおける非常に高温の電子、クォークは一体であり、その後冷却してクォークは陽子と中性子、そして原子を形成し、それから重力の影響により水素とヘリウムが融合して現在の銀河の元が築かれた。その後星々が生まれ、死に、新たな星々が生まれて今日に至る。この過程はさらに詳細に分かれるが、今日に至るまで様々な時期を経てきた。古代エジプト、中国、インドの文明における宇宙の見方を考察してみよう。宇宙はカメの背中に据えられていると説いた文明もあれば、宇宙は無始無終であると説いた文明もあるが、どれも宇宙が様々な時期を経て成立したという重要なポイントは強調していない。クルアーンがこの重要なポイントを強調していることは肝要である。「6 つの時期」がどのように分かれるかについては議論の余地があるが、宇宙が無始でないことも、一瞬にして今日の構造ができたのでないことも、様々な時期を

経て今日に至ったことも、議論の余地はないものとして受け入れられている。

ここで、クルアーンの「7 つの天が創造された」という文言に関していくつかの点に着目したい。多くのクルアーン解釈者が着目しているように、アラビア語で「7」という数字は「多い」という意味も表す。「7 の天」という表現は「7 つある天」を指しもし、「多くの天」も指す。クルアーンのルクマーン章 21 節における「7 の海」という表現、タウバ（悔悟）章 80 節における預言者ムハンマドへの語りかけとしての「彼らのために 70 回赦しを請うても神は彼らを赦さない」という文言は、7 あるいは 70 という数字がトルコ語の 10 や 100 のように多数性を表すためにも用いられている可能性があると述べている。これに似た形で 7 という数字が用いられている例は、古代ギリシャとローマにも見られる[18]。

アラビア語で 7 という数字にこうした使用法があるためにこの知識を伝える必要があるとはいえ、このことにおける「7」は「7 つある天」という意味を指すと私は考えている。まず、一部の人々が説くように「7 の天」が水星、金星、火星、木星、土星といった惑星、そして太陽と月を指しているのでないことを明らかにしなければならない。もしそれらの惑星を指しているとすれば、クルアーンで

18 Kuran Araştırmaları Grubu 著, ‘’Kuran Hiç Tükenmeyen Mucize’’, p. 70, 90.

星々や惑星を表す「necm」あるいは「kevkeb」という言葉が用いられてよかったはずである。また、クルアーンで頻繁に登場する「太陽」「月」という言葉により、この２つの天体が２つの層を形成していることが伝えられてよかったはずである。クルアーンで「7 の天」というときにアラビア語の「semavat」（「天」の複数形）が用いられていることが、その説が誤っていることを示している。

クルアーンの大権章５節で「近くの天が灯明によって飾られた」と述べられている[19]。7 の天がどれであるかを解き明かすのに、この文言が重要であると私は考えている。このとき、天の第１の層は、光がある最初の層である。地球はまず太陽系（第１の天）の一部であり、ここで木星、土星などの惑星は、天の最も明るく最も目を引く要素である。地球は、近くの星々とともに構成する局所恒星間雲（第２の天）、次いで銀河系（第３の天）、この銀河系が他の銀河とともに構成する局所銀河群（第４の天）、おとめ座超銀河団（第５の天）、局所超銀河団（第６の天）、それから観測される全宇宙（第７の天）の一部である。このように地球が７つのシステムの一部であることは、多くの科学本や教科書に記されている事柄である。物理学の本から抜粋した次の表もそのことを示している。

地球　　太陽系　　局所星間雲　　銀河系

19 ここで、灯明という意味の単語「mesabih」が使われており、星という意味の「necm」が使われていないことに注意しなければならない。一部の翻訳者は、「mesabih」を星と思い込み、この単語を「星」と訳している。しかし、クルアーン全体を通して星という単語は「necm」と訳されている。「kebkeb」は「惑星」を意味すると言ってよい。

局所超銀河団　　おとめ座超銀河団　局所超銀河団　　全宇宙

1-7対照に基づいて築かれた宇宙

クルアーンは、創造が対照の状態としてなされることに着目させている。クルアーンで「対、伴侶、ペア」としてトルコ語に訳される「zevc」という言葉は、完成させる対であること、一か所にいることを意味する。

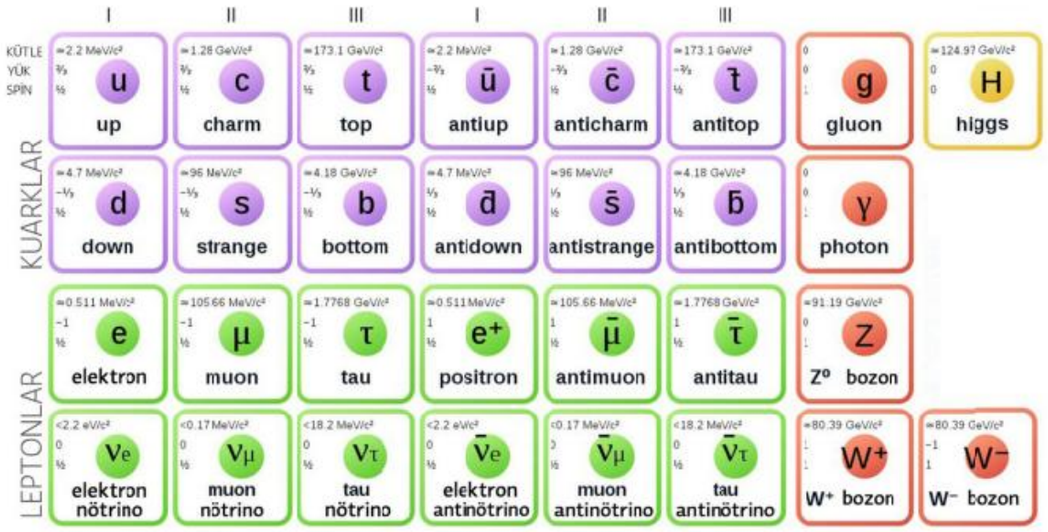
ザリヤート章51-49：あなた方が考え、教訓を得るよう、われわれは全てのものを対照に創造した。

対照の状態による創造は、人間、動物、植物など多くの事例がある現象である。この最も興味深い一例は、宇宙を顕現させた基本粒子の全てが対照の状態だったことである。私たちが見ている物質としての世界は原子から成り立っている。原子は、様々な数の様々な原子として陽子、中性子、電子からなる。電子は、それを成り立たせる他の粒

子がないと考えられている基本粒子である。陽子と中性子は、クォークというより基本の粒子からなる。基本粒子からなるクォークも電子も、それを成り立たせる対照の状態として、原子以下の世界を表した下の表に示されている。例えば、アップクォークの対照の一方はダウンクォークであり、チャームクォークとストレンジクォークに次いでボトムクォークというクォークが発見されると、高い認識を持つ科学者たちは対照の状態による創造に大きく納得し、「トップクォーク」という名を、このクォークがまだ発見されないうちからつけた。1994 年 5 月のタイム誌の表紙は、「トップクォーク」の発見を報じた。有名なフェルミ国立加速器研究所で行われた研究により、「ボトムクォーク」の対照である「トップクォーク」が発見されたのである。私たちが見ている物質世界の全てはこの粒子から成り立っているため、全ての物質的存在は対照の状態として創造されたと言える。

　物質世界全体を取り囲むもう一つの対照の状態の創造は、全ての基本粒子の反粒子が存在していることでわかる。これは、物理学における最大の発見の一つである。科学史の最も著名な物理学者であるポール・ディラックは、これに関する研究を行って 1933 年にノーベル物理賞を受賞した。陽子は、反粒子である反陽子とともに存在する。中性子は、反粒子である半中性子とともに存在する。陽子と中性子を成り立たせるクォークは、下の表内で原子以下

の反クォークとともに示されている。以下の表内の６つのクォークにはその一つ一つの反粒子がある。表を見ていただきたい。



宇宙にある全てのものが対照の状態で創造されたおかげで、宇宙の一体、そして全体の中に秩序が存在する。そうした形による創造のおかげで銀河、星、惑星、植物、動物、そして私たちが存在することが可能になっている。相互を補完する反対粒子同士からカオスではなく超越的な宇宙が創造されたことは、神の芸術を示している[20]。クルアーンが着目させる対照の状態による創造について考えると、神がこの宇宙で示す芸術に数多の精緻さがあることがわかる。クルアーンがこれほどまでに重要な事柄に着目さ

20 Kuran Araştırmaları Grubu 著, ‘’Kuran Hiç Tükenmeyen Mucize’’, p. 65-66.

せていることで、クルアーンがいかに壮大であるかを示す数々の結論が見えてくる。

1-8太陽と月

預言者ムハンマドの時代あるいはその千年後に私たちが生きたとすれば、人類のほぼ全員が、太陽と月は静止した地球の周囲を回っていると信じていることを目の当たりにしただろう。驚くことに、現代科学のあらゆるデータにもかかわらず、今でもそう信じている人々がいる。その少数派を考慮しなければ、今日、多くの人々は地球が太陽の周囲を回っていることを小学校低学年のうちに学ぶ[21]。その教育の段階で、太陽系について説明される中で、まるで太陽が静止しており地球がその周囲を回っているかのように説明されることが多々ある。本来これは、そう説明する教師たちが、地球が動く太陽の周囲で回っていることを知らないことが原因なのではないが、まずは地球は太陽系の一部であると紹介され、それから全宇宙におけるその位置付けに応じて説明がなされる。それに対し、地球がまるで宇宙に静止している太陽の周囲を回っていると思い込んでいる人々が多くいることを、私は何度も目にしてきた。だが、静止した地球の周囲を太陽が回っているのでも、宇宙で太陽がびくともせずに静止しているのでもない。海を進

21 地球が太陽系の塊の中心の周囲を回っているという方が正しい。その場所も太陽がある領域とほぼ重なるため、地球が太陽の周囲を回っているとも言えるのである。

む船のように、太陽は銀河系を進んでいる。クルアーンが太陽の動きについて、地球がその周囲を動いている、あるいは静止していると述べてはいないものの、海を進む船を表すために用いる動詞と同じ動詞を用いて「流れ進んでいる」と述べていることは、クルアーンにおける描写がいかに精緻になされているかということ、そしてクルアーンが啓示された時代の誤った信条を含んでいないことを示す数々の証拠の一つである。

ヤー・スィーン章 36-38：太陽も定まった場所へと流れ進んでいる。これは、偉大な、全知の者の尺度である。

私たちの生命の源である太陽は、時速 70 万 km 以上の速度で、銀河系の中心の周囲を、銀河系の内側で進んでいる。この速度は、地球が太陽の周囲を回る速度よりおよそ 7 倍速い。神は、宇宙という書物で私たちの教訓となる現象を実現する一方で、啓示した書物であるクルアーンを通してその現象を観察するよう導きつつ、深慮するよう促している。

太陽と並び、天空における人々の関心の対象であり地球上の生命の条件に最大の影響を与えている天体は月である。月は地球の衛星でもあり、地球も含む太陽系の一部で

もある。地球の周囲を回る一方で、時速 70 万 km 以上の速度で進む太陽を追いつつ、銀河系の中を進んでいる。

シャムス（太陽）章 91-1、2：太陽とその輝き。それを追うとき、月。

クルアーンのこの節で「追う」と訳される言葉「talaa」は、繋がる、追う、付き従うという意味である。現代科学の知識を持たない者にとって、昼は太陽が昇って沈み、夜は月が昇って沈む。別の者はこの 2 つの現象をそれぞれ独立したものと考え、2 つの天体を相互に追う天体と考えることもあり得るだろう。この節で 2 つの天体が相互の跡を追っていると述べられていないことに注意しなければならない。人類は、月のみが太陽を追い、月が太陽系の一部であることを、現代宇宙学の証明により学んだ。ムハンマドが生きた地域と時代にこの知識はもちろんなかった。クルアーンの他の多くの文言と同様、月に関するこの文言も正鵠を射ている。

ムーミン（信徒）章 40-81：神は、あなた方に証を示している。今や、神のどの証を否定するのか？

第 2 章

クルアーンと地球

現代科学のおかげで、私たちは地球の宇宙における位置、太陽系内での位置、約 45 億年前に形成された後に経た変遷、その大気や内部層、中心部で起きていること、さらには風や山々の特性に至るまで、様々な新しい知見を得ている。地球は、地軸を中心に回転するとともに、太陽系の中心である太陽の周りを高速で回転し、さらに太陽と共に銀河系を高速で移動し、拡大する宇宙の中で銀河系と共に他の銀河から高速で遠ざかっている。そうした動きの中で、地球内部では生命にとって非常に重要な現象も起きている。非常に高温の地下層で様々な現象が生じ、大気は地球上の生命を有害な影響から保護している。生命の存在を可能にする風が吹き、プレートテクトニクスにより大陸が移動している。こうした多様な動きの中で、私たちは日常生活を営み、食事をし、会話をし、本を読み、眠っているのである。

クルアーンは、宇宙と同様に地球にも着目させ、私たちを地球上の現象について考えるよう促している。イスラムが神から送られた宗教であるかどうかを判断しようとする

者が注目すべきもう一つの領域は、クルアーンにおける地球に関する記述である。クルアーンは、地球やその内部で起こる物理的現象に関して多く言及している。しかし、クルアーンが啓示された時代や地域で広まっていた地球に関する誤った概念は一切含まれていない。さらに、その時代や地域を超えて、地球に関連する重要な節も存在する。「なぜ私はムスリムなのか」という問いに対する私の答えのこの部分は、クルアーンの地球に関する説明に基づいている。

2-1 地球の層

地球の表面に立つ人は、地面を見ると自分が土の上で生きていることがわかる。手やスコップで土を掘れば、さらに土や水が現れる。もしこの人物が現代の科学的知識や研究を知らない場合、つまりその知識が自身と何世代にもわたって土と関わってきた祖先たちの経験にしか基づいていなければ、足元の地面をどれほど掘っても、再び表面と同じ土や水が出てくると考えるのは自然なことであろう[22]。こうした人は、地殻の静かな外観の下にある異なる層で重要な現象が起きていることを予測することはできない。また、もしこの人物が地上から空を見上げると、透明に広が

22 火山の近くで暮らす人々が表面的な観察から異なる結論を述べることは考えられる。それでも彼らも、もし科学的な知識を持っていないとすれば、おそらく、火山から噴出する高温の物質が地球の中心を構成する層の構造を反映しているのでなく、火山の下の特別な状況を示していると考えるであろう。

る大気を目にするであろう。科学的な研究に基づかない観察では、大気が透明なせいで、地球の大気がそれぞれ重要な機能を持つ異なる層から成り立っていることを理解することができない。要するに、地球の層構造、つまり足元や頭上にある層を、現代の科学技術が発展する前に発見することは困難だったのである。

クルアーンのタラーク（離婚）章第 12 節では、神が「7 つの天」を創造したことが述べられており、地球上にも「天のように」創造がなされているとされている。これは、地球にも 7 つの層が存在することを示唆していると言える。

タラーク章 65-12：神は 7 つの天を創造し、また地上にもそれと同じ数の層を創造された。神の命令はこれらの間で絶えず下り続ける。これにより、神が全てを知り、全てに力を及ぼすことを知るがよい。

まず、他の言語と同様に、アラビア語で「7」という数字の使用に特徴があることに注意を向けよう。この点は多くの解釈書でも指摘されている。「7」という言葉は、文字通りの「7」を意味する場合もあれば、「多数」を意味することもあり得る。トルコ語の「数十」という表現が時折同様の意味で使われるのと同様である。クルアーンで

は、ルクマーン章第 21 節で「7 つの海」と言及され、また、タウバ章第 80 節では預言者に対して「彼らのために 70 回許しを請うたとしても、神は彼らを赦さない」と述べられていることから、「7」や「70」という数が多様性を表すために使われている可能性があることが考えられる。私は「7 つの天」が「多数の天」ではなく、「7 つの天」を指していると考えており、この「7」という数の意味については、宇宙に関する章で説明した。同様に、「地上にも同じ数だけの層がある」との文言から、地球には「多数の層」が存在することが示唆されるが、ここでも「7 つの層」が具体的に指摘されていると私は考えている。

実際、「7」という表現が複数を意味する場合、議論の余地はなくなる。確かに、地球は地殻の下の層と大気中の多くの層から成り立っている。ムハンマドの時代にはこの層構造が知られていなかったため、この層構造に言及されていることは非常に興味深い。では、「7」という言葉を私が考えるように「7 つの層」として受け取るならば、地球には「7 つの層」があると言えるだろうか。これが現代の科学的知見によって容易に示される可能性があると私は考える。まず、地球は地殻の下の層と大気中の層から成り立っていることを強調したい。地球という惑星は、これらの層の総体である。地球に関する多くの科学的書物には、地球内部の層や大気中の層が詳細に記されている。各層が

構成される部分により、異なる科学書で異なる層の数が挙げられることがある。例えば、地球の中心にある核は、内核と外核の二層に分けられることがある。層を構成する部分の他に、層の中には遷移領域も存在する。例えば、地球内部の主要な層であるマントルは、下部マントルと上部マントルに分けられ、さらにその間に遷移領域が存在する。オゾン層は成層圏に含まれ、電離層と外気圏は熱圏に含まれる。これらの副層を独立した層として考えると、地球の内部と外部の層をそれぞれ 7 つに分けることができる。おおよそすべての科学的分類において、地球の内部は 3 つの主要な層、外部は 4 つの主要な層から成り立ち、合計で 7 つの主要な層から成り立っているとされている。地球内部には 3 つ、私たちが住む層（対流圏）には 1 つ、そしてその上に 3 つの層があり、合計で 7 つの層からなる地球で私たちは生きているのである。どのように層を区分しても、議論の余地のない主要な構造を示す以下の 7 つの層が存在している。

地球内部の層：

1.核

2.マントル

3.地殻

私たちが住んでいる層： 4. 対流圏

地球外部の層： 5. 成層圏 6. 中間圏 7. 熱圏

地球の最も内側には核があり、その最も内側の部分では温度が太陽の表面よりも高く、鉄やニッケルのような原子から構成されている（第 1 の層）。次にマントルがあり、地球内部の 84%の体積を占めている（第 2 の層）。次に私たちが住む地殻があり、大陸と海洋の下地を形成しており、最も薄い内部層である（第 3 の層）。次に私たちが住む対流圏があり、空気が最も濃い領域である（第 4 の層）。次に成層圏があり、有害な放射線をろ過するオゾン層を含み、おおよそ高度 50km まで広がっている（第 5 の層）。次に中間圏があり、特にこの層が隕石から私たちを守っている（第 6 の層）。そして地球の最上層には熱圏がある。これはガスの密度が低い最も外側の層である（第 7 の層）。

2-2守られた天井

空に向かって石やリンゴを投げると、それは私たちのもとに落ちて戻ってくる。この現象は、まるで誰かが非常に高いところからそれらを落としたかのような印象を私たちに与える。科学的知識を持たず、現代科学の発見を知らないまま空を見上げる人は、透明な空をどんな物とも影響し合わない透明な構造だと思うかもしれない。しかし、科学

の発展により、空が私たちを多くの生命を脅かす要因から守っている天井であることが明らかになった。大気圏と地球の磁場によって形成されるヴァン・アレン帯は、宇宙から地球に降り注ぐ隕石や太陽そして他の源から放射される有害な放射線から常に私たちを守っている。また、宇宙の温度は約マイナス 270 度であり、この極寒からも大気の特性によって守っている。もし空がこのように守ってくれなければ、私たちは地上を歩くことも、本を読むことも、生きることもできなかったであろう。このように生命にとって極めて重要な現象にクルアーンが言及していることは、まさに驚嘆すべきことである。

アンビヤ章 21-32：そして、天を守られた天井にした。しかし、彼らはその証拠から目を背けている。

神はこの節で、天に創造された保護構造に目を向けさせることで、人類に対する恩恵の一つに私たちの目を向けさせるとともに、クルアーンが啓示された時代にまだ発見されていなかった天の構造に言及することで、クルアーンの驚くべき特性の一つを示している。この点に関して、一部の人々は「クルアーンは当時のアラブ人に啓示されたものであり、彼らが理解できない表現がクルアーンに含まれているのはなぜか？」と疑問を呈するかもしれない。この主

張を述べる際には、いくつかの誤解に修正が必要である。クルアーンは確かに特定の時代や啓示された環境におけるアラブ人が使用していた言葉で啓示されたものであり、今日のクルアーンの言葉にその時代に存在しなかった意味を付加することはできない。クルアーンの言葉は、神秘的な言葉や無関係な内的解釈で語られたものではない。例えば、「7 つの天」という表現がクルアーンに登場したとき、当時のアラブ人は「7」という言葉の意味を理解していた（それが数字としての「7」であれ、一部の人々が理解する「多様性」であれ）し、「天」（サマー）と言うとき、彼らはそれを自分たちの上に広がる全ての領域という形で認識していた。つまり、彼らにとって「7 つの天」という表現は無意味ではなく、何らかの意味を持っていたのである。しかし、だからといって彼らが「7 つの天」という表現の内容を完全に理解し、天がどのようにして七重構造になっているかを把握していたわけではない。クルアーンがアラビア語で明確に表現されたものであることは理解されているが、これらの概念の深さまでは理解されていなかったことは明白である。もし誰かが天に 7 層の（あるいは多様性の意味で）構造があることを示すことができれば、それは非常に価値のあることであろう。

例えば、宇宙の終わりについての節を考えてみよう。これらの節からは、星々が消え去り終焉を迎えること、そしてこの地球が終わりを迎えることが理解できる。そして、

終末の際に天と地が新たなものに置き換えられることが述べられている（イブラヒム章 14-48）。当時、「星」や「消滅」という言葉を知っていたアラブ人は、「送られるもの章」第 8 節の「星が消え去るとき」という表現を理解していた。しかし、彼らの祖先やそのさらに前の世代がずっと観察してきた星々が消滅し、地球と宇宙の存在が終わりを迎えるという主張は、彼らにとっては理解し難いものであっただろう。今日、クルアーンのこの壮大な宇宙論に関する主張が正しいことを、科学は大きな確信を持って私たちに伝えている。クルアーンの解釈を過去の言説の繰り返しだけに留め、クルアーンのメッセージを狭い時間と地理的な範囲に閉じ込めようとする人々は、このような節の価値が理解できない[23]。同様に、クルアーンに出てくる「天」、「守られた」、「天井」、「証拠」という言葉をアラブ人は知っていたが、天にどのような「守り」があり、それがどのように「証拠」として機能するのかを正確に知ることはできなかった。かつての時代に生きたムスリムたちは、この節の言葉の意味を理解し、それを信じていたが、その意味がどのように実現されていたかについては全く知識がなかったのである。

大気圏は有益な太陽光を地球に取り入れる一方で、有害なものを反射している。また、生命の源である水が蒸発して宇宙の深淵に消えてしまわないようにしている。大気圏

23 Caner Taslaman 著, Tarihselcilik: Çelişkiler Bataklığında, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, p. 64-66.

は有害な太陽光を宇宙へと反射するだけでなく、生命に不可欠な水を地球へと戻してくれる。大気圏が内外の両方にこの反射機能を持たなければ、地球上に生命は存在し得なかったであろう。クルアーンでは、この大気圏の反射機能にも言及されている。

ターリク（夜訪れるもの）章 86-11：そして、反射する空。

この節における「reci」という語句は「反射」を意味している。もし大気圏が何も受け入れず、全てを反射してしまうならば、地球に生命は存在しなかっただろう。逆に全く反射が行われなかった場合や、必要な反射がなされなかった場合にも、地球に生命は存在しなかっただろう。クルアーンが私たちに注目させている現象と、この特性に言及していることは驚くべきことである。大気圏の生命を守る反射機能とそれに関連するバランスは、地球の形成後の段階で生じたものである。

ラフマーン（慈悲あまねきお方）章 55-7：天を高くし、バランスを設けた。

2-3 地球の形状

クルアーンの啓示がなされる前から、地球は球体であると考える者はいた。しかし、クルアーンの啓示の前後において、それに異論を唱える人々も多くいた。はたまた、今日に至っても、宇宙から地球の球状（ジオイド）構造の写真が撮影されているにもかかわらず、これが NASA などの機関によって仕組まれた陰謀であり、実際には地球が平坦な地形であると主張する団体も存在している。重力の法則が知られていなかった時代において、地球が球体であるとするならば、地球の「下にいる者たち」がどうして落ちないのかという問題を解決することは非常に難しく、このような疑問から、多くの人々が地球が球体であることを信じるのに難儀していた。クルアーンの次の節において、地球の球状構造に言及されていることは、クルアーンの驚異的な表現の一つである。

ズマル（集団）章 39-5：天と地を真実によって創造し、夜を昼の上に巻き、昼を夜の上に巻く。

この節で「巻く」と訳されているアラビア語の単語は「yukawwiru（ユカウィル）」である。この単語と同じ語根から派生した「クッラ」は「球」を意味し、「kurretul kadem」（クッラ：球、カデム：足）は、現代のアラビア

語で「サッカーボール」を指す言葉として使用されている。トルコ語の「キュレ（küre）」という単語も同じ語根から派生している。この動詞は、アラビア語で「頭にターバンを巻く」ことを表すためにも使われており、頭が球状の構造をしていることから、この動詞は「夜を昼の上に巻き、昼を夜の上に巻く」ことを表すために使用されている。この節で「夜を昼の上に巻く」と同時に「昼を夜の上に巻く」ことが表現されている。地球が球状であることは、昼と夜が生じる原因となっているのである。

クルアーンの啓示から何百年も後に書かれた書物でさえ、地球が皿のような形をしていると考えられていたり、地球が牛や魚の上に乗っていると信じられていたことが見受けられる。クルアーンの啓示がなされた時代には、地震でさえ「地球を支える魚が尾を振る」ことで説明されるといった考えがアラビア半島で広まっていたのである。クルアーンは、その時代の誤った信念や神話を一切含まず、地球に関するこうした細やかな言及を行っている。クルアーンが啓示された時代と地域の思想や信念を知れば知るほど、クルアーンへの畏敬の念は増すであろう。クルアーンの一見すると何気ない表現でさえ、このように考察されると重要な意味を持つのである。例えば、以下の節を考えてみよう。

ラアド（雷）章 13-2：神は、あなたたちが見るその天を、柱なしに高く持ち上げた方である。

ムハンマドの時代にこの事実が知られていなかったことがわかれば、この節の価値がより明確になる。クルアーンが啓示された後の時代でも、天が地球の両端の山々に支えられているという考えを信じる者がいた。ここで引用した節の表現は、その時代に語ることが不可能な内容ではなかったが、当時の人々の共通の認識を反映したものではないことを理解する必要がある。例えば、「新アメリカ聖書」の古い版の一つには、天が逆さにした鉢に例えられ、天が柱によって支えられていると述べられている[24]。バビロニア人のような歴史上のいくつかの文化では、天が地球の端の山に支えられていると信じられていた。一部のクルアーン解釈者は、クルアーンで明確に天が柱なしに持ち上げられたと述べられているにもかかわらず、この節が地球の見える部分について述べていると解釈し、見えない部分で天が山々に支えられていると解釈した。天が柱で支えられているか否かという議論は、ムハンマドの時代には不確定であり、知ることも証明することもできないものであった。クルアーンが正しく説明したこの真実は、預言者ムハンマドの時代には証明され得なかったため、この節の存在はその時代においてムハンマドに何らかの利点をもたらすこと

24 St. Joseph’s Medium Size Edition, ‘‘The New American Bible’’ p. 4-5

はなかった。むしろ、この節が証明されなかったため、この表現がクルアーンに対する異論を引き起こした可能性さえある。クルアーンをムハンマドが書いたと主張する者たちは、当時の信念に反してなぜクルアーンにこのような表現が含まれているのかを説明することができないであろう。クルアーンの記述の価値をよりよく理解するためには、預言者ムハンマドの時代を思い描き、その時代の人々の考え方を理解しようとすることが必要であることが、この例からもより明確に理解されるのである[25]。

2-4天に上昇するように

クルアーンでは時折、比喩が用いられるが、単にその比喩の伝えたい内容にのみ焦点を当て、比喩の詳細に目を向けない者は、その繊細さに気づかないことがある。以下の比喩は、私が伝えたい点を示す一例である。

アナーム（家畜）章 6-125：…道を誤る者にはその胸を狭くし、その者はまるで天に上昇するかのようになる。

この節で引用されているのは、精神的な問題によって胸の狭さや苦しさを感じる者が、地上から天に上昇するため

25 Kuran Araştırmaları Grubu 著, ‘’Kuran, Hiç Tükenmeyen Mucize’’, p100-102

に胸の狭さを感じる者に例えられているということである。この比喩が本来伝えているのは、イスラムの導きから遠ざかっている者が感じる精神的な苦痛である。このメッセージの部分が重要であることは明らかである。しかし、クルアーンではこのメッセージが比喩を通じて伝えられているのである。クルアーンの比喩は、決して偶然に選ばれたものではない。地上から天に向かって上昇するにつれて、気圧が低下し、その結果として血液が圧力で血管や心臓に負担をかける。また、地上から昇るにつれて酸素が減少し、その結果、呼吸困難が生じ、胸の中の肺に狭さを感じるようになる。地上から昇るにつれて、内部で感じられる狭さは徐々に増し、最終的には生存が不可能な高さに達する。

クルアーンが啓示された時代には、ムハンマドが住んでいた地域でも、地球上のどの場所でも、空高く上昇するための気球、ヘリコプター、飛行機のような乗り物は発明されていなかった。そのため、誰かが空に上昇するにつれて胸に生じる狭さを実際に経験したことはあり得ない。また、空に上昇することで酸素が減少し、それが胸部の肺に負担をかけるという科学的知識もなかった。地上から天に向かって上昇するにつれて気圧が低下し、それが胸部の心臓に負担をかけることも知られていなかった。さらに、当時の心臓や肺の機能に関する知識も、一定の水準に達して

いなかった。クルアーンが啓示されてから千年ほど経ってから、エヴァンジェリスタ・トリチェリが 1643 年に初めて気圧の測定を行ったことを思い出す必要がある。

クルアーンでは、「ヒジュル章」第 22 節のように「風を受粉させるものとして送った」と述べられており、地上の重要な現象が説明されている。風が生命に欠かせない雲を送ったり、植物の花粉を受粉させて植物の繁殖に関与することは、クルアーンがこの説明に注目していることの重要性を示している。時折、クルアーンの繊細さは、この章で取り上げたような比喩で明らかになるのである。イスラムを神が啓示した宗教であることを否定する者たちが主張するように、クルアーンが 7 世紀のアラブ人、さらには 7 世紀の地球上のいずれかの社会集団によって書かれたものであれば、このように多岐にわたる分野で時代を超えた詳細な説明や繊細な比喩を含むことは考えにくい。しかし、クルアーンが神から人々に送られたメッセージであると信じる者にとって、このような状況は驚くべきことではない。神はクルアーンを通じて人々にメッセージを伝える際に、クルアーンに時代を超えた説明や比喩をもたらし、人々がクルアーンが神からのものであることの証拠を得られるようにしたのである。

2-5　山とその根

クルアーンには、地球に関する多くの言及が見られるが、地球上の山々、海、風、雲、雨といった現象に対しても多くの言及が存在する。私たちの身の回りに常に存在し、観察可能なこれらの自然現象について思索し、教訓を得ることの重要性は、クルアーン全体に通底するメッセージである。クルアーンがこれらの現象に注意を促す際には、しばしば比喩や描写が用いられるが、それらを注意深く分析すると、それがムハンマドの時代に知られていた知識レベルで語られたものではないことが理解できる。その一例として、山に関する次のような比喩が挙げられる。

ナバア（消息）章 78-6、7：われわれは大地を寝床としなかったであろうか。そして山々を杭のように設置しなかったであろうか。

山々が杭に喩えられていることの卓越性は、近年の地質学の分野における研究によって、ようやく理解されるようになった。山々は地表において、その高さと壮麗な姿によって際立って見える存在である。しかし、実際には山々には、見える部分よりもはるかに地下深くまで伸びる「根」が存在する。多くの場合、地上に見える山の高さの 10 倍以上にも及ぶ根が地下に存在している。地上に存在する山々だけでなく、海中にも山が存在しており、それらにも

根がある。例えば、高さ 3 キロメートルの山には、30 キロメートルを超える根が存在することがある。クルアーンにおいて山と杭との間に結ばれた比喩の精緻さは、まさにこの点において明らかになる。このような構造は、ムハンマドの時代はもちろん、数百年前ですら知られていなかった事実である。テントのような構造物を支える杭がその機能を果たすためには、地中にしっかりと根を張っていなければならない。杭を外から見てもその根は視認できないが、地下にある根は確実に機能している。同様に、私たちが山を見たときにその根を見ることはないが、杭と同じく、山もその地下の根によって機能しているのである。山が単なる地表の突起物として認識されていた時代において、山の「見えざる根」に言及したクルアーンのこの比喩は、実に驚嘆すべきものである。

クルアーンは、宇宙、地球上の現象、そして生物を認識するよう人々に呼びかけることによって、科学的研究に対する動機づけを提供するが、クルアーンそのものは科学的書物ではない。クルアーンには、高空に行くにつれて大気圧が低下する現象がどのように発見されるかについての記述は存在しない。トリチェリの実験装置がどのように構成されるかについても述べられていない。また、観察される山々の見えない「根」がどのように理解されるかという方法論も記載されていない。さらに、クルアーンは空へ昇るための気球がどのように作られるかや、地中の調査で用い

る装置がどのように製作されるかについても説明しない。科学的書物のように、ある結論に至るための手順を提示するものではない。しかしながら、クルアーンは、例えば「星々がある日消滅する」といった記述や、「空へ昇ると胸が締めつけられる」という比喩、あるいは「山々を杭に喩える」表現などに見られるように、科学的方法論によって段階的に到達可能な知見を含んでいる。クルアーンは、これらの段階（知的・実証的プロセス）をどのように乗り越えるかを説明していないため、科学的書物ではない。しかし、その内容は、科学的手法を通じて得られた知見と関連しており、これらの知見の光に照らしてクルアーンを精査することは、その驚嘆すべき構造を理解し、感嘆する上で有意義である。

2-6 境界を越えない海と海底の暗闇

私は、海沿いの都市であるイスタンブールで暮らしてきた。幼少期から海を旅し、さまざまな国で泳ぎ、潜水もしてきた。それにもかかわらず、クルアーンに記されている海に関する表現には、私自身の観察や科学的研究を通じて知ることができなかった事柄が含まれている。ムハンマドは、海岸のないメッカやメディナで暮らし、たとえ海を見たことがあったとしても、それは非常に限られた時間だったであろう。クルアーンにおける海に関するこれらの記述

が、ムハンマド独自の知識によるものとは考えにくく、このような情報が偶然に語られたものだとも思えない。ここで紹介する最初の例は、二つの異なる水域が合流しても完全に混ざり合うことなく、それぞれの特性を保持していることを示す次の節である。

ラフマーン章 55-19、20：二つの海を解き放った。それらは互いに混ざり合っている。しかし、その間には障壁があり、互いに境界を越えない。

ここで「海」と訳されているアラビア語の「バフル（bahr）」は、海だけでなく、大きな湖などの水域も指す言葉である。また、節に出てくる「マルジュ（marj）」という言葉は、混ざり合うことを意味している。異なる二つの水域が合流する地点では、水の物理的特性により、両者の間に障壁が形成される。この現象は、世界中の多くの海や湖で観察されている。例えば、イギリスのリーズ大学の科学者たちは、2010 年に黒海内で異なる特性を持つ水域を発見した。この水域は 60 キロメートルの長さを持ち、ヨーロッパ最大の河川であるライン川の 10 倍の流量を内包している。この水域は、塩分濃度や密度が黒海の他の部分とは異なる。このような塩分濃度の違いにもクルアーンは言及している。

フルカーン（識別）章 25-53：かれは二つの海を一つにした。一方の水は甘く、渇きを癒すものであり、もう一方の水は塩辛く、苦い。両者の間には障壁があり、越えられない境界を設けた。

2019 年には、ニュージャージー州近くの大西洋で非常に大きな水域が発見された。この水域は、10 億以上のオリンピックサイズのプールを満たすことができるほどの大きさで、塩分濃度が周囲の海水とは異なる淡水の層である。多くの人々は、二つの水域が合流すると、それらが同じ特性を持つと考えることが多い。そのため、合流した水域が異なる特性を保持しているとは考えにくいだろう。科学的な知識やクルアーンのこの記述を知らない多くの人々に、目の前の一つの水域に異なる特性を持つ二つの水域が存在する可能性があるかどうか尋ねてみれば、多くの人がそれを不可能と考えるか、たとえ可能であると考えたとしても、そのようなことを以前に考えたことがないことに気づくだろう。クルアーンにおける海に関する驚くべき記述はこれだけではない。海底の暗闇について言及している次の節の比喩も驚異的である。

ヌール章 24-40：または、深い海の暗闇に似ている。それは波に覆われ、その上に波があり、その上には雲がある。重なり合う暗闇がある。手を出す者は、ほとんど手が見えないほどである。神が光を与えない者には、何の光もない。

私は海沿いで暮らしてきたが、もし誰かに暗闇について例を挙げるように求められたなら、海を例に挙げることは決して考えなかったであろう。陸地が明るいか暗いかと同様に、海も明るいか暗いかと考えていたからである。海底に潜っても、海底が海面と同じように明るいと感じていた。しかし、実際には、地球上で最も広大な暗闇の領域は深海に存在している。地球の 70%以上が海に覆われ、その多くの部分が深く、光が届かないほど暗いのである。表面的な観察や、私たちの肺の容量が許す範囲で潜るだけでは、それに気づくことはできない。しかし、光の屈折を研究する者は、その理由を簡単に理解できるだろう。光は海面から深く潜るにつれて分解され、最初に黄色の成分が消え、次に緑色の成分が消え、最後に青色の成分も消えた後、深海には光が全く届かなくなる。深海は、クルアーンに記されている通り「手を出す者は、ほとんど手が見えない」ほどの暗闇なのである。海底を探査するための最初の潜水艦は、コルネリス・ドレッバーによって 1620 年に作

られた。潜水艦の発明により、深海の底が完全に暗闇に包まれていることが観察できるようになった。

　また、この節にある「それを波が覆い、その上に波がある」という表現も、ムハンマドの時代には知られていなかった知識を含んでいる。多くの人々は、海の中に「重なる波」があることを知らなかったため、この節を非常に波の高い海を指していると解釈した。しかし、節が示しているのは、海の中に多くの波があるということではなく、「波の上に（fevk）波がある」ということである。海岸を歩いて観察すると私たちは海面に波を見るが、海中には波がないと考える。しかし、海の下層では、密度の違いにより、上層とは別に内部波が発生している。この内部波は 20 世紀初頭に発見され、クルアーンの節が示す「波の上に波」という構造を正確に反映している。

　クルアーンの表現の驚異を目の当たりにするためには、新しい技術の発展により観察能力が向上することが重要である。クルアーンの驚異の多くは、進化する観察力に関連している。このことを認識することは、「今日正しいとされる理論が、明日には誤りであると判明した場合、クルアーンに関する解釈はどうなるのか？」というような質問に答える上で重要である。この批判に対しては多くのことが言えるが、まず強調したいのは、クルアーンに関連する驚異的な表現の多くが、発展した観察能力に基づいているということである。明日どのような理論が出てきたとして

も、既存の観察結果を説明するための新たな理論が構築されるだろう。既存の観察結果が信頼できないと考えることは、極端で不必要な疑念である。例えば、隣り合う二つの水域の塩分濃度などの違いを分析する者は、それらが異なる特性を保持していることに気づくだろう。また、潜水艦で深海に潜った者は、「手を出してもほとんど見えない」暗闇を目の当たりにするであろう。さらに、この章で述べられている海中の波も、現在では観察可能である。この本で挙げられた例の 80%以上は、私たちの観察能力が向上することで確認されている。宇宙の膨張、太陽や月の運行、地球の形状、大気の保護機能、さらには高度が上がるにつれて呼吸が困難になることまで、新しい技術のおかげで観察可能になっているのである。理論は、既存の観察結果に基づき、それをより良く説明するために発展し、変化している。明日どのような理論が出てきたとしても、それはこれらの観察結果を説明する理論であろう。例えば、潜水艦で観察した深海の暗闇が「実際には存在しない」と言う理論が出てくるとは、常識的な科学者であれば誰も考えないであろう。

一部の人々は、まず科学を神聖視する実証主義的なアプローチで科学を引き合いに出して宗教に反対しようとする。しかし、科学を真剣に受け止めるアプローチをとれば、科学とクルアーンの間に問題はないことが示され、さらには現代科学の発見によってクルアーンの記述の驚異が

理解されるようになると、同じ人々が極端な詭弁やポストモダニスト的な懐疑的態度で科学的データから得られた結論を避けようとするのが見られる。確かに哲学では、外界が存在するかどうかについて極端な懐疑が議論されてきたが、こうした極端な懐疑にも答える必要があるであろう。しかし、深刻な病気にかかった詭弁家やポストモダニストの懐疑主義者は、必要な薬を手にすると、外界にその薬が本当に存在するかどうか、あるいは薬の説明書に書かれた言葉に本当に意味があるかどうかといった詭弁やポストモダニスト的な疑念をすぐに捨てて、その説明書を読むことになるだろう。私がより重視すべきと考えるのは、宇宙や人間についての知識を提供する科学的研究を真剣に受け止める人々である。実際、詭弁やポストモダニスト的な言説を持ち出す人々の多くも、議論が深まると、科学的データを重視する立場にあることが明らかになる。

クルアーンの啓示を初めて聞いたメッカとメディナの人々は、海沿いに住んでいなかったにもかかわらず、クルアーンでは海や船に何度も言及されている。これは、クルアーンのメッセージが特定の時代や初期の聴衆にのみ向けられたものと考える歴史主義的な見解に対する反論である。もしクルアーンのメッセージがメッカやメディナの人々に限定されていたなら、多くの人が人生で一度も、あるいはほとんど見たことのない海がこれほど多く取り上げられることはなかったであろう。クルアーンのメッセージ

は、特定の時代や地域に限定されたものではない。この本で示されているように、宇宙の膨張から海底の暗闇、メス蜂の働きから大気の保護機能、胎内での発育から宇宙の終焉に至るまで、クルアーンの驚くべき説明は、クルアーンのメッセージが特定の時代や地域に限られたものではないことを示しているのである。

サバア章 34-28：われわれはあなたを、全ての人々への吉報の伝達者そして警告者として遣わした。しかし、ほとんどの人々はこれを知らない。

第 3 章

クルアーンと生物

数世紀前には、生物界には数万種程度の生物が存在していると考えられていた。しかし、私たちが想像していた以上に生物界は豊かであり、驚くべき特徴を持つ数百万種もの生物が存在していることが分かった。クルアーンは、私たちに宇宙や地球の事象を考えさせるように、植物や動物、人間などの生物界についても私たちに目を向けさせ、熟考するように仕向けている。

クルアーンは、宇宙や地球上の現象に関して驚くべき精緻な指摘をしているように、生物界に関する記述にも驚くべき精緻さが見られる。この章では、クルアーンの生物界に関する記述における素晴らしい表現について考察していく。顕微鏡や望遠鏡の進歩により、宇宙の深淵に関する謎を解明したように、顕微鏡の発展により生物に関する謎も解明されてきた。例えば、クルアーンには多くの場所で人間の胎内での発育が言及されているが、顕微鏡やマイクロカメラの発展により、その詳細な過程が明らかになった。その結果、クルアーンの記述について、7 世紀に啓示を受けた時点でのすべての文明の知識では到底言及できないような内容がクルアーンに含まれていたことが理解された。

この章では、クルアーンの生物界に関する記述に基づき、「なぜ私はムスリムであるのか」という問いに対する私の答えの理由を引き続き述べていく。

3-1呼吸の始まりと朝

クルアーンのこの節は、呼吸の始まりと朝の時間の関係を示している。

タクウィール（包み隠す）章 81-18：呼吸を始めた時、朝。

呼吸を始めることと朝の間にはどのような関係があるのだろうか？ 人間や動物が呼吸をしていることは、昼夜を問わず、目を覚ましているときも、眠っているときも見られる現象であり、呼吸の観点では朝と特別な違いがあるわけではない。しかし、朝に太陽光が地球に届くことによって光合成が始まる。植物は、太陽光を利用して光合成を行う。光合成は私たちの存在を可能にする重要な現象である。私たちをはじめとする多くの生物は呼吸をする際、酸素を吸い込み、二酸化炭素を排出する。植物（藻類や一部の細菌も含む）は、光合成の過程で二酸化炭素を取り入れ、酸素を放出する。光合成は二酸化炭素を取り入れ、酸素を放出する呼吸のような過程であり、私たちが呼吸をす

るためにはその存在が必要不可欠である。植物は光合成を通じて酸素を生産し、また太陽のエネルギーを化学エネルギーに変換する。植物が食べられることで、その中に蓄積された太陽のエネルギーが私たちに届く。動植物の食物を摂取することで、光合成を通じて太陽から来たエネルギーを取り込み、それが細胞内で利用されることになる。もし植物が常に二酸化炭素を排出し、光合成によって酸素を生成しなければ、私たちは存在できないだろう。もし植物が光合成を通じて太陽光からエネルギーを蓄積しなければ、私たちも存在できなかっただろう。化学的に示される光合成の式は次の通りである。

光 + 6CO2 + 12H2O → C6H12O6（グルコース） + 6O2 + 6H2O

　クルアーンが 7 世紀に啓示されたことを思い出していただきたい。では、私たち人類が存在する前からあった光合成の存在はいつ発見されたのだろうか？ 1733 年にジョセフ・プリーストリーが行った実験は、植物と空気の関係において重要であるが、光合成が明らかになったわけではない。1770 年、植物が太陽の光を利用して酸素を生成することを生物学者で化学者のヤン・インゲンハウスが述べた。1796 年にはスイスの植物学者で神父のジャン・セネ

ビエが、植物が太陽光とともに二酸化炭素を取り込み、酸素を放出することを示した。19 世紀初頭、ニコラ・テオドール・ド・ソウスールは植物が行う過程をさらに詳しく明らかにした。1840 年、ドイツの物理学者ジュリアス・ロバート・マイヤーは、植物が太陽エネルギーを化学エネルギーに変換することを述べた。光合成に関する詳細は、他の多くの科学者による貢献があった。

クルアーンが啓示されてから千年以上経った後、数多くの科学者の研究が集まり、光合成が明らかにされた。それ以前、科学の世界では太陽光と呼吸の関係については言及されていなかった。光合成は暗闇の中では行われない。クルアーンにおける「朝」の時刻には太陽光が地球に届き、光合成が始まり、植物は酸素を放出し始める。このように、クルアーンの記述における「朝」と「呼吸開始」の間に関係を見出すことは、まさに驚くべきことである。本当に、ムハンマドの時代にこれが知られていたという主張には、信じるに値するものは何もない。この言説も、本書で着目するクルアーンのほかの驚愕すべき表現とともに、思いつきで言葉をでたらめに並べて表現されたというのは、まったく理にかなわない。

3-2 雌蜂

次に、2つの質問をしてみよう。まず、クルアーンで最も特別な存在として描かれている動物は何か？ 次に、地球上で最も特別な存在として描かれる動物は何か？ この2つの質問に答えるためには、どの基準でクルアーンにおいて「最も特別な存在の動物」を選ぶのか、また、100万種以上の動物種の中から「最も特別な存在の動物」を選ぶ基準を明確にする必要がある。もちろん、提示された基準が強引でないことが重要である。

クルアーンの中で動物が描かれる際、その動物自体に焦点が当たっていないこともある。例えば、バカラ（雌牛）章では牛を屠る出来事が描かれているが、その焦点は牛の特徴ではなく、牛を屠る人々の行動にある。また、次の章で触れるアンカブート（雌蜘蛛）章では、クモは例えとして用いられており、焦点は神を離れて他のものを友とする人々にある。ナフル（蜜蜂）章8節では馬やラバ、ロバについて言及されるが、これらの動物が乗り物や装飾用に創られたことが強調され、動物の特徴について述べられている。ここでは、複数の動物の特徴が述べられ、これらは唯一の章で着目されている。しかし、蜂について言及されているナフル章の2つの節では、蜂の行動のみに焦点が当たっており、2節にわたって蜂の働きが詳細に語られている。したがって、クルアーンで最も長く言及されている動物は蜂であり、この点から見ると、クルアーンで最も特別な存在の動物は蜂であると言える。

蜂についての説明があるのは次の節である。

ナフル章 16-68：主は雌蜂に啓示された。「山々や木々、そして人々が作った巣箱から、あなたのために住まいを作りなさい。」

69：「その後、それぞれの果物を食べ、そして主があなたに簡単に進むべき道を示した通りに進みなさい。そこからは色とりどりの蜂蜜が出てきて、そこには人々のための癒しがある。確かに、これには考える人々にとっての教訓がある。」

　次に、「地球上でもっとも特別な動物はどれか」という問いに移りたい。この問いに答えるのは難しい。蜂が蜜を作ること、イルカのレーダー機能、ホタルの光の生成、数多くの生物が持つ特徴は、それぞれが非常にユニークであり、他の生物との比較が難しい。そのため、一見すると、地球上で「最も特別な存在の動物」を特定することは困難である。しかし、考え方の一つとして、どの動物がいなくなった場合に生物界に最も大きな損害を与えるかを想像してみよう。動物を特徴に基づいて順位付けすることは難しいが、それらの動物が生物界で果たす役割の重要性に基づいて、最も特別な存在の動物を特定することは可能である。もし特定の動物がいなくなることで生物界に最も大き

な損害を与えるとしたら、その動物が地球で最も特別な存在の動物であると言えるだろう。

蜂は、植物の花粉を相互に伝達することによって、多くの植物の繁殖を促進する。この事実は、18 世紀および 19 世紀の研究によって明らかにされた。その他の生物も植物の受粉を助けるが、蜂に匹敵する生物は存在しない。もし蜂が絶滅すれば、多くの植物や果物、そしてこれらの植物に依存して生きている動物種も絶滅するであろう。蜂の絶滅が人類の絶滅を引き起こすといった表現は大袈裟かもしれないが、他のどの動物が自然界から消失しても、蜂のように他の生物の絶滅にこれほどまでに大きな影響を与えることはないと言えるだろう。クルアーンが最も長く述べている動物が、世界で最も重要な機能を持つ動物であることは、偶然だろうか？ 一つの書物にこれほどまでの偶然が重なることは、果たして偶然と呼べるのだろうか？

巣箱で全ての重荷を負う働き蜂は、約 6〜7 週間しか生きない。働き蜂はごく短命だが、出生時から巣箱における膨大な作業分担の中で自分の役割を非常に良く理解している。精密な計算に基づき、巣を作り、花から蜜を集め、ダンスで方向を指示し、長距離を迷わず移動し、巣の設置、掃除、保護、そして蜜の製造といった数多くの役割を見事にこなす。働き蜂はそのあらゆる面で、神が創造した素晴らしさの証しである。引用された聖句において、働き蜂の行動が述べられている際、動詞は女性形で用いられてい

る。アラビア語では、動詞は性別によって異なる形を取る。働き蜂の行動を語る際に女性形の動詞が使われていることは、クルアーンが述べた行動が雌の働き蜂によって行われることを示している。したがって、この節を「雌の働き蜂」と翻訳する方が正確である。これらの節に基づくと、以下の 3 つの役割は「雌の働き蜂」によって行われる。

1.巣を作ること

2.自然の中で蜜のエキスを集めること

3.蜜を作ること

実際に、これらの活動は全て、ただ一匹の雌の働き蜂によって行われる。雄の役割は、女王蜂を交尾させることだけであり、クルアーンで言及されている役割には一切関与しない。

クルアーンが啓示された時代において、人々は巣の中での役割分担の詳細、特に働き蜂が巣を作り、蜜を集め、蜜を作るのが雌の働き蜂であることを知っていたわけではなかった。そのため、クルアーンが巣作り、蜜集め、蜜作りなどの活動を挙げ、これらの活動を雌の働き蜂が行っていることに注意を促し、雄の働き蜂をこれらの役割から除外している点は、クルアーンの数々の精緻さの一つである。

同じナフル（蜜蜂）章の 66 節では、家畜の「腹」について触れた際に男性形の語尾が使われている（男女が混ざった集団に対しては男性形の語尾が使われることを覚えておいていただきたい）が、蜜蜂の腹から蜜が出ることについて言及される際には、ただ雌の働き蜂だけが蜜を作るため、「腹（butuniha）」という女性形が使われている。クルアーンの表現においては、偶然の一致などは存在しない。クルアーンにおける動詞が女性形か男性形かという選択さえも、非常に適切である。

働き蜂がその性別が雌であることを簡単な観察で理解することはできない。女王蜂は卵を産み、巣の中で非常に特別な地位を占め、他の働き蜂よりも大きいが、クルアーンの啓示から約千年後にその性別が雌であることが明らかにされた。ファフレディーン・ラズィ（1149–1210）は、自身の有名な解釈書で、働き蜂の大きなリーダーが雄であるかのように「リーダー」と述べている。もしそれが雌であることを知っていたなら、最終的に「リーダー」に女性形の語尾を使っていたはずである。しかし、1670 年代、オランダの生物学者ヤン・スワンメルダムが解剖学的に女王蜂が卵巣を持っていること、つまり雌であることを示した。それ以前、この蜂は雄だと考えられており、「王蜂」と呼ばれていた。働き蜂が雌であることは、さらに後の 1700 年代に確認された。この発見は、動物の卵巣が認識できるようになったことによって可能になった。普通の人

間が拡大鏡なしで解剖を行うことはできない。しかし、ムハンマドの時代には、こうした発見を可能にする光学機器は存在しなかったにも関わらず、クルアーンにはすでにそのことが記されていた。これを偶然だと言う人々に対しては、再三問い直さなければならない。このような偶然が多すぎはしないか？ このような表現をでたらめだによるものだと言うことは、良心にかなっていないのではないか？と。

3-3 雌蜘蛛の家

クルアーンでは、いくつかのメッセージが比喩を通じて伝えられている。これらの比喩を注意深く調べると、多くの精緻な点に気づく。雌の蜘蛛に関する次の節における比喩がその一例である。

アンカブート（蜘蛛）章 29-41：神以外の友を選んだ者の例は、雌蜘蛛の例に似ている。雌蜘蛛は家を作るが、確実に、家々の中で最も脆いのは蜘蛛の家である。彼らが知っていればよかったものを！

アラビア語では、単語に男性形と女性形があり、動詞も男性と女性によって異なる形に変化する。上記の聖句では、「アンカブート」という単語が女性形の接尾辞を持っ

ており、「雌蜘蛛」という意味を成すこと、さらに動詞が女性形で活用されていることから、この節は「雌蜘蛛」を強調していることが理解される。この節における女性形の強調には非常に深い精緻さがある。動物に関する研究でも、蜘蛛について非常に興味深い発見がなされている。まず第一に、蜘蛛の種類の中で家を作る、すなわち網を作るのは主に雌蜘蛛である。雄は若い頃に網を作ることがあっても、年齢が進むと網作りの仕事は完全に雌に任されるようになる。これは、クルアーンにおける女性形の接尾辞に関する考察から得られる教訓があることを示している。クルアーンが啓示された 7 世紀には、雌と雄の蜘蛛が網を作ることにおける違いについて誰も知らなかった。

この節は、神を忘れ、神以外の友を選ぶ者に対する警告を含んでいる。神以外の友に頼る者たちは、ほんの少しの衝撃で壊れる蜘蛛の巣のように信頼できない場所に身を寄せている。蜘蛛の巣は、わずかな衝撃で壊れるほど「脆弱」だが、この巣を作るために使われる糸は、自身の太さと同じ太さの鋼鉄よりも強靭である。また、雌の蜘蛛は、自身の種の雄でさえも容赦なく殺すため、雌の蜘蛛が作る巣は、失敗に終わる入り口がある家である。生物の種は、通常、家を作る際には、暑さや寒さ、敵、そしてあらゆる危険から身を守るために作る。しかし、蜘蛛がその家を作るのは、破壊すること、害を与えること、そして間違って家に入った者を食べるためである。この家は簡単に壊れる

ため信頼できず、また訪れた者が死に至ることから、この家に来る者にとっては信頼できない。神以外の友を選ぶことは、あらゆる面で失敗に終わることであり、この家もまた、失敗が待ち受ける家である。この素晴らしい例が示されている節の 2 つ後の節の表現も興味深いものである。

アンカブート章 29-43：われわれはこうした例を人間に示している。しかし、知識ある者以外それがわかる者はいない。

ムハンマドの時代において、宇宙の膨張や海底の暗闇、波を特定すること、さらには蜘蛛の雌雄が行う行動を区別することができた者は存在しなかった。特に、これらの異なる分野における説明が一度に行われることは全く不可能であった。クルアーンを啓示した者は、宇宙を膨張させ、海を創造し、また蜜蜂や蜘蛛などの生物を創造した神であるため、これらの事象が 1400 年前にどのように記述されているのかを理解することは、イスラムにおいて難しいことではない。これにより、「クルアーンを啓示した者が宇宙を創造した神である」というクルアーンの主張がいかに正確であるかが確認できる。実際、クルアーンにおける驚異的な表現は、さまざまな分野で現れている。しかし、いつの時代にも多くの否定者が神からのメッセージに対して

強硬に反対してきた。クルアーンは、こうした反対に対する備えを私たちに示している。

アラフ（高壁）章 7-132：彼らは言った。「あなたが我々を魅了するためにどんな証拠を持って来ようとも、我々はあなたを信じないだろう。」

3-4 混合液体の一滴

クルアーンの多くの節において、人間が精液から母胎内での段階を経て誕生する過程が述べられている。このようにして、私たちが無力であり、何にも寄与することなく、多くの詳細を持つ過程の末に存在することを思い起こさせるのである。これらの過程が語られる際、クルアーンが啓示された時代におけるこれらの過程に関する誤った信念は一切含まれていない。それに対して、クルアーンが啓示された時代には知ることができなかった多くの情報が節の中で示されている。これらの情報の多くは顕微鏡の発明とその発展によって明らかにされたものである。

ムハンマドの時代においても、人間が精液から創造されることは知られていた。しかし、精液は粘着性がある均質な液体として見なされていた。精液が多くの分泌物からなる混合物であることは知られていなかった。それにもかか

わらず、次の節において人間が「混合液体の一滴」から創造されたことが述べられている。

インサーン（人間）章 76-2: 確かにわれわれは人間を混合液体の一滴から創造した。われわれはその者を試みる。したがってその者を聴き、見る者とした。

マイクロカメラや高度な顕微鏡を用いて人間の体内での過程が明らかにされると、従来「単なる液体」と見なされていた精液が、実際には体内の多くの分泌腺から分泌された物質を含む「混合物」であることが理解されるようになった。精液は、男性の性腺、精嚢、前立腺、そして尿道に付随する分泌腺から分泌された物質が結合することで形成される[26]。精液を分析すると、プロスタグランジン、フラビン、アスコルビン酸、エルゴチオネイン、フルクトース、ホスファチジルコリン、コレステロール、リン脂質、フィブリノリシン、亜鉛、酸性ホスファターゼ、ヒアルロニダーゼ、精子など、数多くの物質が混合されていることがわかる。この「混合液体」のごく小さな一部が、複雑な生物学的構造を持つ女性の卵子と「混合物」を形成し、母

26 Maurice Bucaille 著、“Müsbet İlim Yönünden Tevrat İnciller ve Kuran”Mehmet Ali sönmez 訳、トルコ共和国宗務庁出版, 1998, p.312

親の子宮内での多くの過程を経て、最終的に子供が誕生する。

ムハンマドの時代、さらにはその後千年にわたり、母胎内での発生過程や、胚を構成する原材料が正確には何であるかは知られていなかった。ある者は男性の液体のみ、ある者は女性の卵子のみ、またある者はその両方、さらには女性の月経血を胚の原材料としていると考えていた。クルアーンでは、人間が「精液の全て」ではなく「一滴」から創造されたことに注意を喚起している。ムハンマドの時代には、子供がどのようにして形成されるのかが特定されていなかったため、精液のほんの一部から成ることを示す科学的な見解も存在しなかったのである。

キヤーマ（復活）章 75-36： 人間は自分が放置されると思っているのか？

37：彼は、零れた精液の一滴ではなかったのか？

クルアーンにおいて、「精液」と「一滴」の違いが明確にされていることは重要である。アラビア語で「ヌトファ（nutfe）」（一滴）という言葉は、放出された液体の中で、底に残る非常に小さな水滴を指すためにも使われる。一度の放出で、男性の精液からは数千万の精子が外に出るが、その中で女性の卵子を受精させるのは、わずか一つの

精子である。人間を形成する受精卵は、精液中の数千万の精子の中で、目標に到達し卵子と結びつく唯一の精子と女性の卵子から成り立つ。人間は精液全体からではなく、その「本質」（sulale）から創造されたことを示すこの節も、この点において重要である。

サジダ章 32-8：その後、彼の子孫を、取るに足らない水の本質から創造した。

興味深いことに、私たちは皆、人生における最初のレースで何百万もの競争者を抜き去った「競泳選手」とも言える存在である。私たちは、精液中の液体の無作為な粒子からではなく、精液の中の精子たち、その中でも大きな競争の勝者から創造された。私たちは皆、このような興味深い過程を経て選ばれた「本質」（sulale）であり、現在私たちがこの文章を読んでいること、そして私たちの人生のすべての過程が、この競争に勝ったおかげであるということである。次のクルアーンの節における性別の形成についての表現も興味深い。

ナジュム（星）章 53-45：実に、かれこそ、男と女の対を創造された方である。46：流れ出る精液の一滴から。

現在でも、一部の男性や男性の家族が、女性が男児を産まなかったために非難する場面が見受けられる。この考え方は、女性が子どもの性別を決定すると信じる誤った見解に基づいている。科学界では、この誤解はもはや存在しないが、近年まで科学者たちは、子供の性別は母親からの卵子と父親からの精子が同等に貢献して決まると考えていた。しかし、子供の性別は精子由来の遺伝子物質によって決まるというのは、科学界が最近発見した事実である。ムハンマドの死後約 200 年後に書かれたある書物には、当時の人々が性別の決定についてどのように理解していたのかを示す説明が記されている。その内容は以下の通りである。「男性の水は白く、女性の水は黄色である。両者が混ざり、男性の精液が女性の精液より優位であれば、子供は男児になる。女性の精液が男性の精液より優位であれば、子供は女児になる。」

人間の遺伝情報は、全ての細胞に存在する 46 本の染色体に含まれている。この染色体のうち 2 本は性別を決定する染色体である。男性の染色体は XY、女性の染色体は XX として定義される。女性の卵子は、卵子を排出する際に、X 染色体を 1 本ずつ含んだ 2 つの染色体を放出する。男性の精子には、X 染色体を持つものと Y 染色体を持つものがあり、もし男性の X 染色体が女性の卵子の X 染色体と結びつけば、子供は女性になる。一方、男性の Y 染色体が女

性の卵子のＸ染色体と結びつけば、子供は男性になる。つまり、子供が男性か女性かは、精子から提供されるＸまたはＹ染色体のどちらが結びつくかにかかっている。この情報は、クルアーンが 1400 年前に示唆したものであり、近年まで知られていなかった。この情報には皮肉も含まれている。女性は長年、子供の性別がもとで非難されてきた。科学の発見は、クルアーンに記された細やかな知識を明らかにするとともに、女性に対する誤った情報に基づく不当な扱いを浮き彫りにしたのである[27]。

母親の子宮内で進む過程は、百科事典に記載されるほどの詳細な形成過程を持つ壮大なものである。これらの過程について思索することは、創造主の芸術を理解するため、また私たちの無力さを認識するために価値がある。したがって、クルアーンにおいては、母親の子宮内での過程に目を向ける箇所が多く存在する。これらの過程に目を向ける際、キヤーマ章 75-36 において「人間は放置されると思っているのか？」という問いが投げかけられていることは、これらすべての過程を創造した存在が人間の行動を把握しており、人間を放置することはないことが表現されている点で重要である。

3-5 子宮の壁にぶら下がること

27 Kuran Araştırmaları Grubu 著, Kuran Hiç Tükenmeyen Mucize, p, 187-188

精液の中の精子も、精子が卵子と結びつくことを表す「受精卵」も、「滴（nutfe）」というアラビア語の単語に対応する。この受精卵は、子宮に落ちた時点で顕微鏡でしか確認できない非常に小さな体積を持っている。受精卵は最初の数日で急速に分裂を始め、依然として完全には解明されていない過程を経て、最終的に肝臓から心臓、皮膚から神経系に至るまで、全ての器官が形成される。胚は最初の週の間に子宮壁に吸盤のようにしっかりと付着する。この段階はクルアーンで「ぶら下がる」という意味の「アラク（alak）」という言葉で表現されている。ムハンマドの時代には、世界のどこでも胚発生学（胚学）という学問分野が発展しているわけではなく、胚の発たち過程を表す専門用語も存在しなかった。また、光学技術の進展がなかったため、顕微鏡やその他の光学機器を使用しなければ確認できない過程を記述し、概念化することは不可能であった。クルアーンでは、子宮に落ちた「滴」がその後「ぶら下がる」段階に進む過程が描かれている。実際に、最初の週の終わり頃から胚は子宮壁に吸盤のようにしっかりと付着し、この段階に進む。アラビア語で「アラク」という言葉の意味には「ヒル（吸血ヒル）」も含まれており、この点はクルアーンの表現における素晴らしさの一つである。この段階がクルアーンの中で記された順番で観察されることは重要でえある。

ムーミヌーン（信者たち）章 23-13：そして、それを耐久性のある安定した場所に、滴（nutfe）として置いた。

14：そしてその滴をぶら下がる（alak）ものに変えた…

「アラク（alak）」の段階が始まると、胚は目で見ることができないほど小さな体積を持っているが、この小さな体積の中には人間の体を形成するためのすべての遺伝的情報が含まれている。胚は、母親の子宮内でその後、ミリメートル、さらにはセンチメートル単位の大きさに成長する。例えば、第 6 週には 1 センチメートルに近い大きさになる。この時期およびその後の数週間の間に、胚はセンチメートル単位の大きさに成長する。胚のどの部分が頭、どの部分が胴体、どの部分が手、どの部分が足になるかは肉眼で認識できるが、これらの器官はまだ完全に形成されていない。現代の発達した胚学の知識をもとに、これらの事実を考慮すると、クルアーンのこの節に記された内容の驚異的な正確さがより明確に理解できる。

ハッジ章 22- 5：人々よ！死後の復活に疑いがあるならば、確かにわれわれはあなた方を土から、次に滴（nutfe）から、次に吸い付いて保持する（alak）ものから、次に形のはっきりしない肉片（mudğa）から創造した。そしてわれわれは、定められた期間、あなた方を母親

の子宮内に留め、その後、赤ん坊として外に出すのである…

「ムドガ（mudǧa）」という言葉は、「かみ切ることができる肉片」または「肉の一部」という意味である。実際、胚は目で見ることができる肉片になる前に、子宮内で吸盤のように付着する、いわゆる「アラク（alak）」の段階が始まる。次に、胚が目に見えるような肉片になったとき、器官の形は、クルアーンに記されているように「形がはっきりしない」状態にある。胚の頭、腕、脚は識別できるが、最終的な形態は段階を経て明らかになる。しかし、現代の胚学以前のいくつかの理論によれば、胎児の非常に小さなミニチュアが母親の子宮内で成長し、最終的に胎児を形成するとされていた。この理論が正しいのであれば、胚が小さな肉片（ムドガ）として見られる段階から、器官も明確に認識できたであろう。しかし、現代の生物学は、胚発生が単なるミニチュアの成長ではなく、非常に複雑な成立過程であることを明らかにしている。胚が視覚的に肉片となったとき、それはまさにクルアーンに記されているように「形がはっきりしない」状態であり、胚のどの部分が体のどの部分を構成するのかは理解できるが、手足のような部分はまだ完全には現れていない。

3-6子宮内での増加と減少

妊娠期間中、子宮内では子宮の重量から羊水に至るまで、さまざまな増加が見られる。出産の過程で増加が見られることが多いように思われるが、増加と同時に減少も発生する。例えば、妊娠中に子宮内で収縮を引き起こす $\alpha 1$ 受容体は減少し、その代わりに弛緩を引き起こす $\beta 2$ 受容体が大きく増加する。この減少と増加がなければ、妊娠中に交感神経の刺激を受けるたびに子宮は収縮を続け、その結果として胎児は死に至るだろう。神は驚くべき秩序を創造しており、通常は妊娠していない状態で子宮に多く存在する $\alpha 1$ 受容体は、妊娠期間中にエストロゲンとプロゲステロンの影響で減少し、$\beta 2$ 受容体が増加する。このプロセスに対してクルアーンでの省察は、神が私たちを母親の子宮内で壮大に創造したことへの教訓を得る手助けとなり、またクルアーンの表現が啓示された時代の背景であることを理解する助けにもなる。関連する節は次の通りである。

ラアド章 13-8: 神は、全ての雌が何を妊娠しているか、子宮内で何が減少し、何が増加するかを知っている。全ては神のもとで、定められた尺度によるものである。

クルアーンの時代と同時代の作品を調べると、クルアーンが啓示される前に人々が書いた作品や、その後の数世代で書かれた作品において、人間の繁殖に関する誤った見解が常に提示されていたことがわかる。中世を通じて、神話や根拠のない推測がこの分野で顕著に見られた。1651 年にハーヴィーが「生き物は全て最初に卵から形成され、胚は段階を経て形成される」と提唱した思想は、胚学の科学史における基礎となる段階であった。顕微鏡の発明を活用した 17 世紀には、依然として卵と精子の相互作用について議論されていた。著名な自然学者ビュフォンは、胚が卵から形成されると考える「卵説派」の立場に立っていた。ビュフォンと同じ立場を取ったボネットは、精子が互いに巣を作るという仮説を支持していた。この仮説によれば、将来生まれる人間の全ての個体は、相互に巣を作っており、人類最初の母親の卵巣内に存在しているとされていた。この仮説は 18 世紀にかなりの信頼を集めていた[28]。これらの事実を考慮した上で、7 世紀にクルアーンで述べられた表現と誤った見解が伝えられることなく胚の発展に関する記述がなされている重要性を、私たちはより深く理解できるのである。

28 Kuran Araştırma Grubu 著,'' Kuran Hiç Tükenmeyen Mucize'', p 187-188

第 4 章

歴史からの印

預言者ムハンマドが生きた時代においても、人々は過去に生きた部族について語り、未来に何が起こるかについて意見を述べていた。しかしその当時には、現在のような考古学という学問は存在せず、年齢を特定するために用いられる炭素 14 法のような方法もなかった。また、歴史的文献を評価する際の慎重な作業を含む意味で、歴史という学問分野も存在していなかった。このような時代において、記述文化は非常に弱く、口承文化が支配的であったため、過去や未来に関する主張は、確かな根拠がないまま容易に語られていた。

しかし現在では、考古学は学問として大いに発展し、年齢判定に科学的な多くの方法が用いられるようになり、世界中の多くの歴史家が各地の文献に記された情報を結びつけようと努力している。これらの進展を踏まえて、私はクルアーンに記された歴史に関する表現や、ユダヤ教およびキリスト教の文献における本件に関連する重要な表現を評価しようと考えている。この章では、私が「なぜ私はムスリムであるのか」という問いに対する答えの一部を構成するこれらの表現について考察する。クルアーンには、歴史

に関して誤った情報は一切含まれていない。さらに、クルアーンが過去や未来に関してなされている多くの説明がどれほど適切であるかも明らかになっている。この章ではそれらの例を挙げていきたい。これらの中には、クルアーンの啓示以前に存在した社会に関連するものもある。サバ族はその一例である。また、クルアーンの啓示時には知られていなかったが、ムハンマドの時代に起きた出来事に関連するものもある。例えば、メッカの征服やローマ帝国の敗北に関して予告された勝利がそれに当たる。さらに、特定の出来事が、クルアーンの啓示以前およびそれ以降の出来事に関連している。例えば、クルアーンに記されているようにファラオの遺体が発見されたことがその一例である。また、クルアーンの啓示以前に生きたイエスに関するクルアーンの説明が、異なる多くの資料（アポクリファ文書など）に記録されていることとも関連している。さらに、現在受け入れられているユダヤ教およびキリスト教の聖書に記されているもので、ムハンマドを示唆していると考えられる表現についても評価されることになる。

4-1 人類の歴史

世界と人類が何年前に始まったかについて、クルアーンには明確な説明も暗示も存在しない。この点は、科学と宗教の関係において特別な重要性を持つ。特に、近代の数世

代にわたって科学と宗教の関係について議論し、宗教と矛盾すると主張する者たちは、「宗教」に基づいて地球や人類が数千年前に創造されたとする見解を出発点としてきた[29]。この事実を考慮すると、クルアーンがこの問題に関して、あるいは他のどの問題に関しても誤った歴史的事実を提供していないことは重要である。例えば、預言者イブラヒム（アブラハム）の時代について誤った年号が示される可能性もあった。しかし、当時、誰かがその誤りを発見する可能性は予見できなかった。もしクルアーンが、7 世紀の人間またはその集団によって創作されたものであったならば、この書物はこのような誤りを数多く含むことが予想されただろう。クルアーンに記された、そして本書で多くの場所で指摘したような驚異的な表現に加えて、クルアーンがこのような誤りを含んでいないという事実にも特に注目したい。クルアーンでは、人間が地上で責任を持つ存在として登場するその起源に関して、哲学的に非常に重要な二つの問題が取り上げられている。第一は「悪の問題」であり、第二は人間の最も重要な特徴の一つである高度なレベルでの言語能力である。この点に関して、バカラ章の以下の節を見てみよう。

---

29 キリスト教世界では「若い地球創造説」と言われる説も、広い支持者を集めている。一方で、キリスト教徒の科学者、哲学者、宗教者たちの多くがこの見解を支持していないことも述べておく。これに関しては次を参照されたい。Caner Taslaman 著, Bir Müslüman Evrimci Olabilir Mi?, p. 59-68

バカラ章 2-30：主は天使たちに言われた。「われは地上に支配者を創造する。」彼らは言った。「そこに、破壊をし、血を流す者を創造されるのですか？わたしたちはあなたを賛美し、あなたを崇めています。」主は言われた。「われが知っていることを、あなたたちは知らない。」

31：そしてアーダムに全ての名を教えた。その後、それらを天使たちに示し、「もしあなたたちが真実を知っているならば、これらの名をわれに教えなさい」と言われた。

32：彼らは言った。「あなたを一切欠点のない清い者として認めています。わたしたちには、あなたが教えられたこと以外、何も知識はありません。本当にあなたは知恵を持ち、知っている方です。」

33：「アーダムよ！これらの名を彼らに教えてみなさい。」アーダムがそれらの名を彼らに教えると、主は言われた。「われはあなたたちに、われは天と地の奥深いものを知り、あなたたちが表に出していることも隠していることも知っていると言わなかったか？」

人間が責任を持つ存在として地上に置かれることを告げられたとき、天使たちは、なぜ地上で破壊的な行為（破壊を引き起こし、血を流す）を行う可能性の高い存在が創造されるのか、理解できなかったことを表明し、その意義を探ろうとした。哲学に関心のある者たちは、「悪の問題」

が哲学の中で難解で重要な問題であり、哲学史において多くの著名な思想家たちがこの問題に取り組んできたことを知っている。以前、拙著でこの問題を扱ったことがあるのでここでは詳細に触れない[30]。クルアーンが啓示された地域には、プラトンやアリストテレスのような哲学的学派は存在せず、神話的な思考と口伝文化が支配的であった。人間が責任を持つ存在として任務を担うことによって、最も興味深い問題の一つが「悪の問題」であり、この問題が取り上げられる際に、その繊細さが特に注目に値する。

クルアーンでは、人間が悪を行う能力についての疑問に対し、人間の言語能力を強調して答えている。言語を使う能力によって、人間は他の生物と比較して非常に異なる文化を創造し、科学や哲学を行うことができる。人間が預言者を通じて啓示を受け、責任ある存在であることができるのは、この言語能力によるものである。20 世紀と 21 世紀において、言語哲学は歴史上のどの時代よりも大きな関心を集めた哲学分野となった。言語能力に、最初に言及すべき人類の特性として注目することは、特定の哲学的な知識と関係がある。こうした知識がなければ、言及することは不可能ではないが、非常に困難であると考える。

クルアーンでは、人類に数多くの預言者が送られたことに注意を促している。クルアーンによれば、クルアーンに

30 Caner Taslaman 著, Kuantum Teorisi, Felsefe ve Tanrı, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2017, p. 169-221.

名前が挙げられた預言者たちは、実際には送られた数多くの預言者たちの一部に過ぎない（ムーミン章 40-78 を参照）。ムハンマドは、クルアーンに名前が挙がった預言者たちの中でも、名前が挙げられていない預言者たちとともに、預言者の連鎖の一環として描かれている。預言者が送られた社会は、それぞれ異なる特徴を持っていることがクルアーンの記述からわかる。クルアーンは、過去の多くの社会が後の社会よりも発展していたことを指摘している。

ルム（ビザンチン人）章 30-9：彼らは自分たちよりも力強く、地上を荒廃させ、彼ら自身が作り上げたものよりも多くのものを作り上げていた。
ムーミン章 40-82：彼らは、自分たちより前に存在した人々がどのように終わったかを見るために、地上を歩き回らないのか？前の人々はこれらよりも多く、強力で、地上の遺産においても優れていた。しかし、彼らが得たものは、何の役にも立たなかった。

特に 19 世紀および 20 世紀における哲学、社会学、歴史学などの分野で現れた進化論的で直線的な歴史観とその結果を考察する時、クルアーンのこれらの表現の重要性がより明確に理解できる[31]。これらの理解によれば、歴史上の

31 ここでの「進化論」が生物学における進化論とは関係ないことを特記しておきたい。

社会は常に進展し、後に生まれた社会は前の社会よりも発展しており、さらに後の社会は現在の社会よりも発展しているとされる。現在でも多くの人々に影響を与えているコント主義的な実証主義やマルクス主義的な歴史観などの哲学的・社会学的アプローチにおいて、直線的な歴史観に起因する誤りが見受けられる。16 世紀以降、歴史におけるすべての時代に共通した発展の方向があると考えることは、歴史上の社会を誤解する原因となった誤った前提に基づくものである。この誤った前提に基づいて歴史が評価されると、時に滑稽な主張が現れることもある。例えば、かつてエジプト人によって建設されたピラミッドを、エジプトよりも後の時代に生きた社会が作ることができる技術を持っていなかったため、そのピラミッドは「宇宙人の作品」だとまで言われることがあった。しかし、エジプトの建設技術が後の多くの文明よりも優れていたという説明だけでもこの状況を十分に説明できる。クルアーンがこのような事例においても誤りを見せず、過去の民族が多くの点で後の民族よりも優れていたことを示していること（これを裏付ける考古学的証拠は数えきれないほど多い）にも注目していただきたい。

4-2 クルアーンと考古学：サバ族の例

サバ族は、南アラビアを数世代にわたって支配し、この地域で最も先進的な文明の一つを築き上げた。彼らの首都マリブでは大規模な事業が行われ、その中でも最も重要な成果がマリブ・ダムであった。このダムは、世界で最も古いダムとして知られており、数世代にわたり世界最大のダムとして利用されてきた。このダムによって、降雨量が多い季節に発生する洪水からサバ社会は守られ、それにより非常に優れた農業活動が行われた。このダムがもたらした水を利用することで、年二回の収穫が可能となり、それがサバ社会の富を大いに高めることとなった。紀元前 1 世紀に生きた著名な歴史家ストラボンは、農作物やその香料によってサバ社会が地域で最も裕福な社会であったことを述べ、彼らが所有していた金や銀、建設した華やかな家屋についても記録している。また、紀元後 1 世紀の歴史家プリニウスは、この地域を「緑の国」と呼び、「幸運なアラビア（Arabia Eudaemon）」として言及した[32]。このダムは紀元前 8 世紀に建設されたとされているが、ドイツの考古学者グループは、より古い時代から段階的にこのダムが改修されてきたことを示唆している。この歴史的に重要なダムに関する知見を踏まえて、クルアーンにおけるこのダムの崩壊に関する記述を見てみよう。

32 Joshua J. ‘‘Kingdom of Saba’’, Ancient History Encyclopedia, 2018, http://www.ancient.eu/Kingdom_of_Saba

サバ章 34-15：本当に、サバ社会の地域には一つの証拠があった。右と左に二つの園があった。われわれは彼らにこう言った。「あなたたちの主の恵みから食べ、感謝しなさい。美しい土地と、恵み深い主。」

16：しかし、彼らは顔を背け、そこでわれわれは彼らに「アリムの洪水」を送った。二つの園を、苦い実をつけ、わずかに杉の木が生えている荒れ果てた二つの園に変えた。

17：そのようにして、彼らが感謝しなかったために、われわれは彼らを罰した。われわれが感謝しない者以外の者を罰することがあるだろうか？

サバ社会に関する研究から、この社会が月神や太陽神を崇拝していたことが分かっている。この事実は、クルアーンのナムル章 24 節において、サバ社会が太陽を崇拝していたことが述べられていることと一致している。また、サバ章 15 節で言及されているように、サバ地域の美しい庭園と豊かな作物については、ストラボンやプリニウスのような著名な作家の記録からも確認できる。ダムを通じて南と北の二つの平野が灌漑されていた。この点もサバ章 15 節における「二つの園」という記述と一致している[33]。クルアーンが示す通り、このダムは崩壊し、その崩壊はサバ

33 Kuran Araştırmacı Grubu 著, Kuran Hiç Tükenmeyen Mucize, p.226

社会にとって大きな災厄をもたらした。今日、イエメンにはこのダムの遺跡が残っており、19 世紀には多くの考古学的調査の対象となった。このダムが 6 世紀に崩壊したことが分かっており、これはクルアーンが啓示を受け始める直前の時代にあたる。サバ章 16 節では、サバ社会に送られた罰について「アリムの洪水（seyl el-arim）」として言及されている。「アリム」という言葉は「ダム」を意味する。このため、「アリムの洪水」はダムの崩壊によって引き起こされた洪水を指している。マウドゥディはその解説で次のように述べている。「『アリム』という言葉は『ダム、堤防』を意味し、南アラビア語で使われる『アリメン』から派生している。イエメンでの発掘調査では、この言葉がこの意味で頻繁に使用されていることが確認されている。例えば、イエメンのハビシュ王エブレヘがマリブの大堤防を修復した後に記された 542 年と 543 年の日付の碑文でも、この言葉はダムを意味するものとして使われている。したがって、アリムの洪水とは『ダムが崩壊したときに発生した洪水』を意味する。[34]」

ムハンマドが生きた時代のアラビアでは、まだ考古学のような学問は存在しておらず、ストラボンやプリニウスのような作家の記録を入手できたことを示す証拠は存在しなかったことを考慮すべきである。当然、これらの資料が全く存在しなかったわけではないかもしれないが、仮にこれ

34 Mevdudi, Tefhimul Kuran, 第 4 巻、訳者：Ali Ünal その他、出版元：İnsan Yayınları, İstanbul, p.517

らの資料を入手できたとしても、なぜ虚構の伝承が排除され、真実の情報が伝えられたのかという疑問は、合理的な説明を必要とする。クルアーンが神からの啓示であるという事実は、この書物における天文学、生物学、歴史に至るまでの数多くの卓越した説明がなぜ存在するのかの理由を明らかにしている。

4-3 メッカの征服

ムハンマドが彼に与えられた啓示を周囲の人々に説いていた際、その啓示の中で示された未来の出来事が実際に起こらないと証明されたなら、それは多くの人々がイスラムから離れる原因となった可能性がある。もしクルアーンが人間や人間の集団の創作物であったなら、クルアーンに記された未来に関する予言が全体のシステムを「危険にさらす」ことを意味していたであろう。しかし、もしクルアーンが神の啓示であったなら、「危険にさらされる」ことはあり得ない。なぜなら、クルアーンに記された未来に関する予言は、全てを知っている神からの知識であり、その情報が正確であることが示されると、クルアーンへの信頼が深まるからである。ムスリムたちがまだ弱く、偶像崇拝者が強いメッカの時代に、イスラムの敵が背を向けて逃げることが予告された。メッカ時代に啓示されたクルアーンのカマル章 54-45 には「その集団は敗北し、背を向けて逃げ

るであろう」と記されている。この予告は、まずバドゥルの戦いでの勝利により実現したと考えられている。当時、数と武器で優勢だった多神教徒にとって、この予言は信じ難いものであったが、クルアーンに記された通り、イスラムを排除しようとした者たちは結局、背を向けて逃げざるを得なかった[35]。628 年、メディナのムスリムとメッカの多神教徒との間で結ばれたフダイビーヤ条約は、ムスリムのメッカにある聖地ハラム（カアバ）への訪問をその年は妨げた。このため、ムスリムの間でムハンマドへの不満が高まり始め、神の使者が自分たちと共にいるにもかかわらず、ハラムへの訪問がどうして止められたのかが疑問視された。フダイビーヤ条約の後すぐに、クルアーンの勝利章 48-27 が啓示され、ムスリムたちは聖地ハラムに入ることができるという吉報が伝えられた。

ファトフ（勝利）章 48-27：確かに神は、使徒が見た夢が現実であることを証明された。神の許しによって、あなた方は恐れることなく、髪をそり、短く切った状態でマスジド・ハラームに入るであろう。（神は）あなた方が知らないことを知っている。これ以外にあなた方に近い勝利を与えることになる。

35 Kadı Abdülcebbar 著, Tesbitu Delaili’n Nübüvve, 訳者：M. Şerif Eroğlu, Ömer Aydın, 出版元：Türkiye Yazma Eserler Kurum Başkanlığı, İstanbul, 2017, p. 172-174

この啓示から約2年後、メッカは征服され、ムスリムたちは「安全に」マスジド・ハラームに入ることができた。確かに、マスジド・ハラームが安全に訪れることができたのはこの聖なる場所を含むメッカの征服によってこそ実現した。クルアーンのファトフ章48-27で言及されている「近い勝利（fethan kariban）」は、フダイビーヤ条約後すぐに達成されたハイバルの征服を指すと言える[36]。ファトフ章48-18でもこの「近い勝利」が強調されている。

物理的に脆弱だったため、少数の仲間たちと共にメッカを去らざるを得なかったムハンマドが、生まれ故郷であり、預言活動が始まったメッカを征服して戻るという歴史的な意義は非常に大きい。ファトフ章は、この歴史的な出来事を予告しており、信者たちはその予告に励まされ、メッカに向かって行進した。この征服では流された血はごくわずかで、ムハンマドは、彼を追放し、殺そうとした者たちに対して非常に寛容に接したと伝えられている。歴史的な資料によれば、ムハンマドはメッカの征服時、ユースフが兄たちに言った以下のクルアーンの言葉を読み上げたとされている。

36「近い勝利」という表現によりメッカの征服が示唆されていると考える人もいる。しかし、私はここで、預言者ムハンマド伝記が専門のİsrafil Balcı教授と同じように、「これ以前」という表現により、それ以前の別の征服が告げられていると考える。事実、歴史的資料でも、ハイバルの征服がフダイビーヤ条約の直後そしてメッカの征服からおよそ22か月前に起きたことが示されている。İsrafil Balcı 著, Yayınlanmamış Siyer Notları

ユースフ章 12-92：今日は、あなた方は非難されない。神があなた方を赦されるように。かれは最も慈悲深い者である。

預言者たちの多くは、自分が生まれ育った場所で政治的な支配権を確立することなく亡くなった。ムハンマドが見た夢の出来事は、クルアーンの啓示として予告に変わり、信者たちは追放された土地を取り戻した。もしクルアーンが啓示に基づくものでなかったなら、この予告が誤りであった場合、ムハンマドやクルアーンへの信頼は揺らぎ、多くの人々がイスラムを信じることをやめていたであろう。しかし、ムハンマドに対して「狂人」「魔術師」「利己的」といった非難を浴びせた者たちは、「預言者が言ったことは間違っていた」「クルアーンの予言が実現しなかった」とは言えなかった。実際、このような証拠を使ってムハンマドに反論することは、剣を使って戦い、彼を殺そうとするよりも容易だったであろう。もしイスラムの拡大をこのような証拠で止めることができたなら、戦争をして命を危険にさらすよりも、間違いなくこの方法を選んだであろう。しかし、彼らが困難な方法を選んだのは、このような方法では成功できないことを示している。結果的に、多神教徒たちは、ムハンマドとその仲間たちがメッカを支配するのを阻止することはできなかった。

メッカの征服を予告したクルアーンの章のように、クルアーンの短い章である第111章のタッバト章では、アブー・ラハブとその妻が地獄に送られることが予告されている。ご存じのように、ムハンマドと信者たちに対して最も強い反対を示したメッカの多神教徒の中で、アブー・スフィヤンをはじめとする多くの者が後ムスリムとなった。このように、もしアブー・ラハブやその妻が後にムスリムになったり、少なくとも偽の信者として振る舞ったなら、彼らの行動は多くの人々の心を惑わせただろう。なぜなら、クルアーンのこの章が議論の余地を持つことになったからである。もしクルアーンが啓示ではなく人間の創作物であったなら、クルアーンに基づく予測が誤りとなった場合、その結果として誤りが生じることは避けられなかったであろう。しかし、そのような事例はなかった。アブー・ラハブとその妻に関するこの章の予言は、クルアーンが啓示に基づいていることの証明である。もしクルアーンが人間の手で書かれたものであれば、このような不安が書かれるべきであったが、そのような不安は存在しなかった[37]。

37 本書でイスラムが神が啓示した宗教であることに関して示した証拠の8割以上は20世紀以前の研究には存在しなかった。また、イスラム思想史では特に「預言者であることの証拠」などのテーマで記された書物もある。それらは、預言者ムハンマドが預言者であること、つまりイスラムが神の啓示した宗教であることを示すために記された書物である。アブー・ラハブとその妻がムスリムにならなかったことは、この「預言者である箏の証拠」に関する書物の数々でも取り上げられている事柄である。次の著作を例として参照いただきたい。Beyhaki 著, Delailü'n Nübüvve, 第1巻、訳者：Hüseyin Yıldız, Hasan Yıldız, Zekeriya Yıldız, 出版元：Ocak Yayıncılık, İstanbul, 2017, p. 518-522

ムハンマドの時代には、まだ見ぬ乗り物が創られることを示唆するクルアーンの次の一節も、未来に関する重要な示唆を含んでいる。

ナフル章 16-8：あなたたちが乗るための馬、ラバ、そしてロバを創られ、さらにあなたたちが知らない多くのものも創られる。

現代において乗り物が非常に重要な役割を果たしていることを考慮すれば、クルアーンが指摘したこの点の重要性は明らかである。クルアーンの論理の中では、馬のような動物だけでなく、人間の手によって作られた乗り物も「神の創造物」として説明される。なぜなら、人間の手によって作られた乗り物も、神の創造物である原材料と、神が与えた知恵と手によって作られたからである。船も「神の創造物と恩恵」として以下のように説明されている。

ズフルフ（金の装飾）章 43-12：かれは全ての動物のつがいを創造した。あなた方に船や動物の乗り物を創り与えられた。

13：それらに乗って地上に着いたとき、あなた方が「これらを我々の所有とされた神に、栄光あれ。もしかれがこれを我々の所有とされなかったら、我々はこれを所有できなかったであろう」と言うようにするために。

14：そして、私たちは必ず、私たちの主に帰するであろう。

これらの節からもわかるように、ムスリムたちは、馬のような動物に乗る場合でも、テクノロジーによって生み出された乗り物に乗る場合でも、「これらを私たちの所有とされた神に、栄光あれ。もしかれがこれを私たちの所有とされなかったなら、私たちはこれを所有できなかったであろう」という表現を使うべきである。したがって、現在使用されている車、電車、飛行機などのテクノロジーによる乗り物も、クルアーンで言及された乗り物と同様に、それを使用する時にこの祈りを想起し、読むことが望ましい。現代において使われる乗り物はクルアーンに個別に記載されていないが、ナフル章８節は、現代社会において非常に重要な役割を果たすこれらの乗り物を指し示している。

4-4 ローマ人の勝利

クルアーンには、未来を予見するいくつかの節があり、短期間で歴史的な出来事として実現したものがある。その中で興味深い例の一つが、ルム（ローマ人）章に記された内容である。クルアーンが啓示された時代、ローマ帝国はキリスト教を信仰する国家であり、ササン朝ペルシア（ササン朝イラン）は火を神とする宗教（ゾロアスター教）を

信仰する国家であった。ササン朝がローマに勝利したことは、キリスト教徒と同じく唯一神を信じるムスリムにとっては悲劇的な出来事であった。この敗北の後、クルアーンはローマ人が近い将来勝利することを預言し、そのことによって信者たちが喜びを感じるだろうと告げた。

ルム章 30-2：ローマ人は敗北した。
3：彼らは地球上で最も低い場所で敗北した。しかし、彼らは敗北の後、勝利するだろう。
4：3 年から 9 年以内に。これ以前もこれ以後も、命令は神のものである。その日、信者たちは喜ぶであろう。

上記の引用された第 4 節における「bıdı sinin」という表現は、3 年から 9 年の範囲の数字を示している。アラビア語では、単数形、二つのもの、そしてそれ以上の数を示すために異なる表現がある。ムハンマドが布教を開始した時から、彼に従う人々は常に存在し、その数は次第に増加していった。もしクルアーンのこの表現が誤りであったなら、クルアーンやムハンマドに対する信頼は揺らぎ、多くの人々が信仰を放棄しただろう。クルアーンが神からの啓示でないと考える者にとって、クルアーンに未来に関するこのような予言が記されていることは、システム全体を危険にさらすことになる。預言者は、もしその預言が外れた

場合に失うものが、預言が当たった場合に得るものよりもはるかに大きかったであろう。クルアーンが啓示された書物として認識されなければ、この預言は無用で大きなリスクと見なされるだろう。しかし、ムハンマドが主張するようにこの書物が神から啓示されたものであれば、そのリスクは存在しない。この預言は、実現が難しいことが予告されている。なぜなら、戦争に敗北した国が、近い将来にその敗北した民族に対して戦争に勝つだろうと告げられているからである。また、「bıdı sinin」という表現から、この出来事が 3 年から 9 年の間に起こることが示唆されており、敗北した国が立ち直って戦争に勝利するには短期間であるということがわかる。

ルム章は、メッカ時代の後半、すなわちヒジュラ（＝聖遷、イスラム暦 622 年）が行われる少し前に啓示されたと考えられている。ヨルダン地域で、強力なローマ軍が大きな敗北を喫した。この戦いは 617 年に死海近くで起こったとされている。戦闘はヨルダンのどこかで行われ、エズリアト部族の住地に近い場所であったと、いくつかの資料に記されている。エズリアト部族は死海近くに住んでいた。このことから、この戦いに関するクルアーンの節は、ヒジュラの年である 622 年より前に啓示されたことが示唆される[38]。

38 İsrafil Balcı 著, Vahyin Gölgesinde Siyer Mekke Dönemi III, 出版元：Ankara Okulu Yayınları, Ankara, 2018, p.143-146

私たちに完全に伝わった最初のクルアーン解釈書の著者であるムカティル・ビン・スレイマン（767 年没）の情報からも、この戦いが死海近くで起こったことがわかる[39]。クルアーンのルム章第 3 節では、戦闘が行われた地域を示すために「エドナル・アルズ（ednal arz）」という表現が使われている。この表現は、一部の翻訳者が「地球上で最も低い場所」と訳したのに対し、他の翻訳者は「地球上で最も近い場所」と訳している。このアラビア語の表現は、どちらの意味にも解釈可能である。戦闘の距離という概念は相対的なものであり、戦いが行われた場所がどこであれ、その場所よりも近い場所が存在し得るため、「地球上で最も低い場所」という表現がより適切に思われる。「地球上で最も低い場所」という表現を理解していない解釈者たちは、この意味を選んだ可能性がある。しかし、今日私たちが知っているように、地球の大陸の中で最も低い地点は海面下 430 メートルの死海である。この場所が地球の大陸の中で最も低い地点であることは、当時は知られていなかった。そのため、「地球上で最も低い場所」という表現でここに言及されることは、奇跡的な表現である。ローマ軍が敗北した地域を記録したムスリムの歴史家たちは、その地域が「地球上で最も低い場所」であることを知ることは不可能だった時代に、そこを指摘している。もちろん、この場所はローマとササン朝が戦った地域の中で一つに過

39 İsrafil Balcı 著, Vahyin Gölgesinde Siyer Mekke Dönemi III, 出版元：Ankara Okulu Yayınları, Ankara, 2018, p.143-147

ぎないかもしれない。他の地域でも両国間で戦闘が行われていた。しかし、広大な地球の大陸の中で「最も低い」場所は一つしか存在せず、戦いが行われた場所がこの地域であること、またクルアーンにこの表現が含まれていることを偶然として説明するのは全く納得できない。この事実は、クルアーンの啓示から千年以上が経過した後に、人々によって初めて理解されたのである。

ローマ帝国が、当時、古代イラン地域を支配していたササン朝帝国との間で熾烈な戦争を繰り広げていたことは知られている。この戦争は、その時代の世界政治史において非常に重要な対立であった。世界で最も軍事力の強い二つの帝国が対立していたのである。帝王マウリキウスは602年にクーデターによって退位させられ、その後、家族全員と共に殺害された。クーデターを引き起こしたのはフォカスであり、彼がローマの玉座に就いた。この一連の出来事は、マウリキウスを精神的な父のように慕っていたホスロー2世を激怒させた。おそらく、ホスロー2世は、マウリキウスの復讐者としてフォカスによって支配されていたローマの領土を手に入れる機会を得たのであろう。ササン朝軍が帝国領土に侵入したことで平和は破られ、ローマとササン朝の間で新たな、特にローマ側にとって非常に破壊的な戦争が始まった[40]。戦争の開始とともに、国境の都市は

40 この事柄に関して次の著作を参照されたい。Zafer Duygu 著, Hıristiyanlık ve İmparatorluk: Geç Antikçağ'da Kilise-Devlet İlişkileri ve Kristoloji Paradigmaları, 出版元：Divan Yayınları, İstanbul, 2017, p. 401

ササン朝軍によって占領された。しばらくすると、シリア、フェニキア、そしてパレスチナが陥落した。ササン朝はエジプトとリビアを征服し、さらに進んでアナトリアのすべての都市が焼かれ、ササン朝軍はイスタンブールまで進軍した。外部での敗北に加えて、内部ではフォカスが暴力的な圧力政治を続けたことが彼の終焉をもたらした。帝王はクーデターで退位させられ、ヘラクレイオスが新たな皇帝として即位した[41]。ご存知のように、ヘラクレイオスはムハンマドが生きていた時代のローマ帝国の皇帝であった。

「啓典の民」であるローマ人が敗北したことに偶像崇拝者たちが満足し、それをムスリムに対する優位性の主張に変えたと言われている。伝えられるところによれば、メッカの偶像崇拝者たちはこの状況をムスリムたちに不利に利用しようとしたという。そうした状況の中で「ルム章」が啓示され、ローマ人が近い将来ササン朝に対して勝利を収めるという知らせがもたらされた[42]。この点について、預言者ムハンマド伝記を専門とするイスラフィル・バルジュ（İsrafil Balcı）教授は、他の要因が関与している可能性にも言及している。

---

41 これらの出来事は、ギリシャ語文書と並んで特にスルヤニ語の歴史的文書に記されている。詳細は次を参照されたい。Zafer Duygu 著, Süryani Tarih Yazıcılığında Geç Antikçağ: hıristiyanlık, İslam Siyasi Tarih, 出版元：Divan Yayınları, İstanbul, 2016

42 M. Kamil Yaşaroğlu 著, ‘’Rum Suresi’’, Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, 第 35 巻、2008, p.230-231

「しかし、あまり語られていないもう一つの重要な点は、啓典の民であるネジャシー（エチオピアの王）がムスリムの難民たちに自国を開放し、そこで安全に生活できるようにしたことである。この文脈において、預言者ムハンマドとネジャシーとの間に親密な対話が展開されたことがわかる。この親密さが、ムスリムがキリスト教徒に対して好意的な立場を取ることに影響を与えた可能性が高いと考えられる[43]。」

ローマ帝国が、非常に厳しい状況下で領土と軍隊を完全に失っていた中で大きな復活を遂げたことは、世界史において重要な出来事であり、予想外の展開でもあった。ローマ皇帝ヘラクレイオスは、クルアーンで述べられたように復活を果たし、自国をササン朝の占領から完全に解放した。ヘラクレイオスは新たな軍を編成し、反攻を開始した。622 年 4 月 5 日、すなわちヒジュラ年と同じ年に、彼はコンスタンティノポリスを離れ、続けて行った戦争で成功を収め、ついに自国をササン朝の占領から完全に解放した。ローマの進撃を「止める」べきササン朝軍はもはや存在しなかった。実際、これらの重大な敗北は、ササン朝帝国に連続的な政治的混乱を引き起こした。651 年まで続いた短期間の政権交代の時期に、ササン朝はかつての力と安定を取り戻すことはできなかった。この過程において、イスラム軍は次々に勝利を収め、ササン朝帝国の歴史的存在

43 İsrafil Balcı 著, Vahyin Gölgesinde Siyer Mekke Dönemi III, 出版元：Ankara Okulu Yayınları, Ankara, 2018, p.161

を終わらせた。この出来事は、イスラム史における重要な転換点の一つである。

本稿では、クルアーンにおける二つの驚異的な現象を確認した。第一に、ローマ帝国が敗北した場所を説明する際に使用された「地球上で最も低い場所」という表現があり、これはクルアーンの啓示から千年以上後に地質学の進展によって明らかになった現象に注目したものである。第二に、ローマ帝国が政治的に完全に崩壊した状況下で、短期間で勝利することが予告され、実際にその通りになったことである。これらは、クルアーンが啓示に基づいた書物であることを証明するものである。

4-5 ファラオの遺体

クルアーンはファラオに関して、非常に興味深い主張をしている。この主張は、クルアーンが啓示された 7 世紀から約 2000 年前に生きたファラオに関するものであり、また、クルアーンの啓示から 1200 年後に行われた考古学的な大きな発見とも関連している。このように、歴史の遠い過去と未来に関する事象が同時に言及されていることは、クルアーンの模倣不可能な素晴らしさの典型的な例である。まず、このテーマに関するクルアーンの節を見てみよう。

ユヌス章 10-90： そして、イスラエルの子孫に海を渡らせた。ファラオとその軍隊は、傲慢と敵意をもって彼らを追った。溺れそうになったとき、彼は言った。「イスラエルの子孫が信じている神のほかに神はいないことを信じた。私は従う者の一人である。」

91： 今になってか？ 以前は反抗し、破壊者の一人だったではないか。

92：今日はお前の体を救うことにしよう。後の者たちにとって証拠となるように。実際、多くの人々はわれわれの証拠に気づいていない。

この節が伝えているのは、ファラオは自分が死ぬことを理解したときに信仰を表明したことである。しかし、死が確実であると分かってから表明された信仰は、神によって受け入れられなかった。これに続く、私たちの議論において重要な 92 番目の節において、「あなたの身体を」という表現が登場する。この表現は、生きたファラオではなく、彼の遺体が救われることを示している。また、「後の者への証拠として」と強調されている点も重要であり、これはその場にいた人々に関することではないことを示している。要するに、この節における「身体の救済」と「後の者への証拠となること」は、私たちの議論において重要な事柄である。ファラオの軍が溺れたことはユダヤ教とキリスト教の聖書にも記載されているが、「身体の救済」や

「後の者への証拠としての役割」という表現はクルアーンにのみ見られる。

エジプトでは、1880 年代から、ナイル川近くの王の谷でファラオの王朝に属する多くの遺体が発見された。それらのミイラは約 3000 年後に発見されたことになる。これらのミイラはカイロ博物館の王のミイラ展示室に展示されており、博物館の最も貴重な展示品として訪問者に公開されている。クルアーンの啓示から千年以上前には、ファラオたちのミイラが保存され、腐敗せずに保たれていることについては、誰も知ることがなかった。7 世紀のアラビア半島の誰もその情報を持っていたとは考えられない。仮にそのような情報を持っていたとした場合でも、19 世紀にファラオの遺体が発見され、それが警告のための証拠となることが予測されていたとは思えない。実際、この発見はクルアーンの啓示から約 1200 年後に起こったのである。

クルアーンに記された表現に全く関心を持たない多くのユダヤ人、キリスト教徒、世俗的な考古学者や歴史学者も、これは発見されたファラオの遺体の中でムーサを殺すために出発したファラオのものだと述べている。これについて、ある者は発見された遺体がラムセス 2 世であると予測した。クルアーンと科学の関係について真剣に研究しており、これらの遺体を調査したモーリス・ビュカイユは、発見されたファラオがメルネプタハであると予測した。その遺体に見られる致命的な打撃の跡を証拠として示してい

る[44]。私の見解は、紀元前 15 世紀に生きていた第 18 王朝のファラオの一人だと考える歴史家たちの意見に近い。例えば、ユダヤ人で後にキリスト教徒となったオックスフォード大学の歴史家であり、重要な旧約聖書の専門家であるアルフレッド・エダースハイムは、短命で急死したトトメス 2 世が最も有力な候補であると述べている。[45]彼の体にある膿瘍は、旧約聖書やクルアーンで言及されているエジプト人への罰の結果として生じた可能性が高い。ファラオが海で溺れた後、岸に打ち上げられたその遺体は、エジプト人が他のファラオたちにしたようにミイラ化されたと考えられている。ハーバード大学の博士号を持つジョエル・D・クレンクの研究結果も、この主張を支持するものである。トトメス 2 世の後に支配を引き継いだハトシェプストの碑文には、トトメス 2 世の時代がエジプトにとって非常に困難な時期であったことが述べられており、これは重要である。[46]旧約聖書とクルアーンに描かれたムーサの時代には、エジプト人に多くの災難が降りかかっていたことがわかる。これに関して一部の専門家は、その後に王位を継いだ第 18 王朝のファラオ、トトメス 3 世がムーサのファラオであったと考えている。クルアーンには、ムーサの母親が恐怖からムーサを川に託した後、ムーサがファラオの

---

44 Maurice Bucaille 著, Mumies of the Pharaohs, 訳者：Alastair D. Pannell, 出版元：St. Martin’s Press, New York, 1989

45 Alfred Edersheim 著, Bible History: Old Testament, 出版元：Hendrickson Pub., 1995

46 Joel D. Klenek 著, The Exodus from Egypt: Archaeological Data and Expectations, 出版元：S. R. Press, 2011

妻に養子として迎えられたことが記されていることを思い出そう。トトメス王朝のいずれかがムーサのファラオであったという興味深い証拠の一つは、トトメスとムーサの名前の類似性である。トトメスという名前を構成する 2 つの部分のうち、「モーセ（mose）」という部分がムーサの名前と似ている。この名前の類似性は、ファラオの家族がムーサにその名前を付けたことを説明するかもしれない。ここで本題として重要なのは、1880 年代以降に発見されたすべてのファラオの遺体がミイラ化され、エジプトの博物館に保存されていることである。これらの中で、どのファラオがムーサのファラオであったとしても、私たちがここで到たちする結論には何ら変わりない。

　ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教のいずれにとっても重要な意味を持つこのファラオの遺体が 19 世紀に発見されたことは、考古学における非常に重要な発見である。クルアーンに登場する預言者の中で、確実にその墓が確認されているのは私たちの預言者（ムハンマド）だけである。しかし、「悪の中心」として描かれる人物の中で、その遺体が示される人物はファラオ以外には存在しない。要するに、クルアーンで「良い」と「悪い」と定義された歴史的人物の中で、その遺体の場所が知られている人物は二人だけであり、その中で遺体が確認されている人物はファラオのみである。さらに、クルアーンでは、ファラオに対してのみ「その遺体を救う」「後の世代への証拠として

残す」と記されている。このような表現は、クルアーンの中で他の誰にも使われていない。クルアーンにおけるこの表現と合わせて、考古学における最も重要な発見の一つであるファラオの遺体の発見があることは、単なる偶然であろうか？これを偶然と解釈することは、無慈悲な解釈ではないだろうか？

3000 年もの間存在が知られていなかったこの遺体は、現在では展示されており、クルアーンで述べられたように、人々にとって重大な証拠、教訓となっている。ファラオのような大帝国を築いた者たちの最期を見ることで、この世のものを優先することがいかに無意味であるかを教えている。また、かつての偉大な帝国の最期の姿を目の当たりにすることが、人々に驕り高ぶることがどれほど空しいものであるかを教えている。さらに、自らの権力を悪行に使った者たちに、その悪行から何も残らないこと、そして誰もその責任から逃れることができないことを教えている。そして、クルアーンが人間の創作物ではないことを示している。クルアーンの 92 節におけるもう一つの素晴らしい表現は、「実際、人々の大多数は我々の証拠について知らない」と述べることにより、人々が神が提示した教訓を適切に評価しないことに警鐘を鳴らしている点である。クルアーンの啓示から 2000 年ほど前、クルアーンの啓示から 1200 年後に発見され、そして人類史において重大な意義を持つこの遺体と、それに関連するクルアーンの節は、今

まさに人類とムスリムたちの前に存在していることを見ていただきたい。この証拠に気づいている人はいくらいるだろうか？「実際、人々の大多数はわれわれの証拠を知らない」という表現の素晴らしさに、あなたは気づいているだろうか？

現存する歴史的なデータでは、このファラオがどのように死んだのかを確定することはできない。しかし、クルアーンに記されているファラオの死とこの遺体との間に矛盾は見られない。クルアーンがファラオの遺体が証拠となることを述べている以上、この遺体の発見を待つのは自然である。では、何が起きたのか？いつも通り、然るべきことが実現した。遺体が発見されたのである。 まさに 3000 年の眠りから目覚めて、である。 では、クルアーンの「人々の大多数はわれわれの証拠について知らない」という預言はどうなったのか？これを、この問題についても、他の問題についても、周囲の人々に質問をして自分で確かめていただきたい。 人々の多くが神の証拠についてどれくらい知っているのかを。

クルアーンがムハンマドに啓示された 7 世紀、さらには近年において、将来的に「博物館学」なる概念が登場し、何千年も保存された人間の遺体、さらにはエジプトのファラオの遺体が明らかになることを予測することはできなかった。神の証拠は多く存在しているが、人々の大多数はそれらの証拠について知らずに生きているのである。

4-6 トーラーと旧約聖書（タナハ）の他の書物における印

「旧約聖書」という表現はキリスト教徒が、また「タナハ」という表現はユダヤ教徒が指すものであり、いくつかの違いはあるものの、概ね同じ書物のコレクションを意味している。（キリスト教徒が認める「旧約聖書」の内容はより広範囲であり、プロテスタントは 39 巻、カトリックは 46 巻、ギリシャ正教会は 50 巻を認めている。）その中で最初の五つの書物はトーラー（モーセ五書）であり、さらにダウード（ダビデ）に与えられたゼブル（詩篇）や、エユブ（ヨブ）、ユヌス（ヨナ）などの預言者に与えられた書物もその範疇に含まれる。この書物がどれだけ保護されているか、あるいは改変されたかに関する長い議論については、本書の範囲外であることを思い出しておきたい。ここで、イスラム世界において多くの人々が誤って理解していることに注意を喚起したい。キリスト教徒は、単に福音書（「新約聖書」とも呼べる）を聖書として見るのではなく、キリスト教徒にとっての聖書[47]は、トーラーやゼブルを含む「旧約聖書」も含まれている。したがって、このセクションで述べられる内容は、ユダヤ人だけでなく、イスラムと並ぶ世界人口で最も多い宗教を構成するキリスト

47 多くの訳者が「聖書」（Bible）を「福音書」と訳していることさえ、このことに関する知識が不足していることを示すのに十分である。しかし、「聖書」（Bible）という表現は、キリスト教徒が「旧約聖書」と呼ぶ四つの福音書よりも厚い本のコレクション、また「新約聖書」の四つの福音書と他の書物も同時に含んでいる。

教徒たちが「聖なるもの」として認めている書物に関するものであることに留意しなければならない。

クルアーンの非常に重要なメッセージの一つは、歴史を通じて送られた預言者たちが、ムハンマドと同じメッセージをもたらしたということである。こうして、ムハンマドとそのメッセージは、歴史を通じて送られた預言者たちの使命とつながることになる。このことを理解しているムスリムは、自分自身をどの時代にも多くのつながりを持つ流れの中に見出すことになる。ヌフ（ノア）、イブラヒム（アブラハム）、ヤークブ（ヤコブ）、ムーサ（モーセ）、イーサ（イエス）をはじめ、名前を挙げることができる数多くの預言者たちがどのようなメッセージをもたらしたとしても、ムハンマドもまた同じメッセージをもたらしたのである。実践において（例えば食べることが禁じられているものなど）いくつかの違いはあるものの、基本的な信仰は同じである。クルアーンでは、私たちの預言者が次のように言うよう命じられている。

アフカーフ（砂丘）章 46-9：言え、「私は最初の使徒ではない。」と。

クルアーンの多くの箇所は、預言者ムハンマド以前に来た使徒たちが、神の存在と一体性を信じるよう、偶像崇拝

を避け、不正を行わないように人々に呼びかけたことを伝えている。クルアーンのこれらの節のメッセージを理解した上で、ムスリムを名乗る者は、自分をムハンマドとともに下ったメッセージを信じて従う集団の一部としてのみ見なすのではなく、歴史を通じて同じメッセージに従った、より広い集団の一部として見なす。

クルアーンは、多くの古代の預言者のうち何人かを名前で挙げ、最後の預言者ムハンマドに啓示された書物として、彼のメッセージと先の預言者たちのメッセージを結びつける。また、先に述べた聖書（トーラーや福音書）の中でムハンマドについて予告されていたことを明示することによって、実際にはそれらの聖書もクルアーンのメッセージと繋がっていることを示す[48]。

アラフ章 7-157：彼らはトーラーと福音書に書かれている、彼らの中の、啓典を知らない預言者に従う。かれは彼らに善を命じ、悪を禁じ、清らかなものを許し、汚れたものを禁じる。

ユダヤ教徒やキリスト教徒が現在「聖なる」ものと見なしている書物がどの程度保存されているかは議論のあるテ

48 クルアーンで、その時代より前に現れた預言者の中で、説明がある預言者もいれば、全く説明のない預言者もいることが記されている。（ムーミヌーン章 40-78）

ーマである。「改竄された」という主張は、後の預言者に関する記述が意図的に隠されたり、その意味が歪められたりした可能性があるという点で重要である。しかし、先に述べたように、本書での計画した範囲を超える議論になるため、ここではそれに触れない。とはいえ、クルアーンにはそのような示唆があるので、この項目では、現在認められている「旧約聖書」（または「タナハ」）の中でムハンマドと彼に続くメッセージに言及されている可能性のある表現を取り上げることにする。次の項目では、同じテーマに関連して福音書について取り上げる。

ムハンマドの時代にムスリムとなった人々（一般的に「サハーバ」と呼ばれる）から始まり、ユダヤ教やキリスト教の聖なる書物の中に、ムハンマドへの言及が見られることが確認されている。例えば、アブドゥラフ・ビン・アムルは、後で触れるイザヤ書 42 章 1〜9 節に類似した表現が、これらの書物におけるムハンマドの預言（ベシャーイール）として解釈されるべきだと述べている。著名なウマイヤ朝のカリフ、ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズ（720 年没）は、ビザンツ帝国の皇帝レオ 3 世に宛てた手紙の中で、ユダヤ教とキリスト教の「聖なる」書物に見られる同様の言及に注目している。アッバース朝のカリフ、マフディ・ビッラ（785 年没）は、ネストリウス派の教皇ティモテオス 1 世との対話の中でこれらの表現を取り上げている。イスラム歴史の重要な資料であるイブン・イシャ

ーク（767 年没）の書物にもこのテーマが記されており、元々キリスト教徒で後にムスリムとなったアリー・ビン・ラッバン・アル・タバリ（861 年没）の作品は、この文脈で書かれた後の多くの作品の参考資料となっている。イブン・ハズムからイブン・タイミーヤに至るまで、多くの影響力のあるイスラムの思想家たちもこのテーマに関心を持っている[49]。

このテーマについて具体例を挙げていく。ご存知の通り、預言者イブラヒム（アブラハム）は、息子イスマイルと共にカアバを建てた（バカラ章 2-127）。預言者ムハンマドもイスマイルの子孫である。ムハンマドがなぜメッカを去ったのかという問いに対する答えの一つとして、何千年にもわたる高い歴史的意義を持つカアバを偶像崇拝から解放することが、この使命の一部であったということが挙げられる。「旧約聖書」においてイスマイルの子孫に触れる表現は、ムハンマドの預言者としての任務が予告されていたことの証として解釈されてきた。

創世記 16 章 10 節：そして主の使いは彼に言った。「あなたの子孫をますます増やす。あまりにも多くて数えきれなくなるだろう。」

49 Fadıl Ayğan 著, Son Peygamberi Müldelemek, 出版元：İSAM Yayınları, İstanbul, 2017, p.259-286

創世記 16 章 11 節：主の使いは彼に言った。「見よ、あなたは妊娠しており、男の子を生む。彼の名をイシュマエルと名付ける。主はあなたの苦しみの叫びを聞かれた。」

創世記 17 章 20 節：イシュマエルについて言えば、われはあなたの願いを聞いた。彼を祝福し、実を結ばせ、子孫を限りなく増やす。彼は 12 の族長の父となり、その子孫を大いなる民にする。

トーラーの創世記におけるこのイシュマエルの子孫に関する表現は、イシュマエルの子孫であるムハンマドの登場によって実現したと考えられてきた。イブン・タイミーヤは、イシュマエルの「子孫の増加」と「大いなる民にする」という表現が、讃美の意味を含んでおり、「大いなる民」という表現は信仰するコミュニティと関係があると述べている。この説明によれば、神はイシュマエルの子孫にムハンマドを通じて信仰と預言を授け、彼の後に従う者たちを増加させ、栄光を与えているとされている[50]。

ハガイ書における以下の部分は、預言者ムハンマドが古代の聖典において予告されているという問題に関連しており、「ムハンマド」や「イスラム」と意味的に類似した語が登場する点が重要視されている。

---

50 İbn Teymiyye 著, el-Cevabu’s Sahih, 5, p.219-220; この文献から伝えたのは Fadıl Ayğan（ Son Peygamberi Müjdelemek, p.299-300）。

ハガイ書 2 章 6-9 節:

6 だから、天と地の支配者である神はこう言う。「もうすぐ、われは天と地、海と乾いた地をもう一度揺るがせる。」

7「すべての国々を揺るがせ、そしてすべての国々の富が来る。われはこの家を栄光で満たす」と、天と地の支配者である神は言う。

8「銀も金も私のものだ」と、天と地の統治者である神の言葉。

9「この後の家の栄光は、前のものよりも大きくなる」と、天と地の支配者である神は言う。そして、「この地に平和を与える」と、天と地の統治者である神の言葉。

ハガイ書のこの部分では、未来に起こる重要な出来事が強調されている。キリスト教の信者からムスリムに改宗し、このテーマに関する研究で知られるアブダラハド・ダウードは、ハガイ書 2 章 7 節に登場する「ヒマダ」(Himada)という言葉が、預言者ムハンマドの名前の語源である「ハムド」(hmd)と同じ語源から来ていることに注目している。（現在の翻訳では「ヒムダ」という言葉は「貴重な物」または「価値あるもの」と訳されている。）

さらに、ハガイ書２章９節に登場する「シャロム」(Şalom)と「イスラム」(İslam)という言葉が、同じ語根と意味（平和、自らを委ねること）を持つことは疑問の余地がない[51]。未来に起こる、宗教的に非常に重要な出来事が語られている箇所で、「ムハンマド」と「イスラム」という名前と同じ語源から派生した言葉が同時に現れることは、非常に興味深い点である。

トーラーに登場する表現の中で、ムハンマドに関する予兆と見なされる最も重要な表現の一つが次である。

申命記 18 章 15 節：「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの兄弟たちの中から、私のような預言者を現すだろう。」

申命記 18 章 18 節：「われは彼らの兄弟たちの中からあなたのような預言者を現し、われの言葉をその口から聞くことになる。その者は私が命じるすべてのことを彼らに告げる。」

申命記 18 章 19 節：「われの名によって語る預言者の言葉を聞かない者を、われは罰する。」

51 Abdulahad Davud 著, Tevrat ve İncil’e Göre Hz. Muhammed, Nusret Çam, 出版元：Nil Yayınları, İzmir, 1992, p.22-29

申命記 18 章 18 節には、将来現れる預言者について記されている。キリスト教徒はこの表現がイエスを指すものだと考えているが、実際にはムハンマドがこの預言者である可能性が高いと考えられる。ムハンマドとモーセは多くの点で似ており、両者は自らの生涯を通じて社会的な支配を確立し、社会構造を作り上げた。イエスの死後、初めてキリスト教徒たちによって教会組織が作られた。

ムスリムは預言者たちは共通のメッセージを持っていると認識しているため、ムスリムにとってイエスとムハンマドのどちらがこの預言に適しているかを断定するのは難しい。しかし、イエスを神の子として崇拝し、彼が人類の罪のために死んだとする教会が、申命記のこの表現がイエスではなくムハンマドに該当すると主張することには大きな矛盾がある。なぜなら、教会はイエスを神格化し、彼を他の預言者とは異なる特別な存在と見なしているからである。そうした立場を取るキリスト教徒が、イエスがモーセに似ているという主張をすることは矛盾している。

申命記 18 章 18 節の「われの言葉をその口から聞くことになる。われが命じるすべてのことを彼は彼らに告げる」という表現も重要である。イスラムの啓示に基づけば、ムハンマドは神から啓示されたことを人々に伝えた。クルアーンでは、ムハンマドを表す最も頻繁に使用される言葉は「使徒」であり、これは彼が神からの命令を人々に伝える役割を果たしたことを意味する。対照的に、キリスト教の

主要な教派では、イエスが神から啓示を受けたわけではなく、むしろ「神の存在」として彼が自らの行動と言葉で神の意志を表現したとされる。また、イザヤ書における表現もこの問題に関連している。

イザヤ書 42 章 1 節：見よ、われが彼に支援を与え、われが満足している、われが選んだ人間。われはわれの霊を彼の上に置いた。彼は諸国のために正義を現すであろう。
2 節：彼は叫び声を上げることはなく、街中で声を高くすることもない。
3 節：彼は折れた葦を折ることはなく、消えかけた灯火を消すことはない。忠実に正義を告げ知らせる。
4 節：地の果てまで正義を行うまで彼は気力を失うことはなく、海岸の民は彼の律法を待ち望む。
5 節：天を創造し、それを広げ、地を形成し、それに生気を与え、地上の人々に呼吸を与え、そこに住む者に命を与えるあなたの神、主はこう言われる。
6 節：われは主である。われはあなたを正義によって呼び、あなたの手を取って守り、あなたを民の契約として、諸国の光として立てる。
7 節：あなたは盲人の目を開き、監獄の囚人を解放し、暗闇の中にいる者たちを出すであろう。
8 節：われは主である。これがわれの名である。われは栄光を他者に与えず、賛美を偶像に渡すことはない。

9 節：見よ、われが以前に知らせたことが実現した。今、われは新しいことを告げる。それらが現れる前に、あなた方に知らせる。
10 節：海に向かって行く者よ、海にいるすべての者よ、岸辺とその住民よ、主に新しい賛歌を歌え。地の四隅から彼を賛美の歌で称えよ。
11 節：荒野とその町々、ケダルに住む村々は声を上げよ。セラに住む者たちも歌い、山の頂から声を上げよ。

イザヤ書 42 章における未来に関する記述は、預言者ムハンマドの生涯と大きな一致を見せている。ムハンマドの生涯は、実際に偶像を破壊したこと（8）、生存中に地上を支配して正義を実現したこと（3 および 4）、霊（ムスリムにとってはジブリール）から啓示を受けたこと（1）、優れた道徳観を持っていたこと（2 および 3）、人々に光をもたらし、尖った心を癒したこと（6 および 7）、クルアーンという新たな啓示を人々に告げたこと（10）、また、イブラヒムの息子であるイスマイル（イシュマエル）の子孫であるケダルの血統に連なるコミュニティの一員であったこと（11）といった点において、これらの記述と一致している。これらの出来事が未来に起こると告げられていること（9）も重要である。イザヤ書 42 章の続きで 17 節には、偶像崇拝者たちが恥をかくことについて言及されており、ムハンマドによってもたらされたメッ

セージが偶像崇拝に大きな打撃を与えたことは、歴史的な観点から明白な事実である[52]。

トーラーに記された次の言葉も、この問題に関連して取り上げられる。

申命記 33 章 1 節: そして、神の人モーセが死ぬ前にイスラエルの子孫に読み聞かせた祝福の言葉は次のとおりである。
2 節: そして彼は言った。「主はシナイから来た。そしてセイルから昇り、パランの山から輝いた。そして聖なる者たちの中から、無数の者たちの中から来た。」

このテーマに関心を持つムスリムの著述家たちは、「シナから来る」という表現がモーセの使徒としての使命を、「セイルから生まれる」という表現がイエスの使徒としての使命を、「パラン山から輝く」という表現がムハンマドの使徒としての使命を指していると述べている。このように、トーラーのこの表現が将来の二人の影響力ある預言者を指し示していると考えられた。「シナ」はモーセに啓示が与えられた場所であり（クルアーンのムーミヌーン章 23-20 とティーン（いちじく）章 95-2 にも言及されている）、「セイル」はイエスが生まれた地域だと考えられて

52 Kuran Araştırmacı Grubu 著, Kuran, Hiç Tükenmeyen Mucize, p.240-241

いる。「パラン」はヒジャーズまたはメッカを指していると考えられている。トーラー（創世記 21 章 21 節）におけるハージャルとイシュマエルがパランの砂漠で暮らしたという記述が、この点に関する証拠として使われた。

したがって、クルアーンがモーセとイエスを承認したように、トーラーもまずイエスとムハンマドを承認しているとされる。申命記 33 章 2 節で「無数の中から来る」という予言がなされていることは、ムハンマドの生存中に彼に従った無数の人々との一致を示しているとされている。この解釈を行った者たちは、ハバクク書 3 章 3 節にある「パラン山」の表現もムハンマドの預言の予告として解釈している。旧約聖書の他の表現（民数記 10 章 11-12 節、民数記 13 章 1-3 節、サムエル記 1 巻 25 章 1 節）に基づき、「パラン」がこの地域を指していないと反論する声もある。

申命記 13 章 11-12 節においては、預言者として名乗りを上げる者がその言葉が現実となったとしても、もしその者が神以外に呼びかけているのであれば、その者を拒絶すべきであると記されている。一方、エレミヤ書 28 章 11 節では、預言者として名乗りを上げる者の言葉が実現することこそがその者が預言者である証拠であるとされている。ムハンマドは、この二つの基準を満たしている。彼は、まず第一に、唯一神（アッラー）以外のいかなる神々も強く拒絶し、数十億の人々を偽の神々から救った。また、ここ

で示されているように、彼が人々に伝えたメッセージであるクルアーンは、彼の言ったことの真実性を示す多くの証拠を提供している。歴史的に見ると、ムハンマドはムーサ（モーセ）の後に現れ、1) 唯一神の存在、2) 唯一神以外のものを拝まないこと、3) すべての預言者が承認されること、4) 来世への信仰、5) 良い道徳を奨励し、殺人や盗みを禁じ、弱者や孤児を守るべきことを説き、これらを世界的に実現させた。彼の言葉により、数十億人の人々が神を愛し、神の力が非常に高いことを信じ、ムハンマドに啓示されたクルアーンの多くの言葉の正しさが、歴史の進展や科学の発展とともに証明されている。

ここで取り上げていない他の表現も旧約聖書においてムハンマドの到来を示す証拠として用いられている。その多くは、地上の支配、偶像崇拝に対する勝利、正義の確立といった、ムハンマドが生前に成し遂げた事柄に注目していることがわかる。この問題に関しては長い議論を引き起こす可能性があり、ここでは断定的な表現は避ける。しかし、次の点は明らかである。クルアーンは過去の預言者たちを承認し、ムハンマドが最後の預言者であること（アフザブ章 33-40）を示しており、将来の預言者について予告していない。一方、旧約聖書や福音書では、過去の預言者たちが承認され、将来の預言者たちが予告されている。将来の預言者が神によって予告されていると信じるユダヤ人やキリスト教徒は、これらの予告とともに、クルアーンが

実際にユダヤ人やキリスト教徒が信じる預言者たちを承認し、歴史的に数十億人を唯一の神の信仰のもとに集めたことを認識し、評価すべきである。これこそが、彼らがイスラムを受け入れるか、少なくとも真剣に考えて評価するための重要な理由となる。

4-7　福音書における印

キリスト教徒は、「旧約聖書」とともに「新約聖書」も彼らの聖典として受け入れている。「新約聖書」の最初の四書は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという名の福音書である。これらのほかに、「使徒言行録」や「書簡」、「ヨハネの黙示録」などの章およびその下位区分も存在する。本稿では、これらのうち、前述の四つの福音書のみに依拠し、例を挙げて論じることとする。前章と同様に、本章においても、これらの文書がどれほど保存されてきたか、あるいは改変されたかという議論には踏み込まない。

まず、クルアーンにおいて本主題に関わる次の一節を確認したい[53]。

サフ（戦列）章 61-6：そのとき、マルヤム（マリア）の子イーサー（イエス）はこう言った。「イスラエルの子らよ、まことに私は、あなたがたに遣わされた神の使徒で

53 このことに関して次の著作を参照されたい。Zafer Duygu 著, İnciller Güvenilir Metinler Midir? Metodolojik ve Karşılaştırmalı Analizler, 出版元：Düşün Yayıncılık, İstanbul, 2020

ある。私より前に啓示されたトーラーを確認し、私の後に来る名を『アフマド（大いに讃える者、大いに讃えられる者）』という預言者を告げ知らせる者として来たのである。」しかし、彼が明白な証を携えて彼らのもとに現れると、人々は「これは明らかに魔術である」と言った。

クルアーンにおいては、イエスがムハンマドが訪れるという吉報を告げたことが述べられている。では、現在ある福音書において、この予告の痕跡を見出すことができるであろうか。この問いは、福音書がどの程度保存されてきたかという問題に加え、イエスがアラム語を話していたにもかかわらず、現存する最古の福音書写本が古代ギリシア語で記されているという事実に関わる問題でもある。

これら諸問題にもかかわらず、本主題に関して研究を行ってきたムスリムの思想家たちは、イスラムの初期の時代から現存する福音書の中のいくつかの表現に注目してきた。ウマイヤ朝のカリフ、ウマル・ブン・アブドゥルアズィーズは、ビザンツ皇帝レオ３世に宛てた書簡の中で、福音書に現れる古代ギリシア語の語「パラクレートス（Parakletos）」がムハンマドを予告するものであると主張している。この語が、アラム語における「アフマド（Ahmad）」（「大いに讃える者」「大いに讃えられる者」の意）に相当する語句のギリシア語訳であると考えら

れてきたのである。このような主張は、ムスリムの神学者とムハンマドを否定するキリスト教の神学者との間で、古くから議論と論争の対象となってきた。クルアーンは、「大いに讃えられる者」あるいは「大いに讃える者」を意味する「アフマド」という語を用いて、預言者ムハンマドが予告されたことを述べている。実際、「アフマド」という語は、「ムハンマド（讃えられる者）」と同じ語根（ḥ-m-d）に由来し、意味的にもほぼ同一である。一部の者は、「アフマド」という語をムハンマドの固有名詞であると解釈している。しかし、多くの人々と同様に、私もこの語が「大いに讃える者」「大いに讃えられる者」という意味を内包している点に注目し、固有名詞ではなく形容詞的表現であると考える立場にある。この見解が成立し得ることは、クルアーンからも裏付けることができる。なぜなら、クルアーンにおいてムハンマドの名は四箇所に現れるが、いずれも「ムハンマド」という語が用いられているからである（アリ・イムラン（イムラン家）章 144 節、アフザーブ章 40 節、ムハンマド章 2 節、アル・ファトフ章 29 節）。

　たとえ「アフマド」という語が預言者の固有名であると見なされたとしても、結論は変わらない。というのも、「アフマド」という語は「ムハンマド」と同じ語根を持ち、同様の意味を示しているからである。よく知られているように、福音書の記述によれば、イーサー（イエス）は

十字架にかけられ、その直前にローマ兵によって捕縛されたとされている。伝承によれば、この出来事の直前に、イエスは弟子たち（使徒）と共にいわゆる「最後の晩餐」を取ったとされる。この場における詳細およびイエスが弟子たちと交わしたとされる会話は、「ヨハネによる福音書」の著者によって伝えられている。一方で、「マタイによる福音書」、「マルコによる福音書」、「ルカによる福音書」といった共観福音書の著者らは、この件については何も言及していない。

「ヨハネによる福音書」に記されている該当箇所は以下の通りである。

ヨハネによる福音書 14 章 15–16 節：
「もしあなた方がわたしを愛するならば、わたしの戒めを守るであろう。わたしは父に願おう。そうすれば父は、もう一人の『パラクレートス（Parakletos）』をあなたがたにお与えになるであろう。」

同 14 章 26 節：
「しかし、父がわたしの名によってお遣わしになるパラクレートス、すなわち聖霊は、すべてのことをあなた方に教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださるであろう。」

同 16 章 7–8 節：
「それとともに、わたしは真実を語る。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益となる。なぜなら、わたしが去らなければ、パラクレートスはあなたがたのところに来ないからである。だが、わたしが去れば、わたしは彼をあなたがたに遣わす。彼が来るとき、罪と義と裁きについて、世にその誤りを認めさせるであろう。」

同 16 章 13–14 節：
「しかし、真実の霊が来るとき、彼はあなたがたをすべての真実に導くであろう。彼は自ら語るのではなく、聞いたことを語り、また、来たるべきことをあなたがたに告げ知らせるであろう。彼はわたしを讃えるであろう。なぜなら、わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。」

キリスト教徒たちは、一般的に「パラクレートス（Paraklet）」という語を「聖霊」の意味で理解してきた。この語の翻訳をいかに行うかについては、長らく議論の的となっている。アブドゥルアハド・ダーヴードは、ギリシア語の *parakletos* に対応する語が、イエスが話していたアラム語においては、アラビア語の「アフマド（Ahmed）」と同根・同義である「ムハマダー（Mhamada）」または「ハミダ（Hamida）」であったと

推測している。ラフメトゥッラー・エル・ヒンディーは、イエスが話していた言語におけるこの語の正確な対応語が不明であることに注意を促している。彼は、この語が仮にギリシア語の *periklitos*（意味：非常に称賛される者）であった場合、それがアラビア語の「アフマド」と意味的に一致すると述べる。そして、仮に *parakletos*（助け手）として理解されるとしても、やはりムハンマドを指す可能性があると主張している。エル・ヒンディーは、現代の聖書翻訳においてこの語に与えられている意味、すなわち「助言者（counselor）」「擁護者（advocate）」「慰める主（comforter）」といったいずれの意味も、ムハンマドの特質と一致していると述べている[54]。また、イブン・タイミーヤは、聖霊という概念が福音書に登場するにもかかわらず、「パラクレートス」という名で呼ばれていない点に注目し、この語に「聖霊」という意味を当てることは適切ではないと述べている[55]。これらの点を総合的に考慮すれば、この語がムハンマドを示唆していると考えられる根拠のいくつかが浮かび上がってくる[56]。

A. 来たる「真実の霊」は、自分から語らない（ヨハネによる福音書 16 章 13 節）。イエス自身も、自分の名によらず神の名において語ったと福音書に記されている（ヨハネ

54 Fadıl Ayğan 著, Son Peygamberi Müjdelemek, p. 418-429

55 Fadıl Ayğan 著, Son Peygamberi Müjdelemek, p. 429-438

56 Kuran Araştırmacı Grubu 著, Kuran, Hiç Tükenmeyen Mucize, p.246-247

12 章 49 節）。ムハンマドもまた、啓示であるクルアーンをもって人々を導いた。クルアーンはこの点を以下のように説明する。

ナジュム章 53-3、4：彼（ムハンマド）は自らの欲に基づいて語ることはない。それ（彼の言葉）は啓示された啓示に他ならない。

B. 来たる者は、イエスを称賛する（ヨハネ 16 章 14 節）。クルアーンの多くの節においてイエスは称えられ、彼が預言者であることが確認されている。イエスが神からのメッセージを携えて人類に遣わされたことを最も広く信じさせた人物はムハンマドである。

C. 来たる者は「聖霊」と共に言及される（ヨハネ 14 章 26 節）。ムハンマドに対するクルアーンの啓示が「聖霊（アミーンの霊、すなわちジブリール）」によってもたらされたことがクルアーンに記されている。

シュアラー章 26-192：これは諸世界の主によって下された啓示である。

193：信頼される霊（ジブリール）がそれを下した。

194：あなたの心に。あなたが警告者の一人であるためである。

195：明白なアラビア語によって。

196：そしてそれは、以前の聖典においても言及されていた。

D. 来たる者は、イエスと同じ源から受けたことを明らかにする（ヨハネ 16 章 14 節）。ムハンマドの言葉のすべてもまた、神に由来する。

E.「あなたがたにすべてのことを教えるであろう」（ヨハネ 14 章 26 節）。ムハンマドは、神の存在、来世、道徳的生活など、人間に必要なあらゆる事柄を教えた人物である。キリスト教と共通するこの普遍的メッセージを最も広範に人々に受け入れさせたのはムハンマドである。

F.「私が言ったことを思い出させるであろう」（ヨハネ 14 章 26 節）。イエスとムハンマドのメッセージは、同じ真実を包含している。
「パラクレートス」という表現に加えて、福音書に見られる「神の国（神の統治）」に関する言説も、ムハンマドとそのもたらした預言と関連づけられてきた。

マタイによる福音書 21 章 43 節：
「それゆえ、わたしはあなたがたに言う。神の国はあなたがたから取り上げられ、それを実を結ぶ民に与えられるであろう。」

マルコによる福音書 4 章 26–32 節：
イエスはまた言われた。「神の国は、地に種を蒔く人のようなものである。彼は夜には眠り、昼には起きる。種がど

のようにして芽を出し、育つかは知らない。しかし、地は自然に実をならせる。まず芽が出て、次に穂ができ、最後に穂に実がみのる。実が熟すと、すぐに鎌を入れる。刈り入れの時が来たからである。」
そしてまたこう言われた。「神の国を何にたとえようか。どんな譬えでそれを表そうか。それは、からし種のようなものである。地に蒔かれる種の中で最も小さいが、蒔かれた後、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を伸ばすので、空の鳥がその陰に巣を作ることができる。」

ムスリムの著述家たちは、イスラムの征服によってユダヤ人やキリスト教徒がかつて支配していた多くの地域がイスラム世界の手に渡ったこと、またイエス以降、イスラム共同体（ウンマ）以外に独自の政治的主権と独立した宗教的教義を持つ支配勢力が現れなかったことに言及し、これに類似する聖句や表現をムハンマドの出現の予告（福音）と見なしている。

さらに「ファトフ章」では、ムハンマドの傍らにいる者たちが福音書にどのように記されているかが語られる。この章の表現と、現存する福音書に見られる「神の国（神の支配）」についての描写との類似性は、少なくともその一部がイエスに啓示された本来の福音書の保存された断片である可能性を示唆すると、これに関心を持つムスリム著述

家たちは考えている[57]。また、「マタイによる福音書」13章31–32節および「ルカによる福音書」13章18–19節にも、クルアーンの「ファトフ章」で語られる内容と類似の表現が存在している。

ファトフ章の該当節は次の通りである。

ファトフ章48-29：ムハンマドは神の使徒である。彼と共にある者たちは、不信仰者に対しては厳しく、互いの間では慈悲深い。汝は、彼らが礼拝のためにひざまずき、額を地に付けて神の恩恵と御喜びを求めている姿を見るだろう。
彼らの特徴は、顔に現れる礼拝の跡に表れている。これは、彼らのトーラーにおける特徴である。福音書では、彼らは次のように描写されている――苗を割って芽を出し、それを強めて太らせ、自らの茎の上にしっかりと立つ穀物のようである。この姿は農夫たちを喜ばせる。
神は、こうして彼らを通じて不信仰者を怒らせている。神は信仰し、善行をなす者たちに赦しと偉大な報奨を約束している。

クルアーンにも名が記されているヨハネ（ヤフヤ）は、イエスと同時代に生き、彼よりも先に預言者としての任務

57 Fadıl Ayğan 著, Son Peygamberi Müjdelemek, p.449-460

を開始した使徒である。福音書には、ヨハネとある人々との間で交わされた次のような対話が記録されており、これは非常に興味深いものである。

ヨハネによる福音書 1 章 20 節：ヨハネの証言は次の通りである。彼は明確に語り、否定しなかった。「私はメシアではない」と明言した。21 節：彼らは彼に尋ねた。「では、あなたは誰なのか？あなたはエリヤなのか？」彼は「違う」と答えた。「あなたはその預言者なのか？」ヨハネは「違う」と答えた。

ヨハネに 3 つの問いが投げかけられ、ヨハネはその全てに「否」と答えたことが示されている。

1.あなたはメシアなのか？（イエスか？）
2.あなたはエリヤなのか？
3.あなたは「あの預言者」なのか？

ヨハネによる福音書には三人の人物が言及されている。これらは、1. イエス、2. エリヤ、3.「その預言者」である。ヨハネによる福音書において、ヨハネはイエスと同じ時代に生きていたことが知られている。現存する福音書では、イエスがエリヤが来たことを述べ、人々が彼に多くの苦しみを与えたことが記されている（マタイ 17 章 12 節）。では、「その預言者」とは誰か？人々は「申命記」

18 章 18 節で言及されている「預言者」を待ち望んでいる（前章でこの表現について考察した）。この表現方法は、「その預言者」がイエスとは異なる人物であることを示唆している。では、申命記 18 章 18 節に記されたように、神から言葉を受けて人々に伝える、イエスの時代にはまだ現れていなかった預言者とは誰か？歴史的に見て、ムハンマドを除き、イエスの後に登場し、何十億人もの人々が神に向かう理由となった重要な影響を持った人物は他に存在しない[58]。

ここで注目すべきは、ムハンマドを示唆する表現が何世代にもわたってこの問題に取り組んできたキリスト教徒とムスリムの神学者たちの間で議論の対象となってきたことである。しかし、現存する福音書のいかなる場所にも、イエスの後に預言者が来ないとは書かれていないことは、議論の余地なく明らかである。それに対して、福音書では預言者を見分けるための基準が示されている。「与えられた実を見よ、そして偽り者と真の語り手を区別せよ」と。

マタイによる福音書 7 章 15 節：偽預言者に注意せよ。彼らは羊の皮をかぶってあなた方に近づいてくるが、実際には獰猛な狼である。16 節：あなた方は彼らをその実によって見分ける。茨からぶどうを摘むことができるか、ま

58 Kuran Araştırmacı Grubu 著, Kuran, Hiç tükenmeyen Mucize, p. 248-249

た、あざみからいちじくを摘むことができるか？17 節：良い木は良い実を結び、腐った木は悪い実を結ぶ。18 節：良い木が悪い実を結ばないように、腐った木も良い実を結ばない。19 節：良い実を結ばない木はすべて切り倒され、火に投げ込まれる。20 節：それゆえ、あなた方は彼らをその実によって見分けるのである。

もしもイエスの後に預言者が現れないのであれば、イエスは「私の後には預言者は現れない。私の後に預言者を名乗る者は嘘つきである」と、非常に簡潔にこの問題に答えることができたはずである。しかし、イエスが偽の預言者と真の預言者を見分ける方法を提案したことは、イエスの後に預言者が現れることを示す証拠である。イエスの後に預言者が現れるという事実は、ムハンマドの預言者としての立場がキリスト教徒にとって重要な証拠となるべきである。なぜなら、イエスの後に現れ、神を信じ、神に頼り、神を愛し、偶像を捨てた億単位の人々が生まれたような「素晴らしい実」は、イスラムがムハンマドを通じてもたらしたものであるからである[59]。

世界で最も人口の多い二大宗教であるキリスト教とイスラムは、重要な共通点を有している。まず、両方の宗教は、永遠で唯一、誰にも依存せず、すべての創造物を創造

59 Kuran Araştırmacı Grubu 著, Kuran, Hiç tükenmeyen Mucize, p.249-250

した、高い知識を持ち、高い力を持ち、慈悲深い神の存在を認めている。さらに、来世での問責、報酬、罰といった基本的な信念も共通している。殺人を犯さない、盗まない、人々を欺かない、姦淫を犯さない、傲慢にならないといった多くの道徳的な原則も同様である。内容における違いがあるにもかかわらず、両方の宗教には神への感謝、祈り、巡礼、断食といった礼拝が存在する。また、両方の宗教は、歴史を通じて、預言者ロト、イブラヒム（アブラハム）、イサク、ヤコブなど、多くの預言者を通じて、人々に神、来世、道徳、礼拝に関する教えが伝えられてきたと述べている。

最も重要な違いは、イエスの本質に関する異なる信念に起因している。イスラムの信仰において、イエスとムハンマドは、前述の預言者の鎖の中で、他の預言者と同様に二つの環である。一方、キリスト教の主要な教派によれば、イエスは鎖の他の環とは本質的に完全に異なる存在である。イエスは永遠の神であり、永遠の神は唯一の神であるが、その内には三つの存在がある。これらは父なる神、イエス、そして聖霊である。神性を持つ存在として、イエスはマリアの胎内で他の人々と同様に肉体を取った（受肉）。彼は一方では完全な神であり、他方では完全な人間と見なされている。なぜなら、彼は「神性」の面では神と同じ本質を持ち、人間性の面では他の人々と同じ本質を共有しているからである。

ここで、三位一体の信仰を持つキリスト教徒に対して、自分たちの信じる経典に基づく実験を提案したい。イスラムと主要なキリスト教派のイエスに関する信念について知らないグループを作ろう。まず、キリスト教徒が聖典として認めている書物のうち、三分の二以上を占める「旧約聖書」を読ませよう。その後、その人たちに、この書物から得られた神の信仰と、旧約聖書に基づく未来のメシアの特徴を記述させよう。私は、このグループの 95%以上が、「旧約聖書」から理解した神の信仰と期待されるメシアの特徴が、クルアーンに記されている神の信仰やクルアーンにおける預言者の特徴、またキリスト教の主要な教派が理解する三位一体の信仰や、永遠の神であり人間でもあるイエスの理解よりも、はるかに調和しているだろうと主張する。さらに、私の主張を一歩進めることができる。次にこのグループに四つの福音書と「新約聖書」全体を読ませ、その後、そこから得られた神の信仰とイエスの特徴を記述させよう。同じグループの大多数が、「新約聖書」から理解した神の信仰とイエスの特徴が、クルアーンに記された神の信仰やクルアーンにおけるイエス、またキリスト教の主要な教派が理解する三位一体の信仰やイエスの理解（ヨハネによるもののこの私の仮説に反するように解釈できる一部の表現を除いて）よりも、はるかに調和しているだろうと主張する。

「旧約聖書」を読んだ者は、そこに三位一体の信仰に似たものを見出すことはない。三位一体がもしキリスト教の主要な教派が主張するように最も基本的な教義であるならば、彼ら自身が認める聖なる書物の三分の二以上を占める「旧約聖書」にそれが全く記載されていないこと、さらには非常に明確な神一体（タウヒード）信仰を表現する、それに反するような記述が存在することを、これらの教派は論理的に説明することができないだろう。さらに「新約聖書」を（キリスト教教派の強引な解釈を知らずに）読んだ者も、そこには三位一体の信仰を見つけることはないだろう。教会は、三位一体の理解が、旧約聖書および新約聖書のテキストにおいてなぜ明確に、そして正確に記載されていないのかを合理的に説明することが期待される。実際のところ、教会はこの問いに何世紀にもわたって答えることができなかった[60]。

新約聖書において神に対して「父」と、イエスに対して「子」という表現が使用されているが、旧約聖書および新約聖書を通読すると、「父」という言葉が「すべての者の神」であり、「子（たち）」という言葉が「愛されし者（たち）」として繰り返し使われていることがわかる。実際、旧約聖書のこうした表現から「三位一体」の考えに至

60 本章を執筆するにあたり、Zafer Duygu 氏の著書 ‘‘Hıristiyan Tarihi Üzerine Notlar’’（未出版）と次の著書を参考にした。Zafer duygu 著, ‘‘Hıristiyanlığın Erken Yüzyıllarındaki İsa Teolojisi Tartışmalarında Dinamik Monarşiyanist Akıma Özgü Monoteist Kristoloji ve Bunun Ebionit Kristolojiyle Mukayesesi’’, 出版元：Pamukkale Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü Dergisi, 2018, p. 329-343

ったユダヤ教徒は一人もいなかった。キリスト教の主要な教派の解釈に頼ることなく、新約聖書を全体として読んだ者も、これらの表現から、イエスが「父なる神の永遠に存在する子なる神である」と理解することはないだろう。現存する福音書においてさえ、イエスは神に向かって祈り、神からの言葉を伝える者として（ヨハネ 5,30）、また、自らは無力であり、唯一神だけが善であることを表現している（マルコ 10,18；ルカ 18,19）。これらの表現は、クルアーンの「預言者イエス」に対する理解と、キリスト教教派の「神なるイエス」の理解とを比べると、はるかに調和していると言える。

実際、キリスト教の初期の時期には、イエスの神性を認めない多くのグループや個人が存在していた。キリスト教が国家の公式な宗教となり、教会の権威が強化される中で、これらのグループは排除されていった。実際、現代の研究や初期のキリスト教文献によれば、三位一体の教義はむしろ 2 世紀に成立した主張であったことが示されている[61]。さらに、三位一体の教義が 325 年のニケーア公会議で公式な教義として確立されたものの、その後も多くのキリスト教コミュニティや信仰の流派によって拒絶されていたことが知られている。テオドシウス 1 世（379–395 年）は、キリスト教を一方で「単一の信仰」として統一しよう

61 例えば、記述された最初の福音書であるマタイ福音書の最後の部分に登場し、「父、子、聖霊」という表現を含む部分は追加されたものであることが、文書批判の方法で行われた研究で示されている。詳細については次を参照：Zafer Duygu 著, İsa, Pavlus, İnciller, 出版元：Düşün Yayıncılık, İstanbul, 2018

としたと同時に、当時存在していた異教、ユダヤ教、その他の宗教の信者に対して圧力をかけ、法律や実行を通じて、事実上、国家の権力を利用して三位一体の信仰をキリスト教全体の唯一の正当な教義に変えるのに成功した[62]。現在でも、いくつかのキリスト教グループ（ユニタリアンの一部の教会やペンテコステ派の一部のグループなど）は、「神性を持たないイエス」という認識を受け入れている。

イスラムが歴史上果たした最も重要な役割の一つは、キリスト教の主要な宗派が支持する「神であるイエス」の認識を正し、彼を名誉ある預言者の鎖の尊い一環として位置づけたことである。イスラムは、一方でユダヤ教とキリスト教を受け入れ、それらが実際には同じ宗教が歴史の異なる時代と場所で啓示されたことを伝え、両者を結びつける。さらに、三位一体の教義のような人為的な付加を正す。イスラムがユダヤ教とキリスト教に対して取るこの視点や、三位一体の信仰に対する立場、またイスラムがユダヤ教やキリスト教の聖典においても見受けられる未来に関する予測を満たす性質を持つことは、「なぜ私はムスリムであるのか」という問いに対する多くの理由の一つとなる。

62 Zafer Duygu 著, Hıristiyanlık ve İmparatorluk: Geç Antikçağ'da Kilise-Devlet İlişkileri ve Kronoloji Paradigması, 出版元：Divan Yayınları, İstanbul, 2017

4-8 クルアーンにおけるイエスとマリア、およびアポクリファ（外典）

本稿では、あまり注目されてこなかったがその重要性に相応しい理解がなされていないテーマについて触れる。イエスの死後、1 世紀の終わりから 2 世紀にかけて、今日の正典とされる 4 つの福音書と並んで、「アポクリファ」として知られる多くの福音書が書かれた。現代の研究によれば、西暦 1 世紀の終わりから、キリスト教の世界では今日「福音書」として知られる多くの文書が流布し始めていた。この 2 世紀の中頃、数百に達する可能性があるこれらの福音書の中から 4 つの福音書が、当時の主要なキリスト教の聖職者であるイレナイウスの提案と促しにより、より注目されるようになった。これらの福音書は、3 世紀にさらに重要視され、最終的には 4 世紀に開催されたラオディキア（363 年）、ヒッポ（393 年）、そしてカルタゴ（397 年）の公会議を通じて、「新約聖書」の正典に組み込まれ、公式な地位を得た[63]。特にテオドシウス 1 世の時代からは、キリスト教の代替的な信仰伝統や、それらに基づく文書に対する組織的な迫害が行われたことが知られている。それに従い、イエスの教えを伝えているにもかかわらず、4 つの福音書以外の数百の文書はまず排除され、教会の伝統から外された後、忘れられるべき歴史の奥深くに放置された。これらの文書は、学術界では「外典」や「ア

63 Zafer Duygu 著, İnciller Güvenilir Metinler Midir? Metodolojik ve Karşılaştırmalı Analizler, p. 84

ポクリファ」と呼ばれている。これらの福音書の多くは、現代の考古学的研究によって明らかにされているが、さらに多くのものがまだ発見を待っている。

　現代の技術によって、インターネット上で多くのアポクリファを閲覧できるようになったにもかかわらず、現在のキリスト教徒に質問しても、99%の人々はアポクリファの内容について何も言うことができないであろう。アポクリファは発見されるたびに、キリスト教の世界で一定の人気を集めることとなった。しかし、これらの文書が教会によって排除され、伝統から外されることによって、その影響は大きく制限されてきた。では、7 世紀の状況はどうであっただろうか？これらの書物は 7 世紀に存在していたのだろうか、そしてさらに重要なのは、アラビア半島でこれらの文書を読むことは可能だったのだろうか？間違いなく、当時の限られた状況の中で、一般の人々が伝統的な福音書を含む写本を入手することは非常に困難だったであろう。さらに、アラビア半島はキリスト教徒の人口が比較的少ない地域であり、筆述の文化もほとんど発展していなかった。これを踏まえると、現在「アポクリファ」と呼ばれている書物やその全集が 7 世紀のアラビア半島で知られていた文書であったと述べることは非常に難しく、当時これらの文書がアラビア半島に存在していたということ自体が大いに議論の余地がある。ところが、クルアーンには、イエスとマリアに関する多くの記述があり、これらは今日の伝

統的な福音書の文献には含まれていないにもかかわらず、キリスト教世界で排除されたアポクリファに記載されている。これについては、以下の例を挙げることができる。

マリアの誕生前の神への奉納

アリ・イムラン章 3-35（クルアーン）：イムランの妻は言った。「私の主よ！お腹の中の子どもをただあなたに仕えるために奉納いたします。どうかこれをお受けください。確かにあなたは聞く者、知る者であります。」36節：彼女が子どもを産むと、言った。「主よ！私は娘を産みました。」だが、神はその子が何であるかをよくご存知であった。「男の子は女の子とは異なる。私は彼女をマルヤム（マリア）と名付け、彼女とその子孫を追放された悪魔から守ってくださいと願います。」

ヤコブの福音書 4 章 1 節：見よ、主の天使が彼女に現れ、「アンナ、アンナ、神はあなたの祈りを聞き入れた。あなたは妊娠し、子どもを産むだろう。そして、全世界があなたの子孫を賞賛するだろう。」アンナは答えて言った。「私の主である神が見証します、もし私が男の子であれ、女の子であれ、私はその子を主に奉献し、その子は生涯を通じて主に仕えるでしょう。」

マリアの責任についてのくじ引き

アリ・イムラン章 3-44（クルアーン）：これらはわれわれがあなたに啓示した隠された知らせである。マルヤムを誰が保護し、守るかということでくじ引きを行っているとき、あなたは彼らと一緒にいなかった。その議論をしているときも、あなたは彼らの側にいなかった。

ヤコブの福音書 8 章 3 節：主の天使は言った。「ゼカリア、ゼカリア！神殿を出て、未亡人の男たちを集めなさい。男たちはそれぞれ一枝を持って来なさい。主が誰に印を与えたかに応じて、マリアがその人の妻となるだろう。」この呼びかけはユダヤ全土に広まり、主のラッパが鳴り、男たちは皆、神殿に駆け込んだ。

マリアが垂れ幕を作る

マルヤム章 19-17（クルアーン）：（マリアは）彼らとの間に垂れ幕を作った。その時、私たちは彼女に霊（ジブリール（ガブリエル））を送り、彼は彼女に健全な人間の姿で現れた。

偽マタイによる福音書 8 節：マリアと他の処女たちは刺繍をしてくじ引きで決めた。神殿の垂れ幕を縫う任務がマリアに与えられた。

偽マタイによる福音書 9 節：3 日目、マリアが紫の布を手に持って作業していたとき、部屋に言葉では言い表せないほど美しい男が入ってきた。マリアは彼を見て非常に恐れて震えた。

マリアへの特別な恵み

アリ・イムラン章 3-37（クルアーン）：それで彼女の主は彼女を立派に受け入れ、良い植物のように育てられ、ゼカリアを彼女の世話係として任命した。ゼカリアは神殿に入るたびに、彼女のそばに食物を見つけた。「マリアよ！これはどこから来るのか？」と彼は尋ねた。彼女は「これは神からです。」と答えた。確かに神は、望む者に計り知れない恵みを与えられる。

ヤコブの福音書 8 章 1 節：そしてマリアは、神の家で飼われ育てられていた鳩のようで、天使の手によって養われていた。

マリアがナツメヤシの木の実を食べる

マルヤム章 19-23 節（クルアーン）：出産の苦しみが彼女をヤシの木に向かわせた。「もし私がこの前に死んで、忘れられていればよかったのに。」と言った。

24 節：その時、木の下から彼女に声がかかった。「心配するな、あなたの主があなたの下に川を流している。」

25 節：「ナツメヤシの木を揺すりなさい、あなたのために新しいナツメヤシの実が落ちるように。」

偽マタイ福音書 20 節：そして旅の 3 日目、彼らが歩み続ける中、砂漠の暑さに苦しむマリアはナツメヤシの木を見て、ヨセフに「この木の陰で少し休みましょう。」と言った。そこでヨセフは急いでマリアをその木の下に連れて行き、彼女を馬から降ろした。マリアがそこで座っていると、木の葉が見え、果実が実っているのを見た。彼女はヨセフにこう言った。「この木の実を食べることができればよかったのに。」ヨセフは答えた。「木の枝がこんなに高いのに、どうしてそんなことを言うのか、驚きだ。私は水の不足がもっと心配だ。今、すべての皮袋は空で、私たちや動物を冷やすために水をどこから得られるか分からない。」その時、喜びに満ちた表情をしたイエスはマリアの膝の上に座って、木にこう言った。「おお、木よ、その枝を下げて、母をその実で喜ばせよ。」この命令に従って、木はすぐに枝を下げ、実をマリアの足元に落とした。

人々がマリアを非難する

マルヤム章 19-27（クルアーン）：そして、子どもを抱いて人々のところに来た。彼らは言った。「おお、マルヤム（マリア）！あなたは非常に不正なことをした！」28 節：「おお、ハールーンの姉妹よ！あなたの父は悪い人ではなく、あなたの母も不道徳な人ではなかった。」

偽マタイ福音書 12 節：どれほど多くの人々が集まったのか定かではないほど大きな群衆が集まり、マリアは神殿に連れて行かれた。祭司たち、マリアの親戚や両親は泣きながら彼女に言った。「あなたの罪を祭司に告白しなさい。あなたは神殿で鳩のようにいたのに、天使の手から食べ物を受け取っていたのに。」

イエスの揺りかごでの発言

アリ・イムラン章 3-46（クルアーン）：彼（イエス）は、良い者として、揺りかごの中でも大人になってからも人々と話をしていた。

救世主のアラビア語による幼児の福音書 1 節：イエスは話し、本当にまだ揺りかごに横たわっている時、母であるマリアにこう言った。「私はイエスであり、天使ガブリエルの告知に従ってあなたから生まれた神の子であり、ロゴス（言葉）です。父が私を世界の救いのために送ったのです。」

イエスが泥で鳥を作る

マイダ章 5-110（クルアーン）：われの許しによって、あなたは泥から鳥の形を作り、その中に息を吹き込むと、それはわれの許しによって鳥になる。

幼時のトマス福音書 2 節：イエスは柔らかい泥を取って、そこから 12 羽のひな鳥を作った。これをした時は土曜日だった。彼は他の子どもたちと一緒に遊んでいた。ユダヤ

人が土曜日にイエスがしていることを見て、すぐに行って父親のヨセフに報告した。「見てください、あなたの息子は川から泥を取って 12 羽の鳥を作りました、土曜日に仕事をしていました。」ヨセフがそこに来て彼を見て、尋ねた。「なぜ土曜日にしてはいけないことをしているのか？」するとイエスは手を叩き、ひな鳥に叫んだ。「行け！」ひな鳥たちは翼を広げて鳴きながら飛び立った。

ムハンマドがユダヤ人またはキリスト教徒の共同体で育ったことはないことが知られている。クルアーンにおいて、ムハンマド自身と彼が生まれた部族も「ウムミー」、つまり「聖典を知らない民」と表現されている。この言葉のクルアーンでの使用を見てみると、この言葉がムハンマドが預言者としての使命を受ける前に、彼がいかなる聖典にも依存していなかったこと、またこれらの聖典についての知識を持っていなかったことが強調されていることがわかる。

ジュマ（合同礼拝）章 62- 2: かれ（神）は、メッカの人々の中から、彼らに御名の印を読み、彼らを浄化し、書物と知恵を教える使徒を送る者である。疑いなく、彼らは以前は明白な誤りの中にあった。

ムハンマドが聖典の知識を持っていないことを知っていた彼の民族にとって、彼がユダヤ教徒やキリスト教徒の宗教指導者たちでさえ知ることができるような、トーラーや四つの福音書に登場するノアやアブラハムのような物語を伝えたことには、非常に非凡な点があった。多くの人々は、ムハンマドがこれらの情報を何らかの方法でユダヤ人やキリスト教徒から学んだのではないかと考え、疑念を抱いた。そのため、そのような主張がなされたこともあった。しかし、クルアーンではこれらの主張が否定されており、ムハンマドが聖典の知識を持たない「メッカの人々」の社会の中で「メッカの人物」として存在していたことが述べられている。この問題の重要な点は、今日の私たちの知識に基づいてこの件について何が言えるかである。

クルアーンにおけるイエスとマリアに関する記述は、単に四つの福音書や新約聖書の四つの福音書以外の部分に登場する情報だけではない。それには、これらの福音書には記載されていない情報も含まれている。おそらく、イスラムを受け入れない多くのキリスト教徒は、ムハンマドがイエスとマリアに関する情報の一部を何らかの方法で得て、それを四つの福音書から取得したと考え、残りの部分は「作り話だ」と思っただろう。しかし、現在のところ、四つの福音書にないがクルアーンに登場する多くの情報が、アポクリファに存在していることが分かっている。この現

象の最良の説明は何か？この状況は誰の説を強化しているのか？

まず、この現象に対する可能な説明を考察し、その中で最も合理的な説明を特定しよう。これについて考えると、次の三つの可能な説明が考えられる。第一の説明は、クルアーンに記載された出来事とアポクリファに記載された出来事との間の類似が偶然の一致に過ぎないというもの、これに対しては他の説明は必要ないとする立場である。第二の説明は、ムハンマドが何らかの方法でアポクリファを入手し、そこから引用をして「クルアーンを書いた」とする立場である。第三の説明は、ムハンマドが主張するように、啓示を受けてクルアーンが送られたというものである。

第一の説明が誤りであることは、上記の例を検討することで容易に理解できる。マリアの責任を誰が引き受けるかをくじで決定すること、マリアが出産時にナツメヤシを食べること、イエスが揺りかごで話すこと、イエスが泥で作った鳥を命を吹き込むことなど[64]、これらの詳細の一つでもクルアーンとアポクリファの両方に記載されている場合、それは偶然の一致として評価することはできない。共通して語られている内容はどれも非凡であり、また多くの

64 宗教哲学の視点から重要なテーマである「奇跡」についての私の見解は次の著書で紹介している。Caner Taslaman 著, Kuantum Teorisi, Felsefe ve Tanrı, p.121-167

異なる点での表現に類似性が見られるため、この選択肢は排除しなければならない。

　第二の説明が妥当であるかどうかを理解するために、まず次のような簡単な実験を行うことができる。私たちが現在住んでいる地域で、キリスト教徒がアポクリファについてどれくらい知っているかをテストしてみる。インターネットでアポクリファを閲覧するのは、ほんの数回のクリックで可能である。したがって、現代において、どれくらいのキリスト教徒が、四つの福音書には載っていないが、アポクリファに記載されているいくつかの出来事について語れるのであろうか。さらに実験を進めることができる。インターネットでアポクリファを閲覧することが簡単にできる現代において、キリスト教に人生を捧げたどれくらいの牧師が、四つの福音書には載っていないが、アポクリファに記載されているいくつかの出来事を語れるであろうか。もし牧師たちの中でアポクリファからイエスとマリアに関連する出来事を語る者が出てきたとしても、それは低い割合に過ぎないと予想できる。疑いなく、今日においてもキリスト教世界ではアポクリファの内容はほとんど知られていないのが現実である。7 世紀のアラビア半島では、合性論派やネストリウス派のキリスト教徒が多数を占めていたことが分かっており、これらのグループは現代の四つの福音書を受け入れていなかった。では、7 世紀のアラビア半島において、キリスト教徒の中で暮らしていない者が、さ

まざまなアポクリファの福音書に分散された情報を入手することはどれくらい可能であったであろうか。あるいは、さらに質問を進めると、7 世紀のアラビア半島において、キリスト教徒の中で暮らしている者が、さまざまなアポクリファに分散された情報を入手することはどれくらい可能であったであろうか。確かに不可能だと言い切ることはできないが、非常に予想外の状況であったと言えるであろう。

問題のアポクリファの最も古い写本は、古代ギリシャ語やシリア語など、異なる言語で書かれていることも注目すべきである。読書能力が低かったこの時代と地域において、四つの福音書とともに多くのアポクリファに関する知識を持っていた者がいると仮定してみよう。間違いなく、そのような者がいたとすれば、その時代においては、非常に高度な福音書の専門知識を持つ特別な専門家であったはずである。つまり、もし誰かが「ムハンマドはクルアーンに記載されたイエスとマリアに関する情報を、四つの福音書や多くのアポクリファを入手して伝えた」と言った場合、その人物はムハンマドが当時の非常に重要な福音書の専門家の一人であったと言わざるを得なくなり、その主張は妥当とは言えないことになる。また、クルアーンにおけるイエスとマリアに関する記述が全体の 1%にも満たないことを思い出してほしい。前の章で示されたように、宇宙論や生物学、地質学に関する驚くべき記述を単なる偶然や

ムハンマドの能力として説明しようとする人々が、イエスとマリアに関するクルアーンの記述に関して「ムハンマドが当時の非常に重要な福音書の専門家であった」と主張しなければならないことは、興味深くはないだろうか。

さらに、もしムハンマドがアポクリファに記載されたこれらの情報を自身の能力で（啓示によらずに）知っていたと仮定した場合、彼がその情報をクルアーンに取り入れることでどんな利益があったのかを考えてみよう。そのような状況では、彼がアポクリファからの引用を使用することは、彼が接していた正典とされる四つの福音書に基づいたキリスト教徒にとっては「聖なる」文書にその情報が載っていないため、反発を招くことになり、むしろ有利ではなく、不利な状況を生む可能性が高い。預言者ムハンマドがアポクリファからの引用を使用することは、キリスト教徒を引きつけるための利点ではなく、むしろ彼の立場を不利にする要因と見なされただろう。

ムハンマドは、四つの福音書とともにアポクリファの文書も簡単に入手できる日が来ることを予測し、その日に人々に向けて「私は四つの福音書だけでなく、アポクリファも知っている」と自慢したかったのだろうか？そのような未来の状況を予測するのはほぼ不可能であり、仮に予測したとしても、彼が自分に不利となる可能性があるこれらの引用を行うことは、まったく合理的ではない。

したがって、第三の可能性が最も合理的な説明である。ここではイスラムの立場において問題は存在しない。ムハンマドは自らの能力によってではなく、啓示によって行動していた。真実の啓示は、これを最初に聞いた人々が何と言うかについての懸念からほど遠い目的であった。最初の二つの説明が合理的ではないことが確認されると、残された選択肢はこの説明だけである。イエスとマリアに関するクルアーンとアポクリファの間の現存する類似点は、ムハンマドの能力や努力によるものではなく、啓示が真実を解明するという本質的な性質に基づいて実現したものである。

ご存知の通り、イエスの死後、彼に関する報道は地中海沿岸で主に口伝で、またわずかに書面で広まった。これらの伝承は、ある言語から別の言語、ある文化から別の文化、ある信仰体系から別の信仰体系に伝えられる過程で、伝達者、執筆者、書かれた資料を模倣した者、翻訳者、さらにはイデオロギーや神学的な関心を持つ多くの人々、あるいは悪意を持つ者たちによって、意図的または無意識的に意味や文脈が失われたり、歪められたりする原因となった。イエスとマリアに関する真実と誤り、オリジナルの伝承と捏造された情報は混ざり合い、一緒に広まっていった。実際にこれらの伝承や情報が書面に記される際（つまり、四つの福音書やアポクリファが書かれる際）、真実と誤りが混ざり合い、これらのテクストに反映された。福音

書の伝承における矛盾も基本的にはここから生じている[65]。四つの福音書の選定は政治的な選択を含むものであり、この選択は神の選択ではない。さらに、四つの福音書を正典として認めるキリスト教徒でさえ、アポクリファに記載された多くの事象が、四つの福音書と矛盾しない場合、それが正しいものであると考える可能性がある。四つの福音書を正典として認めない者であれば、そのような条件なしにアポクリファにいくつかの正しい記述があることを認めることができる。ムハンマドがこのように広範な文献を7世紀のアラビアの状況で知っていることは、ほとんど不可能だった。

前述の例をもう一度思い出していただきたい。メリハちゃんとエムレ君が非常に重要な競争に参加していると仮定しよう。あなたはその競争を目撃していなかったが、競争が終わった後に少し遅れてその場に到着したとする。この場合、もしメリハちゃんが非常に嬉しそうで、エムレ君が落ちこんでいるのを見たならば、あなたは競争の結果を見ていなくても、メリハちゃんが競争に勝ったと判断できる。なぜなら、メリハちゃんが勝てば嬉しそうで、エムレ君が負ければ落ち込むことが予想され、逆にメリハちゃんが落ちこんで、エムレ君が嬉しそうであることは予想できないからである。この知識に基づき、メリハちゃんが嬉し

65 Zafer Duygu 著, İnciller Güvenilir Metinler Midir? Metodolojik ve Karşılaştırmalı Analizler, 出版元：Düşün Yayıncılık, İstanbul, 2020

そうな様子、エムレ君が落ちこんでいる様子を見た時、あなたはレースにメリハちゃんが勝ったという結論に達するだろう。ここで使われている推論の方法は、まさに私たちが日常的に行う推論である。すなわち、現状を観察し、その状況が正しいとされる視点に基づいて、何が期待されるかを知っていれば、その状況がその視点に対する証拠と見なすというものである。

私たちはクルアーンの啓示を目撃してはいない。しかし、もしクルアーンが啓示された書物であるならば、クルアーンが言及するイエスとマリアに関するいくつかの内容が、アポクリファの内容と一致することは予想される。歴史の説明において、イエスとマリアに関して真実と誤りが混在していることは知られている。クルアーンが単に実際の歴史的事実を伝えているのであれば、過去のその時代を語る多くのアポクリファにも、その実際の歴史的事実が含まれていることは期待される状況である。7 世紀にキリスト教でない社会に生きていたムハンマドが、特に利益もないのに、四つの福音書とともに多くの異なるアポクリファにおけるイエスとマリアに関する記述を見てそれを利用したというのは予想される状況ではない。クルアーンとアポクリファの間に偶然では説明できないような一致があることは、クルアーンが神からの啓示であることを裏付けている。

第 5 章

ムハンマドの分析

これまでの章でクルアーンが神から啓示された書物であること、イスラムが神から授けられた宗教であることを示してきた全ての証拠は、同時にムハンマドが神の使徒であることの証拠でもある。これら三つの異なる表現、すなわち、クルアーンが神の書物であること、イスラムが神の啓示した宗教であること、ムハンマドが神の使徒であることは、意味において完全に一致している。ムハンマドは神からのメッセージを人々に伝える使徒であり、クルアーンは彼がもたらしたメッセージを内包する書物であり、イスラムはその信仰原理と実践により、このメッセージを表現する宗教の名称である[66]。

クルアーンが宇宙、地球、生物を語ること、あるいはイスラムが人間の本性に適しており、人生に意味を与える宗教であるという主張は、いずれもムハンマドが神の使徒としてその使命を遂行する中で人類にもたらしたメッセージである。なので、イスラムの内容を考察することは、ムハンマドが本当に神の使徒であるかを判断する上で最も重要

66 イスラムは、預言者ムハンマドとともに現れた宗教の名称であるとともに、ムハンマドとともにのみ現れた宗教の特別な名称ではない。クルアーンで「イスラム」とは、歴史を通して神が送った全ての預言者とともに人類に届けられたメッセージ、「ムスリム」という表現は、そのメッセージに従うすべての人々を指す。

な要素である。本書の各章は、実のところ全て「ムハンマドの分析」に関係していると言える。本章では、これまでの章とは異なり、ムハンマドの生涯および彼の人生において成し遂げた事柄に焦点を当てて考察する。ムハンマドを分析することで、彼が、イスラムを否定する者たちが主張するような、自己の利益のために人々を欺いた人物、あるいは幻覚を見る精神疾患者に典型的な特徴が見受けられないことを示し、むしろ「私はムスリムである」と自認する者が神の使徒に期待するような特徴が彼に備わっていることを明らかにしたい。さらに、クルアーンの文体および内容が、仮にムハンマド自身がそれを創作したのであれば当然に予想される特徴を有していない点にも注意を促す。そして、イスラムにおいて神の啓示とされるクルアーンと、ムハンマドの言葉が含まれているとされる諸書との間に存在する大きな違いを、近年導入された分析技術を用いて明示するつもりである。

5-1　「ゼロ地点」から歴史上の大役を担うまで

本書を通じて、私は、ムハンマドが生きた時代において、いかなる個人や集団がクルアーンを創作することも不可能であったことを明らかにしようと試みてきた。また、神の存在とその重要性を理解する者にとって、歴史の中でムハンマド（および彼がもたらしたクルアーンというメッ

セージ）が神を人類に認識させ、人間の生活の中心に据えるという点で、さらに多神教に対して大きな打撃を与えたというその役割を目の当たりにすることが、ムハンマドの預言者としての主張を真剣に検討するに足る十分な理由であることを指摘してきた。

このような主張を裏付けるために、ムハンマドがすべてを「ゼロ地点」から始めたことを示す必要は必ずしもない。しかし、ムハンマドが預言者であることを否定する者たちの代表的な主張は、「ムハンマドがクルアーンを創作し、運よく歴史的役割を果たすことができた」というものである。この反論が存在する以上、ムハンマドが出発時に何を持っていたか、そして彼の人生の実態を検討することは重要となる。ムハンマドがゼロから出発したことを理解することは、彼がもたらしたメッセージと、歴史において実現させた成果の偉大さを理解する助けとなる。

ムハンマドは、神の使徒としての使命に「ゼロ地点」から着手した。すなわち、

1. 学問的側面においてゼロから始めた。
2. 政治的権力においてゼロから始めた。
3. 人的資源においてゼロから始めた。
4. 経済力においてゼロから始めた。

以下において、これら四点を簡潔に検討する。

ムハンマドが生きた地域と時代には、プラトンやアリストテレスに見られるような哲学の学派は存在しなかった。また、シュメール人のように天体観測所を設け、体系的な観測を通じて宇宙を理解しようとする試みも存在しなかった。アラビア半島の大部分では、識字率は極めて低く、読み書きができる者はごく少数であった。メッカにおいてはカアバ神殿の存在により他民族との交易や接触があったとはいえ、プラトンの学園やシュメールの天文台に匹敵するような、本格的な学術的機関が存在していたとは言えない。ムハンマドは、旧約聖書や新約聖書のような先行する聖典の知識すら持たない「ウンミー（聖典を知らない民）」中から現れた人物である（クルアーン：ジュマ章 62-2 参照）。彼が依拠し得る学問的中心地は存在していなかった。知的には完全に不毛なこのような環境において、人々はクルアーンと出会ったのである。この環境がいかに学術的に不毛であったかを認識することで、クルアーンを生み出した知恵がその環境の中には存在しなかったこと、またクルアーンが当時の知的蓄積によって書かれたとする主張が成立し得ないことを、より明確に理解できる。

ムハンマドは、宗教への招きを行う活動を、いかなる政治的権力も継承することなく開始した。「ムハンマドは、

自らが暮らしていた地域の有力な政治指導者として宗教活動を始め、他の集団が徐々にその権力に屈服し、イスラムがこのようにして大国となった」といった主張は、誰一人として行い得ないものである。仮にそのような背景があったとしても、ムハンマドのもたらしたメッセージのもとに人々が結集し、わずか一世紀のうちにメソポタミアから北アフリカ、さらには南ヨーロッパに至るまで広がり、世界最大級の政治体制の一つとなったという偉業が色あせることはない。しかしながら、無からの出発点からこのような展開が現実に成し遂げられたことに立ち会うことこそが、この成功の偉大さを一層際立たせるものである。ムハンマドが預言者としての使命を宣言した当時、彼が住んでいた地域には「国家」と呼び得るような政治的構造は存在していなかった。そこは部族の連合体、指導者たち、そして有力者たちが支配していた社会であった。ムハンマドは、国際的な観点から見れば重要性の低い部族の政治的指導者ですらなかった。政治的指導者として活動を始めたどころか、彼は自身が出自とする社会の有力者ですらなかったのである。実際、ムハンマドの預言を聞いた敵対者たちは、「このクルアーンが二つの町の有力者の一人に下されたならよかったのに」と述べている（ズフルフ章 43-31）。ムハンマドは、地域の指導者としての地位を有し、言葉に重みのある存在としてではなく、「無」に等しい立場にある一人の孤児としてその使命を開始したのである。古くから

の慣習や祖先伝来の宗教に強くこだわり、無知が蔓延し、わずかな習慣の変更にさえ強く抵抗するような社会において、ムハンマドは急進的な変革を成し遂げ、共同体を形成し、短期間のうちに世界で最も影響力のある勢力の一つとなる道を開いたのである。しかもこの過程において、彼は一度たりとも、自らが提唱した宗教の基本信条を譲歩するような妥協を行わず、あらゆる危険を顧みずにこれを貫いた。人々を動かしたのは、彼が有していた特権や政治的地位ではなく、彼のもたらしたメッセージそのものの力であった。

ムハンマドが 40 歳前後でイスラムへの招きを開始した際、彼の周囲には予め結集していた人々が存在していたわけではなかった。例えば、既存の宗教の高位聖職者であったわけでもなく、教団やスーフィー教団（タリーカ）の指導者といった立場でもなかった。彼は、予め存在していた人的資源を用いて、その人々を自身の新たな主張に巻き込んで成功を収めたわけではない。最初に妻ハディージャを、次いでその他の人々を、一人一人説得することから始めたのである。布教活動を開始してから最初の 3 年間で彼に従ったのは、わずか 40〜50 人程度であった。人的資源という観点から見ても、完全にゼロからの出発であった。また、ムハンマドは預言者としての使命を始めた時点で、経済的に強い力を有していたわけでもなかった。彼自身が巨万の富を保有していたわけでもなければ、最初から潤沢

な予算で彼を支援するような人物がいたわけでもなかった。彼には、妻ハディージャと共に行っていた商業活動によって得たある程度の蓄えはあったが、それは軍隊を編成したり、人々を金銭で従わせたりできるような規模からは程遠いものであった。加えて、預言者としての活動開始から間もなくメッカで始まった経済的な封鎖（ボイコット）により、彼は極めて困難な経済状況に直面することとなった。そもそもアラビア半島（特に沿岸部以外の地域）には、大規模な富は存在していなかった。実際、この地域は経済的な観点から見て価値が乏しく、当時あらゆる地域を征服していたローマ帝国ですら、本格的に関心を向けなかったほどである。要するに、他の点と同様に、経済的な側面においても極めて低いレベルからの出発であった。

知識、政治、人的資源、経済的価値の面でゼロに近い立場から出発したムハンマドが、歴史上最も影響力のある人物の一人であることは、ほぼすべての歴史家が認めるであろう。例えば、歴史上最も影響力のある 100 人を選定したマイケル・ハートは、ムハンマドを 1 位に挙げている。ハートは、彼が選んだ多くの有名人が文明の中心地で生まれ育ったことに言及しているが、ムハンマドが生まれ育った地域は、重要な学問、商業、芸術の中心からは遠く離れた場所であった。預言者としての使命を果たした 23 年間の間に、ムハンマドは初めて、アラブの部族の大多数を一つにまとめ、政治的な統一を成し遂げた。この統一は、唯一

神を信じる思想のもとに結びつき、ササン朝ペルシャやビザンツ帝国のような、かつてはアラブ部族が挑戦すら考えなかった強大な勢力に対して勝利を収めた。ハートは、ムハンマドがイエスとは異なり、優れた宗教指導者であるだけでなく、効果的な政治指導者であったことにも注目している。また、イスラムの基本的な教えを大部分ムハンマドが形成した一方で、今日のキリスト教の宗教的信念の形成においてはパウロが非常に重要な役割を果たしたと述べている。このため、ハートはムハンマドを１位に、ニュートンを２位に、イエスを３位にランク付けしている[67]。

アルフォンス・ド・ラマルティーヌは、ムハンマドの歴史的に類を見ない偉大な成功について次のように述べている。「もし目的の壮大さ、利用可能な手段の限られた状況、そして達成された結果の素晴らしさが一人の人間の才能の尺度であるならば、歴史上、誰がムハンマドとこの点で対抗できるだろうか？[68]」要するに、「私はムスリムである」と言う人は、あらゆる力を測る基準でゼロからスタートしながらも、歴史上最も影響力のある人物（おそらく最も影響力のある人物）であったムハンマドのメッセージに従っていることになるのである。

---

67 Michael H. Hart 著, The 100 A Ranking Of The Most Influential Persons In History, 出版元：Citadel Press, New York, 1992, p.3-10

68 Alphonse de Lamartine 著, Historie de la Turquie, 第 1 巻, Chez Wolfgang Gerhard, Paris, p.111

5-2 ムハンマドは「嘘つき」であるという主張

ムハンマドが神の使徒であることを否定する者たちは、ムハンマドをどのように評価するだろうか？ これには以下の二つの選択肢があるように思われる。

1. 嘘をついたと主張すること。

2. 精神疾患であると主張すること。

これらの二つの選択肢以外に、真剣な代替案は見当たらない。実際、イスラムを否定する者たちはこれらを主張している。もちろん、これらにはさらに細かい主張が存在する。まず、この項目ではムハンマドが「嘘つき」であるという主張を取り上げ、次の項目では「精神疾患」であるという主張について評価を行う。この二つの主張が誤りであることを理解することは、「神の使徒」という主張が正しいことをより深く理解する助けとなるだろう[69]。その後、さらに別の項目で、彼の行動がなぜ神の使徒として予想されるべき行動であったのかを示していこうと思う。

---

69 キリスト教徒の神学者たちの一部は、イエスのために類似の区別を 3 パターン用いている。それは、1,嘘で人々を騙したこと、2,精神疾患にかかって騙されたこと、3,その言葉が真実であることという選択肢である。John Duncan（1796-1870）の Colloquia Peripatetica と C.S. Lewis（1898-1963）の Mere Christianity という著作は、その見解が述べられている研究の例である。しかし、ここで第 4 の選択肢があることが言える。それは、イエス自身に関して主張されていること、特に「神性」の主張を弁護していないことである。事実、キリスト教の初期の世紀以来、「神イエス」の認識に反対するキリスト教徒も存在してきた。しかし本書ではムハンマドに向けた 3 パターンの区別のためにそのような第 4 の項目を示すことはできない。ムハンマドの、彼以前の預言者ヌフ（ノア）、イブラヒム、ムーサなどの神の使徒がいたと主張したことを、イスラムの内部、また非イスラム社会の人物の誰一人として否定していない。異論者は、彼は「神の使徒」でないと言ったが、「神の使徒」がいたと主張したことは、彼の敵によってすら否定されなかった。ムハンマドのこの主張は、人類に送られたクルアーンからも明確に理解することができる。

ムハンマドが「嘘をついた」と主張する者の多くは、彼が「自分の利益のために嘘をついた」と言っている。この「利益」に関する主張は、物質的な利益、名声、または他者に対する権威を確立することに関連している場合がある。一方で、「人類の利益のために嘘をついた」と言う者も存在する。「嘘をついた」と主張する者の中には、「魔術師」や「他者の教えを記録しただけの人」、「詩人」など、さまざまな告発とともにこの主張を展開していることがクルアーンにも見られる。これらは一般的に、「自分の利益のために嘘をついた」という主張とともに述べられている。「自分の利益のために嘘をついた」という主張だけではクルアーンの奇跡的な性質を説明できなかったため、ムハンマドが魔術師であった、詩人であった、または他者から支持を得ていたという非難が追加された。

まず第一に、多くの歴史的な資料によれば、ムハンマドの敵でさえも彼を信頼していたことを思い起こすべきである。預言者としての前の時代、彼が生きていた社会では、「アル・アミーン（信頼のおける者）」と呼ばれていたことを覚えておこう。多くの人々が、彼が「嘘つき」であるとする主張に対して、歴史家たちが伝えるこの情報に注目している。ムハンマドの預言者としての立場を否定する者たちは、この歴史的情報が信頼できない、または信頼できる人物が後に「嘘をついた」人物になることがあると言って異議を唱えるかもしれない。こうした反論に対して、ム

ハンマドの信頼性を示す資料に依存するよりも、ムハンマドがもたらしたメッセージであるクルアーンを、そして彼の戦いを詳しく検討することが、「嘘つき」という主張に反論するためにもっと適切であると考える。

　例として、これまでの章で取り上げた、クルアーンの超常的な側面に関する二つの事例を挙げ、これらを「嘘つき」という主張の観点から簡潔に考察する。その他の伝えられた事例も当然同様に取り上げることができる。

最初の例として、「境界のある宇宙」というテーマで取り上げたように、クルアーンが全ての宇宙、星々とともに地球にも終わりが来ると主張している点を考察しよう。この主張が科学的に正しいかどうかは、ムハンマドの時代には理解されていなかったため、このような驚くべき主張をすることは、ムハンマドにとって当時の時代に何の利益ももたらさなかった。むしろ、このために多くの人々がムハンマドを嘲笑していた可能性さえある。「自分の利益のために嘘をついた」とする人物が、彼の時代において、何の利益も得られず、むしろ不利益を被る可能性が高いこのような主張をすることは、むしろしない方が自然である。見せかけの「魔術師」や、言葉を巧みに組み合わせる技術を持つ「詩人」であったとしても、このような主張を説明することはできない。この情報は、宇宙論的には非常に基本的な主張であり、言葉の巧みな組み合わせによる副産物であるとは言えない。加えて、ムハンマドに対するどんな非難

も、利益にならないこのような主張を「これは神からの啓示だ」として、どのように表現したのかを示すことはできない。ムハンマドの時代において、世界の終わりを予測した人物は誰もいなかったため、「他の者が教えた」という主張も無効である。「自分の利益のために嘘をついた」人物が、他の者から学んだ情報を使うことは考えられない。また、「人類のために嘘をついた」人物がこのような主張を行ったとは考える理由はない。ムハンマドが宇宙の終わりを信じさせ、それが神からの啓示であると述べることで、どのように人類の利益を図ったのだろうか？

次に、第二の例として「海の底の暗闇」というテーマで、ムハンマドの時代の科学では知られていなかったにもかかわらず、深海の底が「手を出せば、ほとんど手さえ見えない」ような暗闇であると描写した点を考察しよう。ムハンマドがこのような例えを使った場合の利益は何だろうか？ 当時、これについて知られていなかったため、これを提案しても何の世俗的な利益も得られず、名声を得ることもなかっただろう。「深海の底は、他の場所と違っていない。海は昼間は他の場所と同じように明るい」といった反論がされる可能性もあったが、その時代には今日のように科学的な回答はできなかっただろう。「魔術師」の目くらましや、「詩人」の言葉の使い方が、このような表現を説明することはできない。実際、このような知識を私たちに教えてくれるのは、光学や海洋学などの分野で活動して

いる物理学者や科学者であって、魔術師や詩人ではない。ムハンマドの時代において、どんな人物も深海の底が真っ暗であることを発見したり予測したりすることはできなかったため、「他の者が教えた」という主張も無効である。この点でも、「自分の利益のために嘘をついた」人物が、利益と関係のない他の者から学んだ情報を使うことは考えられない。また、「人類のために嘘をついた」人物がこのような主張を行ったとは考える理由もない。ムハンマドが海の底の暗闇を信じさせ、それが神からの啓示であると述べることで、どのように人類の利益を図ったのだろうか？

神の前において、他のすべての存在がいかに取るに足らないものであるかと同様に、神の名において語られる虚偽の前では、その他すべての嘘は取るに足らないものとなる。もし仮にムハンマドが、「人類の利益のため」といった美辞麗句を用いてさえ、神の名において虚偽を述べたとするならば、この主張は彼を「最大の嘘つき」であると見なすことにつながる。つまり、私たちにとっては次の二つの可能性しか存在しない。

第一に、歴史を通じて数十億人に追随されたムハンマドが人々に伝えたメッセージ、すなわちクルアーンは、最も重要なメッセージである。それは、最も重要なる存在である神からのものであり、神と交信する機能を持ち、信仰や実践において私たちがいかにあるべきかという最も本質的な事項を扱っている。

第二に、歴史を通じて数十億人に追随された「ムハンマドがでっち上げた」書物としてのクルアーンは、「最大の虚偽」である。それは、想定しうる限り最も重大な虚偽、すなわち「神の名において語られた嘘」の範疇に属し、「これは神のメッセージである」という虚偽によって数十億人の信仰と実践が形成されてきたという点で、それは「人類史上最大の虚偽の一つ」、あるいは「人類史上最大の虚偽」である可能性すらある。

要するに、ムハンマドは「最も重要な真実の伝達者」であるか、「最も大きな虚偽の創作者」であるかのいずれかである。彼が伝えたメッセージを、ありふれた真実または平凡な虚偽と分類することはできない。これまでに示した通り、クルアーンに内在する超常的要素は、ムハンマドが生きた時代の個人あるいは共同体によって語られ得たものではない。また、本章で見られるように、クルアーンにこうした事柄が含まれていることは、「彼は自らの利益のために虚偽を述べた」とする、ムハンマドが預言者であることを否定する者たちが最も頻繁に持ち出す主張とは整合しない。一方で、それらは「神が代償をいとわず真理を示し、ムハンマドが使徒として神からの啓示を人々に伝えた」とする主張とは整合する。これらの事柄に関して、ムハンマドが得たとされる利益は何一つ存在せず、「このような理由で彼は虚偽を述べた」といった、説得力ある主張を行うことは困難である。次章では「精神疾患者」との主

張を検討する。その次の章では、神が使徒を遣わすとすれば、その使徒に備わっているべきとされる資質をムハンマドが備えていることを示す予定である。そこで述べられる多くの点もまた、「嘘つきであった」という主張への反証となるであろう。

5-3 ムハンマドは「精神疾患者」であるという主張

ある人物が、自身が国家の元首であると主張していると仮定しよう。この場合、考えられる可能性の一つは、その人物が人々を欺くために嘘をついているというものである。この嘘は、何らかの利益を得るため、あるいは人々をからかうといった異なる目的のために語られている可能性がある。だが、その人物の話し方や行動を観察し、嘘をついているようには見えないと判断した者たちは、その人物が何らかの精神疾患を抱えているのではないかと考えるかもしれない。しかし、もし実際にその国に元首が存在しているのであれば、「元首である」と主張する人物が本物である可能性も当然ながら存在する。「元首」を自称する精神疾患者が多数存在していたとしても、現実に存在する元首の事実が否定されるわけではない。「元首」を名乗る者の多くが嘘つき、もしくは精神疾患者であることが多いという事実は、多くの人々に誤解を与えている。「自国に元首が存在しない」あるいは「その主張者が元首でない」と

いうことが証明されない限り、その人物が「嘘つき」もしくは「精神疾患者」のいずれかであると断定することはできない。同様に、神の存在や、ムハンマドに啓示されたクルアーンが神からのメッセージであることが否定されない限り、「ムハンマドは神の使徒ではない」という理由で、「嘘つき」または「精神疾患者」のいずれかと断定することは妥当ではない。にもかかわらず、現代の多くの無神論者や理神論者は、そのような哲学的前提の検討を行うことなく、あらかじめムハンマドを上記の二者択一のどちらかに分類するという誤りに陥っている。前稿では「嘘つき」という主張について検討した。本稿では、「神の使徒」であるというムハンマドの主張を否定する者たちが利用するもう一つの方法である「精神疾患者である」という主張について論じる。彼の主張のために示された自己犠牲を評価した一部の者たちは、これほどの献身と情熱が「嘘」のために捧げられることは考えにくいとし、その代替案として「精神疾患者説」がより妥当であると考えるに至った。他の者たちはまた異なる理由でこの説を採用している。しかしながら、この見解には多くの問題が内包されている。以下ではそれらの問題点を示していく。

ムハンマドについて最終的な判断を下すのであれば、彼を通して私たちに伝えられたクルアーンを検討することが必要不可欠である。まず、前稿で扱ったクルアーンの中の

二つの驚異的な記述を、精神疾患者説の観点から再検討しよう。

第一の例として、「膨張する宇宙」に関する記述を挙げる。クルアーンは、宇宙が絶えず膨張していると述べている。これは 1920 年代に初めて科学的に確認された現代宇宙論における最も重要な発見の一つ（あるいは最重要）であり、理論的および観測的な数多くの成果の結合によって実証されたものである。仮にムハンマドが当時の最も優れた物理学者であったと仮定しても、7 世紀という時代背景においてこのような科学的知見を持っていたとは到底考えられない。すなわち、このような記述が精神疾患者によってなされたとするのは、極めて困難な説明である。クルアーンの神性を否定し、「ムハンマドが私利私欲のために虚言を述べた」とする説に対し、「その記述は彼にも当時の人々にも利益をもたらさない」と反論されると、「彼は精神疾患者であったので、そうしたことを口にしたのだ」として切り抜けようとする者もいる。しかしこの選択肢を利用する者たちは、「精神疾患者説」という立場によって、「虚言説」よりも遥かに説明困難な問題に直面することになる。すなわち、宇宙論における最重要の知見の一つを、精神錯乱や幻覚の産物として説明しようとする、極めて苦しい立場に追い込まれるのである。

第二の例としては、「子宮壁への着床」に関する記述を挙げる。ムハンマドが生きていた時代の科学的知識では把

握し得なかったにもかかわらず、クルアーンには胎児が発生初期の段階で子宮の壁に付着することが記されている。何千年にもわたり、発生生物学および胎児の形成過程を研究してきた科学者たちは、この事実を理解することができなかった。顕微鏡の発明とその発展によって、ようやく肉眼では観察不可能なこの過程の観測と理解が可能となったのである。ここでも同様に、「ムハンマドが利益のために虚言を述べた」とする説に対して、「このような記述は何らの利益にもつながらない」と反論されると、「彼は精神疾患者だったから、このようなことを口走ったのだ」という回避がなされる。しかし、このような説明は、「虚言説」よりもさらに非合理的である。というのも、精神疾患者が顕微鏡なしには観察不能な生命現象について記述していたという主張は、きわめて不合理であるからである。

結論として、前稿でも示されたように、クルアーンに見られる宇宙の深部、深海、胎児の形成過程、歴史的記述などの驚異的内容は、ムハンマドが自己の判断によって語っていたのではなく、神からの啓示を伝えていたことの証左であるといえる。

本稿で明らかになったように、ムハンマドが「神の使徒」であることを否定する者たちが拠る二つの主張、「虚言者説」と「精神疾患者説」のいずれを採用したとしても、それぞれの立場には多くの困難が伴うのである。

「精神疾患であった」というあらゆる主張に対しては、「7 世紀当時の極めて知的な個人や集団であっても、クルアーンの内容を創作することは不可能である」という点を指摘し、「精神疾患説」がその主張者自身をさらなる困難に追い込むものであることを示すことによって反論しうる。だが、これだけでは不十分であるため、最も頻繁に主張される二つの説、すなわち「統合失調症説」と「てんかん説」について簡潔に検討し、それらの説を利用する者が直面せざるを得ないさらなる困難をも示そうと思う。

まず、「統合失調症」説から検討を始める。現代においては、多くの患者に対して「統合失調症」という診断が、アメリカ精神医学会が策定した「DSM-5（精神障害の診断と統計マニュアル第 5 版）」の基準に基づいてなされている[70]。この基準によれば、統合失調症と診断されるためには、患者が社会的関係や職務遂行において著しい機能障害を示していることが必須要件の一つとされる。しかし、ムハンマドにおいては、そのような機能障害があったどころか、むしろ社会的関係および自らが担った責任を極めて優れたかたちで果たしていた。宗教を広範な人々に伝達する際、彼はその責任を極めて見事に遂行し、それにより、すでに指摘されているように、あらゆる分野において「ゼロ地点」から出発したにもかかわらず、生前のうちに大いなる成功を遂げた。この成功を成し遂げる過程において、

70 http://www.psychiatry.org

彼は自身と共に行動した仲間たちや家族との間においても非常に良好な社会的関係を築いていた。

以下のクルアーンの一節は、彼が周囲と健全な関係を築いていたことを示す節の一例である。

アリ・イムラン章 3-159：あなたは神の慈悲によって彼らに対して柔和に接した。もしあなたが粗暴で冷酷な心の持ち主であったなら、彼らはあなたのもとから離れ去っていただろう。もう、彼らを赦し、彼らのために神の赦しを乞い、また事を決する際には彼らと協議せよ。そして、一度決断し決意したならば、ただ神に信頼せよ。誠に神は、信頼して依拠する者を愛される。

ムハンマドが周囲の人々に対して柔和に接し、彼を預言者と信じていた者たちに対してさえ「自分は全てを知っている、君たちは何者だ」などと言わず、むしろ彼らと相談し、愛情に基づく関係を築いたという点は、ムハンマドが健全な社会的関係を構築していたことの証拠の一つである。彼は、統合失調症患者によく見られるような周囲に対する攻撃的な態度からは無縁であった。預言者と信じられていた人物であることを抜きにしても、現代において近隣の一地域で支持者を集める詐欺的宗教指導者や、ニューエイジ系のカルト指導者の多くは、自らを非常に重要な存在

であると考え、周囲の人々と相談することなく、彼らを絶対的支配下に置こうとする傾向にある。これに対して、ムハンマドは自らの啓示に基づき、周囲の人々と相談すべきであるという姿勢を公に示した人物である。ムハンマドの生涯を記述した文献群においては、彼が家族や友人、そして信徒と築いた健全な社会的関係の実例が多数挙げられている。

統合失調症は一般的に若年期に発症する疾患であるが、ムハンマドは「神の使徒」であると主張し始めたのは 40 歳を過ぎてからである。実際、クルアーンのユヌス章 10-16 においては、ムハンマドが自身の民に対して「私は以前からあなたがたの間で一定の年数を過ごしてきた。あなたがたは考えないのか」と語ったことが記されている。彼の啓示を否定し、彼が預言者を宣言する以前の 40 年を知っていた者たちの中にも、ムハンマドが 40 歳以前に預言者であると主張していたと語る者はいなかった。さらに、統合失調症の患者は一般的に、最も身近な人物たちによってその精神的異常が認識される傾向がある。しかし、ムハンマドの周囲にいた多くの人々は、彼が預言者であることと精神的に健全であることを認めていたのである。統合失調症患者にしばしば見られる特徴の一つに、秩序だった話し方ができないという点がある。ところがムハンマドの敵対者たちは、彼が優れた語り口によって人々を魅了し、クルアーンを自ら創作したと主張することで、彼の「神の使

徒」としての主張を否定しようとした。また、統合失調症の患者は、自己管理が不十分であり、衛生観念に欠けていることがしばしば指摘されている。これに対し、ムハンマドの個人的な生活様式に関する記録や、イスラムの信仰実践の中に見られる清潔さへの強いこだわりは、彼がむしろ清潔さを極めて重視していたことを明確に示している。例えば「衣服を清めよ」（ムッダッスィル章 74-4）といったクルアーンの章句や、ウドゥ（小浄）といった宗教的実践に見られるように、清潔さはイスラムにおいて重要な要素とされており、ムハンマド自身がその模範を行動によって示していた。ムハンマドが生きた時代には、今日の統合失調症患者が服用することで症状を大幅に軽減できる薬物は存在していなかったという点も思い起こされるべきである。

要するに、統合失調症と診断されるために必須とされる機能障害といった特徴や、統合失調症患者に高頻度で見られるとされる多くの特徴は、ムハンマドの個人的な資質、彼の周囲との関係、そしてクルアーンの内容のいずれにおいても観察されていない。

ムハンマドが「精神疾患を患っていた」と主張する者たちは、彼が人々を嘘によって欺いたのではなく、幻覚と現実を混同したために自らが誤認したのだと述べようとしてきた。彼らは啓示を受け取ることが不可能であると前提し、そのために幻覚と現実の区別がつかなくなるような精

神疾患を彼が抱えていたと推定しているのである。彼らの主張に裏付けとなる確実な証拠が存在するわけではない。むしろ、啓示という現象自体をはじめから不可能と見なしているため、このような主張を展開していると断言できる。

幻覚と現実の混同に関して、前述の「統合失調症」が一つの選択肢として挙げられてきたが、もう一つの代替的な説明として「てんかん」、特に「側頭葉てんかん」が提示されている。この疾患を抱える者の脳においては、記憶や情動といった重要な機能を担う側頭葉に異常が見られる。側頭葉に由来する発作の結果、実際には味わっていない味や、嗅いでいない匂いを感じる、既視感（デジャヴ）のように過去に見た光景を再び目にしたように錯覚する、あるいは実際には存在しない映像が見えたと感じるなどの現象が生じ得る。これらの発作の後には、言語障害、発作を起こしたことに対する自覚の欠如、また過度の眠気などが観察される可能性がある。しかし、ここで重要なのは、これらの幻覚が体系的かつ意味をもつ視覚像を形成することはないという点である。

本書のこれまでの章で論じてきたように、ムハンマドの時代において最も卓越した知性を持った人物や集団でさえ、クルアーンを創作することは不可能であったと言える。仮に、ある人物がクルアーンを脳疾患によって生じた幻覚の産物であると位置づけようとするならば、その主張

を論理的に擁護することは極めて困難となるであろう。てんかん発作を起こした者は、発作後に一貫性のある論理的な言説を述べることはできない。対照的に、クルアーンには時代を超越した内容が含まれており、それを啓示されたとするムハンマドは、啓示のたびに人々の信仰と行動を規定する明瞭なメッセージを伝えていた。23 年間にわたって継続的にもたらされたこれらのメッセージの間には一貫性が見られ、矛盾が存在しない。このような特性を、てんかんに由来する幻覚によって説明することは不可能である。実際、クルアーンにおいても、その内的整合性が重要な特質として強調されているのである。

ニサー（婦人）章 4-82：クルアーンをよく調べないのか。もしそれが神以外の者からのものであったならば、彼らはその中に多くの矛盾を見いだしたであろう。

側頭葉てんかんを患う多くの人々において、自伝的記憶の障害が確認されている。イギリスで行われたある科学的研究においては、この病気の患者の 70%に記憶障害が見られたという。一方で、ムハンマドの生涯および彼が成し遂げた事績を検討すると、そのような障害の存在とは相反する事実が明らかとなる。側頭葉てんかんの患者に頻繁に見られるもう一つの問題は、言語能力の障害である。この

病気を有する人々の 40%が、話すこと、命名すること、語彙を思い出すことに困難を覚えるとされる。しかし、ムハンマドは、意味深く人々の内面に変化をもたらすほどの影響力を持つ話し方で名高い人物である[71]。また、てんかん患者に見られがちな情動や行動の異常も、ムハンマドには見られず、彼は多くの人々を容易に圧倒しうるほどのカリスマ性と指導力を有していたにもかかわらず、極めて正常な情動および行動の模範を示していた。

要するに、側頭葉てんかん患者に特有の諸々の特徴は、ムハンマド個人の特性、彼の周囲との人間関係、クルアーンの内容全体において観察されない。したがって、「精神疾患であった」とする主張は、クルアーンの内容がいかにして形成されたかを説明しようとした際に、その主張者自身を解決困難な矛盾へと追い込むことになるのである。

5-4　ムハンマドは「神の使徒」であるという主張

ムハンマドが「嘘つき」または「精神疾患者」であるという主張に関する問題点については、前稿で取り上げた。これに対し、ムハンマドの生涯に見られる多くの事実は、「神の使徒」とされる人物に期待される特徴と一致している。本節では、この点に関していくつかの重要事項に注目する。

---

71 Mahir Yeşildal 著 ‘’Psikiatri ve Din’’（未出版）

クルアーンにおいては、ムハンマドが自らの民に対して「私はこれ（宗教の伝達）に対して、あなた方から報酬を求めてはいない」（サード章 38-86）と述べたことが記されている。このことにより、ムハンマドが自身に深い忠誠を示した多くの人物から利益を得ることは原理的に排除されていた。今日において見られるように、詐欺的で利得を追求する多くの「宗教指導者」やニューエイジ的カルトの指導者たちは、自らの活動から経済的利益を得ようとするのが常である[72]。ムハンマドが預言者であることを否定する者たちの間で最も一般的な主張は、彼が「利益のために嘘をついた」というものである。しかし、もしその人物が本当に利益のために嘘をついているのであれば、自らの利益を制限するような言葉を「神の啓示」として提示することは考えにくい。対照的に、神の啓示を人々に伝える使徒であれば、神の御喜びや来世の報酬に比べて取るに足らない世俗的利益を追い求めることはないと予想される。ムハンマドは、周囲の人々から報酬を求めなかったのみならず、自身の所有していた財産すらも、その使命のために費やしていた。彼はメッカでの活動開始から間もなくして（約 7 年後）、約 3 年間にわたる社会的ボイコットに直面し、彼およびその支持者たちは極めて過酷な困難に見舞われた。史料によれば、空腹のあまり木の葉を食べていたとも伝えられる。この困難な時期、ムハンマドと妻ハディー

72 クルアーンは、私利私欲を追求する「宗教指導者」たちに注意せよと警告している。（タウバ章 9-34 を参照）

ジャは、自らの財産をイスラムの使命と初期ムスリム共同体の存続のために費やした。後に、イスラムの拡大と勝利の獲得により、彼らは多くの苦難を乗り越えた。「自己の利益のために道を選んだ者」の視点からすれば、メッカでのボイコットの状況は、その人物が自らの主張によってこの世の安寧や利益を失い、損失を被っていることを示していると考えられるであろう。当時の小さな共同体が、やがて大きな勝利を収めることを予測するのは困難であった。しかしながら、ムハンマドは、利得を目的とした者には期待できない態度を貫き、自らが「神の使徒」であるという信念をもって一切の妥協をせず、堅固にその使命を遂行し、すべての困難を乗り越えた。彼に対してなされたあらゆる世俗的利益を提示する誘いに対しても、「たとえ太陽を右手に、月を左手に与えられたとしても、私はこの宗教、この伝達を放棄することはない。神がこの宗教を勝利させるか、さもなければ私はこの道に命を捧げる」[73]と述べ、道を貫いた。自らの利益にいかに合致しようとも、イスラムに敵対する者たちに対して一切の譲歩をしなかったのである。

メディナ時代におけるイスラム共同体の拡大と数多くの勝利の後においても、ムハンマドの質素な生活は変化しなかった。インドの心理学者であり哲学者であるコネル・ラーマクリシュナ・ラオは、ムハンマドについて次のように

73 İbn Hişam 著, Siret-i İbn Hişam, 訳者：Abdülvehhab Öztürk, 出版元：Kahraman Yayınları, İstanbul, 2014

述べている。「状況は変化したが、神の使徒は変わらなかった。勝利と敗北のとき、力を持つときも困難なときも、富裕のときも貧困のときも、彼は常に同じであり、同じ人格を示した。神のすべての法則と規範が変わらぬように、神の預言者たちも変わらない存在である。」[74]ムハンマドは、得られた勝利の結果として得た資源を用いて、自身や家族のために豪邸や宮殿を建てることはなかった。彼はむしろ敷物の上で眠り、贅沢を嫌い、自らの部屋を掃除し、モスクの建設時には石を運び、人々と同じような衣服を身にまとい、自分で衣を繕い、周囲の者たちが食べるものと同じものを食べた[75]。「私は王ではない。あなた方の中の一人であるにすぎない」[76]と述べ、平凡な生活を貫いた。彼はその使命を、いかなる時にも世俗的利益を得るための手段に変えることはなかった。

「彼らのある者たちに与えた、現世の飾りとしての物に目を奪われるな。主の糧は、それよりも優れており、永続する」（ターハー章 20-131）との啓示のとおり、世俗的な利益を追求することは、彼の目的ではなかった。通常、どんなに平凡な指導者でも、その場において一目で識別されることが多いが、ムハンマドは、自らが預言者であると

---

74 Koneru Ramakrishna Rao 著, Muhammed the Prophet of Islam, 出版元：World Assembly of Muslim Youth, Riyad, 1989, p.24

75 Beyhaki 著, Delailü'n Nübüvve, 第 1 巻, p 274-284, 出版元：Washington Irving, Mohammed, Wordsworth Editions Limited, Hertfordshire, 2007, p.94; Karen Armstrong 著, Muhammad A Biography of the Prophet, 出版元：Harper Collins, London, 1993, p.93

76 Kadı İyaz 著, Şifa-i Şerif, Naim Erdoğan, Hüseyin S. Erdoğan, 出版元：Bedir Yayınları, İstanbul, 2011

信じる仲間たちの間にあっても、あまりに質素な生活をしていたため、その集団の中に入った者は「ムハンマドはどなたか」と尋ねたという。彼が亡くなったときに残した遺産は、数頭の羊と一本の剣といった、ほとんど価値のないものであった[77]。明らかに、彼は自らの使命の初期において、ムスリムたちがきわめて弱い立場にあったときには、迫害に耐え、全財産をその使命のために投じ、後に豊かな環境を得た後においても、虚栄や快楽を中心とした生活をしなかったのである。この一連の過程において、彼が人々と築いた関係は、愛情、助け合い、謙虚さを基盤とし、それらは彼の精神的な安定性と高い道徳性を明示している。最も弱かった時には卓越した勇気と献身を示し、最も権力を持った時には模範的な謙虚さと質素さを実践したことが確認される。これら全ての行動は、人々を欺いて利益を得ようとする者や、精神的に不安定な者が取るような行動ではないと言える。

ムハンマドは、ただ神からのメッセージを人々に伝達する媒介者であっただけではない。彼は同時に、自らが伝えたそのメッセージの厳格な実践者でもあった。彼の共同体が礼拝を行い、断食を守り、喜捨を施し、禁忌を避けたように、彼自身もそれらを他の誰よりも慎重に実践した。自己の主張に信念を持たず、単なる世俗的利益のために主張する人物に見られる行動様式とは明らかに異なる。さら

77 İsrafil Balcı 著, Vahyin Gölgesinde siyer: Medine dönemi, 出版元：Ankara Okulu Yayınları, Ankara, 2020

に、クルアーンにおいては、ムハンマドに対して特別に追加の礼拝義務が課されている。「夜中に、あなたのみに課されたものとして目覚めて礼拝せよ」（イスラー（夜の旅）章 17-79）。この義務はムハンマドのみに課されたものであったが、一部の信徒たちもこれに加わり、共に礼拝を行っていた。「まことに、あなたの主は、あなたとあなたと共にいる者の一部が、夜の三分の二に近い時間、あるいはその半分や三分の一を礼拝に費やしていることを知っている」（ムッザンミル章 73-20）。多くの人々にとって、睡眠を中断することは望ましいことではないが、ムハンマドは他の信徒には課されていないこの礼拝を実践していた。彼は人生のあらゆる側面において、人類に伝えた価値観に誠実に、一貫して従っていた。

ムハンマドは、財産やチャンス、時間だけでなく、自身の命までも信じる理念のために投じることを厭わなかった。死の脅威や危険も、彼の道を逸らすことはなかった。カーディー・アブドゥルジャッバールは、彼が命を懸けて社会全体に反論した姿を次のように述べている。「彼らは、ラクダや馬を侮辱されることすら許さなかったのに、神々や祖先、自らの考え方を否定し、自らの宗教が誤っているとする人物をどうして黙認できようか？」[78]。彼は、自身の周囲にわずかな支持者しかいなかった時代においても、命の危険を顧みずに社会の価値観に挑んだのである。

78 Kadı Abdülcebbar 著, Tesbitu Delaili’n Nübüvve, p.48

また、ムハンマドはメディナへの移住後、自らとその仲間を滅ぼそうとする勢力に対して前線に立って戦った。「私は預言者である。諸君は戦え、私は後方から命令を下す」とは言わなかった。仮にそう言っていたとしても、その命令を忠実に実行する信徒は多くいただろう。しかし、彼は「神はあなたを人々から守るであろう」（マイダ（食卓）章 5-67）という神の約束を信じていた。なぜなら彼は、初めから自らが伝えていたメッセージが神の啓示であることを確信していたからである。戦いの最も困難な場面において、周囲の一部の仲間が背を向けて逃げる中、彼は高い勇気と犠牲精神を示して最前線で戦い、彼らを背後から呼び戻した。クルアーンにはそのような場面が次のように描かれている。「預言者があなたがたの背後から呼びかけていたのに、あなたがたは誰にも目をくれずに逃げ去っていた」（アリ・イムラン章：3-153）。要するに、彼は自身の理念のためにあらゆるものを捧げ、命さえも惜しまなかったのである。このような姿勢は、自己の利益のために虚言を弄する人物に見られるものではなく、真に信念を持った人物にのみ見られる行動である。仮に、ある人物が本当に「神の使徒」であるならば、その人物に期待される行動は、ムハンマドが生涯を通じて示した行動に極めて合致するものである。

5-5 クルアーンのスタイルとムハンマド

もしクルアーンが「ムハンマドの作り話」であるなら、クルアーンにおけるムハンマドに関する表現はどのようであると予想されるであろうか。一方で、クルアーンが「神からムハンマドへの啓示」であるならば、クルアーンのムハンマドに対する表現はどのようであるべきか。クルアーンにおけるムハンマドに関する叙述を検討すると、この二つの選択肢のうち、どちらの方向性に信憑性があると判断されるかが見えてくる。本稿では、この問題に関していくつかの点に注意を促す。クルアーンにおいて、ムハンマドが他の預言者たちと競わされ、彼らよりも優れているとされている箇所は一つも存在しない。むしろ、「われは、神の使徒たちの誰の間にも区別を設けない」（バカラ章 ：2-285）という記述によって、預言者同士を比較し競わせるような考え方が明確に否定されている。これは、他の宗教の多くの信徒が、自らの預言者こそ最も優れていると主張してきた歴史的事実と対照的である。

ムハンマドの生涯において、ユダヤ教徒やキリスト教徒との多くの対話や対立があったとされる。おそらく、多くの人々が、預言者を互いに比べるという誤った、不要な比較に走ったであろう。もしムハンマドが自己の利益や名声のためにクルアーンを捏造した人物であったならば、他のすべての預言者よりも自身が優れているという言葉を容易に受け入れる用意のあった群衆を前にして、クルアーンに加えたはずである。しかし、神から送られた書物において

は、歴史を通じて遣わされた預言者たちを比較するのではなく、むしろその預言者たちを通じて人類に伝えられたメッセージが中心的に据えられるべきである。クルアーンの内容はまさにそのような構成となっており、預言者同士を競わせるような表現は見られず、また預言者たちが宗教的メッセージよりも重視されるようなこともない。ムハンマドは、自らが預言者であることを否定する者たちに対して、常に啓示としてのメッセージを根拠とし、その証拠がクルアーンそのものであると主張し、挑戦を投げかけていた。クルアーンにおけるこのような高い自信に満ちた文体は、特筆に値するものである。

フード章 11-13：それとも彼らは「彼（ムハンマド）がそれを作り出した」と言うのか。言え、「それならば、もし真実を語っているのであれば、それに類似した作り話の十章を持ってきたがよい。唯一神（アッラー）の他に呼び出せる者たちをも呼び出すがよい。」

14：もし彼らがあなたがたに応じることができないならば、知るがよい。それ（クルアーン）は唯一神の知識によって下されたものであり、唯一神の他に神は存在しない。今や、あなたがたは帰依するか？

バカラ章 2-23：もしわれわれが信仰する者に下したもの（クルアーン）について疑いがあるなら、それに類似した一章を持ってくるがいい。神以外の証人たちをも呼べ。もしあなた方が真実を語るならば！

24：もしそれができないならば――いや、あなたがたは決してそれを成し得ないであろう――そのときには、不信仰者たちのために用意された、人間と石を燃料とする火を恐れるがよい。

クルアーンでは決して「信仰のために証拠は不要である」とは述べられておらず、むしろクルアーンそのものが証拠であるとされており、クルアーンのごく一部でさえ模倣することが不可能であると明言されている。ムハンマドがもし人々を欺くために書物を作り出したとすれば、まず第一に自身がその言葉の虚偽性を認識していたはずであり、そのようなクルアーンにおける大胆な挑戦は予期されないであろう。この挑戦に関して、カーディー・アブドゥルジャッバールが述べたように、「彼らが実際にその模倣に必要性を感じ、激しく望んでいたにもかかわらず、それに類するものを持ち出すことができなかった…。もし彼（ムハンマド）が彼らが模倣できないことを確信していなかったとすれば、この問題について大胆に言及することは

できなかったであろう。」[79]この呼びかけに応じ、ムハンマドを通じて人々にもたらされたこの啓示の一部でも模倣することが可能であったなら、アラビア語に熟達していた当時の人々はその模倣例を提示し、ムハンマドを信じることを妨げ、彼らが強く望んでいたようにこの宗教の拡大を代償を払うことなく阻止することができたはずである。なぜ、当時において戦争を辞さなかった敵対者たちが、十章どころか一章すら模倣してこの挑戦に応えられなかったのか。ムハンマドがまだ存命中に起こったイスラムの急速な拡大は、この挑戦に誰も応えられなかったことを示している。

クルアーンにおいてムハンマドの名前は四度しか登場しない。これに対し、モーセ（ムーサー）の名は 136 回、イエス（イーサー）の名は 25 回登場する。ムハンマドの父や母に関する言及は一切存在しない。一方で、イエスの母であるマリア（マルヤム）の名は 34 回言及されている。また、ムハンマドの人生における多くの浮き沈みもクルアーンには含まれていない。例えば、彼が深く愛した妻ハディージャや幼くして亡くなった息子イブラヒムの死に深く悲しんだことは多くの伝承において伝えられているが、そのような個人的な悲劇はクルアーンには描かれていない。もしクルアーンが「ムハンマドによる創作物」であったならば、内容がムハンマド中心となり、彼の大きな苦悩や重

79 Kadı Abdülcebbar 著, Tesbitu Delaili'n Nübüvve, p.176

要な喜びが豊富に語られることが予想される。しかし実際には、クルアーンは特定の人物ではなく「神中心」の書物である。預言者たちは、伝達されるべき神の啓示の媒体として位置づけられているのであって、ムハンマドを含むいかなる人間もクルアーンの中心ではない。確かに、ムハンマドが啓示を伝える使徒であったことから、クルアーンにおいて彼に関する記述や、彼が直面した状況を述べたり、困難に対する解決策を提示する節も存在する。しかし、それらはクルアーン全体の中では非常に小さな割合に過ぎず、注意深く読むことで多くの教訓が引き出される構造になっている。

　宗教的または神秘的な要素を用いて人々を欺く多くの宗教指導者や、ニューエイジ系の共同体を率いる多くのグル（導師）が、周囲の人々によって超人的な特性を有すると形容され、時には神格化されることすらあり、こうした指導者たち自身もその状況を容認し、むしろ助長している例が頻繁に観察されている。仮にムハンマドが「神の使徒である」と主張するにとどまらず、「人間を超えた存在である」とも述べていたとすれば、それを信じる人々が多数現れることは決して想像に難くない。しかし、クルアーンでは彼に対して「言え、私はあなたがたと同じ人間にすぎない」（カハフ（洞窟）章 18-110 節）と言わせることにより、イスラムが「ムハンマド中心の宗教」として提示されることや、ムハンマドに超越的な地位が与えられることを

あらかじめ排除している。また、詐欺師の宗教指導者やグルたちの多くに見られる特徴として、未来に関する具体的な日付を提示したり、とりわけ終末の時刻（世界や宇宙の終焉）を知っていると主張する行動がよく見受けられる。これに対して、ムハンマドが「終末の時はいつか」と尋ねられた際、どのように答えるべきかについて、クルアーンにおいて明確な命令が与えられている。

アラフ章 7-187：彼らは、終末の時がいつ到来するのかについてあなたに尋ねる。言え、「その知識は、ただ主である神のもとにのみある。その時を明らかにする者は、神のほかには存在しない。それは天と地にとっても重くのしかかる事象であり、あなたがたにとって予期しない瞬間に訪れるであろう。」まるであなたがそれを知っているかのように彼らは問いかける。言え、「その知識は、ただ神のもとにのみある。しかし、人々の多くはそれを理解していない。」

利得のために宗教的および神秘的要素を利用する宗教指導者やニューエイジのグルたちは、まるで一切の誤りを犯さないかのように描かれることが多い。周囲の者たちが「ある程度の過ちがあるかもしれない」と認めたとしても、「ではどのような過ちか、具体的に示してほしい」と

問いかけると、実際に過ちが公にされることはほとんどないというのが現実である。これに対して、ムハンマドが人々に伝えたクルアーンでは、ムハンマド自身のいくつかの過ちが指摘され、修正されている。もしクルアーンが「ムハンマドが捏造した」書物であったならば、自身に関して誤りのない人物という印象を与えるために、そのような批判的記述は含まれなかったと考えられる。例えば、以下のような節では、ムハンマドが自らの民の高慢な有力者たちを宗教的に説得しようとしていた際に、質問のために近づいてきた盲目の人物に十分な関心を示さなかったことが、明確に批判されているのである。

アバサ（眉をひそめて）章 80-1：彼は顔をしかめ、背を向けた。

2：盲人が彼のもとにやって来たからである。

3：だが、彼が清められるかもしれないことが、どうしてあなたにわかるだろうか。

4：あるいは、忠告を受け入れ、それが彼に利益をもたらすかもしれない。

5：一方で、自らを無欲であると見なす者が来たとき、

6：あなたはその者に気を配る。

7：だが、その者が清まらなくても、お前には関係のないことである。

8：それよりも、あなたのもとに急いでやって来た者、

9：彼が畏れを抱いていたそのときに、

10：あなたは彼から目を背けた。

11：いや、それ（クルアーン）は確かに教訓である。

12：望む者は、それから教訓を得るであろう。

以下は、ムハンマドが預言者としての使命を果たす過程で、戦術的な誤りを犯したことに対するクルアーンの批判を示す節である。

タウバ章 9-43：神があなた（ムハンマド）を赦すように。真実を語る者たちが誰であり、偽りを述べる者たちが誰であるかを見極めるまで待たずに、なぜ彼らに許可を与えたのか。

顕著な結果として、多神教徒との共通点を見出そうとし、ある種の譲歩を考慮した時にも批判を受けている。

イスラー章 17-73: 彼らは、あなたに啓示されたこと以外のことで、われわれに対して嘘をつかせるために、あなたを罪に陥れようとしていた。その時、彼らはあなたを友とするところであった。

74：もし（神が）あなたに忍耐を与えなかったら、彼らに譲歩するところであった。

74: そうなれば、あなたの生涯にも死後にも、その報いを味わわせていたであろう。その後、われわれに対してあなたの助けとなる者は一人も見つけられなかったであろう。

クルアーンを一度でも読んだ者は、クルアーンの中心に唯一の神が存在し、神の恩恵とは無関係に預言者たちに力があるという最も小さな認識さえも形成されないことに気づくであろう。例えば、以下の節の文体を見てみよう。

アンファール（戦利品）章 8-63: かれ（神）は彼らの心を一つにした。もしあなたが地上にあるすべてを与えたとしても、彼らの心を一つにすることはできなかった。しかし神は彼らの間を和解させた。確かにかれは優れた方であり、知恵に満ちている。

このように、クルアーンは、ムハンマドが優れた道徳を持つ人間であったとしても、超人的な存在ではないことを示している。彼は預言者という非常に重要な使命を授かっているにもかかわらず、間違いを犯す可能性があり、その誤りがクルアーンによって警告されている人間である。自分の利益のために宗教を作り上げた者に期待されるような、間違いを犯さない人物像を作り上げたり、彼自身を他の預言者よりも高い位置に置き、中心に据えて、間違いがないように見せることは、クルアーンにおけるムハンマドには見られない。

5-6 現代技術を用いたクルアーンとムハンマドの言葉の比較

イスラムが神から啓示されたことを否定する者たちの大多数は、クルアーンの著者がムハンマドであると考えており、そのため「ムハンマドの言葉」とされるハディースとクルアーンには違いがないと主張している。前稿で見たように、ムハンマドがクルアーンを「作り上げた」とされる理由の一つは、彼が世界的な利益（財産、地位、人々を支配すること、名声など）を追求していたという否定的な見解が最も前面に出ている。さらに、「歴史主義者」を名乗る少数の人々は、クルアーンを「ムハンマドの言葉」とみなし、神が預言者として遣わしたムハンマドが、自分の言

葉でクルアーンを記録したと主張している[80]。現代において提供された分析技術を用いることで、これらの主張を評価する機会が得られる。本書とムスリム社会の 99%の主張は、クルアーンの源が神的であるというものであり、したがってクルアーンとムハンマドの言葉を含む書物の間には差異があることを期待している。クルアーンの啓示に基づいて信仰と生活を形作ったムハンマドの言葉には、クルアーンから影響を受けたものが反映されるため、ある程度の類似性は期待される。しかし、もしムハンマドが啓示された内容を直接伝えた（加筆や修正、自己の文体に合わせて編集することなく）のであれば、その場合、クルアーンとムハンマドの言葉を含むとされるハディースの間には顕著な違いが存在するはずである。

現代において、新たな文書が発見され、その一つがプラトンによって書かれ、もう一つがトルストイによって書かれたものであると主張された場合、何が行われるだろうか。プラトンとトルストイが書いた文書を取り上げ、これらの新たに発見された文書と比較されるだろう。比較においては、作者が使用した言葉や、その言葉の出現頻度、スタイル分析（スタイロメトリー）などのパラメータが調査され、その結果に基づいて結論が下される。このような分析は、絵画における筆の使い方やサインの書き方を通じて

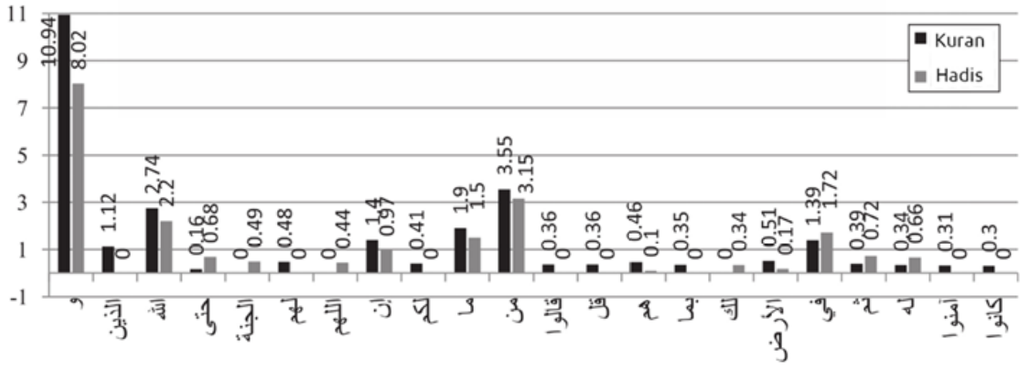
80 この見解を次の拙著で批判した。’’Tarihselcilik Çelişkiler Bataklığında’’ 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2018

画家やサインの所有者を特定するのと同じように、作者を識別するための手段を提供する。

　現代の著者識別技術は、クルアーンと多くの人々に「最も信頼される資料」として認識されているブハリ（Bukhari）の言葉の比較に適用された。ブハリは、ムハンマドの言葉（ハディース）をできるだけ多く集めようとした書物であるため、象徴的に最も注目される作品として選ばれた。もちろん、ハディース書がムハンマドの言葉をどれだけ忠実に伝えているかは議論の余地がある。ハディース書の中にはムハンマドの言葉ではないものも含まれているかもしれないが、それでもこれらの書物が少なくとも一部はムハンマドの言葉を含んでいると言える。したがって、そうした分析を行うことは、たとえそれが完全ではなくても有益であると言えるだろう。いずれにせよ、現存するハディース書の中で「最も信頼できる」とされているブハリは、クルアーンと比較するための最良の選択肢のように見える。もし、多くの無神論者、神秘主義者、キリスト教の宣教師、歴史的な学者の主張が正しければ、すなわち、クルアーンとハディース書が「ムハンマドの知能の産物」であるならば、その間に大きな類似性があることが予想される。この主張を検証するためだけでも、クルアーンとハディース書を比較することは非常に適切な考えである。この比較によって導き出された結果は、クルアーンとハディース書の間には非常に大きな違いがあり、それらの

著者が同一人物であることは不可能であるというものであった[81]。この問題に関する分析結果については、以下に簡潔に要約する。

比較において注目すべき点の一つは、クルアーンとブハリにおける頻繁に繰り返される語句である。例えば、クルアーンでは「ellezine（彼らは）」という語が非常に高い割合で（1.12%）使用されている一方で、ブハリではこの語の使用頻度ははるかに低い。また、「hatta」という語はブハリで 0.68%とごく頻繁に使われているのに対し、クルアーンでは 0.16%と、その 4 分の 1 以下に過ぎない。このように、両者における非常に頻繁に繰り返される語句を比較した場合、両者の間には顕著な違いが見られることが確認できる。



クルアーンとブハリは、文末が音韻を踏んでいるかいないかを比べても顕著な違いがある。ハーリム・サユードは、文末の二語が音韻を踏んでいるかどうかに関してブハリとクルアーンを比較した。結論として、クルアーンは音

81 このテーマで記述したことを、包括的にグラフで考察するために次を参照されたい。Halim Sayoud, Author Discrimination Between The Holy Quran and Prophet's Statements, Literary and Linguistic Computing, vol 27, no.4 2012, p.427-444; Halim Sayoud, Visual Analytics Based Authourship Discrimination Using Gaussian Mixture Models and self Organising Maps: application on Quran and Hadith, www.sayoud.net

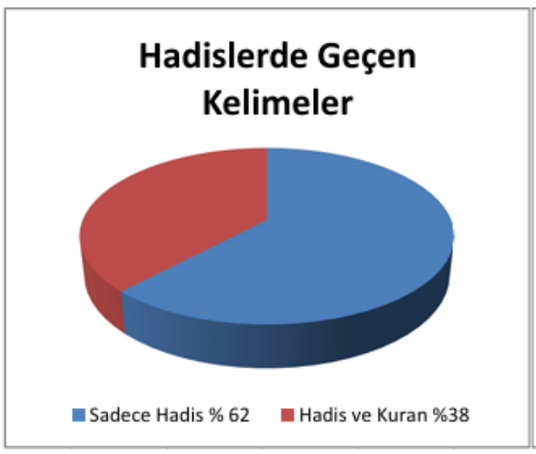
韻を踏んでいる割合が極めて高い一方で、ブハリはその割合がほとんど無いと言っていいほど少ないことが確認された。これは、クルアーンとブハリの形式における根本的な違いを示す重要なデータである。

ハリム・サユードは、クルアーンとブハリで用いされている単語の長さ（字数）の観点からも比較を行った。一文字からなる単語がクルアーンでより多いことがわかっている。二字、三文字、四文字からなる単語は、ブハリの方により多い。ブハリでは、一文字以外の短い単語がより多く使われている。五文字、六文字、七文字、八文字からなる単語はクルアーンの方により多い。九文字と十文字の単語はクルアーンでブハリの二倍多い。単語の長さを比較しても、二つの書物の違いは顕著である。

二つの書物を比較するために選ばれた他の基準は、片方の書物で使われていてもう片方では使われていない単語であった。そのため、クルアーンに登場してブハリにない、またブハリにあってクルアーンにない単語が調べられた。サユードは、クルアーンでは 13,473 語の異なる単語が登場するのに対し、ブハリでは 6225 語が登場することを確認した。クルアーンに登場する単語のうち 83%という非常に高い割合の単語が、ブハリには登場しない。それに対し、ブハリに登場する単語の 62%はクルアーンにはない。二つの書物においてアラビア語という同じ言語を使う著述家が、片方の書物で使った単語ともう片方の書物で使

った単語の間にこれほど根本的な差があることは、全く予期される状況ではない。このことだけでも、ムハンマドがクルアーンとハディース書の筆者であるという主張を無効にするデータとなる。

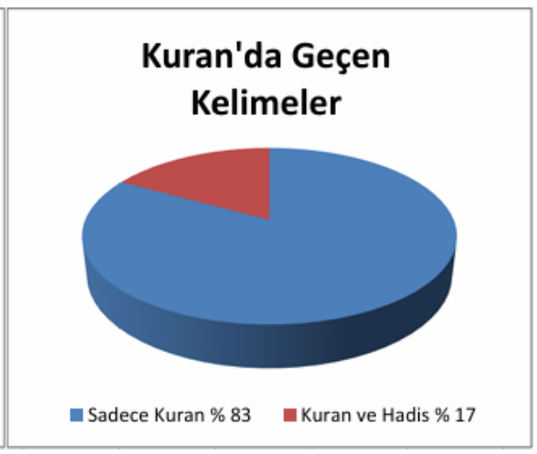
ハディースに登場する単語



青：ハディース書のみ、62%

赤：ハディース書とクルアーン、38%

クルアーンに登場する単語



青：クルアーンのみ、83%

赤：クルアーンとハディース書、17%

左の表：ハディース書（ブハリ）には合計 6225 語の単語が登場し、そのうち 3885 語がクルアーンに全く登場しない。割合を計算すると、ハディース書に登場してクルアーンに登場しない単語の、ハディース書における単語全てに対する割合は 62.41%である。

右の表：クルアーンには合計 13473 語の単語が登場し、そのうち 11133 語はハディース書に全く登場しない。割合を計算すると、クルアーンに登場してハディース

書に登場しない単語のハディース書に登場する単語すべてに対する割合は 82.63%である。（サユード、2012 年）

サユードは、クルアーンとブハリにおける数詞および動物名の頻度とその差異についても分析を行った。この分析により、両者の間には重要な相違が存在することが明らかとなった。例えば、クルアーンにおいて最も頻出する数詞が「1」であるのに対し、ブハリにおいては「3」が最も頻出する数詞である。また、クルアーンではラクダ、牛、羊などの動物を表す語として「アナーム（enam）」が 33 回登場するのに対し、ブハリではこの語はわずか 2 回しか登場しない。さらに、クルアーンに登場するがブハリには登場しない動物名、またその逆にブハリには登場するがクルアーンには登場しない動物名が存在することは、両者の間に明確な違いをもたらしている。ムハンマドがクルアーンに言及された事柄について語ったこと、つまり彼自身の独立した議題を持っていなかったことを想起すべきである。それにもかかわらず、このような違いが存在している点は看過できない。この事実は、クルアーンとハディース書の著者の文体が異なっており、それらが同一の思考主体による産物ではないことを示唆している。

このような現代的な分析手法は、クルアーンとハディース書の著者が同一人物ではないことを示している。この結論は、クルアーンとハディースの出典はムハンマドであると主張する無神論者、理神論者、キリスト教宣教師、歴史

主義者たちの見解が誤りであることを示唆している。この相違の理由を説明するためには、ハディース書に後世の捏造が混入したこと、またムハンマドの発言が意味の伝達を通じて異なる形で伝えられたことが一因であると考えることができる。しかしながら、ハディース書の内容の大部分がムハンマドの言葉であると考える立場に立つ者にとっても、本分析で示された差異は依然として重要な意味を持つ。なぜなら、たとえハディースの多くが正確に伝えられたとしても、これほどまでに大きな違いが現れるとは想定されないからである。一方で、ハディース文献に多数の捏造が含まれ、ムハンマドの言葉を伝えることに失敗しているという見解を採るならば、この分析から導かれる結論は異なるものとなる。しかしその場合、このような結果を目にした無神論者、理神論者、キリスト教宣教師たちは、論理的一貫性を保つためにはハディース書を根拠にイスラム批判を行うべきではない、という帰結にも至る。これは別の議論の領域に及ぶが、それ自体としても重要な指摘である。

結局のところ、ハディース書がムハンマドの言葉をどの程度忠実に伝えているかは、本分析の評価にとっても重要な論点となる。本書の予定された分量では、この重要な問題に踏み込むことはできない。しかし、私たちがハディース書についてどのような立場を取るにせよ、クルアーンとハディース書の著者が同一でないとする認識は極めて重要

である。クルアーンを神からの啓示であり、ムハンマドを含むいかなる人間の言葉でもないと信じるムスリムにとって、これは予想された当然の結論である。

ネジュム（星）章 53-3：「彼（ムハンマド）は自分の望みに従って語るのではない。

4：それ（クルアーン）は、啓示されたもの以外の何でもない。

第 6 章

フィトラ（人間の本質）からイスラムへ

本章では、「フィトラ」（人間の本質）が、イスラムが神から送られた宗教であること、すなわちクルアーンが神から啓示されたものであることを示す証拠となることを説明する。フィトラが神の存在を裏付け、イスラムが神の宗教であることを証明することを論じるために、特にクルアーンの以下の節に触発されて、いくつかの研究を行った。

ルム章 30-30：だから、神の唯一性を信じる者として、この宗教に、神のそのフィトラに向かいなさい。神は人間をそのフィトラで構成した。神の創造に変更はない。この宗教は、永遠に通用するものである。しかし、人々の多くはこれを知らない。

この節によれば、「フィトラ」とは、ムスリムから無神論者、キリスト教徒から仏教徒に至るまで、全ての人々が持っている、創造された者としての特徴を指す。この創造は変更がなく、ここで言う「宗教」に関して重要な証拠があることが強調されている。しかし、この節では、全ての

人々が同じフィトラの特徴を持っているにもかかわらず、多くの人々がそれらが「宗教」についてどのような結果をもたらすかを知らないことに注目している点が重要である。

この章で示される議論を理解するためには、まず人間のフィトラが偶然に生じたものではなく、神によって創造されたものであることを理解する必要がある。この点を信じない者には、前述した書籍を読むことを勧める。もしこれらの書籍を読まないのであれば、この章を飛ばしてもよいし、または神の存在に関する問題を一時的に横に置き、この章を読んでからその問題に戻ることもできる。この章を執筆するにあたり、特に拙著「フィトラの証拠」を参考にしたことを述べておきたい。

ここで注意していただきたい点は、私がこの章を通して示すように、フィトラはイスラムが神から送られた宗教であることを裏付けていることである。フィトラがイスラムが神から送られたものであることを裏付けるだけでなく、クルアーンにはフィトラがイスラムを裏付ける要素があることに注目すべきである。したがって、クルアーンのルム章 30-30 において、フィトラに関連したこの点に注目することは、クルアーンやイスラムのさらなる素晴らしさを示すものであると言える。

6-1自然な欲求からイスラムへ

「自然な欲求」という言葉で、全ての健康な人間に共通して存在する欲求を指している。例えば、生命と幸福を求める欲求は自然の欲求であり、これは私たちの内面から湧き上がるものである。それに対して、外部から来るもの、文化的影響や個人的な選好に基づいて形成された欲求も存在する。例えば、ある人々がサッカーをしたいとか、ピンク色のドレスを着たいといった欲求はそのようなものである。これらは全ての人々に共通する生得的な欲求ではない。「フィトラ」とは、全ての健康な人間に共通する特徴であり、私たちの自然な欲求もそのフィトラの一部である。ここでの出発点はそれらである。もし私たちに自然な欲求がなければ、幸福を求める欲求や恐怖から解放されたいという欲求を感じることはなかっただろう。実際、石や椅子のようなものにはそのような欲求はない。しかし、これらの欲求が存在することは非常に驚くべきことであり、全ての健康な人々にそのような欲求があることが、まるでその存在を重要ではないかのように考えてしまうことがある。このような誤解により、私たちの欲求（およびフィトラ）について深く考えないことがある。欲求に関するこの議論の価値をより良く理解するためには、自然な欲求を持つことの驚異に気づくことが重要である。

自然な欲求は、クルアーンが神を認識させた後の基本的なメッセージである預言と来世の存在を裏付けている。こ

の点について、1-生きたいという欲求、2-恐怖が解消されてほしいという欲求、3-幸福を求める欲求、4-正義を求める欲求について考察するつもりである。

1-生きたいという欲求：最も基本的な欲求の一つである。ショーペンハウアーのような哲学者によれば、この欲求 - 意志はあらゆるものの中で最も基本的である[82]。アルベルト・シュヴァイツァーも生きたいという欲求を、哲学的、道徳的、宗教的なアプローチの基盤に据え、この欲求が私たちの内に現れるものであり、科学が知らせるどんな事実よりもさらに基本的で確実であると述べている[83]。私たちの知能は、他の生物種とは異なり、非常に長い過去と非常に長い未来とを結びつけることができる。未来と、生きることへの内なる欲求とを結びつける人間が来世の存在を欲することは避けられない。生きることへの内なる欲求の声に耳を傾ける者は、誰一人としてこの世の生活が満足を与えるとは思わないだろう。人間は、生まれつき、すなわちフィトラとして、思考を通じて未来を考える特性と、生まれつき生きることへの欲求を持っているが、この世での人間の状態は死を迎えることである。結局のところ、この人間性に内在する状況は、フィトラとして来世の存在を必要としていることを示している。来世への信仰を人々の

82 Authur Shopenhauer 著, The World as Will and Representation, vol.2, 訳者：E.F.J.Payne, Harper and Row, New York, 1966, p.8

83 Albert Schweitzer 著, ‘‘The Ethics of Reverence for Life’’, Christendom, vol.1, 1936, p.225-239

中に生じさせるもの、そしてこの世界で観察される唯一の代替手段は宗教である。

2-恐怖が解消されてほしいという欲求：健康な全ての人間は、生まれつき恐怖という感情を持ち、同時にその感情から解放されたいという欲求も持っている。恐怖がいかに強力な感情であり、人間の行動にどれほど大きな影響を与え、根源的な力となっているかを目の当たりにしたことのない者はいないであろう。恐怖が解消されてほしいという欲求は、生きたいという欲求と同様に、私たちを来世の存在へと向かわせる。しかし、生きたいという欲求と恐怖が解消されてほしいという欲求は、相互に還元不可能な異なる二つの欲求であるため、ここではそれぞれを独立した欲求として検討する。デイヴィッド・ヒュームやジークムント・フロイトなどの著名な哲学者や心理学者は恐怖と宗教の関係に注目している[84]。未来と関係を築く人間の心が最も根源的に抱く恐怖、それは死の恐怖であり、この恐怖を真に満たすことができる唯一の対象は、来世の存在である。また、宇宙における自らの無力さに気づき、それによって恐怖を感じる人間は、自らの創造主との関係を築くことでのみ、この状況に対処することができる。その創造主との関係を可能にする唯一の選択肢は宗教である。したがって、私たちのフィトラの一部である欲求、つまり恐怖か

---

84 David Hume 著, Dialogues and Natural History of Religion, ed. J:A:C: Gaskin, 出版元：Oxford University Press, Oxford, 1993, p.176, Sigmund Freud, The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, vol.XXI (1927-1931): The Future of an Illusion, Civilization and its Discontents and Other Works, The Hogarth and the Institute of Psycho-analysis, London, 1961, p.21

ら解放されたいという欲求は、私たちを来世および宗教への信仰へと導くのである。

3-幸福を求める欲求：全ての健康な人間は幸福を求め、その幸福が持続することを望む。この世で与えられるものの性質も、この世における時間の長さも、人間の幸福を実現するには不十分であることを、自らの内面を見つめた者なら誰でも理解できるはずである。この点を C.S.ルイスはとても見事に表現している。「もし人々が自分の心の奥底を真に見つめることを学ぶならば、大多数の人が、自分たちが激しく望んでいるものがこの世には存在しないことに気づくだろう…それはどんな結婚生活も、どんな旅行も、どんな教育も、真に満たすことができないような渇望である。私がここで言っているのは、結婚や旅行、教育の失敗ではない。最も成功したものであっても、である。もし私の中に、この世のいかなる経験によっても満たされない欲求があるとしたら、その最もありうる説明は、私が別の世界のために創られたということである。この世の快楽が何ひとつとしてその欲求を満たせないのであれば、それはこの世が偽りであることを示すのではない。むしろ、それらの快楽はその欲求を満たすためではなく、その欲求が存在することを明らかにするためにあるのである。こうして私たちは本当の命の存在に気づくのである。もしそうであるならば、一方で私はこの世の恵みを決して軽視してはならず、感謝を忘れてはならない。他方で、それらを本物の模

造品や反響、蜃気楼と取り違える過ちを犯してはならない。私は、自分の真の故郷への渇望を保ち続けなければならない。その故郷とは、私が死ななければ辿り着くことのできない場所である…[85]」

幸福への欲求が来世の存在を必要とするという考え方は、無神論者・有神論者を問わず多くの思想家によって主張されてきた。そして、来世の存在を人々に教え、来世に備えさせるという点において、宗教に代わるものは存在しないのである。

4-正義を求める欲求：正義に関する思想で名高い哲学者ジョン・ロールズは、「正義」や「不正義」といった極めて複雑かつ潜在的に無限の多様性を持つ判断に用いられる基本概念、そしてそれらに基づく道徳的判断は、チョムスキーの言語理論に類似したアプローチで理解可能であると述べている[86]。すなわち、人間が言語を話す準備が整った状態で生まれてくるように、「正義」「不正義」といった概念を用いる準備も整った状態でこの世に生を受けているのである。実際、学歴の有無や文化の違いにかかわらず、ほとんど全ての人々がこのような難解な概念を自然に用い、正義の実現がほぼ全ての文化において共通の願望となっていることは、正義への欲求が先天的・本質的な人間の欲求であることを示している。さらに、20 世紀後半にお

85 C.S. Lewis 著, Mere Christianity, 出版元：Harper Collins Publishers, London, 2002, p.135-137

86 John Rawls 著, A Theory of Justice, 出版元：The Belknap Press of Harvard University Press, Massachusetts, 1999, p.41

ける心理学の分野において、言語習得前の乳児を対象とした実験的研究もこの見解を裏付けている[87]。人間は生まれながらにして正義を求めるが、現実の世界では、多くの暴君がその圧政の報いを受けることなく死に、多くの善良な人々がその善行の報いを受けることなく世を去るという現象が見受けられる。私たちの内にある正義への欲求は、虐げられた者たちに不正を働いた者が処罰され、善人がその善行に対して報いを受けることを要求している。この世においてそれらが実現されない以上、来世の存在、すなわち来世における報いと罰の制度によってのみ、私たちの正義への欲求は満たされ得るのである。来世において正義が実現されるという考えは、イスラムの最も根本的なメッセージの一つである。

私たちの欲求が来世、宗教、そして神への信仰へと導くことを、多くの無神論的思想家も認めてきた。例えば、フォイエルバッハは人間の「幸福への欲求」が、フロイトは「恐怖の感情」が、これらの信仰へと人々を向かわせると主張している。「神学とは人間学である」と述べたフォイエルバッハのように、多くの無神論者は、人間の欲求が来世の存在を要請し、来世の存在が神の存在を要請することを認識していた。しかし、彼らはこの認識をもって、人間

87 例として、生後 6 か月の子供たちを用いて行われた次の実験を参照されたい。Yasuhiro Kanakogi 他著, Preverbal Infants Affirm Third-Party Interventions That Protect Victims From Aggressors, Nature Human Behaviour, January 2017

が神や来世の存在を“創作”したと解釈したのである[88]。フォイエルバッハは神の存在を初めから否定しているため、人間の中にあるこれらの欲求を「空想的な欲求」とみなしている。また、フロイトは宗教を「願望充足（wish fulfillment）」の現れとして捉えている。つまり、欲求が来世や宗教の存在を要請するという点に関しては、多くの著名な無神論的思想家も、本稿で述べられている結論と同様の見解に至っている。しかし、彼らは神の存在を否定しているため、人間の内にあるこれらの欲求の存在を、偶然の結果として説明し、人間が神・宗教・来世を信じることを、偶発的な欲求の充足によって導かれた誤った結論として捉えている。だが、神の存在が認識されたとき、生得的に備わっているこれらの欲求は、もはや偶然の産物とはみなされない。神が人間に視覚や聴覚を与えたように、これらの欲求もまた神によって与えられたものである。私たちの中に来世や宗教を信じるような欲求があることも、決して偶然ではない。神は「私の主は誰か」と問い、創造主との関係を求めるような本性（フィトラ）を人間に授けたのであり、その問いに対して神が答えないということは、理にかなわないのである。

来世の存在が人間の欲求によって求められることに加えて、その来世の創造の力を持つ神が、来世が創造されるこ

88 Ludwig Feuerbach 著, Lectures on the Essence of Religion, (http://www.öarxists.org/reference/archive/feuerbach/works/lectures/lec30.htm), 1851

とを人間に告知するという事実もまた、人間の欲求によって要請されるものである。すなわち、人間が抱く「恐怖が解消されてほしい」という欲求もまた、創造主である神が人間とコミュニケーションを取ることを必要とする。

そして、このような神と人間とのコミュニケーション、そしてあらゆる啓示の手段として唯一考えられるのは、神が遣わす宗教である。この一連の主張は、以下のように項目立てされた論証として提示することができる。

1.神は、生得的な全ての欲求の対象を創造している。
2.神が宗教を遣わすことは、生得的な欲求を満たすために必要である。
3.したがって、神が宗教を啓示するという期待は、啓示しないという期待よりも優先されるべきである。

第一の前提で述べられている内容は、自然な欲求が偶然に生じたのではなく、意識的に創造されたことを知ることに基づいた期待である。また、健康な全ての人に共通して生得的に備わっている多くの欲求に対して、この世でその対象が与えられていることを私たちは観察することができる。例えば、神は空腹を覚える者のために食物を、喉が渇く者のために水を、眠気を覚える者のために睡眠を創造することによって、創造した自然な欲求に対応する対象も創

造していることを示している。論理的に考えれば、渇きのような自然な欲求がありながら、その対象が一切存在しない世界にいることも理論上は可能である。しかし私たちがそのような世界に立ち会ったことがないのは、それが論理的に不可能だからではなく、そのような世界に創造されなかったからである。

第二の前提で述べられている内容は、前の段落で既に説明されており、多くの無神論的哲学者さえもこの見解を共有していることが指摘された。したがって、神が宗教を啓示するという期待が、啓示しないという期待に優先されるべきであるという結論は、論理の要請としてこれらの前提に従って導かれる。

宗教を「願望の充足」とみなす多くの無神論者たちは、彼らの哲学的・心理学的立場に基づき、次のように反論するであろうことは想像に難くない。「確かに人間の欲求は、神と宗教の存在を必要とする。神が存在するならば、これらへの信仰は確かに合理的であろう。しかし神は存在しない」。一方、神の存在は信じているが宗教を信じていない人々の集団も存在する（現代では彼らの多くが自らを「理神論者（デイスト）」と称している）。この議論は、神が宗教を啓示することの必要性を否定するそのような人々に対して有効に用いられ得る。

欲求に基づいてここで導き出された結論は、神が啓示する宗教に以下のような特性が備わっている必要があることを示している。

1. この宗教の存在論の中心には、神が据えられていなければならない。
2. この宗教は、神を、全てを知り、高い全能性を有し、永遠不変なる存在として描かなければならない。なぜなら、そうした属性を備える神のみが人間の欲求を認識し、それに応じることができるからである。すなわち、人間の欲求はこのような神を要請している。
3. この宗教は、来世の存在を明確に告げるものでなければならない。
4. この宗教は、この世で実現されなかった正義が、いかにして回復されるのかについて知らせなければならない。
5. この宗教は、人恐怖を解消したいという人間の欲求に応えるものであり、神が人間の祈りや状況を把握していることを伝えなければならない。

以上の全ての特性を備えている宗教は、疑いなくイスラムである。クルアーンは、神が人間の本質（フィトラ）の

創造者であり、人間の内面にあるす全て、すなわち欲求についても把握していることを明示している。また、神が人々の祈りを知っていると告げ、果てしない宇宙における人間の恐れに対して支えとなっている。さらに、この世の死後に来世が存在することを告げ、人間の最も根源的な欲求に応えている。この世において実現されなかった正義が来世において実現され、全ての人が自らの権利を得ることが明言されている。神が来世を創造し、その場において正義が確立されることを、最も明確かつ詳細に示しており、何十億もの人々がこの点において信仰を抱いている宗教は、イスラムである。つまり、フィトラの一部である生得的な欲求に基づいてここで導き出された結論は、「なぜ私はムスリムなのか」という問いに対する私の答えの一端を構成している。

私たちの内にある自然な欲求は、それに対応する対象の存在を信じるための合理的根拠を与えるが、それらの対象に必ず到達できることを保証するものではない。水に対する欲求は水の存在を示すが、渇きによって死なないことを保証するものではない。同様に、神が宗教を啓示していることは、全ての人がその宗教を信じることを保証するものではない。また、自然な欲求の一つである「渇き」を満たす水が、重金属などによって人間の手で汚染される可能性があるように、自由意志を持つ人間が、神の啓示した宗教を汚し、改変する可能性も存在する。どの宗教、あるいは

どの宗派が人間による汚染にどの程度さらされてきたかを特定することは、本論の範囲外である。

6-2 生得的な道徳観からイスラムへ

20 世紀後半から 21 世紀初頭にかけて、特に現代心理学および認知科学の分野において行われた研究は、健康な全ての人間が、生まれつき道徳的なシステムを学び、適用するための精神的な能力を備えていることを示している。それに対して、19 世紀および 20 世紀前半に活躍した多くの著名で影響力のある思想家たちは、道徳的構造の形成において、生得的な特性の影響を否定するか、あるいは無視していた。例えば、有名な社会学者デュルケムは、人間には生得的な特性が存在しないとし、個人の本性は社会的要因によって形成されると主張した[89]。また、20 世紀の心理学において重要な影響をもたらした行動主義の創始者の一人であるジョン・ワトソンは、自分が育てる赤ん坊を、どのような人物にも仕立てられると述べている[90]。ワトソンのこのアプローチの背景には、生得的な特性を排除し、個人の形成を完全に教育に帰するという考え方が存在していた。

---

89 Donald Black 著, On the Origins of Morality, Evolutionary Origins of Morality: Cross-Disciplinary Perspectives, ed. Leonard Katz, Imprint Academic, Thorverton, 2000, p.109

90 John Watson 著, Behaviorism, W.W. Nortion, New York

道徳の生得性は、ノーム・チョムスキーの「生得的言語（innate language）」に関する見解に似ている。チョムスキーによれば、赤ん坊は生まれつき精神の中に存在する特性のおかげで、言語を話すという難しい能力を身につけることができる[91]。チョムスキーは、言語と道徳の間には、生得的であることや、異なる言語や異なる道徳的構造の存在といった点で類似点があることを示唆している[92]。チョムスキーに触発された心理学者マーク・ハウザーは、私たちの心の中に生まれつき「普遍的道徳文法（universal moral grammer）」が存在すると述べている。彼は次のように述べている。

「普遍的道徳文法は、人々が道徳的なシステムを構築できるようにするための原則とパラメータの整合性に関する理論である。それは、さまざまな異なる道徳的システムを構築することを可能にするツールキットである。この文法や原則の集合体は固定されているが、その結果として生まれる道徳的システムは論理的な可能性の範囲内で無限に存在する。」[93]

子供の頃、私たちは特定の欲求に基づくことなく、また論理的な思考過程を経ることなく、「直感的に」言語を話す能力を獲得し、その後文法について考えることなく「直

---

91 Noam Chomsky 著, Aspects of the Theory of Syntax, 出版元：MIT Press, Cambridge MA, 1965

92 Noam Chomsky 著, Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures, 出版元：MIT Press, Cambridge MA, 1988, p.153

93 Marc D. Hauser 著, Moral Minds, 出版元：Harper Collins Publishers, New York, 2006, p.300

感的に」言語を使用するようになる。同様に、赤ん坊は、話し始める前に、成人が基本的な道徳的概念を使って行うような評価を「直感的に」行い、その後成人期においても、多くの道徳的判断が「直感的」になる。全ての健康な人間が、その本質的に非常に複雑であるにもかかわらず、「善悪、正誤、公正・不公正」といった道徳の基本的な概念を使うことができるのは、これらの概念を使用する能力が人間の本質（フィトラ）に組み込まれていることを示している。

子供たちが生まれながらにして道徳に関する基本的な評価を行うための心的な能力を持っていることを示す多くの実験が行われている。例えば、道徳を可能にする最も重要な特徴の一つは共感であり、行われた実験では、新生児でも共感の基礎が存在していることが示されている。さまざまな実験で、新生児に他の赤ん坊の泣き声を聞かせると、泣き始めたり、ストレスを示す表情をしたり、授乳の頻度が変化したりすることが確認された。この反応が実際に泣き声に対するものなのか、音に対するものなのかを理解するために、新生児に同じ強さの別の音、合成された泣き声、自分自身の泣き声の録音を聞かせると、他の赤ん坊の泣き声に対して示した反応を示さなかった[94]。

94 M.L.Simner, Newton’s Responce to the Cry of another Infant, Developmental Psychology, no.5,1971, p.136-150; M. Dimion, F, Simion and G. Caltran, ‘’Can Newborns Discriminate Between Their Own Cry and the Cry of another Newborn Infant’’, Developmental Psychology, vol.35/2, 1999, p.418-426

ポール・ブルームは、言葉を話す前の時期の赤ん坊を対象に精密に計画された実験によって、これらの赤ん坊が生まれてから最初の一年で道徳に関する生得的な特性を示していることを明らかにした心理学者である。ブルームは、この実験結果が、道徳に関する生得的な特性が存在しないと主張したシグムンド・フロイト、ジャン・ピアジェ、ローレンス・コールバーグなどの多くの著名な心理学者が誤っていたことを示していると指摘している。ブルームは「善悪の認識が何らかの形で人間の存在に内在しているように見える」と述べ、この実験データに基づいて「空白の板（タブラ・ラサ）」説に反対する心理学者の一例を示している[95]。

非常に小さな年齢から、子供たちが正義や善悪に関する評価を行う能力を持っていることを示す実験が、パペットを使用して行われている。例えば、ある実験では、1体のパペットが2体のパペットとボールで遊び、別の1体のパペットがボールを取って逃げるというシナリオを赤ん坊に見せた。このいたずらなパペットが赤ん坊の前に出されると、赤ん坊は「正義を実行しようとし」、そのいたずらなパペットを罰する、例えばパペットの頭を手で叩くといった行動が観察された。善に報い、悪を罰することは「正義」の概念において重要な位置を占めており、赤ん坊がこの点について生得的な傾向を持っているかどうかを検証す

95 Paul Bloom 著, “The Moral Life of Babies”, The New York Times, 5 May, 2010

るために他の実験も行われた。こうした実験では、生後21ヶ月の赤ん坊が「良い」パペットと「悪い」パペットがいる実験環境で観察された。この環境では、生後21ヶ月の赤ん坊たちがパペットに報酬として何かを与えたり、罰として何かを取り上げたりする状況に置かれた。赤ん坊たちは、何かを取り上げるように指示されると「悪い」パペットから取り上げ、何かを与えるように指示されると「良い」パペットに与えることが観察された。別の実験では、生後8ヶ月の赤ん坊たちは、「良い」パペットに報酬を与える者を好み、このパペットを罰する者を嫌った。さらに興味深いことに、「悪い」パペットを罰する者を好み、このパペットに報酬を与える者を嫌った[96]。

近年行われた多くの実験によって、人間が生得的に道徳的な能力を持っていることが示されている。拙著「Fıtrat Delilleri」において、私はこの生得的な道徳的能力の存在が人間特有のものであり、最も適切に説明できるのは神がこの能力を創造したということだとする「生得的道徳的証拠」の議論を提唱した。この議論を展開する際、特に人間特有の「道徳的な認識」が存在し、この道徳的システムが神の存在によってのみ合理的な基盤を持つことができるという点に言及した。

96 Paul Bloom 著, "The Moral Life of Babies", The New York Times, 5 May, 2010

ここで、神の存在を証明するために提示されるこの証拠は、同時に神が送る道徳的なシステムを含む宗教が存在すべきであるという点においても証拠であることに注目すべきである。これを議論形式で表現することができる。

1-宇宙と人間を創造した存在は神である。

2-人間は生得的に道徳的な特徴を持っている。

3-この生得的な道徳的特徴は、神の道徳的命令が存在する場合にのみ、合理的な基盤を持つことができる。

4-生得的な道徳的特徴が神の道徳的命令が存在する場合にのみ合理的な基盤を持つということは、神が人間を自分の道徳的命令に従うような本質（フィトラ）によって創造したことを意味する。

5-神の道徳的命令が人間に届く唯一の方法は宗教である。

6-神は、人間が道徳的命令に従う宗教に従うような本性で人間を創造した。

7-結果として、神が宗教を送ったという立場は、送らなかったという立場よりも優先されるべきである。

この議論の各項目を順に考察してみよう。第一項に記されたように、宇宙と人間を創造した神が存在することを、先に指摘した議論に基づいて私は主張している。第二項で

述べられているように、人間が生得的に道徳的特徴を持っていることを示す現代の心理学や認知科学の多くの研究が存在する。これらの研究のいくつかには、前述の文で言及したものもあり、拙著「Fıtrat Delilleri」でもこの問題を広く取り上げている。第三項で述べられている内容は、この議論を理解する上で極めて重要であり、いくつかの反論がこの点から提起される可能性がある。そのため、この点については以下で詳細に取り扱う。第四の命題が正しいことは、第三の命題で示されたように、生得的道徳的特徴が神の命令の存在を必要とすることが確認された後、少しの分析で理解できる。人間は生得的／フィトラに基づく直感に従って行動するように、また人間が生得的に持っている特徴の一つは合理性の存在とそれが行動に及ぼす影響であることを考えよう。生得的道徳的特徴と合理性の創造主が同一の神であることを思い出していただきたい。そうであれば、神が私たちの生得的道徳的特徴が彼自身の命令に基づいて合理的な基盤を持つように人間を創造したということは、私たちが神の命令に従うように創造されたということを意味する。人間は生得的に神の命令に従うフィトラを持っているのである。第五の命題の正しさは、私たちの世界での観察から明らかである。神の道徳的命令が人間に届くための最も適切な方法、いや唯一の方法は宗教である。私たちはすべて、神の命令が個別の方法で人間に届いていないこと（例えば特殊な啓示のようなもの）を現状として

知っている。実際、神の命令を信じ、それに従う行動をしている人々のほとんどは、神を信じる宗教の信者である。神の命令を人間に届ける方法として宗教以外のシステムは存在しない。第四と第五の命題を同時に考えると、第六の命題の正しさが明らかになる。人間が神の道徳的命令に従うように創造されており、神の命令を伝える方法として宗教以外の機関が存在しないことは、私たちが神の命令を伝える宗教に従うように創造されたことを意味する。これは人間のフィトラが宗教に基づいて形作られていることを示している。神が人間の被創造性／フィトラに据えた特徴が宗教を必要とすることは、神が私たちの目を宗教に向けさせていることを意味し、神の道を示す宗教が存在するべきだという見解は、神が宗教を送らなかったという見解よりも合理的である。神が人間に道徳的命令を送る宗教として最も適切な選択肢はイスラム教である。（ユダヤ教とキリスト教は、この点においてイスラム教の代わりにならない。クルアーンによれば、ムーサ（モーセ）とイーサー（イエス）は、神の道徳的メッセージを歴史を通じて人間に伝える預言者たちのつながりの一部である。）

　では、私たちが生得的に持っている道徳的特徴が、なぜ神の道徳的命令が存在することによってのみ合理的な基盤を持つのかを考えてみよう。道徳的なシステムは、神への信仰と神の命令なしでも機能することは実際には可能である（そのため、多くの無神論者が非常に道徳的である）

が、最も重要な特徴の一つが義務的であり、人々に必要な場合には自己の利益を犠牲にすることを要求するような道徳的システムが、神の命令なしには合理的な基盤を持つことはできない。ここで「合理的基盤」と言っているのは、道徳的行動を「善い」と評価すること、またはその行動を実行すること、さらには必要に応じて自己の利益を放棄することに、理性的な基盤があるということを意味している。実際、多くの著名な無神論的哲学者もこの点を指摘している。例えば、神が存在しない場合、道徳的価値に真実性がないことを、ニーチェやサルトルのような著名な無神論的哲学者たちが指摘している。ニーチェの次の言葉からもこれを理解することができる。

「それから、基本的な概念として、神への信仰を取り除いた場合、すべてを破壊することになる。もはや、強制的なものは何も残らない…。それは、神の存在が正しい場合にのみ真実の価値を持つものであり、それは神によって屹立し、神がいなければ崩れ落ちる。[97]」

ニーチェとサルトルは、神が存在しない場合（神がいなければ、神の道徳的命令も存在しない）、道徳的価値には合理的な基盤が存在しないことを理解していた。現代の最も著名な無神論者であるリチャード・ドーキンスは、他者への思いやりが「ダーウィン的な誤り：幸福をもたらす、

97 Walter Kaufmann 著, Portable Nietzche, 出版元：The Viking Press, New York, 1954, p.515-516

価値ある誤り」であると述べている[98]。無神論的な世界観の中で、私たちが生得的に備えている道徳的特徴が幻想であるべきだという理解は、著名な物質主義的・無神論的な哲学者であるマイケル・ルースとエドワード・ウィルソンの次の言葉からも理解できる。

「道徳は、私たちが共同で行動するために遺伝子によって私たちに与えられた幻想であり、外的な基盤は存在しない。道徳は進化によって形成されたが、進化によって基盤を持つわけではない。マクベスの短剣のように、実際には存在しないが重要な目的を果たしている。幻想について語るとき、道徳が何でもない、完全に幻想であると主張しているわけではない。マクベスの短剣と逆のように、道徳は人類によって共有された幻想である…。道徳には客観的な基盤はないが、私たちの生物学的構造はそれをあたかもあるかのように考えさせる。[99]」

一部の哲学者は、ストア派やハーバート・スペンサーのように、自然界の状況から道徳に関する処方を導き出した。トーマス・ヘンリー・ハクスリーは、スペンサーがストア派の教えに基づき「自然の模倣」をすべきだとしたことを誤って適用していると考えた。ハクスリーは、「生の闘争」が自然界で大きな成果を上げたことを認めつつも、

98 Richard Dawkins 著, The God Delusion, Black Swan, London, 2006, p.253

99 Michael Ruse and Edward o Wilson, ‘2The Evolution of ethics’’, ed. Michael Ruse, Philosophy of Biology, Prentice Hall, New Jersey, 1989, p.314-317

社会の道徳的進展は宇宙のプロセスを模倣することに基づいているのではなく、むしろこれらのプロセスに対抗することに基づいていると述べた[100]。自然界で何が起こっているのか、または人間が生まれつき持っている道徳的特徴が何であるのかを特定することによって、スペンサーのように道徳に関する処方を引き出す者もいれば、ハクスリーのように道徳を自然に反するものとして見る者もいる。単に「無目的で、無意識で、道徳に無関心な」自然に基づくこれらの理解から、どちらが他方よりも優れているかを判断するための有効な哲学的基準は示されない。私たちが生まれつき持っている道徳的特徴は、道徳に関する「あるべきこと」（ought）の概念を私たちに提供するが、これらの生得的特徴は、物質主義的・無神論的な観点から見ると、単に自然の無目的で無意識的な「あるもの」（is）の産物に過ぎない。ここで、デイヴィッド・ヒューム（1711-1770）の有名な指摘を思い出すべきである。ヒュームは、「あるものからあるべきことを導く」（ought from is）問題について、自然界の事実と道徳に関する規範的な命題への論理的な移行が正当でないことを示した[101]。

ここで明確にすべき重要な点は、多くの人々が十分に区別していないが、道徳的行動に関して解決すべき二つの別々の問題があるということである。一つ目は「あるもの

---

100 Thomas Henry Huxley 著, “Evolution and Ethics”, 編者：Michael Ruse, Philosophy of Biology, Prentice Hall, New Jersey, 1989, p299-300

101 David Hume 著, A Treatise of Human Nature, 出版元：Oxford University Press, Oxford, 2000

から良さを引き出す問題」（is-good problem）、二つ目は「良さから行動を引き出す問題」（good-action problem）である。文献では、しばしば「あるものからあるべきことを導く問題」（is-ought problem）として１つの問題に焦点が当てられているが、実際にはこの問題の中に道徳に関する二つの異なる問題が含まれていることに十分に気づかれていない。道徳的システムに合理的な基盤があるために解決すべき二つの大きな問題は以下の通りである。

第１の問題：「善いものとは何か？」という形で表現される。この問題は価値に関するものである。

第２の問題：「なぜ善いものに従って行動することが必要なのか？」という形で表現される。この問題は行動に関するものである。

　私たちが生まれつき備えている「善悪」に関する直感を考えると、「善悪」が個人的な利益や欲求を超えて、存在論的な地位を持っていることが理解できる。これは道徳に関する最も基本的な問題の一つである。唯物論者・無神論者のパラダイムの中では、「善悪」の直感は、偶然の過程で形成されたヌクレオチドのような生化学的構造に依存し、それらは宇宙を構成する基本的な力や引力・斥力、波動・粒子のような性質に基づいている。これらには、個人

的な利益や欲求に基づいた「善悪」に関する直感に対する合理的な基盤は見つからない。したがって、Ruse や Wilson のような無神論者は、この直感を「幻想」と見なしている。無神論的な存在論においては、自然過程と偶然の組み合わせによって生じた人間が動物とは異なる道徳的存在であることを根拠付ける合理的な基盤は存在しない。そのため、ニーチェは先ほどの引用で「それ（善悪）は、神の存在が正しい場合のみ、真実の価値を持つ。それは神によって支えられ、神なしでは崩れる」と述べている。理神論者（デイスト）たちは、神が「善」と「悪」が何であるかについて人々とコミュニケーションを取っていないと考えているため、神と「善」との関係、またなぜ人間が「善」を実行する必要があるのかを根拠付けることができない。生まれつきの道徳的な構造は道徳的なシステムを持つことを可能にするかもしれないが、その合理的な基盤とともに道徳的なシステムを提供することはできない。神が道徳的な命令を示すことなく、道徳的な直感に基づいて何が「善」で何が「悪」かを決定することは、誰も神の意志であると確信することはできない。デイストにとっても、「善」と「悪」は無神論者と同様に合理的な基盤を欠いている。

例えば、誰かが大量の金銭を落とし、それを私たちが見つけた場合、そのお金を返さなくても、私たちの残りの人生が非常に快適であり、そのお金を取ったことが誰にも絶

対に知られないという状況を考えてみよう。このような場合、社会的な制裁が絶対に不可能であるとき、道徳に関する最初の理論的説明は、「善悪」が何であるかを知るために必要である。先験的（アプリオリ）な推論に基づくカントの義務論的道徳[102]や、帰納的な推論に基づく功利主義的道徳[103]を引用することによって、お金を返すことが「善」であり、返さないことが「悪」であると主張する人々がいるかもしれない。しかし、前述のアプローチは、義務論的な規則や功利主義的アプローチがなぜ「善」であるのかを説明することができない。つまり、彼らは道徳的システムの基盤を合理的に構築することができない。

「善」とは、人々の利害計算を超えた基準である。カントの道徳体系では、人々はすべての人々の理性を考慮に入れて到達する道徳的基準（無条件の命令：categorical imperative）を、彼ら自身の理性で行う利害計算や欲求を超えて遵守する必要がある。しかし、「なぜ全ての人が自分の利益を追求するのではなく、他の理性も考慮に入れることによって導かれる無条件の命令に従うことが善であるのか？」という根本的な問いの答えは、カントの道徳体系には存在しない[104]。

---

102 Immanuel Kant 著, Fundamental Principles of the Metaphysics of Morals, 訳者：Thomas Kingsmill Abbott, William Benton, Chicago, 1971, p253-287; Immanuel Kant 著, The Critique of Practical Reason, 訳者：Thomas Kingsmill Abbott, William Benton, Chicago, 1971, p291-361

103 功利主義的倫理に関する古典作品：John Stuart Mill 著, Utilitarianism, 出版元：Hackett Publishing, Indianapolis, 2001

104 カントは道徳を自律的なものと見なしているが、その一方で、道徳をもとに「神の存在、来世、自由意志」の存在を主張する議論を展開していることにも留意すべきである。カントが「最高善（Summum bonum）」のために

無神論者の立場から、功利主義的道徳を引き合いに出して「善」の概念を根拠づけようとする可能性についても考えてみよう。私たちの生得的な道徳的特徴を偶然の自然過程の結果として見る人々は、それを「幻想」と見なすように、私たちの理性も偶然の過程の結果として見る人々にとっては、共通の理性から導かれる価値に従うことによる「必要性」や「拘束感」も「幻想」と見なすべきである。例えば、「なぜ自分自身の最大の幸福（the greatest happiness）ではなく、最も多くの人々の最大の幸福（the greatest happiness of the greatest number）を考えることが善であると見なすべきなのか？」というような、功利主義の根本に関わる非常に重要な質問に対しても、合理的な答えは欠けている。

理神論のパラダイムにおいても、神が私たちに対して道徳的な期待を示していないにもかかわらず、そのような期待があると考えるための基盤は存在しない。神が示していないのであれば、なぜ無条件の命令や功利主義的な道徳計算に従うことが神の意志であると考えるべきなのだろうか？神が示した命令が存在すると仮定せず、アプリオリな推論や帰納的推論によって導き出されたどのシステムも、「善悪」感覚が要求する高い基準（個人的な利益や社会的

「神、来世、自由意志」の存在を要請（postulat）として置くことが不可欠であると見なすことは、道徳が自律的であるという自らの主張と矛盾しているという見解を私は抱いている。カントが否定したこの見解についてここで議論を展開することは控え、この点に注意を喚起するにとどめておく。

な期待を超える基準）に対する合理的な基盤を提供することはできない。

神からの道徳的命令を人々に伝えるイスラムは、意識的で、全てを創造し、全てを知る神がその命令を人々に伝えることによって、道徳に完璧な基盤を提供する。このような基盤以上のものは、「善悪」についての私たちの直感に必要な合理的基盤として考えられない。もし神の啓示に基づくそのような基盤が存在しないのであれば、「善」を魅力的で崇高なものとして認識し、個人的な利益を超越することは、単に私たちの生物学が私たちに仕掛けたゲームに過ぎなくなる。つまり、「善」についての私たちの認識は、合理的な基盤を欠いた生物学的な現象、まるで胃の鳴る音のような現象になってしまう。物理学が定義する物質的な世界には、「善」の必要とする崇高さを提供する要素は存在しない。しかし、意識的な存在である神がその命令を伝えることと関連づけられることで、「善」という概念は必要な崇高さを得て、幻想から解放される。道徳は、最も優れた形で神の善にその最終的な基盤を見いだす。これは、神を「善」として認識する宗教を受け入れるべきであることを示しており、イスラムはその役割を果たす[105]。

生まれながらに持つ特性は、私たちを道徳的価値を持つ存在へと導く。私たちの道徳的価値が合理的な基盤を得る

105 神の本質が「善」に必要な基準を形成しているという見解は、エウテュプロンのジレンマ（Euthyphro dilemma）をも解決するものである。この問題に関心のある読者は、拙著『Fıtrat Delilleri』においてその詳細を参照されたい。

ことは、それらの価値が神の命令と出会うことによって可能となる。神と合理的な基盤を持つ道徳との関係は、神からの命令を伝える宗教だけが築くことができる。この点に関する私のモットーは、「存在論が道徳を決定する」と「道徳は合理的な基盤を宗教によってのみ得ることができる」という形で表現できる。要するに、生まれながらに持つ道徳に関連する私たちの構造によって必要とされる道徳的価値を受け入れることは、神の啓示があることによってのみ合理的な基盤を持つことができる。神を信じる者にとっては、これは期待されることであり、なぜなら神が人間の本質（フィトラ）を創造したため、人間の本質において神の命令を伝える体系（宗教）がある場合にのみ合理的な基盤が得られる特徴が存在する理由は、神が人間の本質を神が送る宗教へと向かわせるように秩序立てているからである。神の道徳的命令を宗教を通じて伝えていない者たちは、道徳的価値に合理的な基盤を見出すことはできない。人間の本質において、神の命令と出会うことでのみ合理的な基盤を持つこうした構造が存在する理由を説明するために、満足のいく答えを持っていないのである。

道徳に関する二番目の問題は「善-行為問題」である。前述の通り、「善悪」が神の命令がなければ成立し得ないことが論じられた[106]。しかし、義務論的または功利主義

106 このことに関する詳しい議論については次の書籍を参照されたい。Alper Bilgili 著, Bilim Ne Değildir? Yeni – Ateist Bilim Anlayışının Felsefi ve Sosyolojik Analizi, 出版元：Doğu Kitabevi, İstanbul, 2017, p.76-83

的、あるいはその他のアプローチによって「善悪」が成立し得ると仮定してみよう。その場合でも、「善悪」がなぜ「行動」を引き起こすべきなのかという基本的な問題には答えがない。落ちたお金を持ち主に返すことが「善」であると認める者は、その「行動」を実行しなければならないが、もしその人が「このお金で自分の残りの人生を楽に過ごす方が合理的だ」と考えた場合、一定の直感的な魅力が「善」であることには存在するにもかかわらず、お金を手に入れることの魅力がそれを上回り、お金を自分のものにしてしまう可能性がある。ここで言及された生得的な道徳的特性や、さまざまな文化が与える教育によって、お金を返す行動が促進されることが多いが、この行動の合理的な基盤は、神の命令を顧みない体系の中では示すことができないのである。

例えば、カント主義的義務論に基づく道徳法則で行動する個人において、その人物が利害計算を脇に置くことを合理的に正当化する基盤は提示されていない。人は自分の精神から出た法則の拘束力を、自己の利益のために拒否することができるからである。また、ミル主義的功利主義に基づく道徳で示される基準に従って行動するよう求められる人が、「最大多数の最大幸福」といった基準ではなく、自らの幸福を基準にして行動する方が合理的だと考える可能性もある。従って、功利主義の「善」として受け入れられ

た場合でも、このアプローチがなぜ「行動」につながるべきかに関しては合理的な基盤を見いだすことはできない。

一方、イスラム（神が歴代の預言者たちを通じて送った宗教）においては、私たちに私たちが持っている全てを与え、全てを知り、全てを支配し、来世において人々の世俗的行動に対する報いを与える神の道徳的命令が存在する。神の道徳的命令に言及しない体系に基づいて「あるべきもの」から「なすべきもの」への移行は不可能であるが、「神の命令から（拘束力のある道徳的法則へ）なすべきものへの移行」は可能である。なぜなら、イスラムは拘束力のある命令を与える正当な権威である神とその道徳的命令を人々に伝えているからである。このようにして、拘束力のある命令、つまり「あるべきもの」という領域の基盤が形成される。私たちが全てを神に与えられていること（感謝の気持ちなどで動機付けられること）や、神が来世で私たちの行いに対して報いを与えるという期待（幸福や恐れから解放されるという願望などで動機付けられること）は、「行動」（正しいこと、すべきこと）のための合理的な基盤と動機を提供する。

フィトラ（人間の本質）に内観的に目を向けると、感謝、幸福、恐れから解放されたいという感情が、私たちの行動にどのように決定的な影響を与えるかを容易に理解することができる。神が全てを知り、全てを支配するということは、私たちが神を信頼し、どんなに他の人々が見てい

ない状況や私たちの利害と反する場合でも道徳的命令を実行する行動を取ることに、合理的な基盤を提供する（イスラム文学的にこれを「善い行い」と言う）。道徳の実践において、単に実践された規則が正しいかどうかだけでなく、その規則を強制する者が誰であるかも重要である。私たちの規則に対する態度は、その内容だけでなく、その規則を命じる者が誰であるかにも依存する。この議論の最も重要な特徴の一つは、道徳と神との関係を確立することである。この議論の結果として、道徳的規則を設ける体系において、道徳と神との必要な関係を確立しないものを除外することが求められる。

　要するに、イスラムは正当な権威を提供し、道徳の拘束力を、合理的で動機付けを与え、また私たちの道徳的本性に適合する基盤を提供している。さらに、「権威に従う」という直感がフィトラの一部であることを、最近の科学的な研究が示していることにも注目していただきたい[107]。「存在論が道徳を決定する」という私が述べた原則は、「善い行為の問題」を解決することも可能にする。この存在論との接点は宗教を通じてのみ可能であるため、この原則は「宗教が道徳を決定する」とも解釈されるべきである。イスラムの存在論における中心には神があり、他の存

107 これに関して行われた現代心理学の研究のうち二例を挙げる。Jonathan Haidt and F. Bjourkland, ‘‘Social Intuitionists Answer Six Questions about Moral Psychology’’, Moral Psychology, 編者：W. Sinnott-Armstrong, 出版元：MIT Press, Massachusetts, 2008, p 181-217; Stanley Milgram, Obedience to Authority: An Experimental View, Harper and Row Publishers, New York, 1974

在と比較すると、それらの存在の存在論的地位は神に対して非常に低いことがわかる。したがって、この存在論は、神の命令のもとで、他の存在からの要求、利害、欲求が重要ではない道徳体系を提供している。他者の要求、私たちの利害、欲求にかかわらず、道徳的義務を果たさなければならないという私たちの本来的な道徳的特徴は、神の命令がある場合にのみ、幻想から解放される。私たちの本来的な道徳的特徴が要求するのは、道徳が幻想でないことであり、これは「神の道徳的命令」に生まれつき依存する被創造性（フィトラ）によって私たちが創られていることを意味する。

この議論によれば、受け入れるべき宗教の重要な部分は道徳分野に関連しているべきあり、この宗教は道徳的責任を適切に果たす者と果たさない者について説明し、これらの間に区別を設けるべきである。私たちの観察によれば、この世界では多くの道徳的善行と悪行が報われることなく残されている。神の命令を守る者と、それを踏みにじり不正を行う者の間に違いがないという考えはあり得ない。私たちの内面に生まれつき宿っているとされる正義感は、正義が実現されることを要求している。この世界で正義が実現されないならば、それはこの後の世界、いわゆる来世において正義が実現されることを必要とする。したがって、採用されるべき宗教は、正義の実現や来世に関する重要な

問題について必要な説明を行うことが期待される。イスラムはこの特性を完璧に具現化している。

私たちの精神の中に共存する生まれつきの道徳的直感や理性といった異なる基本的な特徴が調和するのは、イスラムが提案するパラダイム内でのみ可能である。しかし、無神論者や神の命令を伝えるシステムを拒否する理神論的（デイスト）パラダイムでは、この調和は得られない。善悪、正誤、正義・不正義といった生まれつき持っている道徳的な基本概念は、神の命令に出会うことで、私たちがそれを理解し実行することができ、またその命令に基づいた道徳的システムを持つことを可能にする。神の命令の存在は、生まれつきの道徳に関連する特徴を幻想から救い出すのである。イスラムは、現代心理学や認知科学が示す生まれつきの道徳的構造が理性的な基盤を見つけるための一貫したシステムを提供する。生まれつきの道徳的特徴は、まるで鍵のかかっている扉のようであり、この扉を開けるための鍵は神の命令の存在である。この鍵が必要であるということ自体が、その鍵の存在が証拠である。イスラムはその鍵である。イスラムは、この命令を含み、人々に伝える宗教である。

神の命令が人々に伝えられるべきである、すなわち神が送った宗教が必要であるということを否定する者たちが答えなければならない厳しい質問はこうである。「なぜ私たちが生まれつき持っている道徳的特徴に対して理性的な基

盤が必要であり（それが幻想でないためには）、神の道徳的命令が必要なのであろうか？」または、こうも尋ねることができる。「なぜ人間の自我の中に神の命令が存在する場合にのみ、理性的な基盤を持つ構造が存在するのか？」自然のプロセスを神の手段的な原因と見る者にとって、自然のプロセスが作り上げたフィトラが、これらの自然のプロセスを道具的な原因として使う神の命令を伝えるシステム（宗教）に向けられることは非常に理性的な期待である。しかし、無神論者や理神論者は、私たちの本性に備わっている道徳的特徴が、イスラムの重要な内容の一つである神の道徳的命令に目を向ける理性的な説明をすることができない。

ここで提示されている議論は、イスラムの規範、クルアーンの内容、ムハンマドの生涯に対して提出される多くの異議に対する、根本的な回答である。イスラムやクルアーンの定め、人間の生活に関わる実践、あるいはムハンマドの生き方に対して異議が呈されているのを、読者は何度も目にしてきたはずである。こうした異議は、「イスラムにおいてこの点がなぜこのように定められているのか」、「なぜクルアーンにおいてこの点がこのように述べられているのか」、「なぜムハンマドはこのような行動をとったのか」といった形式で表現される。これらはいずれも、イスラムおよびクルアーンにおける道徳観に対する異議である。

このような異議に答えるためには、まず何がイスラムであり、何がそうでないのかを正確に定義する必要がある。多くの問題の回答は、この点を正確に明確化することにかかっている。もっとも、これは長く議論の余地のある主題であるため、本書ではこれについて深入りはしない[108]。その代わりに、イスラムおよびクルアーンに記されている道徳に関するいかなる異議提起の対象を「X」と記すこととする。読者がクルアーンにおける道徳に関する主張に対して抱いた異議は、すべてこの「X」に置き換えることが可能である。

クルアーンにおける道徳的事柄に対して異議を唱える者は、おおよそ次のように主張していることになる。「クルアーンにはXという内容があるが、それは“悪”である。なのでクルアーンが神からのものであれば、そのようなことが書かれているべきではない」あるいは「Xという内容は本来“善”であるのに、クルアーンはそれに反している。なのでクルアーンが神からのものであるはずがない」といった形である。クルアーンに対する道徳的批判は、このいずれかのパターンに分類することができる。ここで提示されている議論を注意深く検討するならば、これらのアプローチが無効であることが理解されよう。ある事柄を客観的に

108 私が将来的に執筆を計画している研究においては、イスラムとは何かを理解するための方法論を明確にし、何がイスラムであり、何がイスラムでないかを一貫したアプローチによって提示することを目指している。また、将来行う予定の別の研究では、しばしば提起されるイスラムに関する異議・批判点を一つ一つ取り上げ、それに対する回答を提示することも計画している。

—すなわちすべての人に対して妥当する形で—「善」または「悪」と評価するためには、その評価には個人や社会を超えた基盤が必要である。そのような客観的基盤によってこそ、道徳的異議が合理的に成立し得る。

ここで一例として、多くの人が「悪」と評するであろう、インドにおけるサティの慣習を取り上げよう。この慣習は 19 世紀に禁止されるまで、夫の死後にその妻を焼くというものであった。もし個人や社会を超える正統な権威による道徳的命令が存在しないのであれば、道徳的直観に基づいてこの慣習を「悪」と見なし、その禁止を裏付けることはできるかもしれないが、その主張に合理的な基盤を与えることはできない。この論考において示されたように、神の命令が存在する場合に限って、「善」や「悪」、「正しい」や「誤っている」といった道徳的評価に合理的基盤が与えられる。したがって、もし道徳的判断が神からの命令によってのみ合理的基盤を持ちうるのであれば、神の命令に言及することなく X を「善」または「悪」と評価し、それによって宗教を批判することには合理的根拠がない。このような批判を行う者には、「あなたはその事柄を善あるいは悪と評価しているが、その評価はどのような合理的基盤に基づいているのか」と問い返すべきである。なぜなら、「善」や「悪」といった道徳的主張に合理的基盤を見出すことができない限り、それらの主張は無効であるからである。要するに、主観的であったり、文化的背景に

依存する道徳的評価を神の命令（宗教）に言及することなく主張することはできない。ましてや、それらを根拠として神の命令（宗教）を批判することは不可能である。神の宗教によって合理的基盤を持ちうる道徳的法から出発して、神の宗教を批判することはできないということである。このような立場をとる者は、重大な論理的誤謬を犯していることになる。これは「盗用概念の誤謬」（fallacy of stolen concept）と呼ばれる論理的誤謬である。

　すなわち、神の命令（宗教）によってのみ合理的基盤を持ちうる道徳的評価に依拠して、その神の命令（宗教の内容）を批判することはできない。合理的基盤を欠く道徳的主張は、ある人がハンバーグを好み、別の人が寿司を好むといった趣味・嗜好の違いにすぎず、個人あるいは文化的な好みにとどまるものであって、批判の出発点たり得ない。したがって、イスラムやクルアーンの内容に対してなされるかかる異議には、合理的基盤すなわち正当性が存在しないのである。

6-3理性からイスラムへ

　日常生活におけるごく単純な多くの行為から、最も高度な科学や哲学に至るまで、全ては理性によって実現される。しかし、私たちの本質的な特徴の一つである理性について真剣に考察する者は極めて少ない。多くの人々にとっ

て哲学の最も困難な問題とは、ビッグバンのような自然科学に関するものや、理想的な国家統治の在り方といった、議論を呼び起こすテーマであると思われている。だが、私たちに内在し、私たちを私たちたらしめ、日々体験しているにもかかわらず、大半の人が一瞬たりとも考えようとしない「理性」「意志」「意識」といった現象について哲学的に考察することは、これら前述のテーマよりもはるかに困難であると述べれば、多くの人は驚くであろうが、多くの哲学者はこの意見に同意するに違いない。多くの人々は、誰もが持ち、誰もが用い、最も学識ある者と同様に最も無知な者にさえ備わっているため、これらの特性をあたかも凡庸なもののように見なす。しかし、理性・意志・意識といった現象について注意深く考察することによって、この誤解から抜け出すことができ、宇宙の中で最も興味深い構造が、まさに私たち全員に備わっているこれらの現象であることが理解されよう。拙著「Fıtrat Delilleri」において、理性の存在は「永遠の理性」によって最も適切に説明されると論じた。ここでは、理性が神によって創造されたことが理解されているという前提に立ち、理性の存在から宗教に関する結論にも至り得ることを指摘したい。

神の存在を理解した後に、自らの理性という特性について考察する者が直面する重要な問いは次の通りである。「なぜ神は人間に、私たちが目の当たりにするような潜在能力を伴った理性的思考能力を授けたのか？」私たちは理

性的思考能力によって日常生活を営み、必要な栄養を摂取し、肉食動物の餌になるといった危険を回避する。しかしながら、私たちの理性的能力の水準は、単に生存を維持するための能力を遥かに超えている。人工衛星を宇宙へ送り出し、ヒッグス粒子を発見し、素数が無限に存在することを証明し、さらには理性そのものについて思考することを可能にする理性のレベルは、ただこの世における生活を支えるだけの水準を明らかに凌駕している。このような理性の水準によって、神学的な抽象概念や死に対する人間の在り方といった実存的問題についても考察することが可能となる。私たちの理性が持つこの驚異的な潜在力は、理性が単にこの世において生存を確保するためだけに与えられたものではないことを示している。理性について思考する者は、純粋な理性のみでは「私たちはどこから来たのか」「私たちはどこへ向かうのか」といった根源的な問いに答えることができず、しかしながら理性を超えたこれらの問いに答えることが可能な創造者の答えを内包する体系、すなわち宗教を通じて、理性が求める答えに辿り着くことができることを理解するのである。すなわち、理性が自らの限界を自覚したとき、理性を超越する事柄をも包含する体系として、創造者のメッセージを内包する宗教の有無に注目せざるを得なくなる。

結論として、宗教の存在は理性を超える高い実存的意義を持つ問いの存在から期待されるものであり、また宗教に

到達する手段が理性である以上、その宗教は理性と矛盾してはならない。要するに、信仰に値する宗教とは、理性を超える内容を含んでいても、理性と矛盾しないものでなければならない。ここで「理性を超えること」と「理性と矛盾すること」は明確に異なる。この違いは次のような例によって説明される。飛行機のエンジンの仕組みや飛行の原理を理解していない者にとって、飛行機が空を飛ぶことは「理性を超越する」現象であるかもしれない。しかし飛行機が飛ばないはずであるということを誰も示すことができない以上、それは「理性と矛盾する」現象ではない。一方で、「3 と 5 の合計が 10 である」と述べることは「理性と矛盾する」主張であり、答えが 8 であることを示すことでその矛盾は明らかとなる。要するに、信仰に値する宗教は、理性を超える答えを内包しながらも、それらの答えが理性と矛盾してはならない。そしてその宗教に代わるいかなる宗教または他の体系も、これを凌ぐ説明能力を持ち得てはならない。イスラムは、これらの条件を最も適切に満たしていると自信をもって述べることができる。

私たちに贈られた最も重要な特性の一つである理性が、宗教に関する以下の二つの重要な問いに対して、「最も優れた説明」という形式において結論を導き出すことができると考える。

1-　神が宗教を啓示するという期待は、啓示しないという期待よりも合理的であると言えるのか？

2-　もし第一の問いに対する答えが肯定的であるならば、現存する諸宗教の中でどれを選ぶべきであるのか？

本書の多くの箇所で提示された根拠は、神が宗教を啓示するという期待が、啓示しないという期待よりもなぜ選好されるべきであるのかを示している。本書において提示された議論に従えば、第一の問いに対する答えは「そうである」である。また、現存する宗教の中でなぜイスラムを選ぶべきであるのかについても、本書は十分な証拠を示していると考える。

前節の二つの見出しにおいて、一つの宗教が人間の自然な欲求に答え、生得的な道徳的特性に対して合理的基盤を提供することが、その宗教が信仰に値するものであると理解するために寄与することを見た。これらに加えて、全ての人間に生まれつき備わっている理性という特性との整合性が最も高く、理性の働きが宗教に貢献することを明示し、この極めて基本的な特性を排除しない宗教は、そうでない宗教よりも選好されるべきであるという結論に至ることができる。クルアーンは、数百に及ぶ節において理性を働かせることを勧めており、理性に対して他のどの世界宗

教よりも高い重要性を付与している。クルアーンを一度でも通読した者は、このメッセージを受け取るであろう。

バカラ章 2-164：確かに、天と地の創造、夜と昼の交替、人々に有益な物資を積んで海を航行する船、神が天から降らせて死んだ大地を蘇らせる水、その水によってあらゆる種類の生物を地上に広めること、風の運行、そして天と地の間に神の命令に従って浮かぶ雲には、理性を働かせる人々にとっての数々の証が存在している。

6-4 意志からイスラムへ

人間の本質（フィトラ）が私たちを私たちたらしめている他の重要な特徴の一つは、意志を持っていることである。意志は、哲学の多くの分野や宗教に加えて、神経学、心理学、認知科学といった領域においても重要な焦点となってきた。拙著「Fıtrat Delilleri」において、私は人間の意志の存在が否定できないこと、そしてそれが永遠の意志（すなわち神）によって最良に説明され得ることを述べた。本稿では、人間の意志に関する熟考が、宗教に関する結論にも導き得ることを示すことを目的とする。

イスラムによれば、この世界は試練の場であり、人がこの世において行った善悪の行為は、死後の来世において報いを受けるとされる。この世界が試練の場であるという主

張は、イスラムの最も根本的な見解の一つである。試練が成立するためには、意志の存在が前提とされなければならない。もし個人に意志がなければ、その行為は丘から転がり落ちる岩に例えられる。このような状況において、転がる岩に宗教を送ることが無意味に見えるのと同様に、意志を持たない人間に宗教を提示することも同様に無意味に見えるであろう。さらに、ある岩が特定の方向に転がったことを理由に報酬や罰を与えることが無意味であるのと同じく、意志を持たない人間をその行為に基づいて来世で報酬や罰を与えることもまた、意味をなさない。この視点は来世に限らず、この世における報賞や処罰の意味も失わせる。例えば、快楽のために何百人もの人々を殺害したサディストと、何百人もの命を救った献身的な人物の間に、何らの差も存在しないことになる。要するに、宗教の啓示や来世の存在といったイスラムにおける中心的信念は、人間に意志が備わっているという前提に深く関わっている。また、宗教哲学における重要な問題の一つである「なぜ世界には悪が存在するのか」という問いに対する説明の中でも、人間が意志を持っていることにより善と悪を選択することが可能になること、そして意志を持つというこの重要な特性の代償として道徳的悪が生じうることが、主要な説明の一つとして挙げられている[109]。

---

109 このテーマは以前に次の拙著の第 5 章で取り上げた。Caner Taslaman 著, Kuantum Teorisi, Felsefe ve Tanrı, p169-221. また、次の二つの著名な宗教哲学者の研究も参照していただける。Richard Swinburne 著, Providence and the Problem of

拙著「Fıtrat Delilleri」において私が示したように、意志は実在しており、その存在の最も優れた説明は「神によって与えられたものである」という見解であると理解する人物（あるいは、別の理由で神の存在を信じる人物）を想定してみよう。このような人物が、神の存在と全能性を理解したとき、神が意志を与えないという選択も可能であること、すなわち人間が正しいことを行うことも、誤ることもありえないような世界を創造することも可能であったと気づくであろう。

このような気づきの後、その人物が「なぜ私たちは、意志によって善をも悪をも選び得るような仕組みの中に存在しているのか」と自らの存在理由を問い始めたとすれば、この重大な問いに対して、イスラムが提示する「試練のため」という答えは、他のどんな宗教や思想にも見られない独自かつ唯一のものである。神がなぜ私たちに試練を与えるのかという問いを抱く者もいるが、私がこれまでに「もし神が私たちを試練のために創造しなかったとしたら、なぜ創造したのか？」あるいは「神が私たちに試練を与えるために創造したという説明に代わる説明は何か？」と問うた際、代替となる真剣な説明を提示できた例を見たことがない。あなたも試してみれば、この現象を実際に目の当たりにするであろう。要するに、神の存在と意志の存在が認

Evil, Clarendon Press, Oxford, 1998, 10. Chapter; Alvin Plantiga 著, The Probabilistic Argument from Evil, Philosophical Studies, No.35, 1979, p 1-53

められたとき、イスラムの主要な主張の一つである「私たちは試練のために存在している」という説明は、他に代わるものが存在しない、唯一の解釈であると言える。

ムルク章 67-2：かれは、誰が最も優れた行いをするかを試すために、生と死を創造されたお方である。かれは至高なる存在であり、寛容にして赦し深い存在である。

6-5　意識と自我からイスラムへ

拙著「Fıtrat Delilleri」において、理性および意志の証明と同様に、意識と自我に関する証明から導き出される最も重要な結論の一つは、理性・意志・意識・自我といった要素は本来的に永遠の属性であり、これらを後天的に備えるようになった人間のような存在は、永遠に理性・意志・意識を備える存在、すなわち神からこれらを授けられた結果としてそれらの属性を有しているという点である。この点は、宗教に関する評価を行う上でも非常に重要である。まず第一に、仏教やいくつかのニューエイジ思想のように、その体系の中で創造主に一切言及しない宗教および教義は、イスラムの代替たり得ないことが明らかとなる。

永遠に理性・意志・意識を有し、そこから後に理性・意志・意識を備える存在を生み出した「永遠の存在」は極めて重要なものであり、そのような永遠の存在に体系の中で

中心的役割を与えていない宗教・教義・生活様式は、信仰と実践の対象として排除されるべきである。信じるに値する、また従うに値する宗教を特定する際に問うべき基本的な二つの問いは以下である。

1- この宗教は、理性、意志、意識を持つ神について語っているか？
2- この宗教は、神にその体系の中で中心的な位置を与えているか？

イスラムはこれらの基準を最も優れた形で満たしている。こうして、他のフィトラ（人間の本質）の証明とともに「意識と自己の証明」もまた、私たちの目をイスラムに向けさせる。 意識と自我の証明に基づいて示された内容から、東洋の教義や一部のニューエイジ宗教、また一部の神秘主義的な教義において見られる、神と宇宙を一体化させる、または「神」という概念を曖昧にするパンテイズム的、またはパンテイズムに非常に似た教義が、受け入れるべき代替案から排除されるべきであるという結論が導かれる。

これらの教義では、「神はエネルギーである」「神は宇宙である」「神は私たち全員である」といった発言によって、意識的または無意識的に、神は曖昧で、属性を欠い

た、まるで中身のない存在のように描かれている。これは実際にそうした「空虚な状態」にすることで、神が存在しているとは言い難い状態に至るものである。ここでの永遠の要素は、神が理性、意志、意識を持つ存在という有神論の見解に対して、むしろ物質主義の無目的で意志や認識を欠いた物質に似た存在として描かれている。もし神と物質との最も重要な違いを説明することを求められた場合、まず神の「理性、意志、意識、自我」といった属性に言及されるべきである。イスラムにおける、全てを支配し、宇宙の全ての物質とエネルギー、そして生物の創造者である神の信念と、永遠の要素をこのように理解することとの間には大きな違いがある。

イスラムにおいて「神はエネルギーの創造者である」と述べられるとき、それは神の「意志」によって、意識的に宇宙の起源であるエネルギーと物質を創造したことを意味している。しかし、「神はエネルギーである」といった意味が曖昧な発言によって語られると、神は「理性」や「意志」を欠いた存在として描かれ、宇宙の成り立ちを意識的に実行しているかどうか、つまり「意識」を持っているかどうかも不明な存在として言及される。

イスラムにおいて、創造主と創造物との間には重要な存在論的な違いが存在するが、パンテイズムおよびパンテイズム的な教義においては、その境界は曖昧である。何かが計画的で偶然ではない過程で現れるということは、それが

意識的な精神によって、自身の「主観」における既存の「目的」に基づいて、その物が現れるように「意志」を持って実現されることを意味する。パンテイズムおよびパンテイズム的な教義における神の理解における最も重要な欠点の一つはここにある。すなわち、「意識」を持ち、「目的」を達成し、「意志」によって「創造する」神の理解を明確に表現していない点である。「人間の理性、意志、意識、自我といった特徴が、永遠の昔からこれらの特徴を持つ神によって創造された」と述べた拙著「Fıtrat Delilleri」で提案した議論は、パンテイズムおよびパンテイズム的なアプローチに対して、神に関するイスラムの意識的な見解を裏付けている。

　前章で「なぜ人々は自らの意志で正しいことと誤ったことを選択できる構造の中にいるのか？」という問いに対して、唯一神教の宗教が「試練のためである」という答えを示すことに代替案がないことがわかった。試練は意志が存在する場合にのみ意味を成すものであり、意志の存在は意識と自我があってこそ語ることができることを思い出すべきである。意識のない存在が意志を示すことは考えられないように、「自我」に属さない意志も考えられない。意志の存在が意識と自我の存在に依存していることを思い出し、今度は、「なぜ私たちは意識と自我を持つ世界にいるのか？」という問いを立てよう。 もし意志が「意識と自我」とともに意味を持つのであり、意志が神によって与え

られていることが理解されたなら、前の項目で意志がなぜ存在するのかという最良の説明が「試練のため」であるという結論に至ったように、「意識と自我」が神によって与えられた理由の最良の説明も「試練のため」であるという結論に至る。こうして、イスラムはそのパラダイムの基本的要素である試練の概念を通じて、意志の存在理由と同様に「意識と自我」の存在理由にも説明を提示している。

意志、意識、自我が神によって与えられていることに気づくことは、同時に行為の責任を取ることにもつながる。神を否定すること、創造主に感謝しないこと、そして人々に対する悪行は、意識的かつ意志的な存在として私たちが選択することができる一方で、神に向かうこと、創造主に対する感謝、そして人々に善行を行うことも選択することができる。これほど多様な選択肢の中で選択できる意志、意識、自我を与えた者は、これらの異なる選択に基づく行動の責任をも私たちに負わせることになる。これがこの世界が「試練の世界」であることの意味である。この世界での私たちの行動が創造主によって責任を問われること、そしてこの世界での善悪の行動がその世界で相応の結果を受けないという事実が結びつくとき、私たちは来世に対する期待に導かれる。実際、イスラムの神を紹介した後の最も基本的なメッセージは、来世の存在を知らせることであると言っても過言ではない。このように、意識と自我がなぜ存在するのかという問いへの思索は、私たちをイスラムの

パラダイムの基本的な要素である試練と来世に結びつける。

第 7 章

イスラムと意味

不安と希望、苦しみと快楽、恐怖と安心、憎しみと愛といった感情の間を行き来する人生を、意味のあるものとして生きることは可能なのか。この問いは人間にとって根源的なものである。最も重要な欲求の一つは、意味のある人生を生きたいという願いであり、最も大きな恐れの一つは、無意味さに直面することである。人間はその本性として、自らの存在や行為に意味があることを求める。自己の内面を偽りなく見つめる者は誰しも、この意味の探求に気づくはずであると私は考える[110]。意味のあるものは無駄ではなく、価値がある。自らの存在に意味があるならば、存在するに値する。自らの行いに意味があるならば、それは行うに値する。進む方向に意味があるならば、その道を歩むに値する。

本章では、イスラムが私たちの内から湧き上がる意味に関する不安や恐れに最も優れた答えを与え、意味を見出すことによる安らぎと安心を提供していることを示そうとするものである。仮に神の存在が理解されていることを前提とするならば、神は私たちを「意味を求める」ように創造

110 この側面により、ここで取り上げるテーマはフィトラ（人間の本質）に関する前章とも関連している。

したのであり、イスラムはこの存在に内在する意味への欲求に最も適切に応えている。なので、これもまたイスラムが神からの宗教であることの一つの証拠として、他の証拠に加えられるべきである。人間の存在に内在する「意味の探求」という鍵のかかった扉を開く鍵は、イスラムである[111]。神は、その鍵と錠前の双方の所有者として、私たちの内なる意味の探求を通して、イスラムへと私たちを導いているのである。誤解してはならない。「無意味さから逃れるためにムスリムになろう」と言っているのではない。そうではなく、「神は私たちを意味を必要とする存在として創造し、イスラムはその意味の探求に対して満足のいく答えを与えている。ゆえに、神は私たちを意味の探求を通じてイスラムへと導いており、これはイスラムが神の望む宗教であることの一つの証拠である」と述べているのである。

7-1 どうすれば人生は意味あるものになるのか？なぜ私は創造されたのか？

人は多くの仕事に追われ、混乱の中で右往左往し、その混乱がまるで精神を麻痺させるかのようであり、自分の人

111 イスラムに関してここで述べられる多くの事柄は、神がモーセとイエスを介して送ったメッセージにも通用する。事実、「イスラム」という表現がムハンマドを介して人間に伝えられたメッセージを定義しているのと同様に、歴史を通して神が伝えた全てのメッセージも定義する。クルアーンは、神が歴史的プロセスにおいて送ったメッセージを相互に対立するものとしてではなく、相互に認め合うメッセージとして提示する。つまり、クルアーンの観点からすると、ムハンマド以前の啓示を否定するのではなく、ムハンマドが預言者であることを認める必要がある。

生について少しでも考える時間を取ることすらせずに、ぼんやりとした頭を両手で抱えて日々を過ごしている。しかし、一度でも自らの人生について真剣に考えたならば、「何をすれば人生が意味のあるものとなるのか」という問いが必ず浮かび上がる。死の恐怖や苦しみへの恐怖と同様に、もう一つの重大な恐れは「意味のない人生を送ること」への恐れである。「何をすれば人生が意味のあるものとなるのか？」という問いを、自らの存在が自らの意志によるものではない―つまり、自分の目や耳、足、手を自分で創ったわけではない―という認識と共に考える人は、「なぜ私は創造されたのか」「なぜ私はここにいるのか」（これは同じ答えを持つ問いである）という問いへと辿り着く。この問いと向き合うことは、単に何かを聞いたり議論したりすることではなく、存在することの驚異と不可思議な荘厳さを内側から感じ取り、「なぜ私はここにいるのか」という問いを深い叫びとして魂から発することに他ならない。その叫びは明白であるが、多くの人はそれに耳を塞いでしまう。だが、本来この叫びは避けるものではなく、受け止めるべきものである。

「なぜ私は創造されたのか？」と問う者は、その問いと共に「どのようにして私はここに来たのか？」という問いにも向き合うこととなる。この問いに対する答えは、「なぜ私は創造されたのか」「何をすれば人生が意味のあるものになるのか」という問いの答えに到達するために不可欠で

ある。「どのようにしてここに来たのか？」という問いに対して、イスラムの答えは、「私たちは神の意志と意図的な計画によってここに存在している」というものである。イスラムの最も重要なメッセージは、唯一で、全能にして全知、そして自ら以外の全ての存在を創造し、それらが必要とするものを満たす養い主である神を紹介することである。神を理解するとは、私たちの存在が私たち自身の外部からもたらされた意識的な行為、つまり神の創造の結果であることを理解するということである。神を正しく紹介することは同時に、「どのようにして私はここに来たのか？」という問いに答えることでもある。私たちがここにいるのは神のおかげであり、神は私たちを無の闇から存在の光へと導き出した。私たちの精神、身体、外界の持ち物、家族、愛する者たちは全て神のおかげで存在している。この状況により、私たちが神に対する深い感謝の念を抱くことが必然となる。私たちの創造主である神は、私たちについての全てを知り、私たちをなぜここに存在させたのかという知識を備えている。その神が知識を明かしてくれなければ、「なぜ私は創造されたのか」「何をすれば人生が意味のあるものになるのか」という問いに私たちは答えることができない。この二つの問いは本質的に同じ問いである。なぜなら、人が創造の目的に適った生き方をすることで初めて、その人生は意味を持つからである。神が定めた創造の目的と合致しない生き方をしている者の人生

が、意味を持つとは考え難い。神が一人一人に「なぜ創造されたのか」を個別に説明していない以上、その答えは宗教を通して示されたと考えるほかない。イスラムは、「どのようにしてここに来たのか」という問いに神を紹介することで答え、「なぜ創造されたのか」という問いの答えが神のもとにあることを教えている。神からのメッセージであるイスラムは、この問いの答えそのものを内包している。

イスラムを信じるということは、二つの見解を退けることである。第一に、「私たちの存在は偶然の産物であり、なので意味がない」という見解を退ける。私たちの存在がもし偶然の結果であるならば、それは「客観的な意味」、つまり自らを欺いて作り上げた幻想ではない本当の意味が存在しないことを意味する。私たちがこの世界に、何らかの意味や目的に基づいて存在していないのであれば、どれほど努力して意味を与えようとしても、それは無意味な存在であるという事実を変えることはできない。客観的な意味を構築することは不可能である。イスラムが教える通り、自らの存在が偶然ではないことを理解した者は、この絶望的な「無意味」の暗闇の中にとどまる考えを退ける。

第二に、イスラムにおいては、「この世界においてなぜ自分は存在するのか」という問いに対し、神による答えなしに到達しようとするあらゆる代替案は排除される。神による創造を、数ある事象のひとつにすぎないかのように扱

い、それを脇に置いたまま、神とは無関係に意味を構築しようとすることは不可能である。神の存在は、多くの事象の中の一つではなく、全てを根本から変えてしまうような真実である。その他のすべての事象の総和であっても、神の存在と比較すれば取るに足らないものであり、神によって創造された全ての存在の総和ですら、神と比べれば重要性に欠ける。また、「なぜ私は創造されたのか」という問いの答えは、神によって啓示された宗教を通じてでなければ見つけることができないと考えられる。歴史的な過程を検証するならば、人々がこの問いの答えを知るための唯一の選択肢は宗教であったことがわかる。すなわち、神は宗教を通じて、「なぜ創造されたのか」と問い、意味を求める者たちに答えを示したか、あるいは、意味を求め、「なぜ創造されたのか」と問うように人間を創っておきながら、その答えを与えなかったか、のいずれかである。この第二の選択肢は、神が人間に「渇き」という感覚を与えておきながら、水にたどり着く手段を一切与えない、というのと同じくらい不可能なことである。

　要するに、人間を「意味を探し求める存在」として創造した神は、同時に、人間が宗教を通して自らと関係を結ぶことによってのみ答えを見出せるような世界環境も創造したのである。そしてこの世界において、イスラムは意味に関するこの探求に最もうまく答えるものである。イスラムによれば、人間は神との関係を築くためにこの世に創造さ

れた存在である。ザリヤート章 51-56 において、人間が「神との関係を築くために」創造されたことが明言されている。この関係は礼拝（イバーダ）も含むが、礼拝に限定されるものではない。神によって創られた人間にとって、神との関係を築くこと以上に重要なものは存在しない。この創造主と被造物との関係がいかなるものであるべきかも、イスラムにおいて詳細に示されている[112]。「意味」とは、私たちの心が勝手に作り出す主観的な幻想を追い求めることではない。すべてを創造した創造主に対して、深い感謝と敬意を抱き、その意志に従って、神との相応な関係を結んで生きることこそが、「人生が本当の意味を持つための唯一の可能性」である。イスラムは、人生を意味あるものとして生きるための機会を提供しているのである。

7-2 私はどこへ向かっているのか？-カリスマ・金銭・性欲の追求-

「なぜ私はここにいるのか？」「どのようにしてここに来たのか？」という問いは、内面から沸き上がる叫びであるが、多くの人々はこれらの問いからうまく逃れている。しかし、「なぜここに来たかはどうでもいい。とにかく今ここにいるのだから、楽しんでいればよい。そんなことを

112 もちろん、何がイスラムの要素であるかないかに関してはイスラムの内部で議論され続けている。これらのテーマは本書の対象外であり、過去に他の研究で取り上げており、また今後の研究でも取り上げるつもりでいる。ここで取り上げられているのは「ムスリム」を名乗る全ての人が受け入れている、神の存在と唯一性、来世の生活、ムハンマドが預言者であること、クルアーンが神のメッセージであることといったイスラムの支柱である。

考える必要はない」として、自分がどのように、なぜこの場にいるのかを問い直すことを避けてきた人々にとってさえ、「どこへ向かっているのか？」という問いからは逃れることは、格段に難しい。

人間の精神は非常に遠い未来とつながりを持てるように創られているため、「どこへ向かっているのか？」という問いは不可避である。次々と人々がこの世を去っていく様子を見ていること、時には最愛の人を失うことによって味わう深い悲しみ、加齢によって変化する鏡の中の自分の姿など、数々の兆候が、私たちが死という地平に向かって非常な速度で進んでいることを思い出させる。この世界に来た理由を問うことが、快楽を減らすと考えて「なぜここにいるのか？」「どのようにしてここに来たのか？」という問いに無関心であった人々さえも、死によってこの人生の全ての知覚と快楽が終わることを実感したとき、恐怖から逃れられず、「どこへ向かっているのか？」という問いから逃れることは難しくなる。「死が訪れたとき、私はもはや存在しない。だから死を恐れる必要はない」といった表面的なごまかしによって、自分が死ぬという現実に向き合わずに済まそうとする者もいるが、死が刻一刻と近づいており、全ての知覚を終わらせるという事実の恐ろしさの前では、そうした自己欺瞞は無力である。

この人生において最も重要な現象は、この人生が「死」という地点で終わるということである。この最大の現実と

向き合うこと、つまり「どこへ向かっているのか？」という問いに答えることなしに、私たちの深奥から沸き起こる意味の探求を満たすような人生の進路を描くことは不可能である。死が、その後には何も存在しない終着点であるのか、それとも胎児にとっての出産が母胎での人生の終わりでありながら別の人生の扉であるように、次の人生への入り口であるのかが、私たちの眼前にある最も重要な問いである。

この問いに答えることができるのは、もちろん人間を創造し、死後に人間の生命を継続させる力を持つ唯一の存在、すなわち神だけである。そしてその答えを人間に届ける唯一の手段が、神から人間へのメッセージである宗教である。神からのメッセージであると主張するイスラムは、「私はどこへ向かっているのか？」という問いに対し、詳細かつ明確に答えており、死が胎児にとっての出産のように、来世への扉であると伝えている。さらに、死後の復活においては、この人生での行いが問い質される裁きがあるとも告げている。

要するに、私たちの人生に意味ある進路を描くことに関する内面的な探求は、「どこへ向かっているのか？」という問いへの答えを求めており、この問いに答えられるのは唯一、創造主である神だけである。そしてイスラムは、その創造主からのメッセージであると主張しつつ、この問いに最も納得のいく形で答えている。イスラムは、私たちが

この人生の終わりに神と再会すること、死によって別れた愛する者たちと再会する可能性があること、来世で行いに対して責任を取ることになることを告げており、これらの現実の枠組みの中で意味ある人生を生きる機会を提供している。このことは、創造主が私たちに意味を探求させ、「どこへ向かっているのか？」という問いを抱かせ、その問いを通してイスラムへと導いていることの表れであると捉えるべきである。

　多くの人々は、人生の中心に「カリスマ・金銭・性欲」という価値観を据え、それに基づいて生きようとする。カリスマ・金銭・性欲を中心に据えた人生は、多くの場合、先に述べた問いから逃れる主な理由となっている。勤務先の企業でできる限り上の地位に昇進することや、友人たちの間でより多くの名声を得ることで得られるカリスマ性は、多くの快楽への扉を開くだけでなく、カリスマと性に関する欲求を満たすための「金銭」も得ることができる。そして、快楽の頂点とされる「性欲」は、多くの人にとって人生の最も重要な目的となっている。カリスマ・金銭・性欲を追い求める人生の理想像は、歴史のほとんどすべての時代に存在していた。実際、クルアーンのフルカーン章25-43には「自分の欲求を神とする者を見たか」とあり、このような者たちに注意が促されている。ここで神の代わりに据えられた「欲求」とは、まさにカリスマ・金銭・性欲のことであると断言してよい。神を人生の中心に置くの

ではなく、自らの欲求を中心に据える者たち（すなわち自らの欲求を神とした者たち）は、彼らにとっての「崇拝の対象」は神ではなく自分自身の欲求であり、その「崇拝行為」は金・カリスマ・性欲中心の生き方である。

クルアーンには、カリスマに迷った者として「ファラオ」、金に迷った者として「カールーン」、そして性欲に迷った者として「ズライハ（名前は記されていない）」といった例が示されている。カリスマ・金銭・性欲との試練は、歴史のほぼすべての時代に存在していたが、カリスマ・金銭・性欲を追い求めることが、これほどまでに世界規模のマーケティングによって美しく装飾され、魅力的に宣伝された時代はかつてなかったと断言できる。歴史のすべての時代において、社会的なヒエラルキーは存在していた。例えば、昔の村にも地主がおり、その周囲の人々や一般の村人たちという階層が存在していた。しかし現代では、多国籍企業などの場で、出世を目指す者にとっては、何百もの異なる地位が存在している。人々はキャリアの階段を、自らの努力で一歩一歩登っていくことができ、それがカリスマ欲に対して大きな門を開いている。また、歴史上のどの時代にも「財・金」への欲求は存在していたが、現代ほど、人々が金によってこれほどまでに明確な差異を生み出すことができた時代はなかった。現代においては、比較的最近発明されたテクノロジーの多くの製品を、金によって手に入れることが可能である。加えて、現代ほど多

様な商品やライフスタイルを提供するサービス業が存在した時代はない。例えば、大金を持つ者は、快適に旅行できる飛行機を利用でき、多様なサービスを提供するホテルを選ぶことができる。最先端技術を駆使した多くの電子機器や、AIまでも手に入れることができる。過去において同等の財を持っていた者と比べても、現代では金がもたらす違いははるかに大きい。そして「性」に関しても、現代ほど、倒錯的か否かを問わず、これほど多くの人々の人生の中で最も重要な目標となっている時代は極めて稀である。性欲は、世界中で巨大な産業およびサービス業によって支えられているのである。

現代において、多くの人々がカリスマ・金銭・性欲を手に入れることを通じて人生の意味を構築しようと努めており、カリスマ・金銭・性欲のために真剣な投資が行われている。多くの人々にとって、何年にもわたる教育の目的はカリスマと金銭を得ることである。知性を満たすための教育は、エゴを満たすためのカリスマ、財布を満たすための金銭、そして身体を満たすための性欲へと道具化されている。カリスマ・金銭・性欲を手に入れて人生を満たそうと計画する者にとって、この計画を妨げる要素が二つ存在する。第一に、死が地平線にあり、死は非常に速く近づいている。死と出会った後、王と農夫は平等になり、カリスマは全く残らない。死と出会った後、億万長者と破産者は平等になり、来世への銀行送金や不動産の譲渡は不可能であ

る。死と出会った後、カサノバとノートルダムのせむし男は平等になり、土に呑まれた身体の記憶からは情欲に満ちた瞬間が消え去る[113]。死が訪れることを理解した者は、カリスマ・金・性欲から何も残らないこと、カリスマ・金銭・性欲への投資が最終的に破産することが明らかな企業への投資と変わらないことを理解する。心は足の前を歩む。足が歩む現在の快楽が心を麻痺させても、未来に歩み死を見た心の気づきは、現在の快楽を無意味にする。土がかけられたその下に王の身体があるのか農夫の身体があるのかは重要でなくなる。物語はまずその結末によって評価される。この世の人生に限定して見ると、死は人間と羊、ハエ、ノミを平等にする。現代において、ラビ、司祭、イマームの代わりに据えられようとしている精神科医や心理学者も、死と意味の問題に対する無力さに対して、神とのつながりを持たせることなく解決策を見出すことはできない。脳内のセロトニンを増加させ、人を無関心にし、人工的な幸福を生み出すメカニズムを作動させることは解決策にはならない。

カリスマ・金銭・性欲を人生の中心に据える者にとって、死に関する唯一の問題は、死がカリスマ・金銭・性欲と共に得られる快楽を奪うことである、というわけではな

113 イスラムによれば、人間は神に許された方法でカリスマと金銭を得ることができ、性生活を送ることができる。しかし、その方法であっても、神に向かうことよりもカリスマ・金銭・性欲が優先されてはならず、神と宗教を中心とする生活を据え置いてカリスマ・金銭・性欲を中心とする生活を送ることは認められない。ここでの批判は、カリスマ・金銭・性欲が生活の中心となり、神と宗教よりも優先されることに対して向けられている。

い。第二の問題は、短い生の時間と全ての可能性をカリスマ・金銭・性欲の獲得に捧げ、カリスマ・金銭・性欲を人生の中心に据えて生きるという人生そのものが、そもそも意味あるものになり得ないことを、死が明らかにする点である。現代のように近代化とグローバル化のプロセスが進む中で、宗教的メッセージに耳と目を閉ざし、カリスマ・金銭・性欲を追いかける人々を待ち受ける最大の問題の一つが「意味の喪失」である。無意味な人生への恐れは、苦しみや死の恐れと同様に、ひとつの恐怖のかたちである。カリスマ・金銭・性欲の獲得を人生のすべての目標とする者にとっては、死と意味の不在がその全目標を無に帰す。なので、カリスマ・金銭・性欲を追い求める者は、人間の本性から自然に湧き上がる問いから、あえて目を背けようとする。「なぜ私はここにいるのか？」「私はどこへ向かっているのか？」といった問いに対して盲目・無感覚であることは、カリスマ・金銭・性欲を人生の中心に据え続けるために不可欠である。現代人は「人生ではあらゆる考えに開かれているべきだ」「人は自分をごまかしてはならない」といったスローガンを口にするが、「なぜ私はここにいるのか？」「どこへ向かっているのか？」という人生における最も根本的な問いと向き合うことからは逃避する。問うべき最も重要な問いから自身を隠すのである。そして、これらの問いの答えがカリスマ・金銭・性欲を人生の中心から追い出してしまうのではないかと恐れ、自らを欺

く。カリスマ・金銭・性欲が放つ喧騒は、人生がひとつの音楽であることに気づくことを妨げる。このような問いとの対峙から逃げる者たち――実のところこれは人生そのものとの対峙からの逃避である――の多くは、現実がまるで人工的な地獄のようであり、その対峙を避けることによって、束の間の快楽という名の天国を生きることができると信じている。だが、イスラムは本物の天国の存在に注意を向けさせ、こうした逃避が本来の天国への可能性を、本物の地獄へと変えてしまう危険性について警告する。

「私はどこへ向かっているのか？」という問いと向き合うことは、カリスマ・金銭・性欲によって人生に偽の意味を与えようとする努力を打ち砕く。この問いに対する答えが、もし「死後には乗り越えられない暗黒が待ち構え、自分も最愛の者たちもその闇から二度と戻れない」のであれば、どんな努力をもってしても意味ある人生を生きることは不可能である。しかし、もし死が来世へと通じる扉であり、自分も、そして愛する者たちもその先に希望を見出せるのであれば、それは私たちを創造した存在が、死後も再び創造を継続することにかかっている。このことを知らず、この知を得るために神とつながることなくして、人生を意味あるものとして生きることはできない。このことを告げ、神と人とを結ぶイスラムこそが、人生を意味あるものとし得る唯一の希望である。一生をかけて生き、命をかけて死ぬに値する真実は、イスラムを通して人間の人生に

介入する。クルアーンは、意味あるものと無意味なもの、正しいものと誤ったものを区別させる。実際、クルアーンの呼び名の一つは「フルカーン（真実と不真実の差異を明確にするもの）」である。また、カリスマ・金銭・性欲の上に築かれた人生がいかに虚しいものであるかを示し、無意味さの闇をその光で払い、意味を提供する。クルアーンのもう一つの名は「ヌール（光）」である。ムスリムになるとは、無意味から意味へ、方向喪失から方向へ、闇から光へと移行することを意味するのである。

7-3 孤独からの解放：永遠に共にいてくれる存在

科学が私たちに示す図によれば、宇宙と宇宙における私たちの位置を簡単に考えてみる。138 億年前、非常に高温かつ高密度の一点から宇宙は始まった。「私」と呼ぶ存在から、愛する人々へ、太陽、月、地球、そして全ての銀河に至るまで、あらゆるものの原材料は、豆よりも小さなこの一点の中に含まれていたのである。この一点において、まず重力が他の力から分かれ、次に強い核力、電磁気力、弱い核力がそれぞれ分離した。そしてヒッグス粒子（「神の粒子」としても知られる）が働き、物質に質量を与えた。宇宙はその始まりから現在に至るまで膨張を続けており、その影響で数千億もの銀河が互いに遠ざかっている。これらの銀河の中では数千億もの恒星が生まれては死んで

いった。これらの恒星に関わる過程において、私たちの身体の構成要素である炭素や酸素といった原子が形成された。これらの恒星が死ぬことでこれらの原子が宇宙へと撒き散らされ、私たちの太陽系はかつて存在した恒星の墓場の上に築かれ、こうした原子を内包するに至った。もし私たちの身体がどのようにして形成されたかという物語を語ろうとするなら、これまで述べた全ての過程を説明しなければならない。これら、あるいはここでは触れられなかった他の多くの重要な過程のうち、たった一つでも欠けていれば、私たちの身体を構成する要素は存在し得なかったのである。

私たち自身の物語は、父親の精子と母親の卵子が出会うことから始まる。母親の胎内という慈しみに満ちた短い期間の後、私たちはこの世界に目を開ける。乳児期、幼少期、青年期、学校、仕事、結婚、子ども、中年、老年と、人生はあっという間に進んでいく。子どもの頃には「早く大人になりたい」と願い、大人になってからは「子どもに戻りたい」とため息をつく。そして気がつかないうちに、私たちは後ろへとは続かない一日へと至る。まるで壮麗な舞台装置の整った劇を数秒間観たかと思えば、突然幕が下り、「これで終わりだ」と告げられるようなものだ。私たちが「他には何もないのか」と心の中で問うても、幕は下りてしまう。全ての愛する者たちと美しさを携えたこの世界は、私たちの背後に残される。そして、かつて先に旅立

っていった愛する人々と同じように、私たちもまた別れを告げる間もなく旅立つことになる。このように壮大で現実的な宇宙の物語の一部でありながらも、私たちの寿命は100年にも満たない。さらにその人生の約三分の一は睡眠に費やされ、重要な部分はトイレや移動に費やされる。

もしこの短い人生を意味あるものにする何かがあるとすれば、それは共存であり、その中での相互作用であるかもしれない。では、その共存はどのようにして経験されることで、私たちの人生に意味を与えるのか？私たちが経験する共存の一つは、無意識の物質的存在との共存である。物質的存在は、その美しさで私たちを魅了したり、その大きさで私たちを圧倒したりする。しかし、どれほど壮麗であっても、いかなる物質的存在も私たちの存在を意識することはできず、私たちに答えることも、私たちを理解することもできない。例えば、隣の銀河であるアンドロメダが、その数兆の星とともに私たちに贈り物として与えられたと仮定しよう。この短い人生において、私たちの存在を理解せず、私たちに答えることもない、さらには自身の存在さえも意識しないアンドロメダとの共存に、私たちは人生の意味を見出せるであろうか？一人の親しい友と、世界の片隅でささやかに共存することの方が、数兆の星を有するアンドロメダとの共存よりもはるかに意味深く見える。私たちの存在を意識しない植物や動物との関係もまた、物質的存在との関係と同様である。

私たちの存在を認識し、私たちを理解してくれる友人や親戚、両親、配偶者、子供との関係とつながりは、物質的存在との関係に比べてはるかに質の高いものであり、私たちの人生に大きな意味を与えてくれると言える。しかしながら、このような関係の上に人生の意味を築くことには、重大な限界が存在する。というのも、私たちの人生は死によって終わるものであり、この世で築いた全ての関係もまた死によって終焉を迎える。そして死の結果として、愛する人々の記憶から私たちに関する全ての情報が消えてしまうことを意味するからである。このような全てのつながりや関係とは異なる、もう一つの関係の形が存在する。それは、私たちを創造し、私たちが存在する理由であり、永遠に存在する主とのつながり、そして主との関係である。主は、私たちの存在を認識し、私たちを最もよく知っている。「創造した者が知らないはずがあろうか」（ムルク（大権）章 67-14）。この「知る」ということは、その他の全ての友人や愛する人々の「知る」とは根本的に異なる。主は、完全に、どんな欠陥もなく私たちを知っている。

多くの場合、私たちは最も親しい人々ですら自分のことを理解してくれないことに嘆き、不公平な扱いを受けたと感じ、誤解されることの苦しみやストレスを経験する。しかし、神が私たちを誤解することや、完全には理解しないということはあり得ない。私たちを絶対に誤解せず、常に

正確に理解してくれる唯一の存在が、主である。また、私たちが関係を結んでいる多くの人々とのつながりは、ときに途切れることがある。結婚すれば多くの人は両親と会う機会が減り、友人と旅行に出かければ配偶者や子どもとしばらく離れることがあり、子どもが結婚すればその子どもとも距離ができる。最も長く一緒にいる相手でさえ、一日のうちに離れ離れになる時間が存在する。しかし神との関係においては、人生のある時期にも、また一日のいかなる時間においても「離れる」ことがない。「あなたがたがどこにいようとも、主はあなたがたと共におられる」（ハディード（鉄）章 57-4）。この人生において、私たちを完全に理解し、決して離れることのない存在は、ただ主だけである。さらに、私たちが共に生きてきた人々が亡くなると、それまでの関係に関するすべての記憶が彼らの中から消えてしまう。また、私たちが死んだときには、他者に関する記憶や彼らとの関係も私たちの記憶から消える。しかし神は、全てを、しかも永遠に記憶している。私たちに関するあらゆる情報――喜びや悲しみ、作り出したもの、努力の全て――は、主の記憶の中に永遠に存在し続けるのである。

神と共にいること、神と関係を築くことの価値を理解する者は、人生を真に意味あるものとする機会を得る。神と共にいること、神と関係を築くことの価値を悟らずして、この人生を意味あるものとすることは不可能である。「神

は信仰する者たちの友である」（バカラ章 2-257）。常に私たちと共にあり、私たち自身よりも私たちをよく知り、私たちに関する全ての情報を永遠に持ち続ける神との関係を築くことこそが、人間を無価値感や無意味さから救う唯一の道である。イスラムは、神が常に私たちと共におり、被造物を顧みていること、そして神と関係を築くことの中にこそ人生の意味があることを教える。このことはまた、意味を求める扉の鍵がイスラムにあることの一つの証である。

現代人の最も深刻な問題の一つは「退屈さを感じること」である。退屈という感情は、人がただ望まぬことをしている時にのみ感じるものではない。最も望ましい形で人生を生きているとされる瞬間においても、人は退屈の感情に襲われる。憧れの場所に住んでいても、良い結婚をしていても、理想的な両親や子どもを持っていても、十分なお金と健康な生活があっても、人の上には退屈の感情が降りかかる。退屈の感情は時に、単に身体内の化学反応に由来する場合もあり（外的要因に基づかない）、その場合は言うべき言葉はない。だが退屈の感情は多くの場合、人生の方向性や行動の意味のなさと密接に関係している。消滅してしまうものが意味を持つとは考えられない。たとえ死後の永遠なる来世という存在においてすら、神との関係がなければ真の意味は存在せず、この来世さえも（心から退屈という感情が除かれない限り）退屈なものになると私は考

える。神以外のすべては退屈なものである。神との交わりがなければ、すべてが、たとえ永遠の来世ですら、退屈であり無意味である。「至高の善」（summum bonum）は、快楽中心の生活や物質支配、自然の征服の中にはなく、ただ神との関係の中にある。

　イスラムは、神との関係を築く人間たちを愛する神を人生に関与させるものである。恐れもまた神との関係において重要な要素となりうるが、神との結びつきにおいては愛の方がより強く、優先されるべきであると私は考える。実際、「神の満足」が天国の恩恵よりも優れていると語るタウバ章 9-72 は、この見解を裏付けている。「神の満足（ridwānun min Allāhi）」とは、神がそのような人間を喜ばしく思い、愛するという意味に解釈できる。人間の最も根源的な欲求の一つは「認められること」である。相手が私たちにとってどれほど重要で高い存在であればあるほど、その者に認められ、評価され、愛されることの重要性は高まる。神の存在を理解した者は、自分を創造し、自分が持つ全てのためになくてはならない神こそが、あらゆる存在の中で最も重要であることを理解する。自己以外の全てを創造した神の存在的地位は、その他の全ての存在と比較にならないほど高い。なので、私たちの中にある「認められたい」「評価されたい」「愛されたい」という欲求が最も意味ある形で満たされるのは、ただ神に認められ、評価され、愛されることによってのみ可能である。意味ある

人生は、このような神の満足を得るという目標に従って人生の方向を定めることによってのみ実現可能である。

神の存在を理解した後、自分の中にある「認められたい」という欲求について熟考する者は、この欲求が、神に認められる（神の満足を得る）ために与えられたものであると理解する。このことを悟れない者は、自分の中にあるこの感情を、人々の前でカリスマ的な存在になることで（他人に認められ、評価されることによって）満たそうとし、人生の意味をその次元において見出そうとする。しかしイスラムは、神との関係を人生の中心に置くものであり、「最も重要な存在」に認められ、評価され、愛されるというこれほどに意味ある目標を提示することによって、人生に方向性を与える機会を提供する。イスラムは、人生における神との関係が、数ある関係の一つでありうるものではなく、人生の意味を構築するための礎であることを教える。この礎の上でのみ、人生は真の意味を得ることができるのである。

意味を必要とし、自己欺瞞なしに熟考に没頭する者が最初に答えるべき問いは、「神は存在するのか？」というものである。本書を読み始める前に、この問いに答えておくべきであるという私の助言を改めて述べておく。ここでは、読者がすでにこの問いに対する答えを見出し、神の存在を理解したものとして話を進める。だとすれば、次に私たちの前に現れるのは二つの選択肢である。すなわち、神

との関係をもって生きる人生を選ぶか、そうした関係を必要としない人生を選ぶか、である。ここまで述べてきたことは、神との関係を持たない人生が無意味であり、神との関係にこそ人生の真の意味が与えられることを示している。したがって、神との関係を軽視したり、その必要性を否定したりする選択肢は排除されねばならない。そのうえで、神との関係を築くために、なぜイスラムが選ばれるべきなのかを理解する必要がある。神との関係を築くには、まずその関係が神によって認められていることを知る必要がある。また、その関係の中で人間が何をなすべきかが明示されていなければならない。人間は、神からの啓示なしに、自らの力で神との関係のあり方を見出すことはできない。したがって、神との関係を可能にする体系は、神から人間へのメッセージでなければならない。世界の舞台を見渡すとき、神から人間へのメッセージであると主張し、なおかつ人間が神といかに関係を結ぶべきかを適切に示し、歴史上にも大きな影響を与えてきた体系として、イスラム以外に選択肢は存在しないと断言できる。この広大な宇宙において、私たちが見捨てられていないこと、神が私たちに関心と慈悲を持っていることを伝えるイスラムは、私たちの内なる意味探求に対する答えを内包している。これに勝る喜ばしき知らせが他にあるだろうか。実際、「ブシュラー（良い知らせ）」という語は、クルアーンを形容する言葉の一つとして登場する。つまり、イスラムとは、意味

を必要とするように創られた人間に対して、この世の舞台において意味を見出すために与えられた機会である。イスラムが提供する視点は、この世界を軽視するものではなく、むしろこの視点によってこそ、世界の真の価値と偉大さを理解する唯一の手段となる。この視点は、世界が神の創造した芸術であり、私たちが神との関係を築くための舞台であることを示すことで、世界の意味を一層深めるのである。

7-4「神なんて、宗教なんてどうでもいい」と言う人々

イスラムは、カリスマ・金銭・欲求を追い求める者たちの間で非常に一般的な一定の態度を否定する。このような考え方の持ち主たちは、明確な言葉でそう表現していなくても、その態度や行動から「神なんて、宗教なんてどうでもいい」と言っているに等しい。これらの人々の中には、質問されれば「神を信じている」「自分はムスリムである」と答える者も多い。しかしながら、彼らの思考や行動の世界には、神や宗教が全く存在していないのが実情である。このような態度は、私たちの身の回りでもよく見られるだけでなく、各種調査でも、神や宗教を信じていると表明しながらも、それが生活において重要ではないと述べる人々が多数存在することが示されている[114]。イスラムは、

114 これについてはピュー研究センターの研究を参照されたい。

神および神との関係を意味する宗教よりも重要なものは存在しないとし、全存在の総体ですら神の前では取るに足らないものであると強調する。この点において、クルアーンの一つの特徴である「ズィクル（想起すること）」が示すように、クルアーンは最も重要な事柄について教訓を与え、注意喚起する書物である。人々に人生の中心に「最も重要な存在」、すなわち神を据えることを促すという歴史的な役割を果たし、教訓を与え注意喚起していることは、クルアーンおよびイスラムの重要性を示している。神や宗教に人生の中で全く関心を持たない人間の状況とは、果てしない砂漠の中で深く暗い井戸に落ち込み、そこから脱出の手段を持たない人間のようなものである。死を目前にし、美しさに満ちたこの人生や愛する者たちと永遠に別れなければならないという絶望感と暗黒は、砂漠の井戸に閉じ込められた者のそれよりも遥かに恐ろしいものである。クルアーンのもう一つの特徴は「ハブルッラー（神の綱）」である。クルアーンは、まさにその井戸に落ち込んだ絶望的な者に差し伸べられる綱なのである。そのような状況にある者が、クルアーンという綱を無視して、ナッツを食べながら歌を歌うこと（カリスマ・金銭・性欲に夢中な者の井戸の中での状態）に夢中になることは、理に適っているとは言い難い。

神の存在を否定する者たちへの反論は可能である。私はすでに他の著書において、この反論を試みてきた。また、

イスラムが神からの宗教であるという事実を否定する者たちに対しても、必要な証拠を示すことは可能であり、本書ではそれを試みている。しかし、イスラムが神からの宗教であると理解された後に、「イスラムは重要ではない」あるいは「人生の多くの事柄の中の一つに過ぎない」「広い人生の中の小さな一室に過ぎない」と考えることはあり得ない。イスラムが全ての中で最も重要であることを理解するには、詳細な論証を必要としない。カリスマ・金銭・性欲のような目標から一瞬でも自らを切り離し、自己欺瞞なしに少しでも思索にふけることができれば、それだけでそれを理解するのに十分である。絶望的に砂漠の井戸に取り残された人間が、目の前に差し伸べられた綱に興味を示さないことは理に適わない。唯一の救いの手段と見なされるその綱を、ナッツを食べることと歌を歌うことに夢中になって無視することは想像すらできない。ましてや、その綱がその井戸からの脱出の道であると知りつつ（神とイスラムを信じると言いつつも、それを人生で全く重視しない者のように）、ただカリスマ・金銭・性欲のためにその綱を無視することは、最も極端な愚かさと言えよう。近代性という罠に陥ったムスリムたちの多くは、人生の広がりから切り離され、狭い部屋に閉じ込められたかのようなイスラム観を持ってしまった（多くの人々が言う「世俗主義」とはこのようなものである）。しかし、クルアーンが語るイスラムは、これらの「ムスリムたち」が理解しているイス

ラムとは全く異なる。このような愚かさをもたらす麻薬こそがカリスマ・金銭・性欲への執着である。カリスマ・金銭・性欲を人生の中心に据えることは、ただの無神論者や資本主義者、あるいは不可知論者（非宗教者）だけのものではなく、自らを「ムスリム」と称する者たちの間にも広く蔓延している病である。

イスラムは正しいか、誤っているかのいずれかである。正しければ、最大の真実である。すなわち、私たちや全てのものを創造した存在との関係を持つ機会である。もし、これほど重要であり、数十億の人々の人生を形作っているイスラムが嘘であれば、それは当然、最大の嘘である。神の名のもとに語られる嘘よりも大きなものがあり得るだろうか？しかし、イスラムは決して平凡なものにはなりえない。そのメッセージに耳を塞ぎ、評価しないことは不可能である。これに無関心であることは、例えられた井戸の中の者が綱に無関心でいることに等しく、いやそれ以上の愚かさである。井戸の綱はこの短い人生の一時を救うことができるが、イスラムは永遠の命を救うことができる。また、次のような例を考えてみるといい。ある日、家から徒歩二分の職場に行き、そこでバックギャモンをしているとする。そのとき、隣人から電話がかかってきて、家で大きな火災が発生したと告げられた。家には眠っている幼い子どもたちがいて、また非常に価値のある品物もある。鍵を使って家に入らなければ子どもたちが死に、財産も失われ

てしまうと思われる。家に行けば、高性能な消火設備を動かして子どもたちを外に連れ出し、災難を乗り越えられる。しかし、ふと隣人が嘘をついている可能性が頭をよぎる。この場合、どうするだろうか？

ここで考えるべきは次の通りである。火災が本当に起きているなら、家に行けば子どもたちと財産を救うという大きな利益がある。家に行かなければ、子どもたちも財産も失うという大きな災難が待っている。火災がなければ、家に行っても好きなバックギャモンを短時間休むだけで済む。家に行かなければ、休むことなくバックギャモンを続けられる。この場合、火災の可能性による大きな損失を考慮すれば、どんな理性的な人も行動を起こし、バックギャモンを一時中断することに迷わないだろう。私たちの置かれた状況もこれに似ている。死は私たちや愛する人々を消滅させるという意味で、その火災よりはるかに大きな災難である。イスラムはその火災から逃れるための方法であり、カリスマ・金銭・性欲はその火災から逃れるために私たちを行動から遠ざけるバックギャモンである。

この例は、神を信じることがもたらす無限の利益の可能性と、神を否定することによる無限の損害の可能性を比較し、神を信じることを勧めるパスカルのアプローチに似ている。哲学の文献では「パスカルの賭け（Pascal’s Wager）」として知られているこの考え方は、イスラム思想の中でもアリー（アリー・イブン・アビー・ターリブ）

が表現している。私は神の存在の証明の重要性を信じ、このテーマでの著作もあるが、この種のアプローチを「神の存在の証明」のような著書には決して含めていない。無神論者に対してもこの種の議論は用いないが、上記の架空の例は次の二つの重要なメッセージを含んでいると考えている。

第一は、神・イスラムに対して不可知論的（アグノスティック）な態度をとる人々へのメッセージである。この層に対しては、前述の例のように「家が燃えている（人生が過ぎている）、時間がない。すぐに決断しなければならない。重要なメッセージを無視することはできない。今すぐ評価して決断しなければ手遅れになる」と告げるメッセージだ。

第二は、神・イスラムを信じていると表明しながらも、人生で神・イスラムに必要な重要性を与えない人々へのメッセージである。この層に対しては、やはり前述の例のように「家が燃えている（人生が過ぎている）。その火災を止めることができると知っている（イスラムが真実であると知っている）。それを知りながらバックギャモンを続けて（カリスマ・金銭・性欲に没頭して）家の燃えるのを黙認することは、極めて愚かな行為だ」と告げるメッセージである。

要するに、クルアーンの内容は人生の中心に据えられるべきものを据えている。クルアーンはイスラムのメッセージに対し無感覚でいることは許されず、決して「神や宗教など自分には関係ない」と言えるものではないと教えるズィクル（戒め・思い出させるもの）として、人生を神を中心として形成する。人生を、偽りの目標（砂漠の井戸でナッツの皮をむくのに夢中になることや、家が燃えているときにバックギャモンをすること）に追われて過ごしてはならず、人生はできる限り意義あるものとして神との結びつき（イスラムとはその結びつきの名称である）を持って過ごすべきだという教訓を与える。イスラムが人生の中心であるにふさわしいものをそこに置くことが、「なぜ私はムスリムなのか」という質問に対する私の答えの一つである。

7-5　意味、善、正しさ、美の共存

意味も善も正しさも美も、私たちを引きつける。どこへ？なぜか？疑いなく、創造された私たちの本質（フィトラ）ゆえに、これら四つすべてを私たちは欲する。私たちが行う行為が意味を持つということは、それが行うに値するということを意味する。善であるとは、それが必要な道徳的構造に適っており、悪からほど遠いということである。正しいということは、嘘や誤りから離れ、幻想の後を

追わないということである。美しいということは、必要な魅力を備え、不快感から離れていることである。

　無意味なことをしようと努めること、道徳的に悪を行うこと、幻想を追うこと、醜いものを目標とすることは、意味・善・正しさ・美の共存の真逆である。これら四つすべての真逆である場合だけでなく、三つに問題がなくても一つだけが欠けている場合でも、私たちの行う行為に関して重大な問題があるということである。例えば、行う行為が道徳的に問題なく、幻想の後を追わず、必要な魅力を備えている、つまり善であり正しく美しいと考えよう。この場合でも、その行為が無意味であれば、それは時間をかけてまで行う価値のない行為である。他方、もし行おうとする行為が道徳的に問題があり、つまり善でなければ、たとえ幻想でなくても、また美しく正しくとも、その悪しき性質だけで行わないべきである。善でない悪い行為を行うことは価値あることとはなり得ず、それを行う意味もないと考えられる。また、道徳的に問題なく魅力もあり善く美しい行為であっても、幻想の後を追っているとしよう。正しい知識に基づかない行為は行うべきではない。幻想の後を追って行う行為は価値あるものにはなり得ず、それが意味あるものとも考えられない。さらに道徳的に問題なく、幻想でなく良く正しい行為を考えよう。ただしそれが醜く不快であるとしよう。審美的でない行為を行うことも重大な問題である。その行為の審美性の欠如は行う価値を下げ、つ

まり意味に関する問題も生じる。このように意味は、善・正・美から独立した重要な基準であると同時に、善・正・美の基準を満たすことにも依拠しているのである。

神が存在して初めて、意味、正しさ、善、美が存在する。神を否定する者にとっては、これらは単なる幻想である。この言葉は、空虚なレトリックではない。なぜ空虚なレトリックでないかを、以下に簡潔に示すつもりである。加えて、ここで簡潔に示そうとすることが理解されれば、次の主張も空虚なレトリックでないことがわかるであろう。すなわち、イスラムは単なる一つの真実ではなく、あらゆる真実を真実たらしめる真実である。意味のあるものを追求することは価値あるものを追求することであるため、「意味」は向かうべき方向に必要な動機を与える。「善」は道徳的必要性を表し、「正しさ」という概念なしには科学的にも哲学的にも命題の意味は成り立たず、科学や哲学は成立し得ない。「美」という概念は美学や芸術に関わる評価の基盤である。要するに、存在に関する真実（意味）、道徳的真実（善）、科学的・哲学的真実（正しさ）、美的・芸術的真実（美）は、神への言及を通じてのみ客観性や正確性を獲得し得る。イスラムは神を紹介し、神と人間との関係を築くシステムとして、存在的・道徳的・科学的哲学的・美的芸術的なものの基礎となることを可能にする。つまり、最も重要な真実を真実たらしめるのである。これら異なる領域の真実がイスラムが提示する基

盤を必要とし、イスラムの統一（ワフダ）の理解の枠組みのもとに結合可能であることは、イスラムの神性の証拠の一つである。前節では、人生を意味のあるものに導くために神と、神と人間の関係を築くイスラムが必要であることを示した。ここでは、何かが意味を持つためには善・正・美との関係も必要であることに基づき、善・正・美が神および神と関係を築くイスラムとどう関わるかを簡単に述べる。これらはそれぞれ独立した論文や書籍のテーマとなるほど広範な問題であるが、ここでは簡潔に触れ、より詳細に扱った箇所を参照する。

【善】「善」という概念は道徳的判断の基礎である。拙著「Fıtrat Delilleri」の道徳に関する章と本書の第 7 章でこの問題を扱った（繰り返しを避けるため、ここではその内容は繰り返さない）。そこで示したように、客観的な意味で「善」と言えるものは、神からの命令によってのみ根拠づけ可能である。しかし、個人や社会を超越する法律と、その法律を強制する正当な権威があれば、客観的道徳（つまり「善」）について語ることが可能である。イスラムは、個人や社会を超えた道徳的法を強制する唯一の正当な権威である神からのメッセージとして、それを実現する。そのような基盤なしでは、「善」は個人や社会によって変わる相対的な概念から逃れられない。当然ながら、多くの善行は生得的な（フィトラに基づく）能力によって理解さ

れ、「善」に従って行うことも可能だが、「善」は理性的な基盤がなければ成立しない。要するに、この基盤が欠如すれば「善」を語ることはできず、「善」でないものは意味を持ち得ないのである。

【正しさ】「正しさ」という概念は、科学的・哲学的な判断のみならず、日常の最も基本的な知識の基盤でもある。拙著「Fıtrat Delilleri」の理性に関する章でこの問題を扱ったが、ここでは簡潔にまとめる。

「椅子」と言ったとき、椅子という言葉の意味を理解し、座るために作られた一定の形状の物体を椅子と呼ぶことは「正しい」が、バスケットボールのような丸い物体を椅子と呼ぶのは「間違っている」と認識できることに依存している。フレーゲによれば、「正しい」と「間違っている」（真理値とも呼ばれる）は、最も基本的な論理的対象である[115]。神に言及することなくしては意味や善の合理的基盤が成立しないこと（虚無主義や道徳的相対主義の問題）は、多くの無神論者の哲学者も認めている。しかし、「正しさ」概念への接近の仕方が、有神論と無神論のパラダイム間で異なる可能性があることに気づいている者は非常に少ない。物質主義的無神論哲学を採用し、整合的な物質主義者であるためには「排除的物質主義者」であるべきだと

115 Gottlob Frege, Basic Laws of Arithmetic, 訳者・編者：Philip A. Ebert and Marcus Rossberg, 出版元：Oxford University Press, Oxford, 2013

主張する神経科学者と哲学者の夫妻、パトリシア・チャーチランドとポール・チャーチランド夫妻は、脳に「正しい」と「間違っている」の対応物が存在しないことを覚悟すべきだと警告している。（彼らの主張するところのその主張自体が「正しさ」と「間違い」を含まなければ意味を持たないことに気づいているのか疑問であるが）チャーチランド夫妻のこの主張を引用したビクター・レパートは、真理値を排除することの知的代償は非常に高く、この概念を排除した者はこれらの概念の代替を提供できないことに注意を促している[116]。多くの物質主義的無神論者が自らの哲学の帰結を整合的に認めることに苦労しているものの、チャーチランド夫妻が正しく指摘するように、物質主義的無神論哲学が規定する物質世界において「正しい」と「間違っている」概念を位置づけることは不可能に見える。

自然を観察すると、自然界のいかなる存在も「正しい」や「間違っている」という概念に対応していないこと、これらの概念は認識に属するものであることがわかる。例えば、樹木学者が樹木の年齢を測定する「樹木年代学」という学問がある。樹木の幹の年輪を調べて樹齢を判断するが、もしその樹木に年輪を破壊する細菌が存在し、誤った年齢推定を引き起こしていたとしても、その樹木自体が

116 Paul M. Churchland 著, On the Ontological Status of Observals, A Neuro-Computational Perspective: The Nature of Mind and the Structure of Science, Bradford, Campridge Mass., p.150-151 ; Patricia Chrchland 著, Epistemology in the Age of NEuroscience, Journal of Philosophy, October 1987, p 548; この二作から本テーマを伝えた人物：Victor Reppert, C.S. Lewis’s Dangerous Idea, IVP Academic, Downers Grove, p.76-77

「間違っている」とは言えない。誤っているのは樹木ではなく、年齢を誤認した専門家である。認識を持たない存在、技術的な産物、さらには多くの人を誤解させる可能性があるコンピュータに対して、「正しい」や「間違っている」という概念は存在しない。コンピュータの処理を認識で評価すると「正しい」か「間違っている」かの意味を持つが、コンピュータ自身はこれらの概念を認識しない。この状況は、思考をノートに書き留める行為に似ている。認識がなければ、ノート上の文字は単なるインクの跡でしかない。認識がそれらを評価して初めて「正しい」「間違っている」という概念が意味を持つ。ノート自体にそれらの意味はない。ニューロンで構成された生化学的構造が正しいか間違っているかは論じられない（先述の樹木の構造と同様である）。フランシス・クリックのような唯物主義的無神論者は、認識を単なるニューロンの集まり（nothing but a pack of neurons）[117]とみなすため、チャーチランド夫妻のように「正しい」「間違っている」すら否定する、常識に最も反する方法を選択する以外にすべがない。ポストモダン主義者の中にもチャーチランド夫妻とは異なる立場ながら、普遍的な「正しさ」が存在しないか、存在しても認知不可能だと主張する者がいる。彼らの哲学的祖先の一人であるニーチェは、道徳的な「善」に根拠がないだけでなく、「正しさ」も存在しないと主張した。ニーチェはこ

117 Francis Crick 著, The Astonishing Hypothesis: The Scientific Search for the Soul, Simon and Schuster, London, 1994, p.3

のことから意味は存在せず、虚無主義（nihilism）に至るべきだと論理的に結論づけた。私の述べた多くの見解にニーチェは同意したであろうが、神が存在しないために私が誤っていると指摘するであろう。

「正しい」「間違っている」という概念は、他の何ものにも依存せず理解されるべき基本的な概念であり、物質に還元されて物質から理解されることは不可能に見える。宇宙およびその中に存在する理性的存在の起源を、永遠に理性を有する神に帰する神学的（特にイスラム的）立場からは、理性に必要なこれらの基本的な特徴がどのように現れるか理解することに問題はない。認識は永遠の存在であり、イスラムは心に属する特徴を物質に還元して説明する必要性を認めていない。永遠の認識が物質を創造し、この宇宙の限られた認識の発現を可能にする条件と共に物質を設計したのであり、心は物質の偶然の産物ではない。さらに、物質主義的無神論者は理性を、計画されず偶然の進化過程である自然選択の結果と見なしている（ここで問題なのは、進化や自然選択を否定することではなく、その背後に意識的存在がないと主張することである）[118]。自然選択は、生存や繁殖に不適合な個体を排除し、適合的な個体を生存繁殖させる。だが、生存に適合することは「正しい」理性的推論をすることとは無関係である。自然選択に基づく説明では、理性的推論を行う存在を選抜するとは言えな

118 Caner Taslaman 著, Bir Müslüman Evrimci Olabilir Mi? 出版元：Destek Yayınları, İstanbul, 2018

い。したがって、理性的推論が計画されず偶然の自然選択の産物であるとする物質主義的無神論者は、その理性的推論の信頼性を主張できなくなる[119]。一方、神学的パラダイムでは理性は神が与えた賜物である（神がどのような過程で与えたかは問わない）。理性は神の力と創造性の認識と賛美のために与えられ、その限定された形であっても特定の真理に到達することを目的としている。数学的計算を行うために設計された計算機と、偶然に計画なしで進化したが計算機能を備えた計算機があった場合、どちらに信頼するかは明らかである。

唯物論的無神論と神学的見解を理性的に比較すると、理性の信頼性を損なう見解（唯物論的無神論）を唱える者が理性の結果として唯物論的無神論が正しいと結論づけること自体、論理的に問題がある。永遠の存在としての理性ある神を人々に伝えるイスラームは、理性が神からの贈り物であり、「正しい」知識を求めるために用いられるべきものだと教える。世界中の主要な宗教の中で、理性の活用をここまで強調する宗教はイスラム以外にない。イスラムは「正しさ」が幻影ではないパラダイムを示し、神と人を結ぶ体系の中でのみ「正しさ」の概念が語られるべきである

119 このテーマに関するプランティガの見解については次の著作を参照されたい。Alvin Plantiga 著, Warrant and Proper Function, 出版元：Oxford University Press, New York, 1993; Alvin Plantiga 著, Natüralizme Karşı Evrimsel Argüman, 訳者：Fehrullah Terkan, Allah, Felsefe ve Din, 編者：Caner Taslaman and Enis Doko, İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2014, p.175-225

と説く。「正しさ」なしに意味は語れないため、「正しさ」の存在は意味の喪失を防ぐために重要である。

【美】美とは、美学や芸術に関する私たちの判断の基盤である。何が美しく、何が醜いかに関する多くの判断は、社会によって異なるものだと言える。「善」（道徳）に関わるものよりも、はるかに多くの相対性の主張が「美」（美学、芸術）の領域の判断に関連している。ある音楽作品をある社会が非常に好む一方で、別の社会はまったく好まないこともある。しかし、マグノリアやカーネーション、スイセンの花を美しく思わない者がいるだろうか？あるいは真っ青な海やウグイスの鳴き声を誰が美しく感じないだろうか？それ以上に重要なのは、美に関する判断で意見が合わない社会ですら、「美しい」という判断を用いることに関しては同意見だということである。美しいものが何であれ、何かが「美しい」ということ、すなわち美しいことが価値あることであり、望ましいことであるという点で、互いにまったく関係のない部族でさえ同意するのである。だからこそ、何が「美しい」のかは議論の対象になるものの、人間がその本質から「美しい」という判断をすることは相対的ではないと言える。「美しい」ものが魅力的で価値があり、「醜い」ものよりも好まれるといった定義も、どの社会においても容易に受け入れられる。「美しいもの」を成り立たせているものが価値あるものであり、「美しい」ことが何かを示す標識のように、それを現すものの

価値の存在の証拠となる場合、多くの異なる文化の人々が互いに同意することになる。

宇宙に現れる形態が、マグノリアであろうと海の形であろうと、唯物論・無神論のパラダイムにあるように、ただ単に意識のない原子やエネルギーの一定の結合に過ぎないのであれば、そのようにして生まれた形態が「美しい」（価値があり、評価される）とされることに論理的な根拠はあるのだろうか？原子がある結合の仕方でなく別の仕方で結合することを価値あると見なし、「美しい」と定義することは、このパラダイムの中では幻影に過ぎないのではないか？「美しい」との私たちの感覚が外的条件によるものであり、この感覚を内面で感じるのは、ただ身体内で分泌されるある化学物質であるならば、その場合はお腹が鳴る生理現象と「美しい」感覚に違いはあるのだろうか？唯物論・無神論が示すパラダイムの中では、何かを「美しい」と呼び価値あると考えることは幻影であると言って差し支えない。このパラダイムでは、無意識の原子がある形で結合することを価値あると見て「美しい」とすることは、遺伝子の働きによるゲームに過ぎないと見なされる。

イスラムが提示する神中心の存在理解は、「美しい」感覚を幻影であることから救い出す。この理解によると、宇宙に現れる形態の背後には神の知恵と力が存在する。実際、クルアーンにおいては、世界の多くの人々に対して他の宗教以上に、宇宙に現れる現象について熟考するように

促している。クルアーンは神と「美しさ」との間に結びつきを示し、「創造する者の中で最も美しい神の威厳はなんと高いことか」（ムミヌーン章 23-14）、「かれはすべてを美しく創った」（サジダ章 32-7）と述べる。

芸術家が作り出す芸術作品も、神が創造した物質の中に、神が物質に宿した潜在力が表現された結果として存在する[120]。この見方は、自然や芸術家のような媒介的な原因を通じて宇宙に現れる形態が価値あることを示す。私たちの内にある「美しい」感覚は、この価値を理解し、媒介的原因を通じて現れた「美」の真の所有者を称賛することを支える。この存在理解において、「美しい」は幻影ではなく創造主へと導き、その芸術を称賛させる道標である。この道標は私たちに「マシャッラー」（神の御意志によって成った）、「スブハーナッラー」（神は欠点からほど遠い）、「アルハムドゥリッラー」（称賛は神のものである）、「アッラーフアクバル」（神は最も偉大である）と言わせるのである。

イスラムの存在論において、宇宙に現れるすべての形には、例えば真っ青な海の風景の背後にも、神の知と力が存在している。物質がこのように見えるのは、単に原子が集まった結果ではなく、創造主の計画の産物である。「美しい」とされるものは私たちの驚嘆を引き起こし、その驚嘆

120 このテーマについては、拙著「Allah'ın Varlığının On İki Delili」（神の存在を示す 12 の証拠）における第 4 の証拠である「Evrenin Potansiyeli Delili」（宇宙の潜在性の証拠）を読まれたい。

は思索へと至る扉を開く。そして、この思索を通じて私たちは、「美しい」と感じるものの背後に、より重要な、私たちを導く真理が存在しているという結論に至る。

私たちが「美しい」と評するものは、道標のように、それ自体ではなく、それを通して神の知と力へと私たちを導いているのである。この理解に基づけば、私たちの目の前にある世界は、幻想ではない「美」と「驚嘆」の要素を備え、それによって神へと至る橋となるがゆえに価値がある。宇宙は、原子が偶然に集まり離れる場所などではなく、それよりはるかに崇高な意味と重要性を持つ。この理解は、物質的資源（カリスマ・金銭・性欲）を提供する場としてしか価値を認められなかったこの世界に真の価値を与えることになる。イスラムの宇宙に関する教えを正しく理解する者は、私たちの内にある「美」への感覚が、何よりもまず、私たちが「美しい」とするものを通して神の芸術を称賛するために与えられているのだと理解するようになる。私たちの内にある「美」への感覚は、私たちが経験する美の真の原因である創造主の知と力を称えるために、私たちの本質に組み込まれた感覚である。この感覚は、遺伝子の中にある特定の化学物質によって伝えられ、体内の特定の化学反応によって「美」の感覚が生まれるのかもしれないが、私たちがその感覚を持つという事実自体が、物質を超越する創造主の計画の結果である。

この理解に基づけば、「美しい」という概念は、この世の生活に貢献する機能（例えば、健康的な配偶者の選択、健康的な食物の選択など）を果たすにとどまらず、それよりもはるかに崇高な目的を持つ。「美しい」という感覚は、物質を通じて物質を超えたものへと私たちを導き、真に称賛されるべき創造主を称え、感謝を捧げるためのものである。この感覚は、創造主とのつながりを築く役割を担う。イスラムは、存在と創造主の関係を明らかにし、私たちの目の前にある宇宙が単なる雑音ではなく音楽であり、無造作に飛び散った絵の具ではなく一つの絵画であることを見せてくれる。音楽を理解するためには、一つ一つの音を聞くだけでなく、全体を一つのまとまりとして捉える必要がある。ナスカの地上絵のような図形を理解するには、大地を鳥の視点から俯瞰して見る力が必要である[121]。イスラムは、創造された存在を全体として、俯瞰的に見ることを可能にする視点を与えてくれる。宇宙の中の形が偶然ではなく、神の芸術の結果であると語る。創造、世界、試練、来世のつながりを提示し、全体像を見せてくれる。そして、創造がこの枠組みの中で「意味あるもの」そして「美しいもの」であることを認識させてくれる。目の前にあるものが雑音ではなく音楽であり、飛び散った絵の具ではなく絵画であると気づかせてくれる。ある人々にとっ

121 ナスカの地上絵は、何千年もの昔にペルーの砂漠の地上に描かれ、どのようにして描かれたのか今も謎のままの絵である。この非常に大きな幾何学的なデザインと、動物と植物の絵の存在は、鳥の視点から、つまりかなり上方から見て初めてわかる。

て、イスラムの視点は、雑音を音楽だと信じ、飛び散った絵の具を絵画だと信じる一種の純真さやロマン主義に見えるかもしれない。しかしイスラムの観点では、音楽を雑音とみなし、絵画をただの飛び散った絵具とみなすこと、すなわち「美」の荘厳さや感動を理解できないことは、心が硬くなり、聴覚が鈍化し、盲目でいることに他ならない。

このような基盤なしには、「美しい」という感覚は単なる生理的な現象、例えばお腹の鳴る音と同じような化学的プロセスの一つにすぎなくなる。こうした基盤を欠けば、「美しさ」という概念そのものが成り立たなくなり、「美しさ」がなければ、意味というものに深刻な欠如が生じることになる。

イスラムは、「意味」（存在論的叫び）、「善」（道徳的叫び）、「真」（理性の叫び）、「美」（美しさへの叫び）の全てに答えを与える。そしてそれらがともに、一つの基盤の上に成り立つことを可能にする。イスラムが与えるこの基盤の中でこそ、「意味のあるもの（実践すべきもの）」、「道徳（善）」、「知恵（真）」、「魅力（美）」が同時に存在し得る。これこそが、真の意味での幸福な結びつきである。イスラムは理性にも感情にも語りかけ、私たちの本質（フィトラ）の中にある「意味」「善」「真」「美」への叫びに命の水を与える。神が私たちの内に据えた「意味への探求心」は、この四つの偉大な真実が一つに集まることで初めて答えを得る。イスラムの

一体性がこの四要素に土台を与え、それら全てを結びつけることができるという点は、私たちの最も深い部分から発せられる叫びを通じて、神が私たちをイスラムへと導いていることの証である。イスラムとは、神が私たちの内に宿した最も重要な探求への答えの名である。

第８章

クルアーンとそれが築く思考様式

クルアーンは、それが提示する信仰、定めた原則、命令、禁止、助言によって人々の思考様式を形成している。忘れてはならないのは、この思考の形成が７世紀に人類に届けられた一冊の書物によってなされているという点である。これまでに論じたように、クルアーンが人間の生活の中心に神を据えること、非凡さ、歴史において果たした役割、意味付けといった重要な特性に加え、時代を超越して思考様式を構築するという点も挙げるべきである。

実際に、クルアーンは人々と出会ったその時代において、その時代を超越するかのような思考様式を形成したのであろうか。それとも「時代を超えた思考の形成」とされる特徴は、7 世紀のメッカとメディナに生きたムハンマドに帰すべきものであろうか。本章では、この問題を具体的な事例を通じて論じ、人権、統治原則、戦争原則、科学的思考、環境意識といった主題について簡潔に考察するつもりである。例えば、科学が人類にとっていかに重要であるかは、近代の始まり以降広く評価されてきたことである。しかし、そうした科学を評価する思考が主流でなかった 7 世紀のアラビア半島において、人々の思考がこの方向へと

形づくられたことの驚くべき点に注目したい。クルアーンには人類にとって極めて重要なテーマに関し、その時代の狭隘な視点を超える表現が見られることを明らかにしようと努め、またクルアーンがこれらの重要事項においてどのように思考を形成し、どのような原則を提示したのかという点に注目し、だからこそ手本とすべき書物であることを示すつもりである。

8-1 正義

ニサー章 4-58：まことに神は、信託されたものをその担い手に託すこと、そして人々の間を裁くときには公正をもって裁くことを命じておられる。神はいかに優れた訓戒をなされることか。まことに神は聞く者、見る者である。

クルアーンが人々にもたらしたメッセージの中で、「公正であること」は重要な位置を占めている。クルアーンの多くの節において、公正であることが命じられていることが確認できる。ムハンマドの時代、アラビア半島では、部族の利益を正義の原則よりも優先する風潮が広く見られた。自分の部族の者であれば、たとえ不正を行っていても擁護するような連帯の道徳が支配的であった。クルアーンは、そのような傾向が根強くあった当時の社会において、

「正義」の原則が部族への忠誠よりも上位にあることを説いたのである。

マイダ章 5-8：信仰する者たちよ、公正な証人として、神のために真実を守れ。ある民への憎しみが正義を欠く原因となってはならない。正義を守れ。それこそが、より敬神に近いものである。神を畏れよ。まことに神は、あなたがたの行いを知っておられる。

正義において最も基本的な原則のひとつは、人種、民族、部族といった帰属意識を根拠とした差別をしないことである。以下に挙げるクルアーンの節やそれに類するものは、異なる部族や人種を、優劣の根拠ではなく、神の創造における多様性として描いている。

フジュラート章 49-13：人々よ、まことにわれはあなたがたを一人の男と一人の女から創った。そして、互いに知り合うようにと、あなたがたを諸民族・諸部族に分けた。まことに神のもとで最も尊い者は、最も神を畏れる者である。まことに神は全知にして、全てを把握しておられる。

ルム章 30-22：神のしるしのひとつは、天と地を創造されたこと、そしてあなたがたの言語と肌の色が異なることである。まことにこれには、知る者にとっての教訓がある。

自分が所属する社会的集団をもって優位性を語ろうとする者たちに対し、クルアーンは、社会的帰属が優位性の根拠ではないこと、真の優位性は神との関係および高潔な行いにより定まるものであることを教えてきた。

白人、黒人、黄色人種といった肌の色の違いによる人種差別が数千年にわたって行われ、それによって数多くの不正義がなされてきたことは、誰もが知るところである。「既知の人類史数千年において、不正義や人権侵害の最も重要な要因は何か？」と問われれば、間違いなく、人種差別はそのリストの上位に位置するであろう。クルアーンは、肌の色（すなわち人種）の違いを神の創造における多様性として提示し、それに基づいた優越の主張を明確に否定している。

多くの社会において、富裕層がえこひいきされ、貧しい人々の権利が富裕層の前で侵害されている場面を目にすることが少なくない。また、支配的地位にある者や正義を分配する責務を担う者たちが身内を優遇するという問題も深刻である。クルアーンは、正義および人権の観点から、このような重要な事柄に対して以下のような警告をしている。

ニサー章 4-135：信仰する者たちよ、たとえそれが自分自身、両親、または近親者に不利であろうとも、神のために正義を守る証人であれ。彼らが裕福であろうと貧しかろうと、神は彼らにとってよりふさわしいお方である。欲求に従って正義から逸れてはならない。もし真実をゆがめたり、顔を背けたりするならば、神はあなた方の行いを確実に知っている。

クルアーンでは、ムハンマドに対して、彼に悪意を持つ者たちに対してさえも正義ある態度をとるよう命じられている。預言者に対する害意でさえ、不公正な振る舞いの口実にはなり得ないのであれば、誰であれ、自身に向けられた悪意や不正を理由として、不正義を正当化することはできない。

マイダ章 5-42：彼らは絶えず嘘を聞き入れ、禁じられたものをむさぼる。彼らがあなたのもとに来るなら、彼らの間で裁きを下してもよいし、彼らから顔を背けてもよい。もし顔を背けるなら、彼らはあなたに何の害も及ぼすことができない。だが、もし裁きを下すのであれば、公正をもって裁け。まことに、神は公正な者たちを愛する。

クルアーンでは、正義の観点から極めて重要な点についての警告が繰り返されている。人種的差別、部族主義、富者と貧者の格差による差別、身内への特権付与、敵対者に対する不正の容認などが、すべて明確に否定されているのである。

8-2 思想の自由

歴史を通じて、多くの文化では異なる思想に対して非常に寛容さが乏しかった。多くの社会においては、部族、国家、または帝国の公的なイデオロギーに賛同しないことを表明することすら許されなかった。このような意見表明は、投獄から死刑に至るまで、さまざまな罰を伴う可能性があった。しかし、クルアーンによれば、神の存在を否定することやイスラムを否定することに対して、この世で与えられる罰は一切存在しない。この点において、国家とイスラムの存在論的主張との間に大きな違いがあることに留意すべきである。国家とは、人間がルールに従って生きる、政治的に組織された構造体であり、多くの場合、自らに属する個人に対して広範な権利を主張するが、人間や宇宙の創造者であるとか、死後に人間を裁く存在であるといった主張はしない。一方、イスラムは、宇宙と人間の創造主が人々に送ったシステムであり、そのシステムの所有者である神が人間を死後に裁くという主張を持つ。国家の存

在論的主張においては、国家が人間の創造主でない以上、国家が人々の思考を指示する正当な根拠を示すことはできない。しかし、イスラムは神のシステムであり、人間の創造主であり、来世で人間を再び創造する神が、人間の思考や行動を定めることは正当な権利である。それにもかかわらず、イスラムには完全な思想の自由が認められている。宗教に関する信仰や行動は、自由意志によって行われなければならない。神を否定すること、イスラムを否定すること、偶像崇拝、ムスリムでありながら他宗教に改宗すること（背教）、さらにはイスラムの価値を嘲笑することに対してさえ、微塵の世俗的罰も存在しない。

　たとえ、背教、宗教を侮辱する行為、信者が礼拝を怠ることなどに対して、イスラム法学（フィクフ）の分野でいくつかの罰則が提示されていたとしても、それらはクルアーンに基づく根拠に欠けており、むしろクルアーンと矛盾している。

ユヌス章 10-99：もしあなたの主が望まれたならば、地上の全ての人々は皆、信仰者になっていたであろう。では、信じることをあなたが人々に強制しようというのか。

　イスラムは、全ての個人が自由意志によって信じるか信じないかを選ぶことを望んでいる。信仰を価値あるものに

するのは、まさにこの点である。自由意志によって、イスラムを受け入れるかどうか、実践するかどうかの選択肢がある中で、肯定的な選択がなされることが意味を持つのである。信仰や実践に対する強制は、偽善者（ムナーフィク）を生むだけであり、これらはイスラムにとって最も有害な存在である。クルアーンでは、以下の節にも見られるように、神を否定する者は来世で罰を受けることを警告されるが、この世での罰はまったく定められていない。

ナフル章 16-106：信仰した後に神を否定する者―ただし、心が信仰で満たされている者が強制を受けたために否定した場合は別―心を否定に開いた者には、神の怒りが下る。彼らには大きな罰がある。

　ナフル章 106 節に注意すれば、強制を受けたために神を否定することは真の否定とは見なされていないことがわかる。であるならば、強制によって人がイスラム教徒になること、またはイスラム教以外の宗教へ改宗しようとする者を力ずくで妨げることが、果たして「ムスリムになる」と言えるのだろうか。強制的にイスラムを否定させることに価値がないのであれば、強制的にイスラムを受け入れさせることに価値があるはずもない。

一部のイスラム法学派（フィクフ）によって社会の秩序維持のためにどのような見解が表明されていようとも、イスラムを棄教して他宗教に改宗した者（いわゆる「背教者」）が死刑または何らかの刑罰を受けるということは不可能である。実際、次の二つのクルアーンの章句においては、イスラムからの離脱、すなわち専門用語で言うところの「背教」について言及されているが、そこにはいかなる現世的刑罰も定められていない。

バカラ章 2-217：…あなた方の中で、宗教を棄て（背教者となり）、不信仰のまま死ぬ者に対しては、彼らの行いは現世においても来世においても無に帰すであろう。彼らは地獄の住人であり、そこに永遠に留まるであろう。

マイダ章 5-54：信仰する者たちよ！ あなた方の中で誰かがその宗教から離れるならば（背教するならば）、神は彼らに代わって、神が愛し、神を愛し、信仰者に対しては謙虚であり、不信仰者に対しては誇り高く強い人々をもたらすであろう。彼らは神の道のために闘い、誰の非難も恐れないであろう。これは神が御心にかなう者に授ける恩恵である。神は包容力があり、知り尽くしておられる。

バカラ章 217 節では、背教した後に不信仰者として死ぬ者について語られている。もし背教者が死刑にされるべき

であるならば、「不信仰者として死ぬ」ことではなく「処刑される」ことが語られるべきではなかったか？　また、マイダ章 54 節では、背教者が宗教を離れてもイスラムにとって何ら損失がないことが述べられており、現世的な刑罰については一切触れられていない。同様に、アリ・イムラン章 86 節でも、信仰した後に不信仰に陥った者について語られているが、そこでもこの世における死刑のような刑罰は定められていない。むしろ、アリ・イムラン章 89 節では、彼らが後に悔い改めれば、神が彼らに寛容であることが思い出される。もし背教者の刑罰が死刑であるならば、後に悔い改める機会を持つことなど不可能なはずである。要するに、背教者を処刑するという判断はクルアーンと矛盾している。同様に、イスラムの価値観を嘲笑する者を処刑するという判断もまた、イスラムと矛盾している。全てのムスリムは、自らの価値観が侮辱されることに不快感を覚えるものであるが、クルアーンはこのような無礼な者たちに対して暴力を振るうことを許していない。クルアーンが認める思想の自由は、最初の啓示を受けた当時や地域の常識を遥かに凌駕するものである。あの時代にクルアーンがこのように思考の構築を促していたにもかかわらず、ムハンマドの死後に建国された国家の法学者たちは、しばしばクルアーンが提示する思想の自由を回避してきた。

ニサー章 4-140：神はこの書物の中であなたがたにこう伝えた。「神の教訓を否定し、それらを嘲笑する声を聞いたならば、彼らが他の話題に移るまで、否定する者たちと共に座ってはならない。さもなければ、あなたがたも彼らと同様になるであろう。」

マイダ章 5-58：あなたがたが互いに礼拝へと招くとき、彼らはそれを嘲笑と遊びの対象とする。これはまさに、彼らが思考しない民であるからである。

　このように、ニサー章 140 節では、クルアーンの印を嘲笑する者たちの声を聞いたムスリムたちに対し、嘲笑の行われている場から離れるよう指示されているが、暴力の行使は推奨されていない。マイダ章 58 節でも、礼拝への呼びかけ（アザーン）を嘲笑する者たちについて言及されているが、これに対して暴力的対応は推奨されず、彼らの思慮のなさが指摘されるにとどまっている。この二つの章は、ムスリムたちが一定の力を得たメディナ期に下されたものであり、彼らが力を持たず移住を余儀なくされたメッカ期の章ではない。したがって、これらの章句がムスリムたちの弱さに起因する寛容さであったとは言えない。同様に、メディナ期に啓示されたある章では、自らを嘲笑する者たちに対し、ムスリムたちは暴力ではなく「忍耐」するよう命じられているのである。

アリ・イムラン章 3-186：確かに、あなた方は財産と命によって試されるであろう。そして、あなたがた以前に啓典を授けられた者たちや、多神教徒たちから、数多くの不快な言葉を聞くことになるであろう。もしあなた方が忍耐し、慎むならば、それは決意をもって取り組むべき事柄のひとつである。

　このように、クルアーンにおいては、思想の自由が認められているばかりか、相手がイスラムの価値観を嘲笑するような言動であっても、それが暴力に訴えるものでなければ寛容が示されている。相手の嘲笑に対してすら暴力を用いることが許されないのであれば、イスラムに反する思想表明に対して暴力を行使することなど、なおさら許されるはずがない。なので、イスラムの価値が真に実践されている場所とは、無神論者、偶像崇拝者、理神論者、あるいはその他いかなる思想を持つ者であっても、自らの信念を処罰の恐れなく自由に表明できる場であるべきである。ムスリムたちがこのような環境を提供できないのであれば、イスラムとムスリムの間にしばしば差異が存在し得ることを忘れてはならない。本書の焦点はムスリムではなく、イスラムそのものである。ある個人がムスリムでないこと、またムスリムであってもその信仰を保持し続けないことに対

して、現世的な処罰を課すことはできない。それと同様に、イスラムを信仰する者がその信仰に基づく実践を行わない場合にも、現世的な処罰を設けることはできない。イスラムへの信仰が自由意志によってなされるべきであるように、イスラム的信仰に即した行為もまた自由意志によってなされるべきである。強制されて行われる礼拝は、ただの体操にすぎず、強制されて行う断食は、単なるダイエットにすぎない。実際、クルアーンには礼拝、断食、巡礼といった儀式的行為が多くの箇所で記されているが、それらの行為が言及される箇所において、一度たりともそれらを実行しなかった場合の現世的な罰が明記されていることはない。以下のクルアーンの節は、宗教に関していかなる強制も拒否されるべきであることを示している。

バカラ章 2-256：宗教において強制はない。確かに、正当性と誤りは明確に分かたれている。なので、邪悪の中心たる力を否定し、神を信じる者は、決して壊れることのない堅固な取っ手にすがった者である。神は聞き、知っておられる。

イスラー章 17-15：正しい道を歩む者は、自らのために正しく歩む。迷う者は、自らの不利となるように迷っている。いかなる罪人も、他人の罪を背負うことはない。

ガーシヤ章 88-21：訓戒せよ。あなたはただ訓戒を与える者である。22：あなたは、彼らに対して強制する者ではない。

8-3 統治の原則

クルアーンは、政治体制について詳細な記述をしていない。歴史上実施されたカリフ制にも、現代において採用されている大統領制や半大統領制にも類似する体制がクルアーンに描かれているわけではない。クルアーンにおいて語られている内容だけでなく、語られていない内容も重要である。この点については、本章の最後に扱う「クルアーンの意図的沈黙」という項目で触れる。クルアーンがもし、当時のアラブ部族に類似する統治体系を宗教的命令として定めていたとすれば、それはクルアーンがその時代の影響を受けて人間の手で書かれた書物であることを意味してしまう。そのような場合、急速な拡大によって生じた新たな状況や、現代のように技術の進歩が政治構造に影響を与える時代において、それなりに大きな困難が生じていたであろう。クルアーンは詳細な政治構造を命じることなく、変化する条件や状況に応じてムスリムたちが自らの統治方法を定めることを可能にしている。当然ながら、そのような状況では、統治構造を形成する者たちは自らの構築した体制の長所と短所の責任を負うことになる。とはいえ、クル

アーンが統治に関して完全に沈黙しているわけではない。クルアーンには、あらゆる時代に適用可能な統治原則が存在する。本節では、それらの一部を取り上げる。

1. **正義：**前述のとおり、正義の原則は人生の他の領域と同様に、統治においても極めて重要な原則である。政治体制の形態やその時代背景がいかに異なっていても、正義の原則は決して変わってはならない。

ムムタヒナ章 60-8：神は、公正な者たちを愛する。

2. **慈悲：**クルアーンには、人々が互いに慈しみをもって接するべきであるという多くの節が存在する。この原則は、支配者が被支配者に対してとるべき重要な統治原則でもある。クルアーンには、ムスリムたちにとって「美しい模範」であるムハンマドの慈しみ深い姿勢が描かれており、彼が政治的リーダーでもあったことから、後世の全ての指導者にも適用されるべき原則である。

アリ・イムラン章 3-159：あなたは神の慈悲によって彼らに対して柔和に接した。もしあなたが粗暴で冷酷な心の持ち主であったなら、彼らはあなたのもとから離れ去っていただろう。もう、彼らを赦し、彼らのために神の赦しを乞い、また事を決する際には彼らと協議せよ。そして、一度

決断し決意したならば、ただ神に信頼せよ。誠に神は、信頼して依拠する者を愛される。

アラフ章 7-199：赦しを心がけ、適正な事柄を命じ、無知な者たちからは顔を背けよ。

3. 協議：クルアーンは、統治における「協議」を非常に重要な原則として提示している。啓示を受けたムハンマドでさえ、この原則の例外ではない。歴史上、多くの支配者が権力を握ると独裁的になり、権力を集中させる傾向を示し、最も軽視した原則のひとつが「他者への相談」であった。もしムハンマドが自らクルアーンを書いていたとすれば、自分に他者と相談することを命じるような節を含めるとは考えにくい。上述のアリ・イムラン章 159 節では、ムハンマドの慈み深い態度に加え、「事柄について彼らに相談せよ」と記されており、ムハンマド自身もこの原則の例外ではないとされている。ゆえに、いかなる者も他者との相談を無視して、勝手に人々を支配することは許されない。

シュラー（相談）章 42-38：彼らは、主の呼びかけに応じ、礼拝を守り、彼らの間の事柄を協議により決定し、われが彼らに与えたものから施しをする。

4. 信託されたものをその担い手に託すこと：統治において守るべき他の重要なクルアーンの原則は、「信託されたものをその担い手に託すこと」である。歴史上、また現代においても、この原則が軽視されたために多くの社会が大きな損害を被ってきた。管理職や権限のある地位に、親族、同郷人、利害関係者などを据えるような傾向は、社会に大きな損失をもたらす。統治機構における職務は重大な責任であり、それらの職に、最も有能で、誠実で、職務を最も適切に遂行できる、すなわちその職にふさわしい人物を任命することは、社会全体の利益にかなう。

ニサー章 4-58：まことに神は、信託されたものをその担い手に託すこと、そして人々の間を裁くときには公正をもって裁くことを命じておられる。神はいかに優れた訓戒をなされることか。まことに神は聞く者、見る者である。

5. 言語および人種差別の否定：歴史を通じて、特定の言語を話す者や特定の人種に属する者が劣った存在として扱われてきた。クルアーンが啓示された時代およびその後何世紀にもわたって、言語や人種による差別によって多くの人々が抑圧されてきた。クルアーンは、言語や人種の違いを差別の根拠ではなく、むしろ多様性として提示している（この原則は前述の公正の原則の中に含まれるが、その重

要性ゆえに別項目として強調される）。言語や人種による差別をしないことは、個人にとっても、国家のような政治構造にとっても守るべき重要な原則である。

ルム章 30-22：神のしるしの一つは、天と地を創造されたこと、そしてあなたがたの言語と肌の色が異なることである。まことにこれには、知る者たちへの教訓がある。

6-調停的であること：統治者がクルアーンから導き出すべきもう一つの原則は、対立を煽るのではなく、調停的であることである。一部の統治者たちは、社会的な階層や集団を互いに対立させることにより、それらを弱体化させ、結果として支配しやすくしようとしてきた。しかし、クルアーンが示す理想的な姿は、和解し、団結している共同体である。分裂状態は、理性を欠いた行為の結果として描かれている。

ハシュル（集合）章 59-14：あなたは彼らが一つにまとまっていると思うが、実際にはその心はバラバラである。これは、まさしく彼らが思慮のない民であるためである。

7-賄賂を与えないこと：多くの社会を蝕み、崩壊させる最大の問題の一つは賄賂である。クルアーンはこの点についても明確な警告を与えている。賄賂が通用しない社会を築こうとする行政は、クルアーン的原則に適った方向に歩んでいると言える。

バカラ章 2-188：互いの財産を不正にむさぼってはならない。また、人々の財産の一部を罪を犯してまで不正に得ようとして、裁定者に賄賂を渡してはならない。

8-4 戦争倫理

クルアーンは、人命を奪うことを最大の禁忌の一つとして明確に禁止している。とはいえ、イスラムを滅ぼし、ムスリムを無差別に殺そうとする者たちが存在してきた。現実的な宗教であるイスラムが、望ましくはないが時として避けられない戦争に関する教えを提示していることは、非常に重要である。仮にクルアーンにおいて戦争が「殺すことが許される例外的状況」として示されていなかったなら、イスラムは完全な平和主義を擁護する宗教であり、ムスリムは自身を殺そうとする者たちにすら抵抗してはならないという結論が導かれていたかもしれない。イスラムを抹殺しようとし、子どもや高齢者をも区別せずムスリムを殺害しようとする者たちに対して抵抗しないことこそ、倫理的

に問題がある行為である。国際法においても、自衛権は人間にとって最も自然な権利とされている。例えば、国際連合憲章第 51 条においては、攻撃を受けた国家に自衛の権利があると明記されている。クルアーンは戦争を完全には否定しておらず、むしろ相手側からの侵略がある場合には、戦うことを認めている。このアプローチにおいては、「殺すために来た者たちを殺す」ことが必要とされている。

ハッジ章 22-39：不当な扱いを受けたために、戦いをしかけてきた者たちに対して戦う許可が与えられた。確かに神は、彼らを助ける力を持つ。

一部の者たちは、クルアーンの節を文脈から切り離して読み、相手側からの戦闘開始に対して与えられた戦争の許可を、あたかもムスリムが異教徒を無差別に殺して良いという証拠であるかのように解釈しようとした。その中でも特に誤用されているのが、以下の節である。

タウバ章 9-5：神聖なる月（4 ヶ月の猶予期間）が過ぎたなら、多神教徒を見つけ次第殺せ。彼らを捕らえ、包囲し、あらゆる通路を封鎖せよ。

しかし、この節を属している章全体の文脈で読めば、この命令が全ての非ムスリムに対してではなく、ムスリムと戦っており、かつ条約違反を犯した特定の集団に対するものであることは明らかである。

タウバ章 9-1：これは、多神教徒のうち、あなた（預言者）と条約を結んだ者たちに対する、神とその使徒からの決定的な警告である。

さらにタウバ章の後続の節からは、語られている相手が戦争を開始した者たちであることが明白である。

タウバ章 9-12：そしてもし彼らが条約を結んだ後に誓いを破り、あなたの宗教に敵意を抱いて攻撃してくるならば、不信者の指導者たちと戦え。なぜなら彼らには誓いというものがない。もしかしたら思い直すかもしれない。

13：誓いを破り、使徒をその土地から追放しようとし、あなた方に対して最初に戦争を始めたその集団と戦わないのか？彼らを恐れるのか？もし信じているならば、あなた方が恐れるべきは神のはずである。

クルアーンに一貫した解釈学的アプローチをとるために最も重要な原則は、クルアーンの全体性を考慮し、各節をその前後関係と共に評価することである。このようなアプローチによって、戦闘の許可が相手側の攻撃に依存していることが明らかとなる。また、クルアーンは開始された戦争が度を超えないように行われるべきであることも助言している。

バカラ章 2-190：あなた方と戦う者に対して、神の道のために戦え。ただし、度を超えてはならない。神は度を超える者たちを愛さない。

戦争倫理を研究する者たちは、現代戦争倫理の研究において、戦争の開始条件だけでなく、その遂行方法（jus in bello）にも重点が置かれていることを確認する。戦争は正当な理由で開始されたとしても、その中で不当な行為が行われることがあるし、正当とは言えない理由で始まっても公正に遂行されることもある。クルアーンが戦争の許可を相手側の攻撃に依存させているだけでなく、戦争が始まった後もすべての手段が正当化されるとは述べていないこと、むしろ「度を超えるな」と助言していることは、jus in bello（戦争遂行の正義）を考慮する上で重要である。クルアーンは、攻撃してこない者に対しての戦いを禁じ、

戦争中の度を超えた行為を戒めるだけでなく、相手側が戦意を失い和平を望んだ場合には、平和を選ぶことも勧めている。

バカラ章 2-193：迫害がなくなるまで彼らと戦え。だが、彼らがやめたなら、もはや不正を行う者に対して以外は敵意を抱いてはならない。

アンファール（戦利品）章 8-61：もし彼らが和平に傾くなら、あなたもそれに傾き、神を信頼せよ。

平和の維持と戦争の回避のためには、双方が合意に至り、その合意条件を遵守することが重要である。クルアーンはこの点についても沈黙せず、ムスリムにとっての重要な原則を提示している。イスラムにおける「他者」、特に「敵」とのコミュニケーションに対する見解を理解することは極めて重要である。ムハンマドは、自らとイスラムを抹殺しようとした多神教徒たちとフダイビーヤの和議を結び、周囲のムスリムたちが不満を持っていたにもかかわらず、この条約を実行に移した[122]。多神教徒側が条約を破ったとき、ムスリムたちもそれに従って条約の履行を中止したが、条約を守り続けていた多神教徒に対しては、条約に

[122] Muhammed Hamidullah 著, “Hudeybiye Antlaşması” maddesi, Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, c 第 18 巻, 出版元：Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, İstanbul, 1993, p. 297-299.

従って生活し続けた[123]。このことは以下の節に明確に示されている。

タウバ章 9-4：だが、多神教徒の中でも、あなたがたと条約を結んでおり、その条約から何も欠かさず、あなた方と対立せず誰にも援助しなかった者たちは別である。そうした者たちとは、条約期間が終了するまでその条約を完全に履行せよ。確かに神は、慎む者を愛される。

クルアーンにおいて、ムスリムたちが自らの言葉や誓いを守ることを勧めている節は、ムスリムが締結した条約を誠実に守ることの重要性を示す点で意義深い。以下の節はその一例である。

イスラー章 17-34：約束を守れ。なぜなら約束は責任であるからである。

ムスリムが結んだ条約を守ることは、他のムスリムを援助する際でさえも、それより優先されるべきであるとクルアーンは述べている。これに関連する二つの節は次の通りである。

[123] Elmalılı M. Hamdi Yazır 著, Hak Dini Kuran Dili, 第 4 巻, Zehraveyn, p. 278-279.

ニサー章 4-90：ただし、あなた方との間に条約のある民に身を寄せた者、または、あなた方とも自分の民とも戦いたくなくて胸が苦しくなり、あなた方のもとに来た者は別である。神が望まれたなら、彼らをあなた方に差し向けて、彼らはあなた方と戦ったであろう。だが、もし彼らがあなた方から身を引き、戦わず、和平を望むならば、神はあなた方に対し、彼らに敵対する道を設けられない。

アンファール章 8-72：本当に、信仰し、聖遷し、神の道のために財産と命をかけて戦う者たちと、彼らを受け入れて援助する者たちは、互いに守り合う者たちである。信仰したが聖遷しなかった者たちに対しては、彼らが聖遷するまでは、あなた方には彼らを守る責任はない。ただし、宗教上の理由であなた方に援助を求めてきた場合、それはあなた方の義務である。ただし、それはあなた方との間に条約のある民と対立するものであってはならない。神は、あなた方の行いを見ておられる。

クルアーンが条約に対して強調している重要性は、十分に理解されてこなかった。クルアーンの諸節からは、預言者に敵意を持つ者たちとさえも条約が結ばれ、ムスリムたちがその条約の条件を遵守していたことが分かる。ここから導き出される原則は、ムスリムたちが「条約を結ぶこともできない」と主張できるような敵は存在しないという点

である。敵が誰であるかは、条約を結ばない理由にはならない。

　要するに、クルアーンから導かれる戦争倫理に関する重要な原則は次のとおりである。相手が攻撃してこない限り戦争を開始しないこと、戦争を無法に進めないこと、相手が和平を望むならば戦争を続行しようとしないこと、そして条約を順守することである。ムスリムたちが力を持っていたメディナ時代においても、これらの原則に反する啓示は一切下されていない。一部のムスリム支配者が、弱小国家を征服して戦利品を得るために「ムスリムでないこと」を戦争の理由としたことは事実である。世界中の多くの国家がそうであったように、ムスリム多数の国家においても、その支配者たちは機会主義的な態度をとり、宗教的かつ道徳的な原則を利害のために無視してきた。しかし本書で私たちが関心を持つべきは、歴史においてムスリムたちが何をしてきたかではなく、イスラムが何であるかという点である。私たちがムスリムである理由は、ムスリムたちの行動ではなく、イスラムの本質に由来する。イスラムが平和を重視し、戦争倫理に関して研究する者たちが評価するような倫理的原則を掲げていることは明白である。イスラムがある時代や特定の人々の利益のために作られた宗教であったならば、これほどまでに普遍的な原則を設けることは期待されなかったであろう。イスラムが勢力を持っていた時代においても、多神教徒に対してあらゆる手段が正

当化されるとか、彼らが戦争を始めなくても多神教徒であること自体で滅ぼされ得るとか、戦争においてムスリムが好き勝手にふるまってよいとか、彼らの財産を奪ってよいとか、結んだ条約は一切無効であるといったことは主張されなかった。戦争倫理の観点から、歴史のいかなる時代においても通用する原則がクルアーンによって定められ、それはムハンマドによってその時代に応じて実践されたのである[124]。

8-5 弱者を守る

イスラムは、抑圧された者、力のない者、困窮する者の側に立ち、弱者に不利な現状を打破する革命的な宗教である。クルアーンの啓示は、貧者、女性、奴隷など、弱い立場にある人々の状況改善に寄与した。ニーチェによれば、宗教が弱者の側に立つことは「奴隷道徳（slave morality）」であり、宗教の否定的な側面の一つである。ニーチェが批判の対象とした「宗教」はキリスト教であったが、弱者保護に関する彼の指摘は、イスラムにもある程度当てはまる。イスラムは「弱者であること」を神聖視せず、弱者の境遇を改善するための定めを設けた。事実、イスラムとキリスト教に次いで信者数の多いヒンドゥー教は、多くの人々を抑圧された弱者の状態に留めるカースト

[124] 本性を執筆するときに活用した次の拙著で、このテーマをより包括的に読まれたい。Caner Taslaman 著, Terörün ve Cihadın Retoriği, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2020.

制度を正当化する上で、重要な役割を果たしてきた。もしムハンマドが宗教を捏造していたとすれば、自身の属する性別や階層を優遇し、またイスラムの最初の受容者たる上流階級が容易に受け入れるような宗教を創ったはずである。しかし、ムハンマドは自由な男性でありながら、女性や奴隷の地位を改善した。また、啓示の最初の受け手であったメッカやメディナの指導者層の多くは、クルアーンの弱者保護の教えを理由に、イスラムから距離を取った。イスラムは、彼らの気に入るような教えではなく、弱者を保護し、高める普遍的な原理を提示したのである。まず、貧者の境遇改善に関する多くのクルアーンの節のうち、以下の二つを例として挙げる。

タウバ章 9-60：施しは、神の命によって、貧者、困窮者、施しを配る者たち、心を引き寄せる者たち、奴隷、負債を抱える者、神の道のために戦う者、旅人に限って与えられる。神は全てをご存知であり、英知あるお方である。

ファジュル（暁）章 89-17～18：いや、あなた方は孤児を丁重にもてなさない。

18：貧者に食事を与えるよう互いに勧め合うこともしない。

クルアーンは、貧困を受け入れるべき現実として描いたのではなく、多くの節において、信仰者たちが貧困の克服のために積極的に努力し、自らの財から貧者に分け与えることを命じている。クルアーンは、いかなる抵抗にも関わらず、貧者に食を与えることを信者たちに重要な義務として課している。それに対する不信者の抵抗は、以下の節に見ることができる。

ヤー・スィーン章 36-47：「神があなた方に与えた糧の一部を施せ」と言われると、不信者たちは信者にこう言った。「神が御心であれば養われる者たちを、我々が養わうというのか？まったくあなた方は明白な迷妄の中にいる。」

イスラムの登場によって、女性たちは家系や社会的地位に関係なく、社会の一員として認められるようになり、かつて男性にしか認められていなかった多くの権利を、宗教的かつ法的に自由に享受することが可能となった。イスラム初期の時代を見れば、今日一部の人々が抱く「受け身なムスリム女性」というイメージとは全く異なり、女性たちはあらゆる分野で積極的に活動しており、社会で目に見える存在として生活していたことが分かる。ムハンマドの時代において、女性たちは公共の中心であるモスクや礼拝に

定期的に参加し、男性と接する職業に就き、商業活動を行い収入を得ていた。また、男女問わず教育を行い、戦場の後方支援として兵士を助け、傷病者の世話をするなど、積極的な役割を担っていた。さらには勇敢に戦争に参加した記録も存在する[125]。クルアーンは、男女の関係を「相補的な存在」として描いている。

バカラ章 2-187：彼女たちはあなた方にとっての衣であり、あなた方も彼女たちにとっての衣である。

タウバ章 9-71：信仰する男性と信仰する女性は、互いに助け合う仲間である。

イスラムは、当時どの社会にも見られなかった権利と自由を女性に与えた。女性は望む相手と結婚でき、遺産を受け取る権利があり、自由に財産を所有し働くことができるようになった。結婚時に渡される婚資（マフル）も、家族ではなく女性自身が受け取ることが認められた。しかし、これらの女性の権利の多くは、後に社会が古い伝統に回帰することで失われていった。イスラム以前の無知の時代（ジャーヒリーヤ）の慣習に加えて、新たに征服された地域の女性蔑視的な文化（例：ビザンツやササン朝ペルシ

[125] 女性に関してクルアーンがもたらした視点について解説し、論争となっている問題を取り上げた著作として次の著作を参照されたい。Caner Taslaman, Feryal Taslaman 著, İslam ve Kadın, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2020

ャ）が「イスラム」の名の下に影響を及ぼすようになった[126]。こうした女性蔑視の慣習がイスラム文化に入り込み、規範と見なされるようになった結果、それが「イスラムそのもの」と誤解されるようになった。そして、一旦「イスラム」として定着すると、もはや変えることができない定めとなってしまった[127]。さらに、ほぼ全員が男性であった影響力のある神学者たちが、自らの性別を基準に解釈を行ったことで、徐々に旧来の制度が復活し、女性たちは本来の権利を失っていった。預言者の死後に始まったこの退化を、次のアブドゥッラーフ・イブン・ウマルの伝承（ブハリ収録）はよく表している。

「預言者の時代には、女性たちについて何らかの啓示が下されることを恐れて、我々は彼女たちに手も口も出さぬよう慎んでいた。だが預言者が亡くなると、我々は口と手を向け始めた[128]。」

クルアーンが女性に認めた多くの権利が、ムスリム社会で実際に認められていないというのは事実である。しかし本稿の焦点はムスリムの行為ではなく、イスラムが本来どういうものであるかにある。私たちがイスラムに対して取るべき態度は、ムスリムの行為によってではなく、イスラムそのものが何であるかによって決定されるべきである。

---

[126] Melanie Mejia 著, “Gender Jihad: Muslim Women, Islamic Jurisprudence and Women’s Rights”, Kritike, vol. 1, no. 1, June 2007, p. 3.

[127] John Esposito 著, “Women’s Rights in Islam”, Islamic Studies, vol. 14, no. 2, 1975, p. 99

[128] ブハリ’’Nikah’’, 80

クルアーンが啓示された時代には、メッカ、メディナ、その周辺地域、さらには世界の多くの地域で、奴隷制度（女性奴隷は「ジャーリヤ」と呼ばれる）が広く実施されていた。借金の返済ができなかった者、戦争で捕虜となった者、その他の理由で多くの人々が奴隷とされていた。このような奴隷制度が一般的だった時代にあっても、クルアーンには自由な人間を奴隷にすることを認めた節は一つも存在しない。既に奴隷とされていた者たちを解放することは、クルアーンにおいて明確な目標とされている。例えば、ある種の罪の償いとして、奴隷解放が義務づけられている。奴隷解放が第一の方法として挙げられている例には、過失による殺人（ニサー章 4-92 節）、忌まわしい風習「ズィハール」（ムジャディラ章 58-3）、故意の誓約破り（マイダ章 5-89）がある。このうち、過失による殺人とズィハールにはまず奴隷解放が求められており、それができない場合に限り他の手段が認められている。誓約破りの場合には、奴隷解放は複数の選択肢の一つとされている。また、過失殺人の例では、「信仰を持つ奴隷」の解放が条件となっているが、他の例ではそのような限定はない。このような定めを実施するだけでも、社会から奴隷を一掃するのに十分である。だがクルアーンはこれにとどまらず、最も重要な宗教行為の一つであるザカート（喜捨）の使用目的としても、奴隷解放が明記されている。先に引用したタウバ章 9-60 節に加え、バカラ章 2-177 節も同様

である。さらに、クルアーンは奴隷解放や飢餓に苦しむ者の救済を、人々が克服すべき課題として掲げている。

バラド章 90-12：険しい坂とは何かを知っているか。13：それは人間を自由にすることである。

14：あるいは飢饉のときに食物を与えることである。

15：近しい孤児に。

16：または地に這うような貧者に。

　一部の人々はクルアーンがなぜ奴隷制について言及しているのかと問う。しかし、クルアーンは貧困について語るのと同じ理由で、奴隷制についても語っている。バラド章において極度の貧困が奴隷制と並べて語られていること、またザカート（喜捨）の受給対象として貧者と奴隷解放が並列されていることを思い出すべきである。奴隷制も貧困も、「さあ、なくそう」という宣言だけで消え去るものではなく、実際的な取り組みと個人の経済的犠牲が求められる。クルアーンはこの問題に関する実践的措置を提示し、それが実行された場合には奴隷制を消滅させ得る行為を礼拝行為として示している。

　もしクルアーンが奴隷制に一切触れなかったならば、奴隷解放を義務づけ、奨励するような定めは存在しなかった

であろう。その結果、これは確実に奴隷の不利益となったはずである。仮にメッカやメディナのムスリム社会において、奴隷制を単なる宣言で廃止したとしても、ユダヤ教徒、キリスト教徒、ゾロアスター教徒、または多神教徒が形成する他の社会では奴隷制が継続していただろう。ムスリムたちが奴隷を自らの社会に受け入れなければ、彼らはザカートを奴隷解放以外の目的に用いたであろうし、贖罪の際にも他の選択肢を取るようになったであろう。その結果、またしても奴隷が損を被るのである。なぜなら、自らを解放する行為が礼拝行為とされているムスリム社会の中にいることは、奴隷にとって利益となるからである。（ムスリムたちが歴史の中で、クルアーンのこの問題に関する規定を適切に実践しなかったのは、遺憾ながら事実である。）当時現在のような国際関係が存在しなかったことを考慮すると、奴隷制の廃止を世界的に実現することは不可能であったことは容易に理解できる。今日においてその可能性があるならば、それを実行すること、あるいはそれを行う国際機関（国連など）を支援することは、バラド章で掲げられた目標の実現に他ならない。

さらに理解すべきことは、自由を奪われた者とは単に「奴隷」と呼ばれる者に限らないという点である。現代においても多くの人々が、経済的困窮や性的搾取によって、名目上は「奴隷」と呼ばれなくとも実質的に奴隷のような生活を送っており、自由意思を行使できずに、強制的に労

働させられたり、性奴隷にされたりしている。この分野で真剣に活動している国際労働機関（ILO）やウォーク・フリー財団（Walk Free Foundation）などによれば、現在、強制結婚・売春・強制労働に苦しむ「現代奴隷」は約4000万人存在する[129]。その約70%は女性である。歴史上最も奴隷の数が多い時代は、実は私たちが生きている現代であると主張する者もいる。これらの人々をこの境遇から救うために支出することも、クルアーンが指し示す「自由を奪われた者たちへのザカート」に該当する。彼らを解放するための努力は、クルアーンの定める「奴隷解放の贖罪」の範囲内であり、その改善のためのすべての取り組みは、バラド章が掲げる目標の実現に向けた奮闘努力である。

また現代には、表面的に強制されていなくても、貧困ラインの中で極めて劣悪な条件で働かざるを得ない何億人もの人々が存在するが、果たしてその人々がどれだけ「自由」であるかも疑問である。これは本書の想定された分量を超える議論であるため、ここでは深入りしない。アメリカで奴隷制が廃止された時期、奴隷階級の一部は産業革命後に誕生した労働者階級に組み込まれ、以前よりも劣悪な環境で労働を強いられるようになったという。史料には、解放された後に飢えを避けるために元の主人の下へ戻った奴隷の話も見られる。労働者階級がまだ形成されていなか

[129] https://edition.cnn.com/2017/09/19/world/global-slavery-estimates-ilo/index.html

った時代において、何の資産も持たずに解放された奴隷がどのように生活を維持するかという問題は非常に重要である。そのため、奴隷を解放することと同時に、彼らの最低限の生活保障を計画することも必要である。クルアーンは奴隷への支出を礼拝行為と位置づけ、実践的かつ効果的なモデルを提示したのである。ここで重要であり、見落とされがちな点は、クルアーンは決して自由人を奴隷化することを許していないということである。だが残念ながら、イスラム世界では征服地の人々がムスリムによって奴隷にされてしまった。だが以下の節に示されているように、戦争後の捕虜に関しては、「身代金を取る」か「無償で解放する」という二つの選択肢が提示されており、奴隷化という選択肢は存在しない。

ムハンマド章 47-4：不信者と戦闘になったときは、彼らの首を打て。彼らを打ち負かし、制圧したならば、捕虜をしっかりと拘束せよ。その後は、恩赦により解放、または身代金により解放せよ。神が望めば、彼らに直接罰を与えることも可能であった。だが戦いは、あなた方を試すためである。神の道のために命を落とした者たちの行いは決して無駄にはならない。

クルアーンは、戦闘が終わった後の捕虜に対して、1：恩赦による解放、2：身代金による解放という二つの選択肢しか提示していない。ここには「奴隷化」という選択肢は存在しない。他のどの節においても奴隷化は許されていない。クルアーンから戦争による奴隷化は導き出せないし、ムハンマドがバドルの戦い、フナインの戦い、メッカ征服において実践した内容も、上記のムハンマド章の節と一致している。預言者はこれらの戦いにおいて、捕虜を身代金付きで、または無償で解放した[130]。これらの勝利で大きな経済的利益を得るはずだった奴隷化という手段を取っていない。したがって、ムハンマド章の節に反する伝承はどれも、預言者がクルアーンに反する行動をとることはあり得ないため、退けられるべきである。

クルアーンの、ザカート（喜捨）や贖罪により自由を得させるための命令や勧告を実行すれば、イスラム社会の中で奴隷制はなくなったであろう。奴隷は飢餓の危険にさらされることなく自由社会に統合されたであろう。だが、ムスリムはクルアーンから導き出されない奴隷化を正当なものと見なしたため、イスラム世界において奴隷制は続いた。

要するに、クルアーンは自由を失った者の自由回復を目指し、さまざまな罪の償いをこの分野に結びつけ、ザカー

[130] İsrafil Balcı、預言者の生涯に関するノート（未出版）

トの施し先の一つとしてこの領域を定め、自由な者でない者を自由にすることを目標として掲げている[131]。クルアーンは貧しい者、女性、奴隷（自由を失って「奴隷」と呼ばれない場合もこの範囲に含む）の状況改善を目的とした節を含んでいる。長い歴史の中で不正を受け、虐げられ、弱い立場に置かれたこれらの層の状況改善に貢献することは、イスラムの多くの美徳の一つである。もし弱者の状況改善が必要だと考えるなら、ムスリムになる理由がもう一つあると言える。

8-6科学的思考と動機付け

「クルアーンと科学の関係」と言うと、主にクルアーンの内容が科学理論と共に評価されることを思い浮かべる。例えばビッグバンや進化論がイスラム信仰の観点からどう評価されるかが思い浮かぶ[132]。あるいはクルアーンの節に宇宙の膨張や胎児の発育段階が示されているかなど、クルアーンの表現が科学的発見と比較されることが想像される。これらの問題はイスラムと科学の関係の観点から重要であり、私も長年研究しているが、本稿ではこれらを焦点にしない。ここではクルアーンが作り上げた思考構造が科

[131] Caner Taslaman, Feryal Taslaman 著, İslam ve Kadın, p. 150-158.

[132] この件に関して、次の拙著を参照されたい。Caner Taslaman 著, Big Bang ve Tanrı, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2020; Caner Taslaman 著, Evrim Teorisi, Felsefe ve Tanrı, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2020; Caner Taslaman 著, Bir Müslüman Evrimci Olabilir Mi?, 出版元：Destek Yayınları, İstanbul, 2018.

学活動にどれほど適しているか、またクルアーンがその動機付けをどの程度与えているかを簡潔に示す[133]。クルアーンが啓示された時代と地域では、科学研究の価値を認める文化的土壌は存在しなかった。現代のように科学知識が技術生産を支え、金と力に変わることは理解されていなかった。多くの人々にとって科学的努力は腹を満たさない無意味な試みであり、その分野で労力を費やす合理的理由は見出せなかった。そうした環境でクルアーンは多くの節で科学を志すに適した思考を作り出し、その動機付けを与えた。科学的努力の人類にとっての重要性が理解される現代において、７世紀のクルアーンのこの構築と動機付けの価値はさらによく理解される。また、科学活動に不可欠な記述文化への移行をクルアーンが非常に弱い記述文化の地域で促進したことも重要だが、ここでは詳細を述べない。

クルアーンは科学的活動をする際において思考様式に存在する既成概念を支持する。「既成概念」という概念は一部には条件付けや客観性欠如の否定的意味で使われるが、ここでは否定的な意味ではなく、科学活動を支持する思考の状態に関連づけて用いる。私たちは生活の中で一定の見解を身につけると、それが既成概念となり多くの事象をその枠組みで評価する。全ての事象でその既成概念を見直すことは不可能なので、以前得た一定の見解が後の事象評価

133 このテーマをより広く取り扱った文献として、本性を執筆する際に活用した次の拙著を参照されたい。Caner Taslaman, Enis Doko 著, Kuran ve Bilimsel Zihnin İnşası, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2020.

に既成概念として作用する。正しい既成概念は正しい評価を助けるが、誤った既成概念は後の誤り連鎖を誘発する。

ここでの分析は社会学的・心理学的・実用的・伝統的影響を離れて理想化できる思考がクルアーンの枠組みでどのような既成概念を得て動機付けを受けるかに関する。つまり、クルアーンが作り上げる合理的精神が持つ既成概念と動機付けを探るのが目的である。クルアーンのメッセージを受け入れた者の心は一神教（ここではモノテイズムと同義）に基づく存在理解に形成される。この存在理解では神は唯一（ワーヒド）、永遠（アッワル）、合理的（アリーム、ハーキム）、非常に強力（カディル）、慈悲深い（ラフマーン）であり、すべての存在の創造と維持者である。この既成概念はクルアーンの一神教的存在理解の教えに支えられ、ユダヤ教やキリスト教など他の一神教とも多くの共通点があることも付記する。ここでは本書の予定分量を超えないために三つの既成概念だけを簡潔に述べる[134]。

第一に、クルアーンは宇宙が合理的で理解可能な構造であるという科学の重要な既成概念を支持する。もし宇宙が無秩序で混沌としていたり、その複雑さが人間の理解能力を超えていたなら、科学的活動は不可能であった。著名な物理学者アインシュタインは宇宙の理解可能性について「宇宙の本当の謎は、宇宙が理解可能であることにある…

[134] 拙著「Kuran ve Bilimsel Zihnin İnşası」で、7 つの既成概念を、それぞれより詳細に取り上げた。ここで伝えているのは、この本からの引用である。

その理解可能であるという事実は奇跡である[135]。」と述べている。他の科学者や哲学者も宇宙が合理的かつ理解可能な構造であることが科学を可能にする驚くべき事実であると指摘する。しかし多くの科学者は宇宙が合理的で理解可能であることを疑うことなく受け入れている。クルアーンは最も基本的なメッセージとして一神教的存在理解を示し、宇宙は合理的な神によって創造されたと伝える。クルアーンに散在する「アリーム」「ハーキム」といった神の属性から、神が合理的存在であることが理解される。クルアーンを読む全てのムスリムの思考様式は合理的な神によって創造された宇宙の観念で形成される。この者が科学に関心を持ち、観察や実験をするときにも、その思考の中にある宇宙観が離れないのは自然である。合理的な存在である神が創造した宇宙は合理的な存在によって理解可能であることは当然であり、不思議なことではない。しかし一神教の哲学に対する最も重要な競合者である自然主義（唯物論または無神論とも言える）の観点からは、宇宙が合理的で理解可能であることを期待する理由はない。宇宙に法則が存在しないことも可能である。論理的に宇宙に法則が存在しなくても矛盾はない。自然主義者の考え方では、物質の本質は合理性と無関係であるため、そのような存在物から合理的な構造が後から現れることや、もともとその特性を持つことを期待する真っ当な根拠はない。自然主義の枠

[135] Alice Calaprice 著, The Quotable Einstein, 出版元：Princeton University Press, Princeton, 1996, p. 197

組みでは宇宙が合理的構造であることを期待する理由がないが、合理的存在である神によって創造された宇宙とみなすムスリムや他の一神教徒にとっては驚くべきことではない。要するにクルアーンが形成する一神教の信者にとって宇宙が合理的で理解可能であることは期待されることであり、それはクルアーンの合理的な思考様式が形成された結果である。自然主義者も科学を行うときにその既成概念を持つことは可能である（そうでなければ科学は成り立たない）が、その既成概念を合理的に支持する根拠は自然主義の中には存在しない。

　第二に、クルアーンは宇宙の探究、すなわち科学が価値あるものであるという科学の重要な前提を支持する。宇宙を探究することが価値あることであり、この活動に時間や資源を割く価値があるというのは、科学活動を支えるもう一つの重要な前提である。もし宇宙の探究が価値あるものと認められなければ、それは科学活動に取り組む上で重大な障害となる。現代においては、科学が技術の創出において、ひいては生活を便利にする役割を果たしていることが非常によく観察されており、科学を重視する文化的構造が世界規模で広まり、政治体制も科学活動を支援しているため、宇宙の探究が必要である（これは科学を行うことが必要であることを意味する）が、これが容易に受け入れられる前提であるように見える。しかし、人類の歴史を振り返れば、そうではなかったことが容易にわかる。歴史的過程

で生じた多くの文化において、実用的な必要性を満たすこと以外に宇宙を探究するための真剣な奨励や資源の投入はなかった。人間の内から湧き上がる学習欲求は宇宙探究を支持しているとはいえ、この内面的な欲求はなぜ宇宙探究が価値あるのかを示す合理的な根拠を提供しない。全ての宗教的または哲学的見解が科学活動を支持するわけではないことにも注意しなければならない。例えば、宇宙や物質を悪い存在として捉える宗教的・哲学的見解の観点からは、宇宙探究活動を価値あるものと認めるのは困難である。歴史上、一部の宗教的・哲学的見解は、この宇宙の原材料である物質を悪しき存在とみなし、科学の前提に反して心的構造を形成してきた。しかし、クルアーンの文中には宇宙や物質を悪いものと考えさせる表現はなく、宇宙・物質の創造者である神が善き存在として紹介され、創造主が創り出した宇宙や物質を探究することが必要な活動として奨励されているため、この見解は宇宙や物質を探究することが価値あることであると支持する。世界人口の重要な部分に影響を及ぼす東アジアの宗教を考えてみると、その多くは外界、すなわち宇宙が客観的存在ではなく、宇宙は幻影であると主張している（有神論の中の一部の見解や、例えばスーフィズムの一部の流派でも同様の見解が唱えられている）。客観的でない存在や幻影のために資源や時間を割くこと、探究を価値あるものと考えることは合理的ではない。したがって、東アジアの多くの宗教が形成した精

神構造では、科学活動の成立に重要な「宇宙探究は価値ある」という前提は支持されない。しかし、クルアーンでは宇宙と地上が「真実」として創造されたとされ、宇宙を客観的存在と見なさず幻影と見る見解に対して反論がなされている。次のクルアーンの一節はこの点の例である。

アンカブート章 29-44：神は宇宙と地上を真実として創造した。これには信じる者のための証拠がある。

　クルアーンの多くの節では宇宙の現象がクルアーンの主張を裏付けるものとして示されている。これらの節は宇宙探究が価値あるという前提を支持している。したがって、宇宙の現象は神の存在、力、知識を理解するために探究する価値がある。

第三に、クルアーンは宇宙についての知識を得るうえで観察が重要であるという科学の非常に重要な前提を支持する。哲学史における一部の思想家は机上で得られる知識を重視し、観察的過程から有効な成果が得られるとは考えなかった。机上で哲学的議論を構築したり数学の定理を発展させることは可能である。哲学や数学のような机上で行える研究も価値がある。しかし、それ以上に進まず観察中心の科学が行われなければ、宇宙の現象に関する知識は非常に限定的なままにとどまる運命にある。観察的かつ実験的

方法がなければ、化学の周期表も、太陽の内部構造も、細胞のオルガネラの発見も不可能であっただろう。科学の恐らく最も重要な方法である実験とは、実験室条件下で体系的に行われ、必要に応じて繰り返し可能な観察である。実験が有効な方法であるという信念は基本的に二つの前提に基づいている。第一に、観察は宇宙を理解するうえで信頼できる情報源であるということである。観察を情報源として認めない者は、体系的な観察である実験も重要な方法とみなせない。第二に、「自然法則の普遍性」である。実験室の条件下で行われる観察が自然界の過程を理解するうえで重要であるという考えは、自然法則が実験室でも等しく有効であるという仮定に基づいている。これが「自然法則の普遍性」という前提（ここでは触れないがクルアーンの内容が支持する他の前提の一つ）である。実験的方法の最も重要な前提である結果の再現性の原則もまた、「自然法則の普遍性」という前提の下位にある自然法則が時間とともに変わらず常に有効であるという前提の結果である。したがって、これら二つの前提を持つ心は、実験を有益かつ重要な活動とみなすであろう。今日、科学に従事する全ての者が宇宙の現象を観察し、必要ならば実験室の条件下で実験を行いその結果を観察することが科学における最も基本的な情報の源であると認めている。しかし、人類史を通じて知識を得るうえで観察がこのような中心的役割を果たしてこなかったことを科学史の書籍から学ぶことができ

る。古代ギリシアの多くの重要な思想家は、実用的な知識を提供する有用性を除けば、観察的過程の価値を十分に評価しなかった。哲学史における特別な位置を占める有名な哲学者プラトンがその好例である。プラトンによれば、得るべき重要な知識とは変わらず、永遠で、完璧なプラトン的イデアの知識であり、この知識は純粋な思考によってのみ得られ、観察はこの点で助けにならず、むしろ誤らせることがある[136]。

クルアーンには、それが神によって啓示されたとされているものの、「この書から宇宙に関するすべてを学べ」とは述べられていない。むしろ、クルアーンは信仰者に対して宇宙の現象を観察し、そこから結論を導き出すよう促している。クルアーンは、確信的な文体を用い、これらの観察を自らの権威に対する脅威とは見なさず、逆に、理性を働かせ、観察によって得られる知識を自らの主張を裏付けるものとして提示している。宇宙における現象を観察し結論を導くことを勧める節として、以下の２つの節が挙げられる。

アンカブート章 29-20：言え、「地上を旅して、創造がいかに始まったかを見てみよ」

[136] Platon 著, Republic, 訳者： R. Allen, 出版元：Yale University Press, Yale, 2006, 479e-484c

ユースフ章 12-105：天と地には多くの印があるが、人々はそれらを無視して通り過ぎるのみである。

第一の節では、地上にある現象を調査することによって創造についての知識を得るように勧められている。第二の節では、地上の印を調べようとしない者たちが批判されている。これらとこれらに類似した節を読む者は、クルアーンを読めば宇宙の過程に関する全ての詳細が学べるとは解釈せず、むしろ、宇宙の現象を観察し分析することで得た知識が役立つと理解するであろう。要するに、クルアーンは、神話や伝統に染まった旧来の思考を解き放ち、宇宙の現象を観察することを価値ある行為として位置付けるような思考様式を構築するのである。これはすなわち、「宇宙に関する知識を得るには観察が重要である」という、科学にとって価値ある前提の形成を支えるものである。

ここでは取り上げていないが、別の研究において私が論じた、クルアーンの提示する別の重要な前提は以下のとおりである。第四の前提は、人間の理性が宇宙に関する正しい知識に到達可能であるという点である。もし理性が真実に到達することが不可能とされれば、科学的探究の意義は失われる。第五の前提は、科学の対象である宇宙が探究可能な構造を有しているということである。もし宇宙の構造が理解を許さないものであれば、科学的営為そのものが無

意味となる。第六の前提は、科学的に発見される法則が普遍的であるという認識である。もし科学者たちが、発見される法則が場所や時代によって変化するものと考えていたならば、その法則を見出そうとする努力は無意味となるであろう。第七の前提は、宇宙を理解するためには数学が重要であるという点である。もし数学を用いずに宇宙を理解しようとすれば、宇宙の本質に十分に迫ることはできず、過去や未来に関する予測も不可能となる。

　このように、クルアーンは科学を行うために必要な前提を整えた思考を築くと同時に、多くの節を通じて科学的活動を奨励し、必要な動機づけを提供するのである。動機とは、ある行為を行う理由を意味する。科学的営為も一つの行為であり、他の行為と同様に動機づけを必要とする。科学的営為は、食べること、飲むこと、睡眠といった基本的欲求を満たすために行われることもあれば、そうでないこともある。このような基本的欲求を満たすことを目的としない活動に、これほどまでの時間、労力、資源が注がれる理由は何かという問いが生じる。現代では、科学者に対して支払われる報酬、名声、称号や社会的地位などによって動機づけがなされている。だが、ここで注目すべきは、これらの動機の多くは科学に特有のものではないという点である。例えば、商業、スポーツ、政治といった分野においても、科学と同等かそれ以上の報酬を得ることが可能である。音楽、スポーツ、政治に携わる者が、科学者よりも多

くの名声を得ることもある。したがって、これらの動機は科学に固有のものではなく、科学を可能にするにしても、それを必然とするものではない。また、実用性や技術的必要性によっても科学は動機づけられる。これも正しいが、宇宙の起源や過去に関心を寄せるような基礎科学の分野は、このような実用目的では動機づけが困難である。こうした実利的動機は、主に工学の各分野において中心となり、基礎科学は工学的目標のために手段化される範囲においてのみ評価される。クルアーンを信じるムスリムにとって、これらの動機が存在することに問題はない。ムスリムの科学者も、科学的活動を通じて金銭やタイトルを得ることができる。科学によって現世的利益を得ることも可能である。だが、クルアーンが築く思考様式においては、これらよりも意味深い動機が存在する。それはすなわち、宇宙を理解するという行為が神の命令として提示され、その理解の営為が神の全能、知恵、芸術性を認識するための手段であるという動機である。このような動機は、他の現世的な利得が一切存在しない場合であっても、科学的営為を推進する力となる。さらに、この動機は実利的動機とは異なり、宇宙を理解しようとする営為、すなわち科学に特有のものであり、他の分野で代替可能なものではない。したがって、科学が快楽や現世的利益のための手段とならない領域においても、その営為は継続される。このことを理解し、クルアーンが宇宙理解を重視していることを把握して

いる理想的なムスリム社会にとって、科学を追求することは必然である。クルアーンが示す世界観においては、宇宙を最も洗練された形で理解しようとする営為である科学が、不可欠な位置を占めているのである。

クルアーンには、宇宙の現象を観察し、それらから結論を導くよう促す節が何百と存在する。堂々と述べることができるのは、主要な世界宗教の中で、これほどの頻度と強度でこのような奨励を行っているものは他にないという点である。クルアーンの数多くの節に見られるこの奨励を、多くのムスリムは見過ごしたか、あるいは表面的にしか実践してこなかったかもしれない。しかしながら、この奨励の最も洗練された実践形態が、科学的活動へと向かわせるものであること（それらの活動を行うこと、またその結果得られた知識を学ぶこと）は明白である。事実、973 年から 1048 年にかけて生き、当時の世界で最も優れた科学者の一人とされていたビールーニーは、「私が科学に取り組む理由はアリ・イムラン章 191 節である」と語っている。この節は以下の通りである。

アリ・イムラン章 3-191：彼らは立っているときも、座っているときも、横たわっているときも神を想起し、天地の創造について深く思索する。そして言う。「我らの主よ、あなたはこれらを無駄に創造されたのではありません。あ

なたは崇高であられます。我らを火嶽からお守りください。」

　ビールーニーが指摘したこの節と同様に、宇宙の現象を観察することを促すクルアーンの節は他にも多数存在する。その一例として以下が挙げられる。

ユヌス章 10-101：言え、「天と地にあるものを見てみよ。」だが、信じない人々にとっては、いかなる証拠も警告も無益である。

ナフル章 16-10：かれこそが、天からあなた方のために水を降らせた者である。それを飲むことができ、それにより家畜に食ませる植物も育つ。

11：それにより、あなた方のために穀物、オリーブ、ナツメヤシ、ブドウ、その他あらゆる種類の果実を育てる。確かに、思考する人々にとって、そこには証拠がある。

12：夜と昼、太陽と月をあなた方のために役立たせ、星々もかれの命令に従っている。確かに、理性を働かせる人々にとって、そこには証拠がある。

　クルアーンは、7 世紀当時、科学が重視されていなかった文化的環境において、思考を形づくる方法、また動機付

けの面において、科学的活動を支援した書物である。科学の重要性を真に理解する者であれば、クルアーンのこの特徴に感嘆せずにはいられないであろう。

8-7 環境意識

野望の達成を追い求める人類は、多くの場合、その野望のために他者に害を及ぼすことをいとわなかった。歴史を振り返ると、人に害を及ぼすことをいとわなかった人類が自然環境に害を及ぼすことにおいては、なおさらそうであったという多くの例が見られる。人間が自然の一部であることを考えれば、その自然に与えた損害の結果を過去の時代においても観察することは可能であった。例えば、緑地を破壊することが、自らに不利益をもたらす可能性があることを観察することはできたはずである。しかし、18 世紀から 19 世紀の産業革命以前には、人間が自然に与え得る損害の規模は十分に理解されておらず、「環境意識」と呼ばれるような概念に触れることもなかったと言ってよいであろう。環境保護運動の起源は、産業革命以後の過程にまで遡ることができるが、現代的な意味での環境保護運動は、1960 年代から 1970 年代にかけて本格的に始まった。環境保護運動は、大気汚染、水質汚濁、生物種の絶滅、地球温暖化、オゾン層の破壊、砂漠化、森林の消失といった問題に関心を寄せ、これらの問題に対する社会的な関心の

喚起や、必要に応じて法整備を行うために尽力してきた。医学の進歩により、大気および水の汚染が人間の健康に及ぼす影響や、多くの病気の原因となることがより明確に理解されるようになった。生物学者たちは、環境に対する損害が、取り返しのつかない形で多数の生物種を絶滅させていることを明らかにした。今日では、世界各国において多くの人々が真剣な環境意識を持ち、人間の野望の結果として環境に与えられる損害に対して懸念を抱いていると断言することができる。

現代において重要視されるようになった環境意識について、クルアーンは 7 世紀という「環境意識」という概念すら存在しなかった時代において、環境に配慮した思考を育むことを目指していた点が本論において重要である。この点に関して注目すべき節は以下の通りである。

ルム章 30-41：人々がその手でなしたことのために、陸にも海にも腐敗が現れた。彼らが行ったことの一部を味わわせる。彼らが悔い改めるように。

クルアーンは、人々と出会った時代と地域の問題に囚われた書物ではない。クルアーンが啓示された地域には海すら存在しなかった。しかし、上記の節では、人々の行為によって海に生じた腐敗に言及されている。7 世紀におい

て、たとえ海岸沿いに住んでいた人でさえ、目の前に広がる果てしない海が人間の活動によって害されるとは考えなかったであろう。しかし現代においては、人間の活動がいかに海に被害を与えうるかが明確に観察されている。（この章句において「海」と訳されているアラビア語の語は「バフル（bahr）」であり、この語は海だけでなく湖のような大きな水域も指す）工場の排水などによって汚染された海では、人間の無関心さが原因で多くの生物種が絶滅してきた。さらに、廃棄物により重金属を含んだ海産物を食べた人々は、こうした重金属のために癌などの病気に罹ることもある。まさにこの節に述べられているように、私たちは自分の手で行った行為のために、陸と海の生態系に害を及ぼし、その結果としてその害を自ら受けることになるのである。クルアーンは、当時存在していなかった情報を伝えるだけでなく、それに伴う意識レベルも人々に伝えたのである。環境に及ぼされる害の多くは、自然界のバランスが崩れることによって引き起こされる。バランスを崩すことを禁じるクルアーンの章句も、環境保護を支持するものである。

ラフマーン章 55-7：天を高く掲げ、均衡（バランス）を設定された。

8：バランスを乱してはならない。

これらの節における「バランスを乱してはならない」という命令は、9節がこれに関する内容であることから、計量や重さにおいて不正をしてはならないという意味にも解釈できる。しかし、7節で言及されている自然界のバランスを崩してはならないという意味にも捉え得る。

環境に与えられる害の背景には、人間の欲求による浪費がある。クルアーンは以下のように浪費を非難している。

アラフ章7-31：食べなさい、飲みなさい、だが浪費してはならない。神は浪費する者たちを愛さない。

クルアーンでは何度も自然現象に目を向けるように促されている。クルアーンの用語においては、宇宙に存在するあらゆる生き物が神の印である。ある生物種の絶滅を招くことは、神の印の一つを無責任に消滅させることに等しい。信仰者にとって、神の印は大切なものであり、それを粗末に扱い、自然に害を及ぼし、他の人々や未来の世代に害を与えることは、クルアーンが育む責任感と矛盾している。クルアーンが育む思考と教える道徳体系で自然を眺める者は、自然に害を与えることを避けるべきであり、環境意識を有するべきである。

8-8 クルアーンの意図的な沈黙

クルアーンにおいて説明されている事柄と同様に、説明されていない事柄も重要である。私はクルアーンで語られていない事柄を「意図的沈黙」と呼んでいる。この「意図的沈黙」の重要な側面の一つは、クルアーンが啓示された当時の誤った信仰を取り入れていない点にある。もしクルアーンが人間によって作られた書物であったなら、当時の地域で信じられていた誤った信仰の影響が含まれていても不思議ではなかったであろう。例えば、クルアーンには宇宙の膨張や胎児の発育段階に関する驚くべき表現が含まれている。しかし、当時一部の人々によって信じられていた「地球が牛や魚の上にある」とか「子供の性別は母親か父親の体液のどちらが勝るかによって決まる」といった誤った信仰は一切含まれていない。先に述べたような驚くべき表現は、クルアーンがそのテーマについて語る際に誤信を含めていない、つまり「意図的に沈黙している」ことと併せて考慮すべきである。この見出しの下では、クルアーンの「意図的沈黙」のもう一つの側面について述べる。クルアーンがその時代や地域の影響を受けて書かれたものであったならば、非常に広範な時代、多様な文化や民族、異なる気候や政体に対応することは不可能であったであろう。クルアーンにおける数多くの「意図的沈黙」は、イスラームが多様な状況に適応できる柔軟性を可能にしてきたのである。残念ながら、クルアーンの「意図的沈黙」を無自覚

に自分の伝統で埋めてしまった一部の神学者たちは、イスラムを多くの迷信で満たし、その柔軟な構造を損なってしまった。以下にこの問題に関して、政治・経済・女性という三つの分野から例を挙げる。実のところ、このテーマは独立した一冊の書籍に値するほどの広がりを持っている。クルアーンの「意図的沈黙」が、さまざまな分野においてムスリムが時代の変化に適応するための柔軟性を提供してきたことは、ここで挙げた三つの例にとどまらないことを忘れてはならない。

前にも簡単に触れたように、クルアーンの「意図的沈黙」の重要な例として、詳細な政治体制を提示していない点がある。（とはいえ、上記で述べたような正義、協議といった全ての時代に通用する基本原則は、クルアーンが提示していることを忘れてはならない。）一瞬、クルアーンにおいてムハンマドの時代における部族社会の統治システムが提示されていたと仮定してみよう。もしクルアーンが不信者たちが主張するように「ムハンマドが作った書物」であったならば、そのような現象が見られてもおかしくはなかったであろう。部族向けに考案されたシステムでは、大帝国が成立した後に出現する政治構造を統治することは不可能であったであろう。また、今日一般的に行われているように、政党や議員、首相が選挙によって選ばれるシステムの実施も不可能であった。もしクルアーンに「二階建て以上の建物を建ててはならない」といった原則が記され

ていたとしたら、現代の自治体が都市を管理する際にこのような原則を宗教的規範として受け入れた場合、あるいは高層建築に住む人々がイスラムを受け入れようとした場合、この原則によって深刻な困難が生じていたであろう。このような事柄におけるクルアーンの「意図的沈黙」が存在しなければ、クルアーンと矛盾せずに時代の変化に適応した政治体制や自治体の形成は、ムスリムにとって困難なものとなっていたはずである。

商取引に関する例を仮に考えてみよう。もしクルアーンにおいて、一籠のナツメヤシや一匹の羊に対して固定価格が定められていたとすれば、イスラム領土の拡大や歴史の異なる時代において、それが引き起こす問題を想像してみるべきである。あるいは、当時の農業や畜産において行われていた方法がクルアーンで法制化されていたとすれば、それがムスリムたちにとってどのような問題を引き起こすかを想像するべきである。その時代の歴史は、産業革命以後のように常に変化が観察され、変化が進歩とみなされる時代ではなかった。その時代の人々にとって、祖先代々が行ってきた農業や畜産の方法と子孫が行っている方法との間に大きな違いはなかった。新しいものよりも、何世紀にもわたって実践されてきたものが評価されていたのである。要するに、その時代の思考様式で歴史の将来を見ていた人間が、自分の時代の農業や畜産の方法を法として定めようとした可能性は十分にあった。もしクルアーンが不信

者たちの主張するように「ムハンマドによって書かれた」ものであったなら、こうした事例が見られるはずであった。クルアーンにおけるこのような「意図的な沈黙」は、重要な意味を持っているのである。

クルアーンが啓示された7世紀において、世界中の多くの社会には女性に不利な文化的な通念や法律が存在していた。前章で述べたように、クルアーンでは女性に有利な修正が加えられている。その修正の一部は女性に有利な法的規定によってなされ、もう一部は女性に関する事項においてクルアーンが「意図的に沈黙」することによってなされたのである。例えば、男女の関係において、どちらか一方が他方の要求に対してどのような態度をとるべきかという点について、クルアーンは意図的に沈黙しているといえる。例えば、ある女性が隣人の家にお茶を飲みに行きたいと思っていて、夫がそれを望まない場合、その問題に関してクルアーンを見ても判断することはできない。それは、その夫婦の間で解決すべき問題である。学校において男女が共に教育を受けるべきか、また職場において男女が共に働くべきかといった問題についても、クルアーンから直接判断することはできない。これらの問題に関する規定は、社会や個人によって決定されるべき事柄である。神学の学派の創始者たち、有名なハディース集の著者たち、多くの信徒を持つ宗派の創始者たち、影響力のあるタフスィール（クルアーン解釈書）の著者たちは、皆男性である。彼ら

の多くがクルアーンにおける「意図的な沈黙」を男性の視点から埋めようとしたことは指摘されるべき事実である[137]。しかし、クルアーンが女性や男女関係に関して多くの問題で意図的に沈黙していることは、変化する文化構造にイスラームが適応する柔軟性をもたらしたのである。このようなクルアーンにおける意図的沈黙を無自覚に自らの文化構造で埋めようとする者たちの見解は、イスラムから排除されるべきである。クルアーンで説明されていない事柄は、人々の裁量に委ねられているというのは、クルアーン自身の表現である。

マイダ章 5-101：信仰する者たちよ、あなた方に明らかにされると不快に思うようなことを問うな。クルアーンが下されている間にそれを問えば、それはあなた方に明らかにされよう。神は彼らを赦された。神は寛容にして慈悲深き方である。

この節から理解できるのは、クルアーンで何らかの事柄について明確な説明がない場合、それが人々の裁量に委ねられていることを示しているという点である。結局のところ、クルアーンには忘れられた主題は存在せず、「意図的な沈黙」があるだけである。これらは人々にとっての自由

[137] Caner Taslaman, Feryal Taslaman 著, İslam ve Kadın, p. 91-92.

の領域であり、異なる条件への適応を可能にする柔軟性の領域である。クルアーンが言及する主題と同様に、言及しない主題にも注意を払う必要があることを、この節で強調したい。残念ながら、一部の神学者は、クルアーンの「意図的な沈黙」から生じる自由の領域を自らの見解で埋め、消去した。クルアーンに存在する柔軟性は評価されるべきであり、これらの柔軟性が偶然に生じたものではなく、神の知恵と関連していることを理解すべきである。政治、経済、女性に関して挙げた例を考慮すると、クルアーンが啓示された時代や地域の政治、経済、女性観がクルアーンに反映されていた場合、イスラムが歴史の異なる時代や条件に適応する際にどれほどの困難が生じたかを想像することができる。このようにして、クルアーンの以前の節で強調された思考の構築とともに、「意図的な沈黙」の価値をよりよく理解することができる。

第９章

神の存在と名称を伝えるクルアーン

本書は、クルアーンが神から授けられたことを信じるための合理的な証拠を示している。本章で示す論証を理解するには、まず神の存在を証明する諸々の証拠を知らなければならない。これらの証拠を知らない人、あるいは（少なくとも一部を）認めない人々にとっては、本章の内容は意味をなさないかもしれない。以前に拙著「神の存在を示す12の証拠」と「フィトラの証拠」で、宇宙とフィトラに基づいて神の存在をどのように証明できるかを示した[138]。また、「ビッグバンと神」、そして私も編者の一人を務めた「神、哲学、科学」という本もお勧めしたい[139]。本書では、繰り返しを避けるためにこれらの証拠には触れず、これらが受け入れられていることを前提とする[140]。これらの証拠を認めない人々にとっては、本章の内容は的確な答えにならないだろう。その場合は、まずこれらの本を読み、その後で本章を読むことをお勧めしたい。本章で行う論証

---

138 Caner Taslaman 著, ‘‘Allah’ın Varlığının 12 Delili’’, 出版元：Destek Yayınları, İstanbul, 2018; Caner Taslaman 著, ‘‘Fıtrat Delilleri’’, 出版元： İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2018

139 Caner Taslaman 著, ’’ Big Bang ve Tanrı’’, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2017; 編者： Caner Taslaman, Enis Doko 共著, ‘‘Allah, Felsefe ve Bilim’’, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2018.

140 これらの著作は www.canertaslaman.com から無料で PDF としてダウンロード可能である。

は、これらの証拠が神の存在のみでなく、クルアーンが神から授けられたことの証拠であることも示す。

9-1神の存在を礎に確立される宗教とメソッド

クルアーンの（イスラムの）最も重要なメッセージは何であろうか？答えは、クルアーンが神を紹介していることであると言ってもおかしくない。今、神への信仰が失われたことを少しの間想像してみよう。クルアーンが説く宗教的要素は皆無になる。もはや死後の生活があることや、来世で愛する人たちに会えることは考えられない。神への信仰がなくなれば、神の使徒を名乗った預言者たちの系統は捏造でしかなかったと認識される。この信仰が失われると、宇宙は意識的に創造されたことにならなくなる。私たち人間は偶然に出現したのであり、特別な目的も持たないままこの世界にいるのだと信じざるを得なくなる。礼拝するに値する存在がなければ礼拝の意味も、道徳の妥当な根拠がなければイスラムの道徳観が持つ意味もなくなる。つまり、神への信仰という礎がなくなれば、イスラムが築いてきたすべてのものが崩壊することになる。

しかし、クルアーンが説くように、神が存在すること、クルアーンが神を正しく紹介していることが証明できれば、つまり、クルアーンの最も核心的かつ重要なメッセージが正しいことを示せれば、これはクルアーンを信頼する

べき極めて重要な証拠となり、クルアーンが神から送られたこと（イスラムが神の宗教であること）を次の三つの点で裏付ける。

第一に、神の存在が証明されれば、神が送った宗教が存在し得ることが理解できる。クルアーンの最も重要な論は、クルアーンが神から送られたメッセージだということである。それが正しいかどうかは、まず、神が存在するか否か次第である。神が存在することを理解することは、クルアーンが神から送られたことを示すには不十分だが、神が送ったメッセージが存在し得ることは示す。これは、クルアーンにアプローチするための極めて大きな一歩である。

第二の点は、歴史的な過程でクルアーンがこの最も重要なテーマに関して担った役割を精察することと関係がある。神が存在することを理解している人は、そう深く考えずとも、神の存在こそがどんなことよりも重要だということを理解している。クルアーンは何十億人という人々に神を紹介し、神を人生の中心に据えるという極めて重要な事柄において非常に大きな役割を担っている。そのため、その人はクルアーンが神から送られた可能性が高いことを真摯に捉えるであろう。本書を通して説明する数々のクルアーンの特徴を全く知らないとしても、クルアーンの極めて重要なこの役割だけで、クルアーンが神から送られた可能性は高いと真摯に考えるには十分である。このことについ

て、クルアーンは歴史上でクルアーンに似た役割を担うユダヤ教とキリスト教の聖書と神の啓示の関連性にも着目させている。これらの聖書も、神が神の遣わした人間の使徒と使徒への啓示を介して人々に接し、どのように信仰すべきかを教え、道徳のルール、礼拝、禁忌を示したことを伝えている。これらの聖書は、この基本的な事柄に関してクルアーンと共通のメッセージを持っている[141]。クルアーンは、どの時代にも同じ真実が同じ方法で、つまり人間の使徒への啓示を通じて伝えられたことを告げ、これらの聖書は歴史的な連なりの中で相互を補填するものであると述べ、それらを結び付ける。こうして、神について教え、神を人生の中心に据えるためにこれらの聖書が担った歴史的役割は相互を裏付けるメッセージとなっている。人類史上、神を紹介し、人生の中心に据えさせる書物はこれらの聖書とクルアーン全体を合わせた 10 分の 1 すらないと言える。つまり、神の存在とその重要性を理解する人は、クルアーンが神を人間に紹介し人生の中心に据えさせるという極めて重要な役割を持っていることと、クルアーンが神から送られた可能性が高いことを真摯に捉えるだろう。

141 ユダヤ教、キリスト教とイスラムの間の見解の対立について評価は。今後の研究課題にする。例えば、キリスト教の主要な宗派が認める三位一体のような信条はイスラムで決して認められない。このような対信条の対立と並んで、これらの宗教がクルアーンと共通の本質を持つことを知っておくことも重要である、事実、クルアーンには三位一体のような相違への批判がある一方で、この共通の本質への言及もなされている。他の預言者たちと同様、モーセとイエスが神の啓示を通じて共通のメッセージを人間に届けたこと、歴史を通してシルク（神の同位者がおり、それを神と同等にみなすこと）、残酷性、不道徳に対して共通の闘いを示していることをクルアーンは伝えている。クルアーンによれば、これらの宗教の間の対立は、人類が啓示された宗教を歪曲したことの結果である。

第三に、神の存在を示す証拠は、神の存在を空虚な概念としてではなく、クルアーンが伝えるところの神の諸々の名称によって証明している。このことは、そうした名称が示す特徴を持つ神の存在を信じることに加え、クルアーンが神から送られたことも裏付ける。どの証拠が神のどの名称を裏付けているかの例については後述する。クルアーンが、唯一の存在であり、意識を持ち、意志を持ち、自ら以外の全ての存在物を創造し、威力があり、叡智深く、全てを知る慈悲深い神を伝えていることを振り返ってみよう。神の存在は、これらの名称により宇宙とフィトラに基づいて証明される。このようにして、クルアーンと並ぶ二つの大きな根拠である宇宙とフィトラはクルアーンの最も重要なメッセージが正しいことを裏付けている。結論を導くために私が用いた手法（認識論的アプローチ）は、次のように簡約することができる。クルアーンが神から送られたか否かを問う人は、関連し合う次の二つの問いの答えを探すことで解決に至ることができる。問いの一つ目は「もしクルアーンが神から送られたのであれば、クルアーンにどんな特徴があることが予想されるか」、二つ目は「もしクルアーンが神から送られたのでなければ、クルアーンにどんな特徴があることが予想されるか」である。この手法は、今ある状況が予想され得るのはどちらの見解が正しい場合であるかの答えとなる見解が正解たり得るという導出方法だが、この方法で導かれる証拠を正しいと受け入れること

は、日常生活でも頻繁に用いられる思考形態である。例えば、メリハちゃんとエムレ君がそれぞれにとって大事な競争をするとする。あなたはその競争を観戦することができず、競争が終了して少し経った後に二人が競争した場所に来るとする。もしメリハちゃんが嬉しそうで、エムレ君が落ち込んでいるのを見れば、メリハちゃんが競争に勝ったということが、誰が勝ったのかを見も聞きもせずにわかる。その理由は、メリハちゃんが勝ったとすればメリハちゃんが喜び、エムレ君が負けたとすればエムレ君が落ち込むことが予想されること、もしその逆であればメリハちゃんが落ち込み、エムレ君が喜ぶことが予想されるからである。この知識に基づいて、メリハちゃんが嬉しそうでエムレ君が落ち込んでいるのを見れば、あなたはメリハちゃんが競争に勝ったと考えるだろう。本書で頻繁に用いる思考形態もちょうどこれと同じで、私たちが頻繁に用いる思考形態である。今の状況が予想されるのはどちらの見解が正しい場合であるか、その状況を観察することがその見解が正しいという証明に繋がる[142]。

もしクルアーンが述べているように、クルアーンが神から送られたのであれば、まず予想されるのは、クルアーンが紹介する形の神が存在することと、神の存在に関する記述が、実際の観察対象となる宇宙とフィトラに合致すると

142 この手法は科学哲学の分野で取り上げられる「最良の説明への推論」（inference to the best explanation）と「可能性の原則」（likelihood principle）のアプローチに似ていると言える。これに関してお勧めする著作に、Peter Lipton 著, ‘’Inference to the Best Explanation’’や ‘’Routşedge’’, London がある。

いうことである。もしクルアーンが人間の手による捏造物であれば、クルアーンのこの最も重要なメッセージに誤りがあることが予想される。この最も重要な事柄においてクルアーンの正当性を認める宇宙とフィトラは、クルアーンが神から送られたことを示す重要な証拠である。他の証拠がなくとも、ムスリムになるための証拠はこれだけでも足りる。

9-2 神の名称を介して神を知る

ここで理解すべき重要なことは次の通りである。先述の証拠により、一定の特徴を備えた神が存在することが理解される。それらの証拠により示される神の特徴は、クルアーンが紹介する神の特徴でもある。こうして、クルアーンの内部におけるこの核心的な要素がクルアーンの外部における二つの重要な証拠である宇宙とフィトラによって裏付けられていることがわかる。これは、クルアーンへの信頼を裏付ける極めて重要な要素である。

クルアーンには、神を指す 100 以上の名称がある。これらをクルアーンの用語で“el-esmau el-husna”、つまり「最も美しい名称」という[143]。クルアーンは、唯一で、意識ある、自ら以外の全ての存在を創造した、強力で、叡知深く、慈悲深い神について教えている。イスラムは、これら

143 クルアーン：アラフ章 7-180、イスラー章 17-110、ターハー章 20-8、ハシュル章 24-59。

の名称を持つ神への信仰を礎として成立している。イスラムにおける預言者の系統、死後、道徳、礼拝、宇宙に対する視点、人間に対する視点についての見解は、どれもこの礎に基づいて形成されている。

クルアーンで説明される神のいくつかの名称の意味は、クルアーンにおける他の多くの名称も内包しており、多くの名称が相互に関連し合っている。重視すべき事柄を重視し、神の名称を然るべき形で人々の脳裏に刻むため、これらの名称が持つ意味は様々な名称の形を取って強調される。例えば、クルアーンは神の深い叡智を「アーリム」（Alim, 全知者）という名称により強調する。叡知深い者は全てを知っている。クルアーンでこの名称に合致するのは「ハビル」（Habir, 最も通暁している）である。深い叡知により神は全てを包囲している。クルアーンにおいて、神が全てを包囲していることを示す名称は「ムヒト」（Muhit, 全てを包囲する）である。この深い叡智により神は全てを適正に行う。神が全てを適正に行い、全てを然るべき形で統べることを示す名称は「Hakim, ハーキム」である。神が全てを知ることは、神が全てを見通し、聴くことで可能になる。「バシル」（Basir）という名称は神が全てを見通すこと、「サーミ」（Sami）は全てを聴くことを表す。つまり、神が叡知深いこと（Alim, アーリム）あるいは全てを知っている（Habir, ハビル）ことは、クル

アーンにおける他の多くの名称も内包しているか、これらの名称と関連する他の名称を裏付けている。

神が唯一の存在であること、深い叡智を持つこと、強力であること、慈悲深いことなどのいくつかの特徴を考察すると、これらがクルアーンにある神の名称の大部分を内包していることがわかる。この後で神の存在を証明するために示す証拠が神のどの名称を裏付けているかを伝えるが、そのためにはこのことを念頭に置いてもらう必要がある。例えば、ある証拠が神の創造性あるいは叡智の高さを示していることを伝えるとき、その証拠がクルアーンにおけるこれらの特徴を内包する多くの名称も裏付けていることを理解する必要がある。

9-3 宇宙から学ぶ神の名称とクルアーン

私たちが生きる宇宙は、法則があり、何千億もの銀河、何兆もの星、地球があり、何百万種類という生物がいる壮大な空間である。宇宙が私たちに伝える最も重要なメッセージとは、創造し、強力で、叡知深く、意識を持つ、唯一の神の存在である。拙著「Allah'ın Varlığının 12 Delili」では、12 の証拠のうち 7 つを宇宙に基づいて示した。ここではそれらの証拠について詳述しないが、それぞれの証拠について概括し、どの証拠が神のどの名称を裏付けているかを例示する。もちろんどの証拠も、私が挙げた例以上に

神の名称に深く関連している。神の特徴をクルアーンに記述された神の名称を通じて示すことで、宇宙を観察して得られる神の特徴の、クルアーンにおける神の名称に合致するものを示すことを目指す。

1.カラームの宇宙論的証拠

これは、宇宙が無始でないことを示すことにより、神の無始性を否定する哲学史上最大の主張を説破する証拠である。この証拠は、キンディーやガザーリーといった重要な哲学者による永遠の概念に関する考察と並び、現代科学のエントロピーの法則やビッグバン理論などのデータも根拠にしている。この証拠により、神が「エッヴェル」（Evvel）であること、つまり物質と宇宙が存在する以前にも在った、無始の存在であること、常に存在し、存在し続ける、つまり「アヒール」（Ahir）であり、「ベカ」（Beka）であることが示される。神が全ての存在物を必要とせずに自存することを表す「カイユーム」（Kayyum）や「サメド」（Samed）という名称もこれらの証拠により示される[144]。宇宙と物質が無から創造されたことを示すこの証拠は、「ベディ」（Bedi、例無くして創造する）、「ハリク」（Halık, 構成する）、「ジャイル」（Cail, 創

144 神がいかなる存在物も必要とせずに自存することは、宗教哲学で「神の自存」（aseity of God）というテーマの下で議論されてきた。クルアーンで神のこの特徴を表す名称のうち 2 つが「カイユーム」と「サメド」である。

る）、「ファイル」（Fail, 実現する）であることなど、神による創造を表す名称も証明される。

2.法則の存在の証拠

　これは、宇宙のどこにおいても物理的法則が通用することに基づいて神の存在を証明する証拠である。様々な空間で同一の法則が通用していることを最良の形で示すのは、唯一の法則制定者の存在である。それを示すこの証拠により、神の「ワヒド」（Vahid, 一つの）、「アハド」（Ahad, 唯一無二の）などの名称が裏付けられる。宇宙のどこにでも存在し継続する法則が創り出されたことを表すこの証拠は、神の力に全く衰えがないこと、つまり「メティン」（Metin）であること、存在の本質を創造した者、つまり「ファティル」（Fatır）であること、全てを構成した者、つまり「ハリク」（Halık）であることを示す。法則が常に守られていることは、神が全てを守ることを表す「ハーフィズ」（Hafız）という名称や、全てを知っていることを表す「ハビル」（Habir）などの特徴も裏付ける。神が全宇宙を統べる権能を持つこと、つまり「ムクテディル」（Muktedir）ことも、これらの証拠から理解される。

3.宇宙が発見可能であることの証拠

これは、非常に脆弱な人類が宇宙を科学的活動により驚異的な尺度で発見し得ることが、神が宇宙をそのように発見可能な構造にしたことで説明できるという証拠である。宇宙の現在の構造が意識的に設計されたことは、この証拠からも理解される。なので、この証拠により神が「ムサッヴィル」（Musavvir）であること、つまり宇宙の構造に現在の概観を与えた者であることがわかる。全宇宙を所有する者、つまり「マリク」（Malik）、全宇宙を統べる者、つまり「メリク」（Melik）である者、全てを知る者、つまり「アーリム」（Alim）である者のみが、宇宙の構造をこのように設計することができる。これらの証拠はどれも、設計した者が強力であること、つまり「ズル・クッヴェト」（Zul Kuvvet）であること、宇宙を自らの意図した目的の枠組みで創造し実現した者、つまり「ジャイル」（Cail）であり「ファイル」（Fail）であることを示す。

4.宇宙の潜在性の証拠

宇宙の潜在性によって可能にならなければ、星や地球、生物や技術の発明、音楽などの芸術作品が現れることはあり得なかった。これは、そんな状況が神の存在によって最良の形で解明されるという証拠である。人類が技術や芸術を生み出すことを可能にするこの潜在性が宇宙に存在することは、神が人類に対して寛大であることを示す。神の寛

大さは、クルアーンに登場する「エクレム」（Ekrem, 最も寛大な）、「ケリム」（Kerim, 大いに寛大にふるまう）、「ズル・ジェラーリ・ヴェル・イクラム」（Zul-Celali ve'l İkram, 荘厳かつ寛大な）といった名称により示される。宇宙に存在する全てのものは、宇宙に据えられた潜在性の産物である。この潜在性は、神の「ムテッケビル」（Mütekebbir, 至大な）、「Kadir, カディル」（偉力ある）、「アズィズ」（Aziz, 偉大な）、ハーキム（Hakim, 統べる、適正に行う）といった名称も指す。

5.ファインチューニングによる法則と固定物の証拠

　これは、現代科学の発展により発見された宇宙の法則と静止物に施されたファインチューニング（精緻な調整）が、神の存在への信念を裏付けるという証拠である。数学的確率の計算により示すことが可能なことがその際立った特徴である。ここで出発点になるのは、宇宙のどこででも通用する法則と静止物が、非常に精緻な尺度により生物を出現させる形で創造されたということである。この証拠は、宇宙の全ての場所に精緻に調整された同一の法則と静止物が存在していることに基づいて宇宙の全ての場所で同一の意志が通用することを明らかにしつつ、神の「ワヒド」（Vahid, 一つの）、「アハド」（Ahad, 唯一無二の）という名称を示す。このことが裏付けるのは、神が全ての

過程の所有者、つまり「マリク」（Malik）であること、全ての過程を統べる者、つまり「メリク」（Melik）であること、全ての過程を見守る者、つまり「ミュヘイミン」（Müheymin）であること、非常に強力な者、つまり「カーヴィ」（Kavi）であること、全宇宙の所有者として非常に豊かな者、つまり「ガニ」（Gani）であること、一切の欠陥なく創造する者、つまり「バリ」（Bari）であること、宇宙が辿る過程を知る者、つまり「ハビル」（Habir）であるということである。

6.物理的現象のファインチューニング

　この証拠は、現代科学の発展により発見されたファインチューニング（精緻な調整）と関連しており、先述した証拠と同様、数学的確率の計算により示すことが可能なデータに基づいている。ここでの出発点は、宇宙の物理的過程が生物を出現させるように設計されたことである。宇宙がその始まりとその後に辿った過程が始まりから何十億年も経た後の生物の出現にふさわしくファインチューニングにより設計されたことは、神が宇宙の全ての過程に関わっていることと、これら全ての過程に積極的に関与していることを示す名称を裏付ける。これは、神は宇宙における過程に無関心であるという見解（大半の理神論者の見解もそう

である）[145]に対する答えとなる証拠の一つである。この証拠から、神が全ての過程を全ての要素により創造した者、つまり「ベディ」（Bedi）であること、これほど巨大な宇宙で、これほど長い間、これほど精緻に調整された過程を統べる者「ハーキム」（Hakim）であることから、非常に偉大な、つまり「アラー」（Ala）、「アリー」（Ali）、「ミュテアル」（Müteal）であること、非常に偉大な者、つまり「カビル」（Kabir）であることが理解される。このような数学的データからも示される証拠により神の存在と名称が裏付けられ得ることから、神が明白な者、つまり「ザヒル」（Zahir）であること、全ての物事よりも真実である者、つまり「ハク」（Hak）であることも理解される。

7.生物の設計の証拠

　これは、生物を出現させた潜在性が宇宙に存在していることと、生物を出現させた過程があったことが神の存在を示すという証拠である。この証拠は、何百万種類もの生物を神の存在を示す証拠の一部として示す。生物が創造された最も重要な要素の一つは、生物に必要なものが生物に与えられることであり、この証拠は、クルアーンにおいて

145 多くの理神論者が、創造者は宇宙における過程に関わらず、人間が宗教的に必要とするものを知らずにいると述べている。一部の理神論者は宗教を否定するだけであり、そのような見解を持っていない。本書はあらゆる種類の理神論に答えを示す。

「アッラー」という名称の次に多く登場する名称である「ラブ」（Rab, 必要なものを与える者、育む者）という名称、また「ラッザク」（Rezzak, 恵みを与える者）といた名称を裏付ける。神が生物を守ることから育むことまで、生物が必要とするものを詳細に至るまで与えることから大いなる恵みを持つ者であること、つまり「ズル・ファドゥルン・アズィム」（Zul Fadlun Azim）であり、「ムジブ」（Mucib, 応える者）であること、生物を存在させていることから「ムフイ」（Muhyi, 生かす者）であること、全ての詳細を見守り計画していることから全てを「シャーヒド」（目撃する者）であること、生物に体の詳細な構造など多くの恵みを与えることから「ズト・タヴル」（Zut Tavl, 大いなる恵みを持つ者）、「ラティフ」（Latif, 恵みを与える者）、「マジド」（この上なく寛大な者、恵みの豊かな者）であることも、この証拠により裏付けられる。

9-4 フィトラから学ぶ神の名称とクルアーン

フィトラとは、健康な全ての人間が持つ特徴を意味する。クルアーンは、外界（宇宙）に証拠があるように、私たちの内界（フィトラ）にも証拠があることに目を向けさ

せる[146]。私はこれをヒントにそうした証拠を二つのテーマに分けて考察した。以前、拙著「Allah'ın

Varlığının 12 Delili」で、フィトラに基づいて五つの証拠を示した。拙著「Fıtrat Delilleri」では、その五つの証拠をより細かく取り上げている。これらの証拠を詳しく学び、なぜ説得力ある証拠であるかを知りたい方々には後者をお勧めする。先のテーマと同様このテーマの下でも、これらの証拠を概説してからどの証拠が神のどの名称を裏付けているかを例示する。ここでも、神の特徴をクルアーンにおける名称により伝え、フィトラを精察することで明らかになる神の特徴がクルアーンにおけるどの名称に対応しているか、より理解が深まるよう説明する。その際に、これらの証拠で明らかになる神の名称の全ては記さず、一部のみを例に挙げることを改めて申し述べておく。

8.自然な欲求の証拠

これは、全ての人間が持つ自然な欲求の考察に基づいて、その欲求が神によって構成されたことが最良の説明であることを示す証拠である。私たちの欲求が、欲求を創造した者によって、特定の名称を持つ創造者に向かわせる形で構成されたことを示す証拠である。自らの意志に対抗できる力を持つ者が皆無である者、つまり「ワヒド」

146 クルアーン：東ローマ人章 30-30、解明章 41-53、撒き散らすもの章 51-20, 21

（Vahid, 一つの）、「アハド」（Ehad, 唯一無二の）である者、全宇宙を然るべき形で統べる、つまり「ハキーム」（Hakim）である者、欠陥が一切ない、つまり「クッドゥス」（Kuddus）である者のみが、脆弱な存在である私たちに備わった欲求に応えることができる。欲求は、私たちを「ズ・ラフメフ」（Zu Rahmeh, 慈愛を持つ者）、「アルハムル・ラヒミン」（Arhamur Rahimin, 慈愛深い者の中でも最も慈愛深い者）、「ラフマン」（Rahman, 慈愛深き者）、「ラヒム」（Rahim, この上なく慈愛深い者）、「セミウード・ドゥア」（祈りを聞き届ける者）、「カリブ」（Karib, 近い者）、「ラウフ」（Rauf, 慈悲深い者）、「ナシル」（Nasir, 助ける者）、「ムステアン」（Müstean, 庇護する者）である神に向かわせる形で意識的に構成されている。このように、私たちの欲求を存在させている者はその欲求を通じて自らの特徴を伝えている。

9.生得的な道徳の証拠

　これは、現代心理学や認知科学などの分野による研究も示す、道徳性が私たちの生得的な特徴であることに基づき、これらの特徴が神によって私たちに据えられたことが最良の説明であることを示す証拠である。この証拠は、道徳的命令を下す、道徳的な善の源である神の存在を裏付ける。この証拠から、神が「ラフマン」（Rahman, 慈愛深い

者）、「ラヒム」（Rahim, この上なく慈愛深い者）、ラウフ（Rauf, 慈悲深い者）、「シャキル」（Şakir, 感謝に応える者）、「ハリム」（Halim, 柔和にふるまう者）などの善を表す名称が導出される。また、道徳的命令を出す神のこの命令に従うことは、神が全と悪を区別していてこそ、つまり「ハイルル・ファシリン」（Hayrul Fasılin, 区別する者の中でも最も良い者）であり、従い守るべき命令を下す者、つまり「エフルト・タクヴァ」（Ehlut Takva, 守られるべき）であってこそ意味をなす。神が道徳的命令を下す者であることは、「ムルシル」（Mursil, 送る者）であること、道徳的命令に従わない者、例えば他者に残酷にふるまう者の悪行を相応に罰する、つまり「ズル・インティカム」（Zul İntikam）あるいは「ムンタキム」（Müntakim）であることを示す。

10.理性の証拠

　理性を働かせるという人間の特徴の存在を最良の形で説明するのは、永遠の理性を備えた神がこの特徴を与えたことであるという証拠である。神がこの特徴を与えたことは、神がその与える他のものと同様、人間が必要とするものを最良の形で与える者、つまり「ラブ」（Rab）であることを示す。理性とは、神が人間に与えた大いなる支えであり、最も重要な恵みの一つである。「ナシル」（Nasir,

助ける者）、「ヴェリ」（Veli, 友）、「レッザク」（恵みを与える者）は、クルアーンにおける神の名称であり、神によって創造された人間に神が与えた理性は、この理性を遥かに凌駕するレベルを神が備えていること、つまり神が「アーリム」（Alim, 非常に高い知識を備えた者）、「アッラム」（Allam, すべてを知る者）であることを裏付ける。人間が直面する出来事を判断する理性の特徴は、この特徴を与えた者が全ての出来事について完全に、相応に判断を下すこと、つまり「ハーキム」（Hakim）であることも示す。

11.意志の証拠

人間の最も重要な特徴の一つである意志の存在について最良の説明となるのが、永遠に意志を備える神からこの特徴が与えられたことであるいう証拠である。意志が後から現れた偶然の特徴ではなく、神が持つ無始の特徴であることを表すこの証拠は、神の「エッヴェル」（Evvel）という名称を裏付ける。神が全ての力の源であること、全ての存在物が神の意志により存在し存続することを表す神の「カイユーム」（Kayyum）、「サメド」（Samed）という名称もこの証拠により裏付けられる。意識的に構成され、善と同じように悪も選択することができる人間の意志は、神がこの世で人間に試練を与えていることを伝えるク

ルアーンの諸節を裏付け、神が、人間が自らの意志で行ったことを審問する者、つまり「ハシブ」（Hasib）であることを示す。人間を人間たらしめる最も基本的な特徴の一つである意志が人間に授けられたことは、神が人間の真の「メヴラ」（友）であることも示す。

12.意識と自我の証拠

人間を人間たらしめる最も基本的な要素である意識と自我が存在することを最良の形で説明するのが、永遠に意識と自我を持つ神がそれらを与えたという証拠である。意識と自我が無始であることが示されると、神が「エッヴェル」（Evvel, 最初の）、「エブカ」（Ebka, 永続する者）であることを裏付ける。人間の意識は、多くの要素（血液、心臓、肝臓、脳）が統合してこそ存続することができる。なので、人間に意識を与える者は、全てを統合する者、つまり「ジャーミ」（Cami）でなければならない。私たちは、意識を持たない物質から意識を持つ人間が引き出されたことを知っている。このことは、神の「ムフリジ」（Muhric, 引き出す者）という名称を想起させる。無始の自我が存在することを裏付けるこの証拠は、クルアーンにおける「神の自我」という語句の重要性も示す[147]。ま

147 クルアーン：アナーム章 6-12, 54

た、神が意識を持つということは、「ハイイ」つまり、生を司るという意味である。

　見てのとおり、宇宙と同様フィトラに基づいて示される証拠も、クルアーンに記された神の名称を通じて神の存在を証明している。特定の名称を持つ神の存在を伝えることは、クルアーンの最も重要なメッセージである。クルアーンはその非常に重要な歴史的役割により、これらの名称を持つ神の存在を何十億もの人々に伝えてきた。これらの証拠のうちいくつかは（5、6 番目の証拠のように）20 世紀における科学の発展とともに示され、いくつかは（1 番目の証拠のように）、以前からあったものが 19〜20 世紀の科学の発展により確固たる形で裏付けられたものであり、いくつかは（2、3、4、8、9、10 番目の証拠のように）哲学の分野で新たな見識の出現とともに近代において示されており、いくつかは（7、11、12 番目の証拠）、過去にいくつかの種類があったと言えるものの、それらは現代の洗練された見解に大きく後れを取っている。つまり、これらの証拠の大半がクルアーンの啓示から 1000 年以上も後に宇宙とフィトラに基づいて示され、それらがクルアーンにおける神の名称を通じて神の存在を裏付けているのである。他に全く証拠がなかったとしても、これらの証拠だけでも、ムスリムになるための（クルアーンが神から送られたことを信じるための）十分な根拠になる。

第 10 章

保護されたクルアーンと数学的尺度

ピタゴラスからプラトン、アル・フワーリズミーやアル・ビールーニー、ガリレオからニュートンに至るまで、多くの科学者および哲学者たちは数学の確実性に魅了され、その確実性を多くの分野において追求したのである。例えば、ニュートンは長年にわたり研究を重ねていた聖書の中に、数学的に意味のある印を見出そうと努力していた。それでは、クルアーンの中に数学で表現できるような構造的な秩序は存在するのであろうか。実のところ、この主題について調査を行うと、非現実的で根拠の乏しい主張に数多く遭遇することになる。しかし、宇宙を創造し、預言者たちを遣わして経典を啓示したのが同じ神である以上、神が宇宙創造に用いた数学的尺度を、啓典の啓示においても用いたと考えることは合理的な期待であるといえよう。根拠の薄い主張が多いからといって、この分野に対する探究心を失ってはならない。要するに、「クルアーン」と「数学」という語を並べて見たときに、提示される主張を先入観で否定する姿勢も、また無批判に受け入れる姿勢も取るべきではないのである。私たちはまず、提示される主張を真剣かつ批判的な視点で評価したうえで、結論を出

すべきである。本章では、クルアーンにおける語の用法や章・節の配列に数学的な尺度が存在することを示そうとするものである。読者が簡易な計算機とクルアーンのテキストを手元に置き、本章で紹介されるデータを確認することができるようにしてある。ここで提示されるデータは、複雑な数学的問題ではなく、基礎的な数学知識を持つ多くの人々が理解可能な内容である（語の出現位置、章番号や節番号に関する表も以下に提示される）。また、クルアーンが今日に至るまで改変されることなく伝えられてきたことを示すデータや、クルアーンの構造的な秩序に関する研究（環状構造など）についても簡潔に言及する予定である。これらのデータは、クルアーンがいかに良好に保護されてきたかを示すと同時に、その驚異性を示すものであり、重要な意義を持つ。

10-1　保護されたクルアーン：フルフィズムと数学

クルアーンが改変されずに保護されてきたことを数学的データで示す前に、クルアーンの保全に関するいくつかの点に注意を喚起したい。まず、これまでの章で取り上げた内容は、クルアーンが非常によく保護されてきたことを支持している。クルアーンには、宇宙（第 2 章）、地球（第 3 章）、生物（第 4 章）、歴史（第 5 章）について時代を超えた多くの表現が含まれているが、その時代や地域の誤

った信仰は含まれていない。もしクルアーンに人為的な追加があったなら、人々は自分たちの時代や地域の誤った信仰をクルアーンに持ち込んだであろう。クルアーンには宇宙、地球、生物、歴史と矛盾する要素が存在しない。

クルアーンは 23 年間の戦争、移動、苦難、闘争の時代に啓示されたこと、また編集過程（修正過程）を経ていないことを思い出そう。もしクルアーンに人為的な追加があったなら、自分たちの見解をクルアーンに持ち込んだ人々は、クルアーンの内部の整合性を損なったであろう。クルアーンの内部構造に矛盾がないことは、クルアーンに人為的な追加がなかったことを示している。実際、以下のクルアーンの節はこの点に注意を喚起している。

ニサー章 4-82： 彼らはクルアーンについてよく調べないのか。もしそれが神以外からのものであったなら、彼らはその中に多くの矛盾を見つけただろう。

この主題に関連して、クルアーンが保護されることを宣言している以下の節は重要である。

ヒジュル章 15-9： 確かに、われわれは「訓戒」（クルアーン）を下した。そしてわれわれは確実にそれを保護する。

フッスィラ章 41-41：彼らに「訓戒」（クルアーン）が来たとき、それを否定した者たちよ、それは崇高な書物であることを知れ。

42：偽りはその前からも後からも近づくことができない。それは賢明で大いに称賛される方（神）によって下された。

クルアーンが神の啓示であることを認めながらも、後に人間の言葉が混入した可能性について疑念を表明する者たちは、ヒジュル章やフッスィラ章の節も人間の作である可能性があるため、これらの節がクルアーンが保護されていることについての証拠とはならないと主張するかもしれない。この反論は部分的には正しい。しかし、第一に、クルアーンの一部が失われた可能性について疑念を抱く者たちに対して、これらの節は証拠となる。クルアーンのこれらの節が含まれる部分が保護されていることが示されれば、そこからクルアーン全体が保護されていると推論できる。

第二に、さらに重要なのは、クルアーンが保護されてきたことに関する主張は、これらの節以外にも、以下に列挙される理由や、後のページで一部が紹介されるクルアーンの数学的尺度を示すデータに基づいている。預言者ムハンマドに啓示されたクルアーンの節は、最初の啓示の時期から書き留められ始めた。クルアーンでは、クルアーンを

「アル・キターブ」と紹介している（バカラ章 2-151）。この表現は「書かれたもの、書かれるもの、読まれるもの」を意味する。また、クルアーンの最初の啓示の一つと考えられているアラク章では、「彼（神）はペンで書くことを教えた」（アラク章 96-4）と述べられており、これもクルアーンの最初の啓示の一つと考えられているカラム章の冒頭では、「ペンとそれが書くものに誓う」（カラム（ペン）章 68-1）とある。クルアーンの最初の啓示の節で書くことの重要性が強調されているにもかかわらず、ムスリムたちが自分たちにとって最も重要なテクストであるクルアーンを書き留めなかったとは考えにくい。クルアーンでは、借金でさえ書き留めるように述べられている（バカラ章 2-282）。借金を記録することを重要視するムスリムたちが、自分たちや将来の世代の生活を導くクルアーンを書き留めなかったとは考えられない。クルアーンが啓示された時代にページに書き留められたことは、以下の節からも理解できる。

アバサ章 80-13：それは尊いページ（スフーフ）にある。

14：高貴で清らかである。

15：書記たちの手で書かれた。

16：尊い、良き書記たちの。

預言者ムハンマドが「ページを読んだ」と述べている以下の節も、クルアーンが啓示される際に書き留められていたことを示している。

バイイナ（明証）章 98-2： 神から送られた、清らかなページを読む使者である。

3：そのページには正しい教えがある。

さらに、クルアーンで伝えられている多神教徒たちの以下の発言も、クルアーンが啓示された時代に書き留められていたこと、彼らでさえ書かれたクルアーンの部分を目撃していたことを示している。

フルカーン章 25：5 彼らは言った：「昔の者たちの物語だ！他人に書かせて、その人々に朝晩それを読まれている。」

6：言え、「それを、天と地の秘密を知る方が下された。確かに、かれは赦し深く、慈悲深い。」

クルアーンが不信者たちに挑戦する表現からも、クルアーンが啓示される過程で書き留められていたことが理解できる。なぜなら、これらの挑戦では、相手にクルアーンの章の類似を作るように求めているからである。もし当時の

不信者たちがクルアーンの章の構成を目撃していなかったなら、それらの類似を作るように求めることは意味がなかったであろう。

フード章 11-13：それを彼が作り出したと言っているのか？言え：「それならば、そのように作られた 10 の章を持ってくるがいい。もしあなた方が真実を語るならば！神以外に呼べる者たちをも呼べ。」

14：もし彼らがあなた方に答えられなければ、それが神の知識によって下されたものであり、彼以外に神はないことを知れ。今やあなたたちはムスリムになるか？

バカラ章 2-23： もしわれわれが信仰する者に下したものについて疑いがあるなら、それに類似した一章を持ってくるがいい。神以外の証人たちをも呼べ。もしあなた方が真実を語るならば！

24：もしそれができないならば—そして決してできないであろう—その場合、不信者たちのために用意された、燃料が人間と石である火から身を守りなさい。

多くのムスリムは、啓示された時代からクルアーンを暗記してきた。今日、世界中に数十万人のハーフィズ（クルアーン全体を暗記した者）が存在し、これらの人々は、クルアーンの暗記が一定の努力によって可能であることを示している。読み書きが普及していなかったクルアーン啓示

初期の時代においては、暗記は現代よりもさらに高く評価された能力であった。ムハンマドの時代に書かれ、暗記されたクルアーンは、単なる文書の一つとして理解されるべきではない。ムスリムたちは、その啓示が人類と出会った時代から今日に至るまで、絶え間なくその文書を注視してきた。手元に現存していたこと、また常に目を注がれていたこと、さらにはそれが神からのものであると信じていたことから、「数ある書物のうちの一つ」としてではなく、唯一無二の書物として扱ってきたのである。ゆえに、その内容の改変、追加、削除は決して許容されず、また実際に許されなかった。要するに、書かれ、暗記されて守られてきたクルアーンは、同時に人々の視線が常に注がれてきた書でもあった。

ムスリムたちは毎日複数回、礼拝（サラート）を行い、その際にクルアーンを朗誦する。クルアーン啓示の時代から現代に至るまで途切れることなく続いてきた礼拝における反復も、クルアーンがいかに厳密に守られてきたかを示すものである。全体を暗記するムスリムは一部に限られるが、多くのムスリムは少なくとも一部を暗記しており、さらに朗読中に間違いがあればそれを指摘できる程度に内容を理解している者も多数存在する。加えて、クルアーンの朗読は礼拝以外でも崇拝行為とされており、ムスリムたちは日常的にこの行為を行っている。このように、日々クルアーンと接し、それを重要視しているムスリムたちにとっ

て、その内容が厳密に保持されてきたのは、むしろ当然のことである。

ムハンマドに最も近く、クルアーンの啓示に直接立ち会った者たちの中には、ムハンマドの死後まもなくして互いに争うほどの対立に巻き込まれた者もいた。イスラム初期の数世紀には、ムスリムたちが科学や哲学において世界最高の文明を築いた一方で、望ましくない出来事も数多く発生し、政治的な分裂は宗派的な対立へと発展し、ムスリムたちは多くの問題について対立する陣営に分かれた。しかし、相互に矛盾し、厳しく批判し合い、異なる立場をとったムスリムたちでさえ、ただ一つのクルアーンの文書については一致していた。これは、クルアーンが極めて厳密に守られてきたことの証左の一つである。

最古のクルアーン写本を調査しても、クルアーンがよく保持されていることが明らかとなる。最古の写本において、全く異なる章が含まれていたり、現在のクルアーンには存在しない物語を語る節が記されていたりすることはない。ただし、手書きで写本が複製されたことから、筆写ミスのような微細な誤りが含まれている可能性はある。だが、それらも他の現存写本や暗記によって修正することが可能である。また、読みやすさを考慮して、一部の写本には特に母音の「アリフ」などが追加された事例もあるが、これはクルアーンの内容に関わる差異とはなっていない。

バーミンガム大学に所蔵されている 2 ページのクルアーン写本は、現存する中で最も古いものとされている。放射性炭素年代測定によると、これらのページはムハンマドの生涯にわたる時代から、彼の死後 13 年にあたる 645 年までの時期に属しているとされている（なお、この測定は特定の年を示すものではなく、あくまで期間を示すものである）。したがって、これらのページがムハンマドの時代に書かれた可能性もある。これらの最古の数ページを調査すると、現在のクルアーンの配列と同じように、第 19 章「マルヤム（マリア）」章の終わりと、その直後に第 20 章「ター・ハー」章の冒頭が確認できる。

以上で簡潔に述べたような理由に加えて、以下に一部紹介するクルアーンに含まれる数学的な構造を示すデータもまた、クルアーンが極めて厳密に保護されていることを明らかにするものである。これまでに述べた理由を快く受け入れる多くの人々が、クルアーンに見られる数学的構造についてはなかなか受け入れようとせず、提示されたデータを調査することなく否定する傾向がある。このことについては、正されるべき三つの原因があると私は考える。

第一に、「クルアーンと数学」という題のもとに、極端かつ根拠のない主張がなされてきたため、一部の人々はクルアーンと数学には何の関係もないと述べ、このような突飛な主張からイスラムを守ろうとしている。しかしながら、「悪しき例は例とならず」という格言は誰しもが知る

ところである。クルアーンの節に関して突飛な解釈がなされているからといって、私たちはその節を理解しようとする努力をやめたりはしない。また、偽の預言者が現れるからといって、真の預言者を称えるのをやめたりしない。あるいは、偽の科学者がいるからといって、真の科学者の功績を称賛しないということもない。同様に、この分野における悪しき例によって、私たちがこのテーマを研究することなく先入観によって退けるべきではないのである。

　第二に、社会の広い層が数学の重要性を理解していない現実がある。その一因として、教育制度において数学が適切に、また親近感を持って教えられていないことが挙げられると私は考えるが、本書の主題から逸れるためこの点には深入りしない。宇宙を理解し、記述する上で最も重要な道具は数学であると言っても過言ではない。この事実と共に、神が宇宙を創造したことを理解する者は、神が数学に特別な役割を与えたことにも気づくであろう。私たちが到達する結論は、ガリレオの言葉のように「数学とは、神が宇宙を記した言語である」ということである。もし、神の創造において数学が特別な意味を持つと理解できるならば、そして神が人間とコミュニケーションを取るために一冊の書を送ったと考えるならば、どうしてその書物に数学とは関係がないと先入観を持って決めつけるのか？　突飛な主張を鵜呑みにすることが問題であるのと同様に、数学

的秩序に関する主張を先入観で否定することもまた問題なのである。

　第三に、クルアーンに数学的秩序があるという主張は、イスラムにおいて異端とされるフルフィー主義のような潮流と関連付けられることが多い。確かに、フルフィー主義のような流派が陥った誤りを繰り返さぬことは重要である。しかし、クルアーンにおける数学的秩序に関するデータをフルフィー主義と混同することは、天体について語るという一点だけで天文学と占星術を混同するのと同じ過ちである。フルフィー派は、クルアーンに出てくる単語や文字に関する数を用いて、クルアーンには存在しない新たな意味を作り出す。例えば、クルアーンに登場する「クン（在れ）」という語を取り上げ、この語を構成するアラビア語の二文字「カーフ」と「ヌーン」の読みの中に六つの文字音があるとし、この六という数字が六方向を表すと主張するのである。彼らの中には、指導者の生年月日をクルアーンから導き出し、指導者が「神の特別な僕」（例えばマフディーやイエス）であると証明しようとする者もいたし、今でも存在する。このような数え上げは、数学的尺度にも、クルアーンにおける語の意味にも、科学にも、クルアーンのメッセージにも関係なく、あたかもクルアーンの教えであるかのように、そこにないことを持ち込む論理性のない、無理な解釈にすぎない。

これに対して、以下に示されるように、クルアーンの語と宇宙との間に調和があることを示す目的で、例えば「一日（ヤウム）」という表現が 365 回登場することや、「この世（ドゥニヤー）」と「来世（アーヒラ）」という語がそれぞれ 115 回ずつ使われていることを挙げる場合、クルアーンにおけるメッセージの内容や語義を変えるものではなく、また科学が語っていないデータをあたかも科学的であるかのように示すものでもない。文学において、例えば詩では音節数によるリズム（音節律）などの数学的な尺度がある。このような尺度を用いて、詩人は各句を同じ音節数で構成し、作品に調和をもたらすとともに、詩人としての技巧を示すのである。クルアーンにおける数学的秩序をフルフィー主義と混同することは、詩の音節律をフルフィー主義と混同するようなものであり、極めて誤った考え方である。クルアーンの数学的秩序とは、クルアーン本文の記述に用いられた文学的特徴の一つである。記された文書において、語の数を全体の構成を考慮しつつ数学的な秩序に合わせ、しかも意味を損なうことなくそれを実現することは、文学の世界では極めて困難であり、そうした例はほとんど見られない。しかし、クルアーンは人間の手によって創られた作品ではない。創造主と人との間を結ぶという非凡な使命を帯びた書物である。この非凡な使命を持つこの書は、多くの驚嘆すべき特徴を示している。前述のものに加え、数学的秩序もその一つである。以下にその例を紹

介する。本書に示される数多くの驚異が、かくも重要な機能を備えた一冊の書に集中しているという事実こそが、最も驚くべきことと私は考える。

さらに、クルアーンには「数字が付けられた書物」への言及もある。これは、書における数学的秩序の存在を最初から否定する者たち、書物と数学の間に関係を見出せない者たちに対する回答である。

ムタッフィフィーン（量を減らす者）章 83-7：いや、悪人の書は確かにシッジーンにある。

8：シッジーンとは何であるか、あなたにそれを知らせるものは何か。

9：それは数字で記録された書である。

同章 83-18：いや、善人の書はイッリーユーンにある（最も高き星座に）。19：イッリーユーンとは何であるか、あなたにそれを知らせるものは何か。20：それは数字で記録された書である。

また、すべてが数えられていることを述べる以下の節も、数学的な構造に関する主張を慎重に検討する必要性を示している。

ジン（幽精）章 72-28：かれ（神）は、彼らのもとにあるものを完全に包囲しており、全てを数え上げている。

10-2　クルアーンの構造における対称性とリング構造について

クルアーンを表面的に見ると、計画的な構造がないように見える。クルアーンの最初の章は 7 節からなる短い「ファーティハ章」であり、その後にクルアーン最長の章「バカラ章」が続き、さらに多くの長い章が現れる。その後、中程度の長さの章が続き、最後には多数の短い章で締めくくられる。このような構成に対し、一部のオリエンタリストたちはクルアーンに一定の秩序が存在せず、「混乱した書」であると批判してきた。しかし、イスラム発祥から 200 年後には有名なムスリム思想家ジャーヒズがクルアーンの構造における計画性を研究し、300 年後には著名な神学者バーキッラーニー、600 年後には著名なタフスィール（クルアーン解釈）学者ラーズィー、900 年後にはスユーティーなどがこのテーマに関心を寄せ、貴重な見解を示した。21 世紀に入り、クルアーンの構造的調和と対称性に焦点を当てた詳細な研究が行われるようになった。この分野において注目されているのはレイモンド・ファリンの研究である[148]。ファリンはカリフォルニア大学バークレー校

[148] Raymond Farrin, Structure and Quranic Interpretation,White Cloud Press, Ashland, 2014.　ファリンの著作のサブテーマは“A study of Symmetry and Coherence in Islam’s Holy Text”。

でアラビア語と文学の博士号を取得した学者であり、アラビア詩の研究に続いてクルアーンの構造に関心を持つようになった。彼はクルアーンにおけるリング（輪）構造に関する発見を経て、ムハンマドがこのような構造を単独で作り出すことは不可能であるとの結論に達し、イスラムに改宗した。近年、クルアーンの調和した構造を明らかにする研究で注目されている学者には、アンゲリカ・ノイヴィルト、ピエール・クラポン・ド・カプロナ、ムスタンシル・ミール、ムハンマド・アブデル・ハリーム、マティアス・ツァーニザー、ニール・ロビンソン、カール・アーンスト、そして特にアミン・イスラーヒーおよびミシェル・カイパースがいる。

これらの研究によって、クルアーンの章の配置、章の内部構造、さらには節の内部に至るまで、対称的な構成が存在することが明らかにされた。クルアーンにおける対称性にはいくつかの形がある。そのひとつが「パラレリズム（並列構造）」と呼ばれるものであり、A1-B1-A2-B2 のような構成をとる。もう一つは「キアズム（交差構造）」と呼ばれるものであり、A1-B1-B2-A2 という構成である。クルアーンで最も頻繁に見られる対称性は、中心を軸とした「集中構造（コンセントリズム）」であり、その構成は A1-B1-M-B2-A2 のような形をとる。ここで、同じ文字は内容的に対応していることを示している。以下の単純

な例を見れば、集中構造がどのようなものであるかがより明確に理解できる。

A1 = 車でショッピングモールに入った。

B1 = モールでピザを食べた。

C1 = モールで出会った友人と会話した。

M = モールでバスケットボールのユニフォームを買った。

C2 = モールで服屋の店員と会話した。

B2 = モールでケーキを食べた。

A2 = 車でショッピングモールから家へ向かった。

ご覧のように、A では車による出入りが対称的に語られている。B では食べたものが対称的に述べられ、C では交わされた会話が記録されている。そして中心に位置する M では、バスケットボール用の服の購入が語られている。中心対称的な構造においては、通常、最も強調したい出来事や興味深い内容が中央に配置される。このような構成では、最初と最後の部分、前から 2 番目と後ろから 2 番目の部分などが対応しており、全体が環状（リング）関係をなしていると言われ、「リング構造（halka sistemi）」と呼ばれる。

ここで示した対称性は非常に単純な例であるが、ファリンは、クルアーン全体にこのような構造がより複雑な形で散在していると主張しており、自身の著作においてその実

例を示そうとしている。私はファリンの研究全体およびいくつかの例に関して懐疑的であるが、彼のアプローチがクルアーンの構造に関する重要な点を捉えていると感じており、このテーマは真剣に取り上げられるべきだと考える。ファリンは、章の配列、各章の内部、さらには一部の節の内部にもリング構造が存在すると主張している。この対称構造には 3 つの説明が考えられる。第一の説明は、これらの対称構造が偶然に生じたというものである。しかし、提示される例の複雑さは、この主張を否定するものである。第二の説明は、ムハンマド自身がこの構造を意図的に作り出したという説である。文学においてリング構造は非常に稀ではあるが、中東地域および他の地域においてこのような文体が用いられたことがあると研究者たちは指摘している。だが、ムハンマドが預言者となる以前に詩作に関わっていた、あるいはその方面に才能があったことを示す歴史的記録は存在しない。リング構造によって文を書くことの困難さも見過ごしてはならない。この構造を用いるには、書き手は文全体を見渡せる視点を持ち、しばしば文章に修正を加える必要がある。しかし、クルアーンは編集プロセスを経た書物ではない。これまで述べたこと、そしてこれから述べることの意義を正しく理解するためにも、クルアーンが編集を受けた書物ではないという事実を常に念頭に置くべきである。さらに、ムハンマドは 23 年間の預言者としての活動の中で、信者たちの質問に答え、啓示を人々

に伝え、敵からの攻撃に対処し、また一人の人間として家族と過ごし、子どもたちの死という悲劇も経験した。このような激動の中で、状況に応じてクルアーンの啓示がもたらされ、人々に伝えられた。例えば、時には多神教徒の攻撃、時には偽信者の態度、時にはローマ人の敗北、あるいは質問への回答が啓示の契機となった。これらの啓示が書き記されていく中で、将来の出来事を人間が予測することは不可能であり、それらの出来事を考慮してこのような構造を意図的に設計することはできなかったはずである。また、ムハンマドの時代やその後の時代において、章や節におけるこのようなリング構造の存在が認識されていたことを示す証拠はない。もし彼自身がこのような対称的構造を意図していたのなら、そのことに注意を促し、自らの「能力」の証として周囲に示していたはずである。以上の２つの選択肢が排除されると、残るのは３つ目の説明である――すなわち、クルアーンは人間の手によるものではなく、神の啓示によるものであるということである。

本書では、提示可能な多数の例の中から、いくつかを取り上げる。クルアーンに内在する対称構造は、ファーティハ章からすでに確認することができる。

1：ビスミッラー・ヒル＝ラフマーン・ヒル＝ラヒーム（慈悲あまねき、慈愛ふかき神の御名において）。

2〜4： 讃えは万物の主である神に帰する。（統治）

彼は慈悲あまねく、慈愛ふかき方である。（慈悲）

彼は審判の日の統治者である。（統治）

5：我々ははただあなたと関係を築き、ただあなたに助けを乞うのである。（中心節であり、上と下の両方と関連している。）

6〜7. 我らを正しい道へと導きたまえ。（導き）

あなたが恩恵を授けた者たちの道へ。（導きと慈悲）

怒りを招いた者たちや迷った者たちの道ではなく。（導き）

バスマラは、クルアーンの 114 の章のうち 113 の冒頭に現れ、クルアーンにおいて非常に特別な位置を占めている。ファーティハ章においてはバスマラは番号付きの節であるが、他の章では章の冒頭に番号なしで存在している[149]。バスマラはクルアーンの章の入口の表現として、章の上部で独立した位置にある。ファリンは、まずファーティハ章の中の二つの小さな輪に注目した[150]。第一の輪は、神の統治（ハキミーヤ）を表す第二節の「ラブ」（養育者、必要を満たす者）と第四節の「メリク」（統治者、治める者）という属性の間にある、慈悲を表す第三節の「ラフマ

[149] クルアーンの現存する章の順序と節の区別が正しいことを認める構造として「偶数と奇数」のシステムを後述する。

[150] Raymond Farrin 著, Structure and Quranic Interpretation, p. 6-7.

ン」（慈悲深き者）と「ラヒーム」（憐れみ深き者）の属性が配置されている輪である。第二の輪の中央にもまた慈悲の強調がある。すなわち、第六節の「正しい道に導いてください」という祈りと、第七節の「怒りを受けた者および迷える者ではなく、恵みを受けた者の道に導いてください」という祈りの間に、恵みを受けた者の祈りが配置されているのである。この二つの小さな輪はいずれも、慈悲の強調を対称的に含んでいる。章全体においては、まず神をその属性で描写する部分が存在し、次に第五節の中央の節において、上部の部分と下部の祈りの節とをつなぐ文があり、そこでは神と関係を築く人間は神とのみ関係を築き、神からのみ助けを求めると宣言している。そしてその後、その人間の口から神への祈りが続く。ご覧のとおり、ファーティハ章においては（小さな輪にも章全体にも）クルアーンで最も頻繁に見られる中心的な対称性の形が現れている。章の中心の文は、上の節と下の節を結びつける性質を持っているのである。

上の節において神の統治と慈悲が語られた後、中心の文においてこれらの属性に基づき「ただあなたと関係を築きます」と述べられている。この属性を持ち、関係を築くべき神こそ、祈りを捧げ向かうべき存在である。だからこそ中心の節の続きで「ただあなたから助けを求めます」と言われており、その後の節においてその助けのための祈りがなされている。要するに中心の節は、上部の部分と下部の

部分を第一部分と第二部分として、非常に美しい調和で結びつけているのである。

クルアーンの構造の観点から、もう一つ重要な点は章と章の間の関係である。クルアーンにおいてファーティハ章は第一の章として特別な位置を占めると同時に、ナス章は114番目、すなわち最後の章として特別な位置を占めている。この二つの章間に見られる平行性は特別な重要性を持つ。なぜならば、クルアーンの初めと終わりがあるべき場所にあることを示し、現存の章の順序を裏付けるからである。両章ともにバスマラを含み、加えて6つの節から構成されている（ファーティハ章はバスマラが番号付きの節であるため、7節である）。両章の冒頭は神の属性を列挙することから始まり、両章に共通する神の「ラブ」や「メリク」といった属性がある[151]。両章において神の保護を願いつつ祈りが捧げられる。ファーティハ章では、二つの否定的なもの、すなわち怒りを受けた者と迷った者から避難し、ナス章では人間とジンという二つの源から来る悪魔の囁き（思い込み）から身を守ることが意図されている。

さらに、114番目のナス（人々）章は113（黎明）番目のファラク章と関係がある。ほぼ全てのタフスィール（クルアーン解釈書）学者がこの章間の関係に注意を払っている。113番目の章では外部からの危険（闇、結び目に息を

[151] いくつかの読み方（キラート）によれば、ファーティハ章には「メリーク（Melik）」の称号の代わりに、同じ語根から派生し非常に近い意味を持つ「マリク（Malik）」の称号が用いられている。

吹き込む者（つまり魔術師の類）、嫉妬する者）に対して神の保護を求め、114 番目の章では人の心の中に疑念を植え付ける者に対して神の保護を求める。両章とも（ファーティハ章でも）バスマラに続く節に神の「ラブ」の属性が現れる。この二つの短い章は悪から身を守ることを意図しており、その長さはほぼ同じであり、祈りの形態をなしている。ここでクルアーンの構造上重要な点は、この二つの章のペアを形成することがクルアーンの構造において例外的な事態ではないことである。近代においてアーミン・イスラヒ、ミシェル・クイパーズ、ファリンなどの研究者たちは、クルアーンの大部分がペアの形態をなす章から成っていると主張している。

　次に第 12 章ののユースフ章を長い章の代表として取り上げ、その中の対称的要素を詳しく検討しよう。この章を注意深く読むと、そこに一つのリング構造があることが見て取れる。

A-1：序論。クルアーンが過去の物語を語ることについて。

B-1：ユースフの夢。

C-1：兄たちの策略とエジプトへの旅。

D-1：ユースフが井戸から救出され、家に迎え入れられる。

E-1：ユースフを誘惑しようとする試み。

M：囚人たちと王の夢、そしてそれを解釈するユースフ。唯一神のメッセージが語られる。

E-2：ユースフを誘惑しようとした試みが明らかになる。

D-2：ユースフが権威ある管理者として国に定住する。

C-2：ユースフが兄たちに策略を仕掛け、ユースフの家族がエジプトへ旅する。

B-2：ユースフの夢が実現する。

A-2：結論。クルアーンの物語から教訓を得ること。

ユースフ章をクルアーンの翻訳で読むと、この章における「中心対称構造（リング構造）」を目の当たりにすることができるであろう。A-1 と A-2、B-1 と B-2、C-1 と C-2、D-1 と D-2、E-1 と E-2 の間には、対称性と相補的な関係が存在する[152]。（ファリンは、これらのセクション内にも小さなリング構造があると述べている）

短い章の例としてファーティハ章、長い章の例としてユースフ章を取り上げた後、クルアーンで最もよく知られている節の一つであるアーヤト・アル＝クルスィー（Ayat al-Kursi）を分析し、バカラ章の第 255 節であるこの節の内部にあるリング構造を示そうと思う。まず、この節の全体の翻訳を見てみよう。

[152] Raymond Farrin 著, Structure and Quranic Interpretation, p. 33-43.

バカラ章 2-255：アッラー、かれの他に神はなく、永遠に生き、自存する。かれを眠気も眠りも捉えることはない。天と地にある全てのものはかれのものである。かれの許可なしに、誰がかれのもとでかれの赦しを執り成すことができようか。かれは彼らの前後を知っておられる。かれの知識のうち、かれが望むもの以外を人々は把握することはできない。かれの王座は天と地を覆っている。それらを保持することはかれにとって困難ではない。かれは至高であり、偉大である。

この節は、リング構造の良い例であると私は考える。多くの人々がこの節を何度も読んできたものの、その中の対称性に気づかなかったであろう。生涯にわたって何千回もこの節を読んでもその対称性に気づかなかったとすれば、章の中の対称性が何百年も人々に気づかれなかったことに驚くべきではない。この節を構成する九つの文に分けて分析してみよう。

A-1： アッラー、かれの他に神はなく、永遠に生き、自存する。（信仰告白と神の二つの属性）

B-1： かれを眠気も眠りも捉えることはない。（保護の完璧さ）

C-1： 天と地にある全てのものはかれのものである。（全てのものの所有者）

D-1： かれの許可なしに、誰がかれのもとでかれの赦しを執り成すことができようか。（完全な統治；その許可に依る）

M： かれは彼らの前後を知っておられる。（中心部分）

D-2： かれの知識のうち、かれが望むもの以外を人々は把握することはできない。（完全な統治；その許しに依る）

C-2： かれの王座は天と地を覆っている。（全てのものの所有者）

B-2： それらを保持することはかれにとって困難ではない。（保護の完璧さ）

A-2： かれは至高であり、偉大である。（神の二つの属性）

　このように、A1 と A2、B1 と B2、C1 と C2、D1 と D2 をそれぞれ比較すると、対称性が明確に見て取れる。最初の文である A1 では、信仰告白の後に神の偉大さを示す二つの属性が述べられており、対称的に最後の文である A2 でも神の偉大さを示す二つの属性が述べられている。B1 と B2 は共に神の保護の完璧さを語っており、神が眠気にも眠りにも捉えられないように、天と地の保持も彼に

とって困難ではない、つまり神の存在の持続には何の障害もないことを示している。C1 と C2 は、神がすべての存在の所有者であることを語っている。D1 と D2 は、神が神の許しの執り成しと知識を完全に統治しており、神の許しによってのみ事象が起こることを示している。中心の文で「前」と「後」の言葉が使われているのも興味深い。「前」という言葉がこの中心文を節の前半に、「後」という言葉が後半に結びつけていると考えられる（ファーティハ章の中心節における類似の構造を思い出そう）。このように、多くの人々がその中の対称性に気づかずに速く読んでしまう、ムスリムが最も多く読む節の一つであるアーヤト・アル＝クルスィーの構造は、文学的な繊細さで設計されている。

クルアーンにおけるこれらの対称性は、多くの例の中のほんの一部を構成している。これらが偶然に生じたと考えるのは合理的な説明ではない。また、ムハンマドが、人生において何の利益も得ることなく、生きている間に話題にもならなかったこれらの構造を、敵が彼を滅ぼそうとし、周囲の人々が質問攻めにしていた中で、どのように完成するかも知らずに 23 年かけて完成させ、編集過程も経ていない一冊の書物の中で実現したと考えるのも、良い説明ではない。クルアーンの構造におけるこれらの配置は、他の多くの例と同様に、その非凡さを裏付けるものである。

10-3 宇宙と語句の調和における数学

宇宙を創造したのは神であり、クルアーンを啓示したのもまた神である。クルアーンは、そのメッセージに従うよう命じると同時に、目を宇宙に向けるように促し、そこに証拠が存在することを示している。ムスリムは、目を宇宙にもクルアーンにも向けるべきである。クルアーンにおけるある語の出現回数は、それが表す宇宙の現象と一致していることがある。「宇宙」という語によって、太陽、月、海、陸、生物など外的世界のすべての存在を指している。宇宙とクルアーンの語との一致の例を、その語が登場する章と節の番号を明示することにより紹介する。これにより、私たちが持つクルアーンからいつでもこれらのデータを確認することが可能である。また、クルアーン中の語句の出現箇所は、これに役立つ多くのコンピュータープログラムによっても検証可能である。本書にこれらのデータを収録する前に、多くの人々がそれらを確認し、承認したことを述べておきたい。クルアーンの中の語が、ここで述べるように宇宙との間で、また次の章で述べるように語同士の間で調和していることには、以前の研究においても注目されてきた。私の知る限りでこれに最初に注目したのは、アブドゥルラッザーク・ネッフェルである。彼は自身の著書のアラビア語原典において、クルアーンのこの特性を「クルアーンのイジャーズ（簡潔で豊かな表現）」と定義している。彼の研究の後、多くの数学的な構造がクルアー

ン中に発見され、それらはコンピューターを用いた研究によって確認され、正確性が証明された。ここではその件に関して 10 の例を挙げるが、本書に収録されていないさらなる例が存在することも付け加えておきたい。

1 - 日（yevm）：クルアーンでは「日」（アラビア語で「yevm」）という語が単数形で 365 回登場する。地球が太陽の周りを一周する間に、地球上では 365 回の「一日」が生じる。太陽と地球の関係を基にした暦では、これにより一年は 365 日に分けられる。ある人が太陽と地球の関係ではなく、月と地球の関係に基づく暦を使用しているとしても、365 という数の天文学的な意義は変わらない。なぜなら、365 という数は暦とは無関係に地球と太陽の関係を表すものであり、地球上の日の形成においては、太陽の存在が月よりも重要であるからである。このように、「一日」という語がクルアーンで非常に多く、まさに 365 回登場するということが、果たして偶然であると言えるだろうか？

語	クルアーンで繰り返さ

	れている回数
1日(yevm)	365
地球が1回公転した時に地球で経過した日数	365

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	1:4	62.	7:51	123.	16:124	184.	26:87	245.	40:16	306.	57:13
2.	2:8	63.	7:53	124.	17:13	185.	26:88	246.	40:16	307.	57:15
3.	2:48	64.	7:59	125.	17:14	186.	26:135	247.	40:17	308.	58:6
4.	2:62	65.	7:163	126.	17:52	187.	26:155	248.	40:17	309.	58:7
5.	2:85	66.	7:163	127.	17:58	188.	26:156	249.	40:18	310.	58:18
6.	2:113	67.	7:167	128.	17:62	189.	26:189	250.	40:27	311.	58:22
7.	2:123	68.	7:172	129.	17:71	190.	26:189	251.	40:29	312.	60:3
8.	2:126	69.	8:41	130.	17:97	191.	27:83	252.	40:30	313.	60:6
9.	2:174	70.	8:41	131.	18:19	192.	27:87	253.	40:32	314.	62:9
10.	2:177	71.	8:48	132.	18:19	193.	28:41	254.	40:33	315.	64:9
11.	2:212	72.	9:3	133.	18:47	194.	28:42	255.	40:46	316.	64:9
12.	2:228	73.	9:18	134.	18:52	195.	28:61	256.	40:49	317.	64:9
13.	2:232	74.	9:19	135.	18:105	196.	28:62	257.	40:51	318.	65:2
14.	2:249	75.	9:25	136.	19:15	197.	28:65	258.	40:52	319.	66:7
15.	2:254	76.	9:29	137.	19:15	198.	28:71	259.	41:19	320.	66:8
16.	2:259	77.	9:35	138.	19:15	199.	28:72	260.	41:40	321.	68:24
17.	2:259	78.	9:36	139.	19:26	200.	28:74	261.	41:47	322.	68:39

18.	2:264	79.	9:44	140.	19:33	201.	29:13	262.	42:7	323.	68:42
19.	2:281	80.	9:45	141.	19:33	202.	29:25	263.	42:45	324.	69:35
20.	3:9	81.	9:77	142.	19:33	203.	29:36	264.	42:47	325.	70:4
21.	3:25	82.	9:99	143.	19:37	204.	29:55	265.	43:39	326.	70:8
22.	3:30	83.	9:108	144.	19:38	205.	30:12	266.	43:65	327.	70:26
23.	3:55	84.	10:15	145.	19:38	206.	30:14	267.	43:68	328.	70:43
24.	3:77	85.	10:28	146.	19:39	207.	30:43	268.	44:10	329.	70:44
25.	3:106	86.	10:45	147.	19:85	208.	30:55	269.	44:16	330.	73:14
26.	3:114	87.	10:60	148.	19:95	209.	30:56	270.	44:40	331.	73:17
27.	3:155	88.	10:92	149.	20:59	210.	30:56	271.	44:41	332.	74:9
28.	3:161	89.	10:93	150.	20:64	211.	31:33	272.	45:17	333.	74:46
29.	3:166	90.	11:3	151.	20:100	212.	32:5	273.	45:26	334.	75:1
30.	3:180	91.	11:8	152.	20:101	213.	32:25	274.	45:27	335.	75:6
31.	3:185	92.	11:26	153.	20:102	214.	32:29	275.	45:28	336.	76:7
32.	3:194	93.	11:43	154.	20:104	215.	33:21	276.	45:34	337.	76:10
33.	4:38	94.	11:60	155.	20:124	216.	33:44	277.	45:35	338.	76:11
34.	4:39	95.	11:77	156.	20:126	217.	33:66	278.	46:5	339.	76:27
35.	4:59	96.	11:84	157.	21:47	218.	34:30	279.	46:20	340.	77:12
36.	4:87	97.	11:98	158.	21:104	219.	34:40	280.	46:20	341.	77:13
37.	4:109	98.	11:99	159.	22:2	220.	34:42	281.	46:21	342.	77:14
38.	4:136	99.	11:103	160.	22:9	221.	35:14	282.	46:34	343.	77:35
39.	4:141	100.	11:103	161.	22:17	222.	36:54	283.	46:35	344.	77:38
40.	4:159	101.	11:105	162.	22:47	223.	36:55	284.	50:20	345.	78:17
41.	4:162	102.	12:54	163.	22:55	224.	36:59	285.	50:22	346.	78:18
42.	5:3	103.	12:92	164.	22:69	225.	36:64	286.	50:30	347.	78:38
43.	5:3	104.	14:18	165.	23:16	226.	36:65	287.	50:34	348.	78:39
44.	5:5	105.	14:31	166.	23:65	227.	37:20	288.	50:41	349.	78:40

45.	5:14	106.	14:41	167.	23:100	228.	37:21	289.	50:42	350.	79:6
46.	5:36	107.	14:42	168.	23:111	229.	37:26	290.	50:42	351.	79:35
47.	5:64	108.	14:44	169.	23:113	230.	37:144	291.	50:44	352.	79:46
48.	5:69	109.	14:48	170.	23:113	231.	38:16	292.	51:12	353.	80:34
49.	5:109	110.	15:35	171.	24:2	232.	38:26	293.	51:13	354.	82:15
50.	5:119	111.	15:36	172.	24:24	233.	38:53	294.	52:9	355.	82:17
51.	6:12	112.	15:38	173.	24:37	234.	38:78	295.	52:13	356.	82:18
52.	6:15	113.	16:25	174.	24:64	235.	38:79	296.	52:46	357.	82:19
53.	6:22	114.	16:27	175.	25:14	236.	38:81	297.	54:6	358.	83:5
54.	6:73	115.	16:27	176.	25:17	237.	39:13	298.	54:8	359.	83:6
55.	6:73	116.	16:63	177.	25:22	238.	39:15	299.	54:19	360.	83:11
56.	6:93	117.	16:80	178.	25:25	239.	39:24	300.	54:48	361.	83:34
57.	6:128	118.	16:80	179.	25:26	240.	39:31	301.	55:29	362.	85:2
58.	6:141	119.	16:84	180.	25:27	241.	39:47	302.	56:50	363.	86:9
59.	6:158	120.	16:89	181.	25:69	242.	39:60	303.	56:56	364.	90:14
60.	7:14	121.	16:92	182.	26:38	243.	39:67	304.	57:12	365.	101:4
61.	7:32	122.	16:111	183.	26:82	244.	40:15	305.	57:12		

2 - 日々：（eyyām、yawmayn）クルアーンでは、「日々」を意味する複数形の語（eyyām、yawmayn）が合計で 30 回登場する。これは、1 か月の日数に相当する。「yawmayn」はアラビア語で「2 日」を意味し、双数形である。「eyyām」は「複数の日々」を指す。月は地球の周囲を約 29.53 日で一周するため、イスラム暦では 1 か月が 29 日または 30 日で構成される。29.53 を四捨五入すると 30 となる。同様に、地球が太陽の周囲を一周するのに約

365.25 日かかり、これを四捨五入すると 365 日となる。クルアーンで「1 日」という語が 365 回登場することは先に見た。クルアーンにおける語の登場回数と宇宙の現象との一致は、（一語の二分の一、四分の一、十分の一は有り得ないので）数学的な丸め処理を考慮している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
日々	30

1 か月の日数	30

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	
1.	2:80	11.	7:54	21.	41:10	
2.	2:184	12.	10:3	22.	41:16	
3.	2:184	13.	10:102	23.	45:14	

4.	2:185	14.	11:7	24.	50:38	
5.	2:196	15.	11:65	25.	57:4	
6.	2:203	16.	14:5	26.	69:7	
7.	3:24	17.	22:28	27.	69:24	
8.	3:41	18.	25:59	28.	2:203	2日 (yevmeyn)
9.	3:140	19.	32:4	29.	41:9	
10.	5:89	20.	34:18	30.	41:12	

3 – 月（şehr）：クルアーンのタウバ章第 36 節において、「神の御許において月の数は 12 である」と記されており、1 年を構成する月の数が 12 であることが確認されているのである。クルアーン全体を通して、「月」という単語は単数形で 12 回登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数
月 (Şehr)	12

1 年間の月数	12

順番	章・節	順番	章・節
1.	2:185	7.	5:97
2.	2:185	8.	9:36
3.	2:194	9.	34:12
4.	2:194	10.	34:12
5.	2:217	11.	46:15
6.	5:2	12.	97:3

地球が太陽の周りを 365 日かけて一周する間に、月は地球の周りを 12 回公転し、12 の月が形成される。この 12 の月の長さは 354.37 日であり、これを四捨五入すると 354 日となる。そしてこの 354 日は、月を基準とする（ヒジュラ）暦年の日数である。12 のヒジュラ月には 354 日が含まれているが、非常に興味深いことに、クルアーンにおける最初の「月」という語の登場（バカラ章 2-185）から、最後の出現（カディル章 97-3）までの間、すなわちクルアーン中の 12 の「月」（şehr)）という語の間には、ちょうど 354 の「日」（yevm）という語が存在するので

ある。この事実は、クルアーンにおける現行の章配の列をも裏付けるものである。

12 の月(şehr)から成る月 (Kamer)歴の日数	354

クルアーンに登場する 12 の「月」(şehr) という語の間にある「日」という語の数	354

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
	1:4	52.	7:51	113.	16:124	174.	26:87	235.	40:16	296.	57:13
	2:8	53.	7:53	114.	17:13	175.	26:88	236.	40:16	297.	57:15
	2:48	54.	7:59	115.	17:14	176.	26:135	237.	40:17	298.	58:6
	2:62	55.	7:163	116.	17:52	177.	26:155	238.	40:17	299.	58:7
	2:85	56.	7:163	117.	17:58	178.	26:156	239.	40:18	300.	58:18
	2:113	57.	7:167	118.	17:62	179.	26:189	240.	40:27	301.	58:22
	2:123	58.	7:172	119.	17:71	180.	26:189	241.	40:29	302.	60:3
	2:126	59.	8:41	120.	17:97	181.	27:83	242.	40:30	303.	60:6
	2:174	60.	8:41	121.	18:19	182.	27:87	243.	40:32	304.	62:9

	2:177	61.	8:48	122.	18:19	183.	28:41	244.	40:33	305.	64:9
1.	2:212	62.	9:3	123.	18:47	184.	28:42	245.	40:46	306.	64:9
2.	2:228	63.	9:18	124.	18:52	185.	28:61	246.	40:49	307.	64:9
3.	2:232	64.	9:19	125.	18:105	186.	28:62	247.	40:51	308.	65:2
4.	2:249	65.	9:25	126.	19:15	187.	28:65	248.	40:52	309.	66:7
5.	2:254	66.	9:29	127.	19:15	188.	28:71	249.	41:19	310.	66:8
6.	2:259	67.	9:35	128.	19:15	189.	28:72	250.	41:40	311.	68:24
7.	2:259	68.	9:36	129.	19:26	190.	28:74	251.	41:47	312.	68:39
8.	2:264	69.	9:44	130.	19:33	191.	29:13	252.	42:7	313.	68:42
9.	2:281	70.	9:45	131.	19:33	192.	29:25	253.	42:45	314.	69:35
10.	3:9	71.	9:77	132.	19:33	193.	29:36	254.	42:47	315.	70:4
11.	3:25	72.	9:99	133.	19:37	194.	29:55	255.	43:39	316.	70:8
12.	3:30	73.	9:108	134.	19:38	195.	30:12	256.	43:65	317.	70:26
13.	3:55	74.	10:15	135.	19:38	196.	30:14	257.	43:68	318.	70:43
14.	3:77	75.	10:28	136.	19:39	197.	30:43	258.	44:10	319.	70:44
15.	3:106	76.	10:45	137.	19:85	198.	30:55	259.	44:16	320.	73:14
16.	3:114	77.	10:60	138.	19:95	199.	30:56	260.	44:40	321.	73:17
17.	3:155	78.	10:92	139.	20:59	200.	30:56	261.	44:41	322.	74:9
18.	3:161	79.	10:93	140.	20:64	201.	31:33	262.	45:17	323.	74:46
19.	3:166	80.	11:3	141.	20:100	202.	32:5	263.	45:26	324.	75:1
20.	3:180	81.	11:8	142.	20:101	203.	32:25	264.	45:27	325.	75:6
21.	3:185	82.	11:26	143.	20:102	204.	32:29	265.	45:28	326.	76:7
22.	3:194	83.	11:43	144.	20:104	205.	33:21	266.	45:34	327.	76:10
23.	4:38	84.	11:60	145.	20:124	206.	33:44	267.	45:35	328.	76:11
24.	4:39	85.	11:77	146.	20:126	207.	33:66	268.	46:5	329.	76:27

25.	4:59	86.	11:84	147.	21:47	208.	34:30	269.	46:20	330.	77:12
26.	4:87	87.	11:98	148.	21:104	209.	34:40	270.	46:20	331.	77:13
27.	4:109	88.	11:99	149.	22:2	210.	34:42	271.	46:21	332.	77:14
28.	4:136	89.	11:103	150.	22:9	211.	35:14	272.	46:34	333.	77:35
29.	4:141	90.	11:103	151.	22:17	212.	36:54	273.	46:35	334.	77:38
30.	4:159	91.	11:105	152.	22:47	213.	36:55	274.	50:20	335.	78:17
31.	4:162	92.	12:54	153.	22:55	214.	36:59	275.	50:22	336.	78:18
32.	5:3	93.	12:92	154.	22:69	215.	36:64	276.	50:30	337.	78:38
33.	5:3	94.	14:18	155.	23:16	216.	36:65	277.	50:34	338.	78:39
34.	5:5	95.	14:31	156.	23:65	217.	37:20	278.	50:41	339.	78:40
35.	5:14	96.	14:41	157.	23:100	218.	37:21	279.	50:42	340.	79:6
36.	5:36	97.	14:42	158.	23:111	219.	37:26	280.	50:42	341.	79:35
37.	5:64	98.	14:44	159.	23:113	220.	37:144	281.	50:44	342.	79:46
38.	5:69	99.	14:48	160.	23:113	221.	38:16	282.	51:12	343.	80:34
39.	5:109	100.	15:35	161.	24:2	222.	38:26	283.	51:13	344.	82:15
40.	5:119	101.	15:36	162.	24:24	223.	38:53	284.	52:9	345.	82:17
41.	6:12	102.	15:38	163.	24:37	224.	38:78	285.	52:13	346.	82:18
42.	6:15	103.	16:25	164.	24:64	225.	38:79	286.	52:46	347.	82:19
43.	6:22	104.	16:27	165.	25:14	226.	38:81	287.	54:6	348.	83:5
44.	6:73	105.	16:27	166.	25:17	227.	39:13	288.	54:8	349.	83:6
45.	6:73	106.	16:63	167.	25:22	228.	39:15	289.	54:19	350.	83:11
46.	6:93	107.	16:80	168.	25:25	229.	39:24	290.	54:48	351.	83:34
47.	6:128	108.	16:80	169.	25:26	230.	39:31	291.	55:29	352.	85:2
48.	6:141	109.	16:84	170.	25:27	231.	39:47	292.	56:50	353.	86:9
49.	6:158	110.	16:89	171.	25:69	232.	39:60	293.	56:56	354.	90:14

50.	7:14	111.	16:92	172.	26:38	233.	39:67	294.	57:12		101:4
51.	7:32	112.	16:111	173.	26:82	234.	40:15	295.	57:12		

4 - 年（sene）：クルアーンにおいて「sene（年）」という語の派生語は 19 回登場する。19 年という周期は、天文学において重要な現象であるメトン周期に相当する。人類の歴史において広く用いられてきた暦は二つ存在する。一つ目は、地球が太陽の周囲を 365 日かけて回ることを基盤とした太陽暦である。もう一つは、月が地球の周囲を約 30 日で回ることを基盤とした太陰暦である。太陽暦を用いる人々は、365 日の周期を 12 か月に分けて、ある意味で月を基準とした暦に似せている。一方、太陰暦を用いる人々は、12 か月の積み重ねを「1 年」と見なし、ある意味で太陽を基準とした暦に似せている。しかし、地球が太陽の周囲を一周することで形成される太陽暦の 1 年と、月が地球の周囲を 12 回回ることで形成される太陰暦の 1 年は、完全には一致しない。同じ月相が同じ太陽暦の日に一致するのは 19 年に一度であり、天文学ではこの現象をメトン周期として知られている。この周期の中で、太陰暦の 7 年は「うるう年」（355 日）、12 年は「通常年」（354 日）である。クルアーンでは、「sene」という語が 19 回登場するが、その派生語のうち単数形（sene）は 7 回、複数形（sinin）は 12 回登場し、ここにも興味深い一致が見られる。

語	クルアーンで繰り返されている回数

年（sene）	19

1つのメトン周期を構成する年数	19

年（sene）という語の単数形が登場する章・節		年（sene）という語の複数形（sinin）が登場する章・節			
1.	2:96	8.	7:130	15.	20:40
2.	5:26	9.	10:5	16.	23:112
3.	22:47	10.	12:42	17.	26:18
4.	29:14	11.	12:47	18.	26:205
5.	32:5	12.	17:12	19.	30:4
6.	46:15	13.	18:11		
7.	70:4	14.	18:25		

クルアーンにおいて「太陽」と「月（kamer）」という語は、19回同時に用いられている（第41章37節では両語がそれぞれ2回ずつ同時に使われている）。これは、太陽と月という二つの天体による暦の計算を融合させたメトン周期の年数に一致している。以下には、「太陽」と「月」

が一緒に登場する箇所のリストが示されている。そして、非常に興味深いことに、「太陽」と「月」が共に登場する19番目の節は、この二つの天体の統合について述べている。それが次の節である。

キヤーマ章75-9：太陽と月が一つにされたときに。

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	6:96	8.	21:33	15.	41: 37
2.	7:54	9.	22:18	16.	41: 37
3.	10:5	10.	29:61	17.	55: 5
4.	12:4	11.	31:29	18.	71: 16
5.	13:2	12.	35:13	19.	75: 9
6.	14:33	13.	36:40		
7.	16:12	14.	39:5		

5 - 月（kamer）：クルアーンにおいて、天体としての「月」（Kamer）という語の派生語は27回登場する。これは、月が地球の周囲を楕円軌道で一周するのに要する日数が27日であることと一致している。また、月と太陽がある計算に従って動いていることが、クルアーンのラフマーン章55-5で述べられている。現代では数学的な計算によってその運行が理解されている月と太陽が、クルアーンにおいて登場する回数にも数学的な秩序が見られること

は、クルアーンの驚異の一つである。「月」という語が登場する箇所は以下に示されている。

語	クルアーンで繰り返されている回数
月	27

月の楕円軌道が一周するのにかかる日数	27

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	6:77	8.	16:12	15.	36:39	22.	71:16
2.	6:96	9.	21:33	16.	36:40	23.	74:32
3.	7:54	10.	22:18	17.	39:5	24.	75:8
4.	10:5	11.	25:61	18.	41:37	25.	75:9
5.	12:4	12.	29:61	19.	41:37	26.	84:18
6.	13:2	13	31:29	20.	54.1	27.	91:2
7.	14:33	14.	35:13	21.	55:5		

6-太陽：クルアーンにおける「日」、「日々」、「年」、「月」という語が、天文学的な観点から意味を持ち、数学

的な尺度で用いられていることを確認した。これに基づいて、これらの語と関連する「太陽（Şems）」という語も、天文学的に重要な数学的尺度と関係しているはずだと考え、この語を取り上げた。まず、クルアーンに「太陽」という語が 33 回登場し、そのうち 1 回を除く 32 回が、アラビア語の定冠詞「El-」付きで「El-Şems」として現れていることが分かった（英語の「the」のように、アラビア語にも定冠詞が存在する）。定冠詞が付いていない唯一の箇所は、76 章「インサーン章」13 節であり、これは来世において太陽の焼けつくような熱さがないことを表しているため、定冠詞が付いていない。要するに、これらすべての出現回数である 33、または定冠詞付きの出現回数である 32 のいずれかが、太陽にとって重要な事象に対応している必要があると考えた。そして私たちは、32 も 33 も、太陽にとって非常に重要な「視直径（angular diameter）」と関係していることを発見した。視直径とは、天文学において非常に重要な指標であり、ある天体が特定の位置からどれほどの大きさに見えるかを角度で表したものである。視直径は、天体が接近したり大きく見えるときに大きくなり、遠ざかったり小さく見えるときに小さくなる。太陽が地球から最も遠い時の視直径は 31.6（整数に丸めると 32）、最も近い時は 32.7（整数で 33）である。太陽の大きさや地球からの距離は、生命の存在にとって非常に繊細に調整されている。太陽がこれより大きかっ

たり、地球に近かったりすれば、地球は非常に熱くなり、生命に悪影響を及ぼしただろう。これは、視直径が現在よりも大きくなる状態に対応する。逆に、太陽がより小さかったり、遠かったりすれば、地球は生命が生まれるには寒すぎる場所になっていただろう。これは、視直径が現在よりも小さい状態に対応する。視直径は、地球と太陽の距離関係が生命の存在にとってどれほど重要であるかを、ひとつの尺度で表すことができるため、天文学で用いられる重要な指標である。また、太陽暦と太陰暦の間には約 11 日の差がある。33 年ごとに、両者は同じ時点で一致する。例えば、ある年のラマダンが 1 月に始まった場合、再び 1 月にラマザンが始まるには 33 年が必要である。この 33 という数は、太陽暦にとってもこのような重要な現象と関係している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
太陽 （定冠詞の有無にかかわらない）	33

太陽の最大の視直径	33

語	クルアーンで繰り返されている回数
太陽（定冠詞付き）	32

太陽の最小の視直径	32

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:258	10.	17:78	19.	29:61	28.	55:5
2.	6:78	11.	18:17	20.	31:29	29.	71:16
3.	6:96	12.	18:86	21.	35:13	30.	75:9
4.	7:54	13.	18:90	22.	36:38	31.	76:13*
5.	10:5	14.	20:130	23.	36:40	32.	81:1
6.	12:4	15.	21:33	24.	39:5	33.	91:1
7.	13:2	16.	22:18	25.	41:37		
8.	14:33	17.	25:45	26.	41:37		
9.	16:12	18.	27:24	27.	50:39		

7-七つの天：クルアーンにおいて「七つの天（yedi gök、アラビア語で *seba semavâtin*）」という表現は 7 回登場する（この表現で何が意図されているかについては、本書第 2 章の「相対的宇宙」という見出しのもとで考察した）。なお、ナバア章（Nebe Suresi）第 12 節では、天について語られる際に「七つの強固なもの（seban şidâden）」という表現が用いられており、「七つの天」という言い回しは使用されていない。もしここでも「七つの天」という語が使われていたならば、この表現は 8 回登場することとなり、数学的な秩序が崩れることになっていた。クルアーンにおけるこの数学的な秩序は、クルアーン中の用語の用法を評価する上で新たな視点をもたらしうる。以下に「七つの天」という表現が登場する箇所を挙げる。

語	クルアーンで繰り返されている回数
七つの天	7

順番	章・節	順番	章・節
1.	2:29	5.	65:12

2.	17:44	6.	67:3
3.	23:86	7.	71:15
4.	41:12		

8 - 海と陸：クルアーンにおいて「海（el-bahr）」という語は 32 回、「陸（el-berr）」という語は 12 回登場する。一見したところ、この 2 つの語の使用には特別な関係はないように見える。しかし、地球上における海と陸の面積比を見てみると、クルアーンにおけるこの 2 語の使用頻度の比が、実際の地球上の海と陸の比率と一致しており、クルアーンに驚くべき数学的な秩序が存在することがわかる。

「海（el-bahr）」という語は、定冠詞付きの形（英語の “the” に相当）である「el-bahr」として 9 回、「陸（el-berr）」の定冠詞付き形「el-berr」とともに登場している。これは、両語がこの形において相互に関連づけられて使用されていることを示している（また、「deniz（海）」という語は複数形で 8 回、定冠詞なしで 1 回使用されている）。

以下の表では、同じ節に両語が登場する場合にはアスタリスクが付けられている。

地球の表面積は約 5 億 1000 万平方キロメートルであり、そのうち約 3 億 6000 万平方キロメートルが海、約 1 億

3500 万平方キロメートルが陸である。クルアーンにおける「陸」と「海」の語の出現数の比率は：

12 / 32 = 0.375

であり、地球上の陸と海の面積比：

1 億 3500 万 km² / 3 億 6000 万 km² = 0.375

と完全に一致している。

なお、上記の面積以外に、明確に海とも陸とも言えない**氷床（氷に覆われた地域）がおよそ 1500 万 km²存在する。24 章 40 節にて定冠詞なしで一度だけ登場する「bahr」**という語は、もしかするとこの氷床に該当する可能性があるかもしれない。

クルアーンにおける「海」と「陸」を表す語の出現比が、地球上の実際の「海」と「陸」の比率と完全に一致しているという事実を、あなたは単なる偶然だと思うだろうか？

語	クルアーンで繰り返されている回数	割合
陸	12	12/32 =0.375
海	32	

場所	面積	割合
陸	1,35億 km^2	1,35億 /3,6億= 0.375
海	3,6億 km^2	

「海」という語が登場する箇所　（*がついているのは「海」「陸」の語が両方ある箇所）

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:50	12.	16:14	23.	26:63
2.	2:164	13.	17:66	24.	27:63*
3.	5:96*	14.	17:67*	25.	30:41*
4.	6:59*	15.	17:70*	26.	31:27
5.	6:63*	16.	18:61	27.	31:31
6.	6:97*	17.	18:63	28.	42:32
7.	7:138	18.	18:79	29.	44:24
8.	7:163	19.	18:109	30.	45:12
9.	10:22*	20.	18:109	31.	52:6
10.	10:90	21.	20:77	32.	55:24
11.	14:32	22.	22:65		

「陸」という語が登場する箇所　（*がついているのは「海」「陸」の語が両方ある箇所）

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	5:96*	5.	10:22*	9.	27:63*
2.	6:59*	6.	17:67*	10.	29:65
3.	6:63*	7.	17:68	11.	30:41*
4.	6:97*	8.	17:70*	12.	31:32

9- 鉄：クルアーンの鉄章 34-10 において、「われらはダウドに鉄を柔らかくした」と記されており、鉄に言及されている。また、アリ・イムラン章 3-14 のように、人々の財産への欲求を語る文脈では、金や銀が語られている。しかし、ただ一箇所、鉄章 57-25 においては、「鉄」が節の主要なテーマの一つとして扱われている。他の節では、ダウドに与えられたものや、人々の物欲の例として鉄や金銀が挙げられているのに対し、この節では鉄そのものが中心に置かれている。まさにこの節で鉄が重要視されているために、この章の名も「鉄」（Hadid）となっているのである。

クルアーンにおいて、元素あるいは金属が章の名称として使われた唯一の例がこの章である。

該当の節は以下のとおりである：

鉄章 57 - 25

「われらは確かに、明確な証拠を携えて使徒たちを遣わし、彼らと共に書物と秤（はかり）を下した。人々が正義を実践するためである。そして、われらは鉄も下した。その中には大きな力と人々への多くの益がある。」

元素の最も基本的な特性は原子番号である。原子番号はその元素を定義するものであり、各元素に固有のものである。鉄の原子番号は 26 である。原子番号とは、その原子が持つ陽子の数を示し、鉄に 26 個の陽子があることを意味する。

この鉄章の冒頭から、鉄に言及される 25 節までの間に、「アッラー（Allah）」という語が 26 回出現する。これは、鉄の原子番号と一致する。また、鉄に言及されている節は 57 章の 25 節であるが、章の冒頭の番号の付かない「ビスミッラー（慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名において）」をカウントすれば、通算 26 となる。これも鉄の原子番号との一致である。

さらに、クルアーンが啓示された当時、アラビア文字は数字としても使用されており、各文字に数値的価値が割り当

てられていた。「鉄（حديد）」を構成する 4 つの文字の数値を合計すると次のようになる：

. ハー（ح）＝8
. ダール（د）＝4
. ヤー（ي）＝10
. ダール（د）＝4

→ 合計：8 + 4 + 10 + 4 = 26

つまり、アラビア語の「鉄」の文字の合計も鉄の原子番号 26 に一致する。

原子に含まれる陽子の数が異なれば、それは別の元素となる。しかし、同一の元素でも中性子の数が異なれば、異なる同位体となる。鉄には安定した同位体が 4 種類あり、そのひとつが質量数 57 である。そして 57 は、この章「鉄」の章番号でもある。

この章は、クルアーンの後ろから数えて 58 番目の章でもあるが、この 58 という数字もまた、鉄の 4 つの安定同位体のうちの別の 1 つの質量数である。

このような情報は、クルアーンの語彙の使い方だけでなく、章番号や節番号までもが意図された秩序のもとに構成されていることを示唆している。もちろん、これらの情報だけでは決定的とは言えないが、次に紹介する「偶数と奇

数」に関するデータが加われば、十分に説得力のあるものとなると私は考える。

鉄の原子番号	26
章の冒頭から鉄の特性について述べている唯一の節である鉄章第25節の終わりまでに「アッラー」（Allah）という語が登場する回数	26

鉄の同位体の一つ	57
鉄章の章番号（クルアーンの冒頭から数えた場合）	57
鉄の同位体の一つ	58
鉄章の章番号（クルアーンの最後から数えた場合）	58

10-蜜蜂：蜜蜂に関する私の例も、鉄の場合と同様に、クルアーンの章（スーラ）や節（アーヤ）の配置が何らかの知恵によって行われていることを示すものである。この件については、「偶数と奇数」に関する章でより説得力のある例が見つかることを再度お知らせす

る。クルアーンでは、蜂以外の他の動物についても言及されており、他の動物の名前が冠された章も存在する。しかし、本書の第 4 章で先に述べたように、クルアーンでは、どの動物についても、その動物の行動だけに 2 つの節にわたって焦点を当てて記述されることはない。したがって、クルアーンでは蜂に特別な位置が与えられていることが見て取れる。特別な位置を持つ生き物には特別な示しがある可能性もある。蜂の行動や特性は、第 16 章「ナフル（蜂）」章に述べられている。雄の蜜蜂の染色体数は 16 である。雌の蜜蜂の染色体数は（2n）で 16×2＝32 である。世界中の蜜蜂はこの染色体数を持つ。また、ナフル章は 128 節から構成されている。128 は 16 の 8 倍であり、32 の 4 倍に等しい。（この章の第 16 節が最も短い節であり、第 128 節は 32 文字であることも指摘されている。）これら 128 節の中で、「アッラー（神）」という言葉が出てくる節は 64（16×4 および 32×2 に等しい）あり、アッラーの言葉が出てこない節も 64 節あるということも興味深い観察である。

蜜蜂章の章番号	16
蜜蜂章の節数	128 (16×8)

雄の蜜蜂の染色体の数	16
雌の蜜蜂の染色体の数	16×2

10-4　語句の調和における数学

クルアーンに登場する互いに関連する語句の使用にも、数学的な秩序が存在する。具体的な例に入る前に、これらについて考えられる基本的な説明を確認しておく。これに対して取り得る反応は三つある。

第一に、提示される例は誤りであるか、あるいは偶然一致したものであり、数学的な秩序の存在は否定できるとする立場である。

第二に、ムハンマドが自らの能力によってクルアーンにこのような特徴を組み込んだと考える立場である。

第三に、クルアーンにこのような特徴があるのは、その神的な起源によるものであり、クルアーンの非凡さと改変されずに守られてきたことを示すものであると受け入れる立場である。

第一の立場について言えば、クルアーンは六千数百の節からなる中程度の厚さの一冊の書であり、高頻度の語句の繰り返しを含む数々の異なる数学的整合性の例が、単なる偶然で一冊の書に収まったとするのは、公平とは言い難

い。誤ったデータだという主張に対しては、語句が出現する場所が示されており、確認したい者は容易に調べられる（今日のコンピュータプログラムを用いれば難しいことではない）。同じ一冊の書が、歴史上果たしてきた重大な役割、宇宙、地球、生物、歴史に関する驚異的な説明も思い出すべきである。前の章で述べた壮大な説明を行った唯一の書の中に、数学的秩序の例が見出されるということは、それらの例の非凡さをさらに高めるものである。

　第二の立場、すなわちムハンマドが 23 年間の預言活動の中で、人々に宗教を説き、信徒たちを組織し、自分自身と信徒たちを殺そうとする多神教徒と戦いながら、語句の出現回数までも意図的に調整し、このような数学的秩序を意識的に保ったと考えるのは、まったく理にかなっていない。今日ではコンピュータを用いてようやく管理できるようなこれらの数値を、23 年間に断続的に啓示された啓示の中で意図的に成し遂げたというのは、信憑性に欠ける。著者に対して、「文意を損なうことなく、コンピュータを用いずに語句の使用に数学的秩序を持たせることが可能かどうか」と問うてみれば、あるいは自分自身をその著者の立場に置いてみれば、そのような選択肢がいかに現実離れしているかが理解できるはずである。
加えて、仮に（あり得ないことだが）この数学的秩序の例をムハンマドが意図的に作ったと仮定してみても、生前にはまったく役に立たないこのような秩序のために、なぜ彼

が労力を費やしたのか、そしてなぜそのことに注意を引くことなく世を去ったのか、説明がつかない。生きている間に何の利益もない特徴に労を費やすことには、見合うだけの価値がないのである。

私は第三の選択肢が正しいと考える。このように多数の数学的秩序の例が偶然に現れることはあり得ず、ムハンマドによって意図的に作られたものでもない。『クルアーン』における数学的秩序は、『クルアーン』が極めて良好に保存されていること、そして語句の選定が神によるものであることを示している。

では、今から 20 の例を紹介していく。これらの例は、広大な集合の一部分であることをあらかじめ述べておく。

1 - 現世／来世：クルアーンを一度でも読んだ者なら、「現世」と「来世」という概念の相互関係に気づくであろう。これら二語の関係は明白であり、『クルアーン』において非常に頻繁に繰り返される語でもある。この二つの語は、それぞれ 115 回ずつ、等しく出現する。

語	クルアーンで繰り返されている回数
現世	115
来世	115

「現世」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:85	25.	4:134	49.	10:88	73.	23:37	97.	40:51
2.	2:86	26.	5:33	50.	10:98	74.	24:14	98.	41:12
3.	2:114	27.	5:41	51.	11:15	75.	24:19	99.	41:16
4.	2:130	28.	6:29	52.	11:60	76.	24:23	100.	41:31
5.	2:200	29.	6:32	53.	12:101	77.	24:33	101.	42:20
6.	2:201	30.	6:70	54.	13:26	78.	28:42	102.	42:36
7.	2:204	31.	6:130	55.	13:26	79.	28:60	103.	43:32
8.	2:212	32.	7:32	56.	13:34	80.	28:61	104.	43:35
9.	2:217	33.	7:51	57.	14:3	81.	28:77	105.	45:24
10.	2:220	34.	7:152	58.	14:27	82.	28:79	106.	45:35
11.	3:14	35.	7:156	59.	16:30	83.	29:25	107.	46:20
12.	3:22	36.	8:42	60.	16:41	84.	29:27	108.	47:36
13.	3:45	37.	8:67	61.	16:107	85.	29:64	109.	53:29
14.	3:56	38.	9:38	62.	16:122	86.	30:7	110.	57:20
15.	3:117	39.	9:38	63.	18:28	87.	31:15	111.	57:20
16.	3:145	40.	9:55	64.	18:45	88.	31:33	112.	59:3
17.	3:148	41.	9:69	65.	18:46	89.	33:28	113.	67:5
18.	3:152	42.	9:74	66.	18:104	90.	33:57	114.	79:38
19.	3:185	43.	9:85	67.	20:72	91.	35:5	115.	87:16

20.	4:74	44.	10:7	68.	20:131	92.	37:6		
21.	4:77	45.	10:23	69.	22:9	93.	39:10		
22.	4:94	46.	10:24	70.	22:11	94.	39:26		
23.	4:109	47.	10:64	71.	22:15	95.	40:39		
24.	4:134	48.	10:70	72.	23:33	96.	40:43		

「来世」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:4	25.	5:41	49.	13:34	73.	24:23	97.	40:43
2.	2:86	26.	6:32	50.	14:3	74.	27:3	98.	41:7
3.	2:94	27.	6:92	51.	14:27	75.	27:4	99.	41:16
4.	2:102	28.	6:113	52.	16:22	76.	27:5	100.	41:31
5.	2:114	29.	6:150	53.	16:30	77.	27:66	101.	42:20
6.	2:130	30.	7:45	54.	16:41	78.	28:70	102.	42:20
7.	2:200	31.	7:147	55.	16:60	79.	28:77	103.	43:35
8.	2:201	32.	7:156	56.	16:107	80.	28:83	104.	53:25
9.	2:217	33.	7:169	57.	16:109	81.	29:20	105.	53:27
10.	2:220	34.	8:67	58.	16:122	82.	29:27	106.	57:20
11.	3:22	35.	9:38	59.	17:7	83.	29:64	107.	59:3
12.	3:45	36.	9:38	60.	17:10	84.	30:7	108.	60:13
13.	3:56	37.	9:69	61.	17:19	85.	30:16	109.	68:33
14.	3:77	38.	9:74	62.	17:21	86.	31:4	110.	74:53

15.	3:85	39.	10:64	63.	17:45	87.	33:29	111.	75:21
16.	3:145	40.	11:16	64.	17:72	88.	33:57	112.	79:25
17.	3:148	41.	11:19	65.	17:104	89.	34:1	113.	87:17
18.	3:152	42.	11:22	66.	20:127	90.	34:8	114.	92:13
19.	3:176	43.	11:103	67.	22:11	91.	34:21	115.	93:4
20.	4:74	44.	12:37	68.	22:15	92.	38:7		
21.	4:77	45.	12:57	69.	23:33	93.	39:9		
22.	4:134	46.	12:101	70.	23:74	94.	39:26		
23.	5:5	47.	12:109	71.	24:14	95.	39:45		
24.	5:33	48.	13:26	72.	24:19	96.	40:39		

2-天使／悪魔：「天使」という語が挙げられたとき、多くの人の頭にまず浮かぶものの一つは、天使と対立する存在として位置づけられる「悪魔」である。この二つの語のすべての派生形は、クルアーンにおいてそれぞれ 88 回ずつ、等しく登場している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
天使	88
悪魔	88

「天使」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:30	25.	6:9	49.	17:40	73.	41:30
2.	2:31	26.	6:50	50.	17:61	74.	42:5
3.	2:34	27.	6:93	51.	17:92	75.	43:19
4.	2:98	28.	6:111	52.	17:95	76.	43:53
5.	2:102	29.	6:158	53.	17:95	77.	43:60
6.	2:161	30.	7:11	54.	18:50	78.	47:27
7.	2:177	31.	7:20	55.	20:116	79.	53:26
8.	2:210	32.	8:9	56.	21:103	80.	53:27
9.	2:248	33.	8:12	57.	22:75	81.	66:4
10.	2:285	34.	8:50	58.	23:24	82.	66:6
11.	3:18	35.	11:12	59.	25:7	83.	69:17
12.	3:39	36.	11:31	60.	25:21	84.	70:4
13.	3:42	37.	12:31	61.	25:22	85.	74:31
14.	3:45	38.	13:13	62.	25:25	86.	78:38
15.	3:80	39.	13:23	63.	32:11	87.	89:22
16.	3:87	40.	15:7	64.	33:43	88.	97:4
17.	3:124	41.	15:8	65.	33:56		
18.	3:125	42.	15:28	66.	34:40		
19.	4:97	43.	15:30	67.	35:1		
20.	4:136	44.	16:2	68.	37:150		
21.	4:166	45.	16:28	69.	38:71		
22.	4:172	46.	16:32	70.	38:73		
23.	6:8	47.	16:33	71.	39:75		

24.	6:8	48.	16:49	72.	41:14		

「悪魔」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:14	25.	6:112	49.	17:64	73.	36:60
2.	2:36	26.	6:121	50.	18:63	74.	37:7
3.	2:102	27.	6:142	51.	19:44	75.	37:65
4.	2:102	28.	7:20	52.	19:44	76.	38:37
5.	2:168	29.	7:22	53.	19:45	77.	38:41
6.	2:208	30.	7:27	54.	19:68	78.	41:36
7.	2:268	31.	7:27	55.	19:83	79.	43:36
8.	2:275	32.	7:30	56.	20:120	80.	43:62
9.	3:36	33.	7:175	57.	21:82	81.	47:25
10.	3:155	34.	7:200	58.	22:3	82.	58:10
11.	3:175	35.	7:201	59.	22:52	83.	58:19
12.	4:38	36.	8:11	60.	22:52	84.	58:19
13.	4:60	37.	8:48	61.	22:53	85.	58:19
14.	4:76	38.	12:5	62.	23:97	86.	59:16
15.	4:76	39.	12:42	63.	24:21	87.	67:5
16.	4:83	40.	12:100	64.	24:21	88.	81:25
17.	4:117	41.	14:22	65.	25:29		
18.	4:119	42.	15:17	66.	26:210		
19.	4:120	43.	16:63	67.	26:221		

20.	5:90	44.	16:98	68.	27:24		
21.	5:91	45.	17:27	69.	28:15		
22.	6:43	46.	17:27	70.	29:38		
23.	6:68	47.	17:53	71.	31:21		
24.	6:71	48.	17:53	72.	35:6		

3-利益／腐敗：クルアーンにおける概念として「利益（nef）」は肯定的な内容を持ち、人々が有益であることは望ましいとされている。それに対して「腐敗（fesad）」は非難され、望ましくない状態を表している。意味として互いに対立するこの二つの語は、クルアーンにおいてそれぞれ 50 回ずつ、等しく登場している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
利益	50
腐敗	50

「利益」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節

1.	2:102	11.	7:188	21.	20:89	31.	26:73	41.	40:80
2.	2:123	12.	10:18	22.	20:109	32.	26:88	42.	40:85
3.	2:164	13.	10:49	23.	21:66	33.	28:9	43.	43:39
4.	2:219	14.	10:98	24.	22:12	34.	30:57	44.	48:11
5.	2:219	15.	10:106	25.	22:13	35.	32:29	45.	51:55
6.	4:11	16.	11:34	26.	22:28	36.	33:16	46.	57:25
7.	5:76	17.	12:21	27.	22:33	37.	34:23	47.	60:3
8.	5:119	18.	13:16	28.	23:21	38.	34:42	48.	74:48
9.	6:71	19.	13:17	29.	25:3	39.	36:73	49.	80:4
10.	6:158	20.	16:5	30.	25:55	40.	40:52	50.	87:9

「腐敗」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:11	11.	5:32	21.	7:142	31.	17:4	41.	28:77
2.	2:12	12.	5:33	22.	8:73	32.	18:94	42.	28:77
3.	2:27	13.	5:64	23.	10:40	33.	21:22	43.	28:83
4.	2:30	14.	5:64	24.	10:81	34.	23:71	44.	29:30
5.	2:60	15.	7:56	25.	10:91	35.	26:152	45.	29:36
6.	2:205	16.	7:74	26.	11:85	36.	26:183	46.	30:41
7.	2:205	17.	7:85	27.	11:116	37.	27:14	47.	38:28
8.	2:220	18.	7:86	28.	12:73	38.	27:34	48.	40:26
9.	2:251	19.	7:103	29.	13:25	39.	27:48	49.	47:22
10.	3:63	20.	7:127	30.	16:88	40.	28:4	50.	89:12

4-近い／遠い：「近い」と「遠い」の語句の関係は明確である。この二語は、クルアーンに 10 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数
近い	10
遠い	10

「近い」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	11:114	5.	38:25	9.	67:27
2.	26:64	6.	38:40	10.	81:13
3.	26:90	7.	39:3		
4.	34:37	8.	50:31		

「遠い」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:222	5.	18:16	9.	33:51

2.	4:90	6.	19:48	10.	44:21
3.	4:91	7.	19:49		
4.	11:42	8.	26:212		

5-苦しみ／平穏：「苦しみ」を意味する「dayk」という語の派生語と、この語の反対の意味を持つ「安心、平穏」を意味する「tatmain」という語の派生語は、クルアーン全体を通してそれぞれ 13 回ずつ、等しく登場している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
苦しみ	13
平穏	13

「苦しみ」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節
1.	6:125	8.	16:127
2.	9:25	9.	25:13
3.	9:118	10.	26:13
4.	9:118	11.	27:70

5.	11:12	12.	29:33
6.	11:77	13.	65:6
7.	15:97		

「平穏」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節
1.	2:260	8.	13:28
2.	3:126	9.	16:106
3.	4:103	10.	16:112
4.	5:113	11.	17:95
5.	8:10	12.	22:11
6.	10:7	13.	89:27
7.	13:28		

6-バランス／過度：クルアーンでは「バランス」（mizan）を守ることが述べられている。「過度性」（israf）は避けるべきことだと伝えられている。この二語も、クルアーンにおいて 23 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数

バランス	23
過度	23

「バランス」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	6:152	9.	17:35	17.	55:8
2.	7:8	10.	18:105	18.	55:9
3.	7:8	11.	21:47	19.	55:9
4.	7:9	12.	23:102	20.	57:25
5.	7:85	13.	23:103	21.	83:3
6.	11:84	14.	26:182	22.	101:6
7.	11:85	15.	42:17	23.	101:8
8.	15:19	16.	55:7		

「過度」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	3:147	9.	10:12	17.	39:53
2.	4:6	10.	10:83	18.	40:28
3.	5:32	11.	17:33	19.	40:34
4.	5:141	12.	20:127	20.	40:43
5.	6:141	13.	21:9	21.	43:5

6.	7:31	14.	25:67	22.	44:31
7.	7:31	15.	26:151	23.	51:34
8.	7:81	16.	36:19		

7-離婚／結婚：クルアーンでは離婚を表す「talak」という語と結婚を表す「nikah」という語がそれぞれ 23 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数
離婚	23
結婚	23

「離婚」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:227	9.	2:237	17.	48:15
2.	2:228	10.	2:241	18.	65:1
3.	2:229	11.	18:71	19.	65:1
4.	2:230	12.	18:74	20.	66:5
5.	2:230	13.	18:77	21.	68:23
6.	2:231	14.	26:13	22.	77:29
7.	2:232	15.	33:49	23.	77:30

8.	2:236	16.	38:6		

「結婚」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:221	9.	4:22	17.	24:33
2.	2:221	10.	4:22	18.	24:60
3.	2:230	11.	4:25	19.	28:27
4.	2:232	12.	4:25	20.	33:49
5.	2:235	13.	4:127	21.	33:50
6.	2:237	14.	24:3	22.	33:53
7.	4:3	15.	24:3	23.	60:10
8.	4:6	16.	24:32		

8-男／女：クルアーンでは、男という意味の「*racul*」という語句と女という意味の「*meratun*」という語句の単数形がそれぞれ 24 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数
男	24
女	24

「男」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:282	9.	17:47	17.	34:43
2.	4:12	10.	18:37	18.	36:20
3.	6:9	11.	23:25	19.	39:29
4.	7:63	12.	23:38	20.	39:29
5.	7:69	13.	25:8	21.	39:29
6.	7:155	14.	28:20	22.	40:28
7.	10:2	15.	33:4	23.	40:28
8.	11:78	16.	34:7	24.	43:31

「女」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	3:35	9.	12:30	17.	29:32
2.	3:40	10.	12:51	18.	29:33
3.	4:12	11.	15:60	19.	33:50
4.	4:128	12.	19:5	20.	51:29
5.	7:83	13.	19:8	21.	66:10
6.	11:71	14.	27:23	22.	66:10

7.	11:81	15.	27:57	23.	66:11
8.	12:21	16.	28:9	24.	111:4

9-語りかけ／話す：クルアーンでは「話す」という意味の「nutuk」という語句と、語りかけという意味の「hitab」という語句がそれぞれ 12 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数
語りかけ	12
話	12

「語りかけ」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節
1.	2:235	7.	25:63
2.	11:37	8.	28:23
3.	12:51	9.	38:20
4.	15:57	10.	38:23
5.	20:95	11.	51:31
6.	23:27	12.	78:37

「話す」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節
1.	20:63	7.	41:21
2.	20:65	8.	41:21
3.	23:62	9.	45:29
4.	27:16	10.	51:23
5.	27:85	11.	53:3
6.	37:92	12.	77:35

10-船／溺れる：クルアーンにおけるヌフ（ノア）に関する物語では、神のメッセージに応えた者たちが「船」によって救われたのに対し、不信仰者たちは水に溺れて滅ぼされたことが語られている。「船」は神のメッセージに応えた者たちの居場所であり、「溺れる」は不信仰者たちの結末であった。

アラフ章 7-64：「彼を嘘つきと呼んだ。われは彼と、船にいた者たちを救った。われの印を否定した者たちは溺れさせた。彼らは盲目的な民であった。」

クルアーン全体を通して、「船」と「溺れる」という語は、それぞれ 23 回ずつ登場する。これらの語の関連性は、両方が同時に登場する以下の節において見出すことができる：アラフ章 7-64 節、ユヌス章 10-73、フード章 11-37 節、ムミヌーン章 23-27。

語	クルアーンで繰り返されている回数
船	23
溺れる	23

「船という語が登場する箇所」

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:164	9.	17:66	17.	31:31
2.	7:64	10.	22:65	18.	35:12
3.	10:22	11.	23:22	19.	36:41
4.	10:73	12.	23:27	20.	37:140
5.	11:37	13.	23:28	21.	40:80
6.	11:38	14.	26:119	22.	43:12
7.	14:32	15.	29:65	23.	45:12
8.	16:14	16.	30:46		

「溺れる」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:50	9.	17:69	17.	29:40
2.	7:64	10.	17:103	18.	36:43
3.	7:136	11.	18:71	19.	37:82
4.	8:54	12.	21:77	20.	43:55
5.	10:73	13.	23:27	21.	44:24
6.	10:90	14.	25:37	22.	71:25
7.	11:37	15.	26:66	23.	79:1
8.	11:43	16.	26:120		

11-アーダム／イエス：クルアーンにおいて、アリ・イムラン章 3-59 では、他の預言者たちの間では類を見ない比喩がアーダムとイエスの間でなされている。興味深いことに、クルアーンでは特別に比喩されたこの「アーダム」と「イエス」という名前が、それぞれ 25 回ずつ、同数で登場している。

アリ・イムラン章 3-59：神の御許におけるイエスの状況は、アーダムの状況のようである。神は彼を土から創り、その後「在れ」と言われると、彼は存在した。

語	クルアーンで繰り返されている回数
アーダム	25
イエス	25

「アーダム」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:31	10.	7:19	19.	19:58
2.	2:33	11.	7:26	20.	20:115
3.	2:34	12.	7:27	21.	20:116
4.	2:35	13.	7:31	22.	20:117
5.	2:37	14.	7:35	23.	20:120
6.	3:33	15.	7:172	24.	20:121
7.	3:59	16.	17:61	25.	36:60
8.	5:27	17.	17:70		
9.	7:11	18.	18:50		

「イエス」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節

1.	2:87	10.	4:163	19.	19:34
2.	2:136	11.	4:171	20.	33:7
3.	2:253	12.	5:46	21.	42:13
4.	3:45	13.	5:78	22.	43:63
5.	3:52	14.	5:110	23.	57:27
6.	3:55	15.	5:112	24.	61:6
7.	3:59	16.	5:114	25.	61:14
8.	3:84	17.	5:116		
9.	4:157	18.	6:85		

12-その日／終末の日：クルアーンでは、互いに対義的な語の使用に数学的なバランスが見られるのと同様に、互いに類似した意味を持つ語の間にも数学的な均衡が見られる。例えば、来世における再創造を示すために用いられる「その日（yevmeizin）」という表現と「審判の日（yevmül kıyameh）」という表現は、それぞれ 70 回ずつ、等しく登場している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
その日	70
終末の日	70

「その日」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	3:167	25.	30:57	49.	77:34
2.	4:42	26.	37:33	50.	77:37
3.	6:16	27.	40:9	51.	77:40
4.	7:8	28.	42:47	52.	77:45
5.	8:16	29.	43:67	53.	77:47
6.	11:66	30.	45:27	54.	77:49
7.	14:49	31.	52:11	55.	79:8
8.	16:87	32.	55:39	56.	80:37
9.	18:99	33.	69:15	57.	80:38
10.	18:100	34.	69:16	58.	80:40
11.	20:102	35.	69:17	59.	82:19
12.	20:108	36.	69:18	60.	83:10
13.	20:109	37.	70:11	61.	83:15
14.	22:56	38.	74:9	62.	88:2
15.	23:101	39.	75:10	63.	88:8
16.	24:25	40.	75:12	64.	89:23
17.	25:22	41.	75:13	65.	89:23

18.	25:24	42.	75:22	66.	89:25
19.	25:26	43.	75:24	67.	99:4
20.	27:89	44.	75:30	68.	99:6
21.	28:66	45.	77:15	69.	100:11
22.	30:4	46.	77:19	70.	102:8
23.	30:14	47.	77:24		
24.	30:43	48.	77:28		

「終末の日」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:85	25.	11:98	49.	28:71
2.	2:113	26.	11:99	50.	28:72
3.	2:174	27.	16:25	51.	29:13
4.	2:212	28.	16:27	52.	29:25
5.	3:55	29.	16:92	53.	32:25
6.	3:77	30.	16:124	54.	35:14
7.	3:161	31.	17:13	55.	39:15
8.	3:180	32.	17:58	56.	39:24
9.	3:185	33.	17:62	57.	39:31
10.	3:194	34.	17:97	58.	39:47

11.	4:87	35.	18:105	59.	39:60
12.	4:109	36.	19:95	60.	39:67
13.	4:141	37.	20:100	61.	41:40
14.	4:159	38.	20:101	62.	42:45
15.	5:14	39.	20:124	63.	45:17
16.	5:36	40.	21:47	64.	45:26
17.	5:64	41.	22:9	65.	46:5
18.	6:12	42.	22:17	66.	58:7
19.	7:32	43.	22:69	67.	60:3
20.	7:167	44.	23:16	68.	68:39
21.	7:172	45.	25:69	69.	75:1
22.	10:60	46.	28:41	70.	75:6
23.	10:93	47.	28:42		
24.	11:60	48.	28:61		

13-病／苦痛：「病（marada）」と「苦痛（eza）」という語は、人々が避けようとする望ましくない状況を表すものである。互いに関連のあるこれら二つの語のすべての派生形は、クルアーン全体を通してそれぞれ 24 回ずつ、等しく登場している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
病	24
苦痛	24

「病」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:10	9.	5:52	17.	33:12
2.	2:10	10.	8:49	18.	33:32
3.	2:184	11.	9:91	19.	33:60
4.	2:185	12.	9:125	20.	47:20
5.	2:196	13.	22:53	21.	47:29
6.	4:43	14.	24:50	22.	48:17
7.	4:102	15.	24:61	23.	73:20
8.	5:6	16.	26:80	24.	74:31

「苦痛」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:196	9.	4:16	17.	33:48

2.	2:222	10.	4:102	18.	33:53
3.	2:262	11.	6:34	19.	33:53
4.	2:263	12.	7:129	20.	33:57
5.	2:264	13.	9:61	21.	33:58
6.	3:111	14.	9:61	22.	33:59
7.	3:186	15.	14:12	23.	33:69
8.	3:195	16.	29:10	24.	61:5

14-汚れ／不潔：汚れ（rics）と不潔（ricz）という語は、その発音も意味も互いによく似ている。クルアーン全体を通して、これら二つの語はそれぞれ 10 回ずつ、等しく登場している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
汚れ	10
不潔	10

「汚れ」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節

1.	5:90	6.	9:125
2.	6:125	7.	9:125
3.	6:145	8.	10:100
4.	7:71	9.	22:30
5.	9:95	10.	33:33

「不潔」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節
1.	2:59	6.	8:11
2.	7:134	7.	29:34
3.	7:134	8.	34:5
4.	7:135	9.	45:11
5.	7:162	10.	74:5

15-預言者／知らせ：トルコ語で使用されている「預言者」という語に対応するアラビア語は「ネビ（nebi）」であり、その語源は「知らせ」を意味する「ネベ（nebe）」という語である。「ネビ」という語は、預言者たちが神から人々に伝えるべき知らせ（ネベ）を届ける存在であることを示している。クルアーン全体を通して、「預言者（nebi）」と「知らせ（nebe）」という語

は、それぞれ非常に多い回数、80 回ずつ等しく登場している。

語	クルアーンで繰り返されている回数
預言者(Nebi)	80
知らせ(Nebe)	80

「預言者」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:61	25.	5:81	49.	25:31	73.	49:2
2.	2:91	26.	6:89	50.	29:27	74.	57:26
3.	2:136	27.	6:112	51.	33:1	75.	60:12
4.	2:177	28.	7:94	52.	33:6	76.	65:1
5.	2:213	29.	7:157	53.	33:7	77.	66:1
6.	2:246	30.	7:158	54.	33:13	78.	66:3
7.	2:247	31.	8:64	55.	33:28	79.	66:8
8.	2:248	32.	8:65	56.	33:30	80.	66:9
9.	3:21	33.	8:67	57.	33:32		
10.	3:39	34.	8:70	58.	33:38		

11.	3:68	35.	9:61	59.	33:40		
12.	3:79	36.	9:73	60.	33:45		
13.	3:80	37.	9:113	61.	33:50		
14.	3:81	38.	9:117	62.	33:50		
15.	3:84	39.	17:55	63.	33:50		
16.	3:112	40.	19:30	64.	33:53		
17.	3:146	41.	19:41	65.	33:53		
18.	3:161	42.	19:49	66.	33:56		
19.	3:181	43.	19:51	67.	33:59		
20.	4:69	44.	19:53	68.	37:112		
21.	4:155	45.	19:54	69.	39:69		
22.	4:163	46.	19:56	70.	43:6		
23.	5:20	47.	19:58	71.	43:7		
24.	5:44	48.	22:52	72.	45:16		

「知らせ」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:31	25.	9:94	49.	26:6	73.	64:5
2.	2:33	26.	9:105	50.	26:69	74.	64:7
3.	2:33	27.	10:18	51.	26:221	75.	66:3

4.	3:15	28.	10:23	52.	27:22	76.	66:3
5.	3:44	29.	10:53	53.	28:3	77.	66:3
6.	3:49	30.	10:71	54.	28:66	78.	66:3
7.	5:14	31.	11:49	55.	29:8	79.	75:13
8.	5:27	32.	11:100	56.	31:15	80.	78:2
9.	5:48	33.	11:120	57.	31:23		
10.	5:60	34.	12:15	58.	33:20		
11.	5:105	35.	12:36	59.	34:7		
12.	6:5	36.	12:37	60.	35:14		
13.	6:34	37.	12:45	61.	38:21		
14.	6:60	38.	12:102	62.	38:67		
15.	6:67	39.	13:33	63.	38:88		
16.	6:108	40.	14:9	64.	39:7		
17.	6:143	41.	15:49	65.	41:50		
18.	6:159	42.	15:51	66.	49:6		
19.	6:164	43.	18:13	67.	53:36		
20.	7:101	44.	18:78	68.	54:4		
21.	7:175	45.	18:103	69.	54:28		
22.	9:64	46.	20:99	70.	58:6		
23.	9:70	47.	22:72	71.	58:7		

24.	9:94	48.	24:64	72.	62:8		

16-植物／木：クルアーン全体で「植物」（nebat）という語句の派生語と木という意味の「şecer」という語句が、26 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数
植物	26
木	26

「植物」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:61	10.	18:45	19.	37:146
2.	2:261	11.	20:53	20.	50:7
3.	3:37	12.	22:5	21.	50:9
4.	3:37	13.	23:20	22.	57:20
5.	6:99	14.	26:7	23.	71:17
6.	7:58	15.	27:60	24.	71:17
7.	10:24	16.	27:60	25.	78:15

8.	15:19	17.	31:10	26.	80:27
9.	16:11	18.	36:36		

「木」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:35	10.	17:60	19.	37:62
2.	7:19	11.	20:120	20.	37:64
3.	7:20	12.	22:18	21.	37:146
4.	7:22	13.	23:20	22.	44:43
5.	7:22	14.	24:35	23.	48:18
6.	14:24	15.	27:60	24.	55:6
7.	14:26	16.	28:30	25.	56:52
8.	16:10	17.	31:27	26.	56:72
9.	16:68	18.	36:80		

17-非難／侮辱：クルアーン全体で「非難される」（racim）という語句とこれに近い意味の「侮辱される」（malum）という語句が、それぞれ 14 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数

非難される	14
侮辱される	14

「非難される」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	3:136	6.	18:20	11.	38:77
2.	11:91	7.	18:22	12.	44:20
3.	15:17	8.	19:46	13.	67:5
4.	15:34	9.	26:116	14.	81:25
5.	16:98	10.	36:18		

「侮辱される」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	5:54	6.	17:29	11.	51:54
2.	5:54	7.	17:39	12.	68:30
3.	12:32	8.	23:6	13.	70:30
4.	14:22	9.	37:142	14.	75:2
5.	14:22	10.	51:40		

18-生長／栽培／実：クルアーンで作物の生長（ziraat）、栽培（hiraset）、栽培し生長した結果得られる「実」（fakihe）という語句がそれぞれ 14 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数
生長	14
栽培	14
実	14

「生長」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	6:141	6.	18:32	11.	48:29
2.	12:47	7.	26:148	12.	48:29
3.	13:4	8.	32:27	13.	56:64
4.	14:37	9.	39:21	14.	56:64
5.	16:11	10.	44:26		

「栽培」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節

1.	2:71	6.	3:117	11.	42:20
2.	2:205	7.	6:136	12.	42:20
3.	2:223	8.	6:138	13.	56:63
4.	2:223	9.	21:78	14.	68:22
5.	3:14	10.	42:20		

「実」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	23:19	6.	44:55	11.	56:20
2.	36:57	7.	52:22	12.	56:32
3.	37:42	8.	55:11	13.	77:42
4.	38:51	9.	55:52	14.	80:31
5.	43:73	10.	55:68		

19-達する／至る／届く：クルアーンで相互に近い意味の「達する」（naal）「至る」（derake）「届く」（vasıl）という語句がそれぞれ 12 回ずつ等しく登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数

達する	12
至る	12
届く	12

「達する」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:124	5.	7:49	9.	9:120
2.	3:92	6.	7:152	10.	22:37
3.	5:94	7.	9:74	11.	22:37
4.	7:37	8.	9:120	12.	33:25

「至る」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	4:78	5.	6:103	9.	26:61
2.	4:100	6.	7:38	10.	27:66
3.	4:145	7.	10:90	11.	36:40
4.	6:103	8.	20:77	12.	68:49

「届く」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:27	5.	6:136	9.	13:21
2.	4:90	6.	11:70	10.	13:25
3.	5:103	7.	11:81	11.	28:35
4.	6:136	8.	13:21	12.	28:51

20-恵み／慈悲深い／とても慈悲深い：クルアーン全体を通じて「rahmet（恵み）」という単語のすべての派生形は 114 回登場する。これらの派生形の登場回数は以下の通りである。

Rahmet＝79 回、rahmetike＝3 回、rahmetina＝5 回、Rahmetihi＝25 回、Rahmeti＝2 回。

クルアーンの最初の節であるバスマラに含まれ、同じ「RHM」の語根を持ち、神の属性として用いられ、その高い情け深さを示す「Rahim」という名称もまた 114 回登場する。同じくクルアーンの最初の節に含まれ、同じ「RHM」語根を持ち、神の属性として用いられ、その大いなる慈悲を示す「Rahman」という名称は、この用法のちょうど半分の 57 回登場する。

語	クルアーンで繰り返されている回数

恵み	114 (57x2)
情け深い	114 (57x2)
慈悲深い	57

「恵み」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	2:64	25.	7:72	49.	16:89	73.	24:21	97.	39:38
2.	2:105	26.	7:151	50.	17:24	74.	25:48	98.	39:53
3.	2:157	27.	7:154	51.	17:28	75.	27:19	99.	40:7
4.	2:178	28.	7:156	52.	17:57	76.	27:63	100.	41:50
5.	2:218	29.	7:203	53.	17:82	77.	27:77	101.	42:8
6.	3:8	30.	9:21	54.	17:87	78.	28:43	102.	42:28
7.	3:74	31.	9:61	55.	17:100	79.	28:46	103.	42:48
8.	3:107	32.	9:99	56.	18:10	80.	28:73	104.	43:32
9.	3:157	33.	10:21	57.	18:16	81.	28:86	105.	43:32
10.	3:159	34.	10:57	58.	18:58	82.	29:23	106.	44:6
11.	4:83	35.	10:58	59.	18:65	83.	29:51	107.	45:20
12.	4:96	36.	10:86	60.	18:82	84.	30:21	108.	45:30
13.	4:113	37.	11:9	61.	18:98	85.	30:33	109.	46:12
14.	4:175	38.	11:17	62.	19:2	86.	30:36	110.	48:25
15.	6:12	39.	11:28	63.	19:21	87.	30:46	111.	57:13
16.	6:54	40.	11:58	64.	19:50	88.	30:50	112.	57:27
17.	6:133	41.	11:63	65.	19:53	89.	31:3	113.	57:28

18.	6:147	42.	11:66	66.	21:75	90.	33:17	114.	76:31
19.	6:154	43.	11:73	67.	21:84	91.	35:2		
20.	6:157	44.	11:94	68.	21:86	92.	36:44		
21.	7:49	45.	12:56	69.	21:107	93.	38:9		
22.	7:52	46.	12:111	70.	24:10	94.	38:43		
23.	7:56	47.	15:56	71.	24:14	95.	39:9		
24.	7:57	48.	16:64	72.	24:20	96.	39:38		

神の属性である「情け深い」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	1:1	25.	4:106	49.	10:107	73.	26:104	97.	42:5
2.	1:3	26.	4:110	50.	11:41	74.	26:122	98.	44:42
3.	2:37	27.	4:129	51.	11:90	75.	26:140	99.	46:8
4.	2:54	28.	4:152	52.	12:53	76.	26:159	100.	48:14
5.	2:128	29.	5:3	53.	12:98	77.	26:175	101.	49:5
6.	2:143	30.	5:34	54.	14:36	78.	26:191	102.	49:12
7.	2:160	31.	5:39	55.	15:49	79.	26:217	103.	49:14
8.	2:163	32.	5:74	56.	16:7	80.	71:11	104.	52:28
9.	2:173	33.	5:98	57.	16:18	81.	27:30	105.	57:9
10.	2:182	34.	6:54	58.	16:47	82.	28:16	106.	57:28
11.	2:192	35.	6:145	59.	16:110	83.	30:5	107.	58:12
12.	2:199	36.	6:165	60.	16:115	84.	32:6	108.	59:10
13.	2:218	37.	7:153	61.	16:119	85.	33:5	109.	59:22
14.	2:226	38.	7:167	62.	17:66	86.	33:24	110.	60:7

15.	3:31	39.	8:69	63.	22:65	87.	33:43	111.	60:12
16.	3:89	40.	8:70	64.	24:5	88.	33:50	112.	64:14
17.	3:129	41.	9:5	65.	24:20	89.	33:59	113.	66:1
18.	4:16	42.	9:27	66.	24:22	90.	33:73	114.	73:20
19.	4:23	43.	9:91	67.	24:33	91.	34:2		
20.	4:25	44.	9:99	68.	24:62	92.	36:5		
21.	4:29	45.	9:102	69.	25:6	93.	36:58		
22.	4:64	46.	9:104	70.	25:70	94.	39:53		
23.	4:96	47.	9:117	71.	26:9	95.	41:2		
24.	4:100	48.	9:118	72.	26:68	96.	41:32		

神の属性である「慈悲深い」という語が登場する箇所

順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節	順番	章・節
1.	1:1	13.	19:75	25.	20:109	37.	36:11	49.	50:33
2.	1:3	14.	19:78	26.	21:26	38.	36:15	50.	55:1
3.	2:163	15.	19:85	27.	21:36	39.	36:23	51.	59:22
4.	3:30	16.	19:87	28.	21:42	40.	36:52	52.	67:3
5.	17:110	17.	19:88	29.	21:112	41.	41:2	53.	67:19
6.	19:18	18.	19:91	30.	25:26	42.	43:17	54.	67:20
7.	19:26	19.	19:92	31.	25:59	43.	43:19	55.	67:29
8.	19:44	20.	19:93	32.	25:60	44.	43:20	56.	78:37
9.	19:45	21.	19:96	33.	25:60	45.	43:33	57.	78:38
10.	19:58	22.	20:5	34.	25:63	46.	43:36		
11.	19:61	23.	20:90	35.	26:5	47.	43:45		

12.	19:69	24.	20:108	36.	27:30	48.	43:81		

これほど多くの言葉がこれほど数学的な尺度で用いられていることは、クルアーンの多くの優れた特徴の一つである。クルアーンの節は、預言者ムハンマドによって直面した問題に関連して、20 年以上の長きにわたり信者たちに説かれたものであり、クルアーンは現代の書籍のようにいかなる編集過程も経ていないことを改めて思い起こすべきである。

これほど長期間にわたって編纂され、かつ修正過程を経ていないにもかかわらず、クルアーンがこれらすべての特徴と数学的尺度を備えていることは、扱われている事象の壮大さを高める要素である。クルアーンの前章で指摘された卓越した表現が、このような数学的尺度により用いられた言葉で実現していることは、これまで示してきた証拠に加わるもう一つの証明である。さらに、この数学的尺度はクルアーンが非常によく保護されていることを示している。仮にクルアーンの 1 パーセントが失われた、あるいは 1 パーセント程度の長さのテキストがクルアーンに加えられたという主張を検討してみよう。もしそのような事態があれば、数学的尺度に関する例示のいくつかが崩れることが予想される。例えば、クルアーンに 365 回現れる「1 日」という表現が、1 パーセント程度の部分において 3〜4 回程度しか現れない、またはそれぞれ 115 回登場する「現世-来世」という語が 2〜3 回程度に減少する、あるいはそ

れぞれ 88 回現れる「天使-悪魔」という語が 1〜2 回程度になることが予想される。1 パーセントの加筆や削除でさえ、これらの言葉の宇宙や相互の調和を破壊する可能性が高い。したがって、クルアーンが加筆や削除がなされた書物であったなら、これほど数学的な尺度に基づく用例を見て取ることはできなかったであろう。偏見なく接する者にとっては、神の多くの証拠は明らかである。

アラフ章 7-146：地上で不当に高慢になる者たちを、われはわれの証拠から遠ざけるであろう。彼らはあらゆる証拠を見ても信じない。正しい道を見ても、それを選ばない。しかし、もし傲慢の道を見れば、それを選ぶ。これは彼らがわれわれの証拠を否定し、それに対して無関心であるからである。

10-5　クルアーンにおける「偶数と奇数」に基づく尺度

　偶数と奇数という概念は、小学校の段階から学ぶ数学の重要な主題である。紀元前のピタゴラス派からユークリッド、さらにガウス（1777〜1855）に至るまで、多くの著名な数学者たちがこのテーマを取り上げてきた。クルアーンに、数学における重要な区別である「偶数と奇数」に基づく数学的な構造が存在すると述べると、多くの人々が初

めからそのような主張を拒否し、「クルアーンと偶数・奇数がどう関係あるのか」といった反応を示す場面に、私は幾度となく立ち会ってきた。

このような反応を示す人々に、クルアーンに「偶数と奇数」についての記述があることを伝えると、彼らはその事実を知らず、むしろ驚く様子を見せることが多かった。クルアーンが取るに足らないことを語ることはあり得ないという点は、ほとんどすべてのムスリムが認めるところである。イスラム教徒でない人々や、イスラムに対して懐疑的な立場の人々に対しては、クルアーンが 7 世紀の個人や人々の手によって書かれたものでないこと、そして非常によく保護されてきたことを示すためにも、「偶数と奇数」に基づいたクルアーンの構造を検討することは有益である[153]。クルアーンで「偶数と奇数」に言及されている節は次のとおりである。

ファジュル章 89-3：誓って言う、偶数にも奇数にも。

クルアーンにおいて偶数と奇数に重要性があるということは、単にこの節に言及されているからといって、その重要性がこれだけに限られているということを示すものではない。だが、ここで語られている内容は注意深く検討され

[153] 本章は、特に http://www.mucizeler.com のウェブサイトにおけるデータを検証して執筆した。

るべきである。クルアーンの構造が偶数と奇数に基づいているという主張を最初から否定することは、この節によって妨げられている。

さらに、クルアーンにおいて「偶数と奇数」であることに言及があるという事実は、ムスリムたちがクルアーンの中に様々な数学的構造を探し、多くの試みの末に見つけた面白い事例を取り上げて、奇跡的であると主張しているにすぎないという意見を否定する根拠ともなる。なぜなら、「偶数と奇数」に関連する数学的な秩序が存在すると語る者たちは、様々な事象を調べて偶然に何かを発見したわけではないからである。むしろ、クルアーンが明確に注目を促している「偶数と奇数」という基盤に基づいて、クルアーンに現れる数学的なシステムを明るみに出しているのである。クルアーンに見られるこのシステムを観察するために、高度な数学知識は必要ない。偶数と奇数の区別がわかり、電卓を使って加算や乗算といった基本的な計算ができれば十分である。

クルアーンにおける「偶数と奇数」を中心としたシステムは、クルアーンの章の配列および節ごとの区分が神による起源に基づいていることを示している。このことは、クルアーンが保護されていると信じている者たちの一部ですら、クルアーンにおける章の配列が異なっていても問題はないと考えていることに対して、明確な反論を呈している。

例えば、ファーティハ章を現在の第１章から第２章に移し、バカラ章を現在の第２章から第１章に移したとしても、クルアーンは同じクルアーンであり、何も変わらないと考える人もいる。また、7 節から成るファーティハ章の第 6 節と第 7 節を 1 つにまとめて 6 節にし、バカラ章の最後の 286 節を 2 つに分けてこの章を 287 節にしたとしても、特に変化はないと思うかもしれない。しかし、「偶数と奇数」を中心としたシステムは、ムスリムの大多数が信じている現在の章および節の配置が神の意志によるものであることを示している。実際、これから見るように、クルアーンにおいてたったファーティハ章とバカラ章の順序を入れ替えたり、これらの章のいずれかから１節を減らしたり増やしたりするだけで、「偶数と奇数」に基づいたシステムが崩れてしまう。

このことから理解できるように、「啓示の順に並べたクルアーン」あるいは「啓示の順に訳されたクルアーン」というタイトルのもとにクルアーンやその訳を出版することは好ましくないのである。そもそもスーラの啓示順は議論のある問題であり、この件についてコンセンサスは存在していない。だが、仮にそのような合意が存在していたとしても、「偶数と奇数」に基づいたこのシステムは、クルアーンの現在の章および節の構成が神の定めたものであり、それを変更すべきではないことを明確に示しているのである。

また、ここから理解できるのは、世界で広く使用されているクルアーンの章および節の番号付けが正しいということである。世界の大部分（トルコも含む）では「ハフス版（Hafs）」として知られるクルアーンが広まっており、ただ北アフリカと西アフリカの一部では「ワルシュ版（Warsh）」が使われている。両方のバージョンにおいて、114 の章が同じ順序で存在し、章の内容と長さも同一である。しかし、節の区切り方においてわずかな違いが見られる。「偶数と奇数」を基盤とする数学的システムは、世界中で広く使われているハフス伝承に基づくクルアーンにおける節の区分を正当化している。多くの人が、ハフス版クルアーンは啓示時に書き写された原本に基づいて複製されたと考えており、この見解は数学的にも裏付けられている。一方、ワルシュ版はおそらく記憶に基づいて筆写されたバージョンである。記憶によるクルアーンの朗誦では、文の停止位置や節の区切りが混同されることが一般的である。

一部の人は、クルアーンの編纂過程において神が介入し、節の番号に至るまで保護がなされたと考えており、これはキヤーマ章 75-17 の「まことに、われらこそ、それ（クルアーン）を集め、それを読ませる者である」という言葉によって裏付けられていると主張する。もしそのように述べられても、私はそれに反論するつもりはない。なぜなら、そのような見解は、ここで述べている内容と矛盾しないからである。

私自身の見解も、多くの人と同様に、クルアーンの現在の構成は、啓示された最初の瞬間からすでに成立しており、最初の筆写・複製過程においてもその章および節の構成が維持されていたというものである。観察されるこの数学的システムは、現在の章および節構成を裏付けている。したがって、神がクルアーンの構造を保護するために、その編集過程に介入したか否かは、本論にとって重要ではない。重要なのは、クルアーンに言及されているある現象（偶数と奇数）に基づいて行われる分析を通じて、世界で広く使用されているクルアーンが、章や節の分割に至るまで非常によく保存されていることを目の当たりにできるという点である。クルアーンの啓示から 1400 年が経過しているにもかかわらず、常にその中に存在していた「偶数と奇数」の基準を通じて、現在の章および節の区分の正確性を確認できるのである。多くの驚くべき特徴を持つこの書が、世界の他のいかなる書物にも見られないこのような特性を示していることは、実に驚くべきことである。

それでは、「偶数と奇数」で示されるクルアーンに見られる興味深い配置に進もう。

クルアーンの章と節の順序を数値で表すと、ファーティハ章は「1-7」、つまり「第 1 章、7 節」と定義される。バカラ章は「2-286」、つまり「第 2 章、286 節」となる。

ごく簡単な操作として、ファーティハ章を示す「1 + 7 = 8」と計算すれば、8 は偶数であるため、以下の表で示

すように偶数欄に記載する。次に、バカラ章に対して「2 + 286 = 288」と計算すれば、これも偶数なので偶数欄に入る。一方、アル・イムラン章（第 3 章）は節数が 200 である。これを加算すると「3 + 200 = 203」となり、203 は奇数であるため、奇数欄に記載する。この方法を、クルアーンの全ての章と全てのに適用する。すると、次のような表が現れる。

章番号	節番号	合計	偶数	奇数
1	7	8	8	-
2	286	288	288	-
3	200	203	-	203
4	176	180	180	-
5	120	125	-	125
6	165	171	-	171
……				
57	29	86	86	-
……				
109	6	115	-	115
110	3	113	-	113
111	5	116	116	-
112	4	116	116	-
113	5	118	118	-

114	6	120	120	-
6555	6236	-	6236	6555

第 1 章から第 114 章までの章を合計すると、6555 という数が得られる。また、「奇数」欄に記載された数を合計したときにも、6555 という同じ数が得られる。

この二つの数が等しくなることには、数学的な必然性は存在しない。同様に、節の合計数である 6236 という数と、「偶数」欄の合計が 6236 になることにも、必然性はない。右側の「偶数」と「奇数」の列にある数の合計は、章と節の番号の合計で構成されているため、章と節の合計と一致するのは当然のことである。この一致は、可能性の範囲を制限する要因ではあるが、それでもクルアーンにおける章数と節数がそのまま保たれているとしても、偶数と奇数の列で異なる分布になることは十分に起こり得る。つまり、章と節の総数が同じままで、その分布が異なる形に変更された場合でも、右側の「偶数」列と「奇数」列が 6236 と 6555 という結果を出す可能性は非常に低いのである。このように、章と節の総和が一定であるという条件を維持しつつも、それらの分布が異なる場合に得られる「偶数・奇数」列の数値の組み合わせは、次のような集合で表すことができる。

(0–12791, 2–12789, 4–12787……6234–6557, 6236–6555, 6238–6553……12784–7, 12786–5, 12788–3)

ご覧の通り、クルアーンにおける章数と節数の合計が保持されたとしても、それらの分布が変われば、「偶数」と「奇数」欄にはさまざまな数の組み合わせが現れるのである。

では、この表は私たちに何を語っているのだろうか？まず第一に確認すべき点は、クルアーンに存在するどの章を取り除いたとしても、この表のバランスは崩れるという事実である。また、仮に「第 115 番目の章」が追加されたと仮定し、表が崩れないようにするためにその章の節数を自由に調整できるとしても、どんな節数を設定してもこの表は崩れてしまう。

このことは、クルアーンに含まれるすべての章がなぜ重要であるか、またなぜその一つたりとも模倣することができないのかを示す証拠のひとつである。

クルアーンの各章は、そのシステムを完成させる一つの部分である。その部分をシステムから取り外したり、あるいは偽の部分を加えたりすれば、システムは崩れる。それはまるで、長いパスワードの一文字を削除すれば、全体の機能が失われてしまうのと同じである。このことは、クルアーンにおける次の挑戦的な啓示の言葉が、いかに的を射ているかを理解する助けとなる。

バカラ章 2-23：もしわれわれが信仰する者に下したものについて疑いがあるなら、それに類似した一章を持ってく

るがいい。神以外の証人たちをも呼べ。もしあなた方が真実を語るならば！

クルアーンに現在ある章の順番を変更した場合も、多くの変更パターンでこの表が崩れる。例えば、クルアーン内のすべての章がそのままの位置にあるとして、ただし第 1 章であるファーティハ章と第 2 章であるバカラ章の位置を入れ替えたと仮定しよう。このとき、バカラ章が第 1 章となり、（1＋286）の合計である 287 が「奇数」列に入る。ファーティハ章が第 2 章となり、（2＋7）の合計である 9 も「奇数」列に入る。結果として、6236 と 6555 という対称的な合計の両方が崩れ、「偶数―奇数」に基づいた既存の対称性が失われる。

114 の章のうち 57 は偶数番号であり、57 は奇数番号である。これは数学の特性によるものであり、連続した整数列では偶数と奇数がちょうど半分ずつ存在するためである。114 の章のうち 60 の章は偶数の節数（節数）を持っている。この 60 の章のうち 30 は偶数番号、30 は奇数番号である。このような分布は、数学の特性上必然的に現れるものではない。例えば、50 の章が偶数で 10 が奇数、あるいは 46 が偶数で 14 が奇数、または 34 が偶数で 26 が奇数というように、様々なパターンが成立し得た。

一方で、54 の章は奇数の節数を持っている。これらの章の番号についても、27 が偶数で 27 が奇数であるという数学的対称性を示す構造が見られる。だが、48 が偶数で 6 が奇数、41 が偶数で 13 が奇数、32 が偶数で 22 が奇数といった可能性もあり得た。結論として、対称的な構造が現れている 4 つのグループが存在する。これらのグループは以下のとおりである：

- **章番号：奇数 — 節数：奇数（例：ファーティハ章1-7）**
- **章番号：奇数 — 節数：偶数（例：マイダ章5-120）**
- **章番号：偶数 — 節数：奇数（例：アナーム章6-165）**
- **章番号：偶数 — 節数：偶数（例：バカラ章2-286）**

これら 4 つのグループによって形成される対称性は、次の表に示されている。

114 章			
60 (偶数番号の節を持つ章)		54 (奇数番号の節を持つ章)	
30 偶数番号の章において	30 偶数番号の章において	27 奇数番号の章において	27 奇数番号の章において

これら 4 つのグループのうち、2 つを同質、残りの 2 つを異質として分類することができる。同質な章とは、章番号と節数の両方が「偶数」または両方が「奇数」である章のことである。一方、異質な章とは、番号と節数のいずれか一方が「偶数」で、他方が「奇数」である章を指す。この観点から章を分析すると、57 の同質な章と、57 の異質な章が存在する。以上の事実に基づいて、先ほどの表は以下のような形でも表現することができる。

114 章			
同質な章		異質な章	
57 章		57 章	
30 章 偶数章の偶数節の数	27 章 奇数章の奇数節の数	27 章 偶数章の奇数節の数	30 章 奇数章の偶数節の数

クルアーンの章番号の合計が 6555 であり、そのうちの 60 個の章は節の合計が偶数で、54 個の章は節の合計が奇数であることが知られている。では、これらの章番号は、最も均整の取れた方法でどのように分布し得るだろうか。まず 114 の章番号の合計である 6555 を章の総数 114 で割り、その後、偶数の節数を持つ章の数である 60 を掛ければ、偶数節の章番号の最も均整の取れた分布を導き出すことができる。その結果は 3450 であり、実際に偶数節を持

つ章の番号の合計は 3450 である。同様に 6555 を 114 で割った後、奇数節を持つ章の数である 54 を掛ければ、これらの章番号の最も均整の取れた分布である 3105 という数値を得ることができる。実際に、奇数節を持つ章の番号の合計は 3105 である。この 2 つの数のうち一方が最も均整の取れた分布と等しいことがわかれば、数学的な必然としてもう一方の分布もまた最も均整の取れたものと等しくなる。なぜなら、後者の数値は前者の数値と足し合わせて必ず 6555 にならねばならず、一方がバランスの取れた分布であれば、他方も自動的にそうなるからである。例えば、わずか 1 つの章、7 節から成る第 1 章「ファティハ」と、286 節から成る偶数節の第 2 章「バカラ」の順番を入れ替えるだけでも、この均整の取れた分布は崩れてしまう。これは非常に興味深い現象であり、偶数と奇数という観点からクルアーンの章番号と節数を分析した際に浮かび上がる現象である。

偶数節を持つ60の章が最も均整の取れた形で分布した結果としての章番号の合計	3450
偶数節を持つ60の章の章番号の合計	3450
奇数節を持つ54の章が最も均整の取れた形で分布した結果としての章番号の合計	3105

奇数節を持つ54の章の章番号の合計	3105

クルアーンにおいて、偶数と奇数に関して現れる対称性は、クルアーンを章の順序に基づいて対称的に二つに分けた場合にも、それぞれの対称的な構造の中で観察される。クルアーンを章の配列順に沿って二つに分けると、両側にそれぞれ 57 の章が存在する。この分割は第 57 番目の章である「鉄章」の終わりで行われる。鉄章の章番号である 57 を、節数である 29 と掛けると 1653 となる。この 1653 という数は、同時に鉄章までの章番号の合計にも等しい。分割が行われる箇所でこのような特徴が現れることは、その分割点が特別に設計されたことを示す印の一つである。

クルアーンの前半の章の合計 (1+2+3.　55+56+57)	1653
クルアーンの前半最後の章の番号（57）とこの章の節数（29）を掛けた結果	1653 (57×29)

クルアーンを二つに分けて調査すると、クルアーンの両方の半分の中に、前述の「同質」および「異質」という観点において、対称的な構造が存在する。クルア

ーンの前半には 29 の「異質な」章と 28 の「同質な」章あり、後半には 28 の「異質な」章と 29 の「同質な」章がある。この状況は次の表にも見ることができる。

114 章			
クルアーン前半の章数：57		クルアーン後半の章数：57	
「奇数」番号の章：29	「偶数」番号の章：28	「偶数」番号の章：29	「奇数」番号の章：28
「同質」な章：29	「異質」な章：28	「異質」な章：29	「同質」な章：28

何世紀にもわたって、多くのクルアーン解釈者たちは、ファジュル章 89-3 の「偶数と奇数に誓う」という表現が何を意味するのかを理解しようとし、さまざまな推測を行ってきた。いずれにせよ、「偶数と奇数」であることが、ほとんどすべての国で数学の主題として扱われている一方で、クルアーンにおいても注目されているのである。ここまで述べたことは、クルアーンにおいて「偶数と奇数」になぜ注目が向けられているのか、そしてこの節の 2 節後にあるファジュル章第 5 節の「思慮ある者にとって、これらは誓うに値しないのか」という表現の意味を理解する助けとなる。クルアーンにおける「偶数と奇数」に基づく言及

は、イスラムやクルアーンと偶数・奇数の性質が無関係であるとか、「これは無意味なフルフィー（文字神秘主義的）なアプローチにすぎない」とする批判に対して、反論の扉を閉ざすものである。クルアーンの偶数・奇数に基づく構造は、クルアーンが 7 世紀の人間によって書かれたものではないことを示す、数多くの驚異的特徴の一つである。そして、クルアーンがこの特徴によって非常に良く保存されてきたという重要な点も、同時に示される。このことは、クルアーンの驚異的な特性であり、重要な機能をも果たしているのである。

前にも述べたように、クルアーンのどの章を削除しても、あるいは架空の章を追加しても、「偶数」と「奇数」に基づくこの対称的構造は崩れてしまう。節の追加や削除においては、可能な 4 つの変更のうち 3 つのタイプでは対称性が崩れるが、1 つのタイプでは崩れない。「章と節の合計」が「奇数」である列にある章に対して、偶数・奇数いずれの節を追加または削除しても、構造は崩れる。なぜなら、章の合計数である 6555 という数は固定されており、「奇数」の列におけるあらゆる変更は、例外なく対称構造を崩すからである。一方で、「章と節の合計」が「偶数」である列において「奇数」の節を追加または削除すれば、合計が他の列に移動し、両方の列の対称性が崩れる。しかし、「偶数」の列に「偶数」の節を追加または削除すれば、その変更は 6236 という数に対して対称的に増減し、対称構造は崩れない。要するに、「偶数」と「奇数」

に基づいたこのシステムは、クルアーンに対する 4 つの可能な節追加・削除のうち、3 つを検出する仕組みとなっている。

　このシステムの存在を知らずに、ある者がクルアーンに節の追加や削除を試みたと仮定しよう。その他すべての保護的要素を無視して、このシステムだけがクルアーンを守っていると想像するならば、まず章の追加・削除のような行為に対しては、対称構造が崩れるため、そのような大きな変更は検出される。次に、同一人物がクルアーンの 10 箇所に少数の節を追加・削除することで、改変を試みると仮定する。この構造を知らない者が節の追加を試みた場合、「偶数と奇数」に基づくシステムに検出されない確率は 1/4 である。2 回の試みにおいては 1/4×1/4＝1/16、3 回であれば 1/4×1/4×1/4＝1/64 である。10 回の改変を試みる者がこのシステムに検出されない確率は、1/4 の 10 乗、すなわち 1/1,048,576 である。さらに 20 回の試みをするならば、このシステムに検出されない確率は 1/1,099,511,627,776、すなわち 1 兆分の 1 以下である。結論として、クルアーンの 1%を改変しようとする者が、クルアーンの 20 箇所で少数の節を削除または追加する場合、単にこのシステムだけを回避する確率ですら、1 兆分の 1 未満となる。そして、クルアーンにこのような規模の追加や削除が行われたならば、先に例として挙げた、意味的に関連する語の対称的な登場のような、他の多くの構造も崩れることになるであろう。

「偶数と奇数」に関する研究が興味深い結果を示す分野の一つは、章番号と節の合計が 19 の倍数である章を調べたときに現れる。クルアーンでは「偶数と奇数」に注目が向けられているように、興味深いことに「19」という数にも注目が集められており、他のどの数についても語られていない形で、この数の信仰を高める特性に注意が向けられているのである。

ムッダッスィル章 74-30：その上には 19 がある。

31：われは火獄の番人としてただ天使たちを任命した。そしてその数（19）を、不信仰者たちにとっての試練とした。それは、啓典を授けられた者たちが確信をもって信じ、信仰者たちの信仰が一層深まるためである…。

これらの節において、19 という数字が「試練とされる」ことや「信仰を強める」といった性質に注意が向けられている点に興味を持ち、19 という数字について研究を行い、多くの興味深いデータにたどり着いた者たちがいる一方で、突飛で根拠に乏しい主張をする者たちも存在した。また、このテーマに関連して問題があり、今なお解決されていない事柄も存在している。例えば、この数字に関して多くの主張がなされている「ムカッタア文字（各章の冒頭に登場する文字）」に関する多くの主張は、極めて議論の的となっている。この書では、そのような議論を呼ぶ

分野には立ち入っていない。しかしながら、19 の観点からクルアーンを調査したとき、議論の余地のない興味深いデータが存在することも確かである。例えば、クルアーンには 114 の章があり、114 は 19 の 6 倍であり、最大の素因数が 19 である。また、各章の冒頭に記される「バスマラ」は、特別な位置を占めており、その文字数は 19 文字である。クルアーンには 114 回のバスマラが存在しており、そのうち第 9 章の冒頭にはバスマラが記されていない。しかし、この第 9 章以降で数えて 19 番目にあたる第 27 章の 30 節にはバスマラが再び登場し（27+30=57 も 19 の 3 倍である）、合計回数が 114 に達している。また、クルアーンには 30 の整数が登場し、それらの合計である 162,146 は 19 の 8534 倍である。さらに、クルアーンに登場する 8 つの分数と合わせると、クルアーンには 38 種類の異なる数が登場しており、38 もまた 19 の 2 倍である。このように、議論の余地のない事実が存在する一方で、前述のとおり、解決されていない問題や議論を呼ぶ点もあるため、本書では 19 という主題を単独で扱うことはしなかった。しかし、クルアーンにおいて「偶数と奇数」に注意が向けられているように、「19」にもまた興味深い形で注意が向けられているという点は記しておきたい。

　これから提示する表を興味深くしている要因の一つは次の通りである。この表では、「偶数・奇数の観点からの検討」と「19 の倍数であるという基準」の 2 つが交差する領域において観察されており、「偶数・奇数」に関するシ

ステムに注目する者を「19」に関する研究へ、「19」に関する数学的構造に注目する者を「偶数・奇数」の研究へと導いているのである。クルアーンの章と節を「偶数と奇数」の観点から検討する際に、章番号と節数の合計が 19 の倍数である章のみに注目し、それらが形成する対称性を示すことにする。要するに、19 を独立した主題として取り上げることはしないが、「偶数と奇数」というテーマの中で、章番号と節数の合計が 19 の倍数である章が構成する対称的構造を紹介する。

　クルアーンにおける全ての章と節を偶数・奇数の観点から分析して作成した表と同様の形式で、章番号と節数の合計が 19 の倍数である章に限定して作成された表には、以下の 12 の章が含まれている。

章番号	節数	合計	掛け算
6	165	171	=19×9
15	99	114	=19×6
21	112	133	=19×7
39	75	114	=19×6
41	54	95	=19×5
42	53	95	=19×5
50	45	95	=19×5
55	78	133	=19×7
56	96	152	=19×8

70	44	114	=19×6
88	26	114	=19×6
107	7	114	=19×6

合計欄にある数字が偶数（114、114、152…）と奇数（171、133、95…）の観点から調べられると、両グループの合計が 722 で等しいことがわかる。そのうえで、合計を構成する数字のうち 6 つが偶数、6 つが奇数であるという対称性にも注目すべきである。また、章番号と節数も偶数・奇数の観点から分けて合計すれば、こちらもやはり対称的に 722 に等しくなる。このように、合計 1444 がここでも分配されており、この数は可能性の範囲をある程度制限している。しかし、それでもなお、ここには多くの異なる可能性が存在している。

1444 に等しい 24 個の数値を偶数と奇数に分けて合計すると、対称性を持たない何百通りもの異なる結果を得ることができる。また、この 24 個の数値のうち、ちょうど 12 個が偶数、12 個が奇数でなければならないという必然的な理由は存在しない。双方の内部に対称性が現れることも、しかもその対称性が等しくなることも、また双方の内部にある偶数と奇数の数が対称的に等しくなることも、いずれも必然的にそうならなければならない理由は存在しない。この状況は、以下の表において確認できる。

章番号	節数	合計
6	165	171
15	99	114
21	112	133
39	75	114
41	54	95
42	53	95
50	45	95
55	78	133
56	96	152
70	44	114
88	26	114
107	7	114

	章番号と節数の合計の合計	総計
奇数の合計	171+133+95+95+95+133	＝722
偶数の合計	114+114+152+114+114+114	＝722

	章番号と節数の合計	総計
奇数の合計	15+21+39+41+55+107+165+99+75+53+45+7	= 722
偶数の合計	6+42+50+56+70+88+112+54+78+96+44+26	= 722

また、章番号および節数を表す数字を構成する各桁の合計にも注目してみよう。例えば、奇数の 15 という数に対しては 1 と 5 を、奇数の 165 という数に対しては 1、6、5 を取り出して足す。この方法をすべての奇数および偶数に対して同様に適用し、それぞれのグループ内で合計する。すると、ここでも両グループにおいて対称的に「110」という合計が現れる。しかし、本来、同じ合計値を持つ数字群に属する各桁の数字を足し合わせたとき、同じ結果が出るとは限らない。にもかかわらず、偶数・奇数を基にしたこの分析からも、興味深い対称性が見出される。この状況は、以下の表において確認できる。

	章番号と節数の数値の合計	総計
奇数の合計	1+5+2+1+3+9+4+1+5+5+1+0+7+1+6+5+9+9+7+5+5+3+4+5+7	= 110
偶数の合計	6+4+2+5+0+5+6+7+0+8+8+1+1+2+5+4+7+8+9+6+4+4+2+6	= 110

全ての章に対して行った以前の分析と同様の分析を、ここでも実施し、表を中央で二分してみよう。こうすることで、6 つずつの章からなる 2 つのグループが形成され、これらの間にも対称的な構造が現れる。両グループにおける章番号と節数の合計は、それぞれ 722 で等しい（722 は 19×38 に等しく、38 は 19 の 2 倍である）。本来であれば、合計 1444 という数はさまざまな方法で 2 つに分けることができるが、対称的に 722 ずつの 2 つに分ける方法はただ 1 通りしか存在せず、ここではその通りになっている。この点は下の表からも確認できる。なお、ここで提示されているデータ群は互いに因果関係

を必ずしも持たないデータであり、数学的な必然性によって生じる結果を含むデータはここに含めていない。例えば、表の上部にある 722 という数を構成する奇数の合計は 508、偶数の合計は 214 である。一方、下部の 722 を構成する奇数の合計は 214、偶数の合計は 508 である。このような対称性は、これまでに示されたデータから数学的必然性として導かれるものであるため、新たな対称性とはみなされない。このような数学的必然性に基づく構造が、独立した対称性として提示されないよう、特に注意して扱っている。

章番号	節数	合計
6	165	171
15	99	114
21	112	133
39	75	114
41	54	95
42	53	95
クルアーンの前半の章番号と節数の合計		総計

6+15+21+39+41+42+165+99+112+75+54+53	= 722

章番号	節数	合計
50	45	95
55	78	133
56	96	152
70	44	114
88	26	114
107	7	114

クルアーンの後半の章番号と節数の合計	総計

50+55+56+70+88+107+45+78+96+44+26+7	= 722

加えて、現在取り上げている 12 の章の前に位置する、章番号が偶数である 6 つの章を取り上げよう。この 6 つの章の番号と節数を合計すると、741 という数に到達する。次に、節数が偶数である 6 つの章を取り上げ、同様にそれらの章番号と節数を合計しよう（両方とも 6 つずつの対称的な構成を持つグループであることにも注目すべきである）。ここでも新たな対称性が現れる。この処理によっても、同じく対称的に 741 という数に到達する。さらに、これまでと同様に、章番号および節数を構成する数字の各桁を取り出して合計する方法を用いてみよう。例えば、章番号が偶数であるグループでは、「6」という数字からは 6 を、「165」からは 1、6、5 を、「42」からは 4 と 2 を取り出して合計する。結果は 111 となる。同じ手法を、節数が偶数であるグループに対しても適用してみると、ここでもまた対称的な構造が現れ、結果は再び 111 となる。このような内容は、表を参照することで確認できる。

偶数番号の章	節数	合計
6	165	171
42	53	95
50	45	95
56	96	152
70	44	114
88	26	114

偶数番号の章の、章番号と節数の合計	総計
6+42+50+56+70+88+165+53+45+96+44+26	= 741

偶数番号の章の、章番号と節数の数値の合計	総計

6+4+2+5+0+5+6+7+0+8+8+1+6+5+5+3+4+5+9+6+4+4+2+6	= 111

章番号	偶数の節数	総計
21	112	133
41	54	95
55	78	133
56	96	152
70	44	114
88	26	114

偶数の節を持つ章の、章番号と節数の合計	総計

21+41+55+56+70+88+112+54+78+96+44+26	= 741

	偶数の節を持つ章の、章番号と節数の数値の合計	総計
合計	2+1+4+1+5+5+5+6+7+0+8+8+1+1+2+5+4+7+8+9+6+4+4+2+6	= 111

先ほどと同じ手順を、今度はまず章番号が奇数である節に対して、次に節数が奇数である節に対して適用してみよう。すると、驚くべきことに再び類似した対称的な構造が現れる。2 つのグループを構成する数の合計は、それぞれ 703 であり、対称である。加えて、これまでと同様に、合計した数値を構成する各桁の数字を取り出して合計してみよう。するとここでも、またしても対称的な構造が現れ、2 つのグループを構成する数の桁の合計はどちらも 109 である。任意の方法を用いたのではなく、偶数番号の章および節に対して適用された方法と同じ手法を、奇数番号の章および節に対しても適用するこ

とで、同様の対称性が現れるという点は重要である。この内容は以下の表から確認することができる。

奇数番号の章	節数	合計
15	99	114
21	112	133
39	75	114
41	54	95
55	78	133
107	7	114

奇数番号の章の、章番号と節数の合計	総計
15+21+39+41+55+107+99+112+75+54+78+7	= 703

奇数番号の章の、章番号の節数の合計	総計
1+5+2+1+3+9+4+1+5+5+1+0+7+9+9+1+1+2+7+5+5+4+7+8+7	＝103

章番号	奇数番号の節の合計	総計
6	165	171
15	99	114
39	75	114
42	53	95
50	45	95
107	7	114

奇数の節数を持つ章の、章番号と節数の数値の合計	総計
6+15+39+42+50+107+165+99+75+53+45+7	＝703

奇数番号の章の、章番号と節数の数値の合計	総計
6+1+5+3+9+4+2+5+0+1+0+7+1+6+5+9+9+7+5+5+3+4+5+7	= 103

私たちが調査しているのはたった一つの書物である。この書物には、宇宙、地球、生物、歴史について驚くべき説明があり、神とのつながりを築かせるという非常に重要な機能を果たしている。また、この書物は人生に意味を与え、歴史において非常に重大な役割を担ってきた。このような書物の中に、非常に巧妙に保護されていることを示す数学的なシステムが見られる。そして、あらゆる反論に対しても扉を閉ざすかのように、およそ1400年前に「奇数と偶数に誓う」という表現がこの書物に記されており、保護のメカニズムの一つを指し示している。このような特性を持つ書物が、世界のどの書物に存在するというのか。神と他のいかなる書物よりも深く結びつかせてくれるこの書物が、他のどの書物にも存

在しない驚異的な特性をも兼ね備えているのであれば、それはこの書物が神からのものであると信じるに足る証拠ではないだろうか。

17章 イスラー章88節：言え：「たとえ全ての人間とジン（幽精）が、このクルアーンに似たものを作るために集まり、互いに協力し合ったとしても、その類似を作り出すことはできない。」

補足：来世を信じるための礎

イスラムの信仰には三つの基本的な教えがある。第一は、非常に偉大な力と知識を持つ、永遠なる神の存在である。第二は、ムハンマドが預言者であり、クルアーンが神聖な啓示であるということ。第三は、来世における復活、審判、報いと罰の存在である。以前に書いた著作では、第一の教えを理論的に支えようと努めた[154]。本書では、これらのうち第二の教えを理論的に支えようとした。そして本書のこの補足の章では、第三の教えがどのように理論づけられるかについて簡潔に述べることにする。

神の存在を理解することは、第二と第三の教えにある事柄が可能であることの理解へとつながる。つまり、神の存在を理解する者は、預言者が存在することも、来世が存在することも可能であると理解できる。そして、そ

[154] 次の拙著を参照されたい。: Caner Taslaman 著, Allah'ın Varlığının 12 Delili, 出版元：Destek Yayınları, İstanbul, 2018; Caner Taslaman 著, Fıtrat Delilleri, 出版元：İstanbul Yayınevi, İstanbul, 2018.

れらが「可能である」と理解されることは、極めて大きな一歩を踏み出したことになる。来世で再び創造されること（死後の復活）を否定する最も大きな理由は、人が死に、土に還ったあとに、どのように再び創造されるのかが理解できないことにある。しかし、神の存在を理解するとは、何百億もの星を持つ宇宙や銀河、植物、動物、そして聴覚・視覚などあらゆる感覚をもつ人間の創造を理解するということに他ならない。神の存在を理解することによって、人生において生まれつき盲目だった者が視力を得る以上の大きな違いが生まれる。神は、自分以外のすべての存在を無から創造したのであり、その神にとって再創造を行うこと、つまり人間を新たな形で再び創り、その人間が存在する新たな環境を創ることは非常に容易なことである。神の存在を理解するとは、来世の存在が「可能である」と理解することと同義である。クルアーンでは、来世の存在を否定する不信仰者たちに対し、宇宙、地上、人間において私たちが目撃する創造そのものが、再創造がいかに容易であるかを理解させるに足る証拠であると強調されている。

イスラー章 17-49：彼らは言った。「我々が骨となり、土となって崩れた後、本当に我々が新たな創造によって復活させられるのか？」

50：言え。「石にでも、鉄にでもなるがよい。」

51：「あるいは、あなた方の心の中で想像もできないような、他のどんな創造物でもよい。」彼らは言うだろう。「誰が我々を戻すのか？」

言え。「最初にあなた方を創った方が、それを行う。」

ルクマーン章 31-28：あなた方の創造も復活も、ただ一人の人間のそれと同じである。神は聞く者であり、見る者である。

ヤー・スィーン章 36-77：人間は、自分がほんの少しの液体から創られたことを見ないのか？ それなのに今や彼は、明白な敵となっている。

78：自らの創造を忘れて、われわれにたとえを示そうとする。彼は言う。「朽ち果てた骨を誰が甦らせるのか？」

79：言え。「それらを最初に創造した方が復活させる。かれこそが、あらゆる創造を知っている者である。」

アフカーフ章 46-33：彼らは見ないのか？ 天と地を創り、それによって疲れることのない神が、死者をも生き返らせる力を持っているということを。まさに、かれはすべてにおいて力を持つ者である。

カーフ章 50-2：いや、不信仰者たちは、自分たちの中から警告者が現れたことに驚き、こう言った。「これは驚くべきことだ。」

3：「我々が死んで土となった後に？ そんな復活は遠すぎる。」

4：実に、地が彼らから何を減らしたのか、われわれは知っている。わがもとには、すべてが記録された書がある。

本書全体を通じて証明されたように、イスラムが神によって遣わされた宗教であることを理解することは、来世での再創造、審判、報いと罰が存在することを理解する上で決定的な証拠となる。クルアーンの何百もの節に

おいて、来世での再創造、審判、罰せられること、そして報いを受けることが語られている。神の存在を理解した者は、神にとって来世を創造することが極めて容易であることをも理解する。イスラムが神の宗教であることを理解した者は、神が来世での再創造を吉報として告げていることを見るだろう。神にとって創造は極めて容易なことであり、クルアーンの何百もの節で語られている来世に関する吉報は、来世の存在を信じるために十分な根拠である。イスラムを信じることは、来世を信じることでもある。この書物を重要なものにしている要素の一つもまさにこれである。イスラムが神から送られた宗教であることを理解する者は、時間の経過とともに、自分自身や愛する者たちが死によって消滅の闇に向かって進んでいるのではなく、むしろ死が、新たに生まれた赤子にとっての誕生のように、私たちにとって新たな人生への扉であることを理解する。本書は、存在論的観点からも極めて重要なこの問題の根拠づけを扱っている。

「来世の存在への信仰は、イスラムが神の送った宗教であることを理解することで、決定的な根拠を得た」として、この議論をここで終えることもできよう。だが私はそうはしない。来世の存在という、イスラムの内容およ

び存在論的にこれほど重要な吉報の、イスラムでの啓示以外のいくつかの証拠も示そうと思う。来世の存在を示す証拠は、クルアーンにおいて神の紹介の次に最も重要なメッセージが来世の紹介であることから、来世に関するこのメッセージの正しさを確認することを通じて、イスラムが神の宗教であることを裏づける。

私が提示しようとする証拠の一つは、本書の第二部で「フィトラ（人間の本質）」に関連して扱った「自然な欲求」から導き出された証拠である。その章で語られたことを繰り返さないため、ここでは再度述べない。その章をよく読めば、生まれながらにして私たちに備わっている「生きたい」「恐れから解放されたい」「幸福になりたい」といった欲求の一つひとつが、来世の存在を必要としていることが理解できるだろう。ここで述べようとしている点は、ペルシャのことわざで非常に簡潔に表現されている。「与えようとしなければ、欲求すら与えなかったであろう。」要するに、神が来世の生命を創造しようとしなかったのであれば、私たちの欲求を来世を望むようには創らなかったであろう。すべての人に共通して備わっている自然な欲求が来世を指向していることこそ、神が来世を創造するという証拠である。このよう

な考え方に、キリスト教神学者ノーマン・ガイスラーの次の論証にも見られる。

1-あらゆる自然な欲求には、それを満たす対象が存在する。

2-来世での生が存在することは、人間の自然で、生まれつき備わった欲求である。

3-したがって、死後に来世での生が存在する[155]。

この議論をガイスラーは演繹法の形で示している。だが、望むならば、来世の存在が自然な欲求であることから、この欲求を創造した神が来世を創造することのほうが「より期待される」と言い、この議論を「最善説明の形」に転換することもできる。フロイト、フォイエルバッハ、サルトルのような有名な無神論者は、人々が神の

[155] Norman Geisler 著, Baker Encyclopedia of Christian Apologetics, 出版元：Baker Book House, Grand Rapids, 1999, p. 282.

存在を信じる根本的な理由の中に来世の生活を望むことがあると考えており、もしこのような議論を聞いたならば、次のように言うことが想像に難くない。「もし神がいるならば、あなたの議論は非常に説得力があるだろう。しかし神はいない」と。一方で、神の存在を信じていると言いながらも来世の存在を否定するか疑う人々も存在する。ここで自然な欲求から来世の存在を基礎付けるこの証明は、そのような人々に対して証拠となる。私たちの自然な欲求が来世の信仰へと向かわせるのは偶然ではない。神は、生まれつき持つ欲求を、私たちを来世の信仰に導くように創造したのである。

本書の本性（フィトラ）に関する章で示された「生得的な道徳性」に基づく証明もまた来世の信仰を支持している。その章を読めば、ここで簡単に述べたこともより理解できるだろう。生まれつきの道徳構造は、道徳的な命令を持つ神の存在を必要とし、これらの命令が人間に伝えられていることを示唆している。以前の研究と本書の本性に関する章で、私は、生まれつきの道徳構造が神の存在と神の道徳的命令を含む宗教の存在の証拠であると主張した[156]。もし神からの道徳的命令があるならば、

[156] 拙著「Fıtrat Delilleri」（フィトラの証拠）の「Doğuştan Ahlak Delili」（生得的な道徳の証拠）の章を参照されたい。

それに従う者と従わない者を区別する必要がある。しかし、この世では多くの殺人者や孤児の権利を侵す者、世界を荒廃させる者が報いを受けずに死んでいるのが見られる。それに対して、神の命令を守る多くの善人は非常に苦しい生活を送ることもある。この状況は、神の道徳的命令に従う者と従わない者が報いを受けるのは来世であることの（宗教が来世の存在を告げることに加えた）証拠である。私たちが被創造性（フィトラ）に基づいて持つ正義感[157]は、この世界で悪人が善人よりも良い生活を送ることが可能なことに対して、正義が実現される来世の生活を求めている。

拙著「Fıtrat Delilleri」の道徳に関する章では、プラトン以来議論されてきた「エウテュプロンのジレンマ（Euthyphro Dilemma）」と呼ばれる問題を扱った。すなわち、「神は何かを命じるから善であるのか、それとも何かが善であるから神はそれを命じるのか」という二者択一の問題である。多くの哲学者や神学者と同様に、私はこのジレンマが偽の（疑似的な）二者択一であると考えている。すなわち、神自身が善であるがゆえに善を

[157] 拙著「Fıtrat Delilleri」で、私たちが「正義感」を生まれつき持っていることを示すデータ（例えば言葉を話す時期の前の子供たちに行われたパペットの実験）を、このテーマに関する現代心理学と認知科学で行われている研究に基づいて伝えた。

命じるのである。神の外にあって神を制約する善もなければ、神の命令が偶然に善であるという問題も存在しない。善を神の本質（神の本質に属する属性）に基づかせることは、善に対して最も堅固な根拠を与えることである。結果として、生得的な道徳の証明によって、本質的に善である神の存在が基礎付けられ、神の道徳的命令の源泉がこの堅固な根拠にあると私は主張した。

これを理解した後に、世界において善と悪の行為をする人間たちを考察しよう。例えば、スレブレニツァで無実の人々を殺害した悪者たちに対して、無実の者たちを死から救おうとして命を落とした善き人々を世界中の人々が目の当たりにした。もし来世が存在しなければ、世界に現れた善と悪の行為の間に何の違いもなくなるであろう。しかし、本質的に善である神が、世界の善と悪を同等とし、悪が行ったことを容認し悪を善の前に立たせるなどということは考えられない。結果として、神の本質が善であることを理解し、世界の現象を観察する者にとっては、来世の多くの証拠が見えてくるのである。

また、本書のフィトラ（人間の本質）に関する章で提示された「意志」に基づく証明も来世の信仰を支持する。そこに示されたように、貧しい者や弱い者を助ける

善行と、人の財産を奪ったり不正に利益を得たりする悪行のどちらかを選択できるのは、私たちが意志を持つ存在であるからである。神が望めば、私たちに意志を与えなかっただろう。その場合、「善」と「悪」という概念には意味がなくなる。そうなれば、人間の行為と岩が転がることの間に差異はなくなるだろう。意志を持つ存在として、善と悪の行為の間で選択ができる世界にいることの最善の説明は、この世界が試練の場であるということである。この説明に疑問を呈する者もいるかもしれないが、意志を持ち、善と悪の間で選択できるように創造されたことの説明として、「試練のためである」という答えより良いものは存在しない。試練の世界で行われた行為には報いがあるはずであり、この世界では意志による行為が報われないことは明らかである。つまり、意志の存在と私たちが試練の世界にいるという現象を熟考すると、善と悪の報いがなされる来世が存在しなければならないという結論に達するのである。

世界を見渡すと、次のような光景に出会う。神を信じる多くの者たちは、来世を創造することは神にとって非常に容易であると語り、来世における再創造があることを主張している。一方で、神の存在を否定する多くの者

は、「腐って骨になった後、誰がそれを復活させるのか」と言って来世の存在を否定し、来世の存在を信じる者たちを嘲笑している。神の存在を理解する者は、来世を創造することを非常に容易とする創造主の存在を理解したことになる。また、否定者たちが信じる者たちを嘲笑していることを神が知っていることも理解する。このことを知る者にとって、来世を創造することが非常に容易な神が来世を創造することは、創造しないよりもむしろ期待される。神が来世を創造せず、否定者たちを正当化し、信じて信頼する者たちを誤らせることは期待されない。

神を信じる者たちを観察すると、次のような現象が見られる。神にとって来世を創造することは非常に容易であると信じるこの人々は、来世で再び創造され、愛する者たちと再会するために祈っている。そしてこの祈りは、多くの祈りの中でも平凡な祈りではない。むしろ心の最も奥深くから、最も強い願望と粘り強さをもってなされる祈りである。神が、被造物である人間を祈ることで自らに向かうように創造したことを忘れてはならない。また、人間を「祈りを捧げることができる存在」として創造したのも神であることを忘れてはならない。そ

れは、来世を創造することを非常に容易とし、この誠実な祈りを聞く神が、もしその送った宗教によって来世の存在を一切知らせていなかったとしても、自らに向けられるこの真心の祈りに応えて来世の存在を創造することを期待する理由になっていたであろう。

宇宙を観察すると、数千億の銀河、数京の星々、何百万もの生物種を含む地球が驚異的な場所であることが分かる。このような素晴らしい環境に目を開いた人間は、色彩、香り、味覚、多様な感情を通じて周囲の環境を目の当たりにする。宇宙や地球で観察され、体験されるこれら全ての驚異を前に、人生は非常に短い。まるで壮麗な装飾を施した劇場の舞台が開かれ、その後、見事な出演者と装飾を見ることになるが、この見事さに反して劇場の幕は一瞬で閉じられる。この光景について考察する者は、「これが全てか？」と問いかけ、この素晴らしい出演者と装飾が一瞬のためだけに示されているわけではないと理解するだろう。神がこの宇宙で示した驚異的な構造、権能、知識、そして芸術が、ただこの非常に短い人生のためだけに示されたものではないことを認識するだろう。宇宙に存在する壮麗さと人生の非常に短いこととの不均衡は、人間がただこの世の人生だけのために創

造されたのではなく、来世が存在するという考えを支持する。

本書の意味に関する章では、人間が「意味を求める存在」として創造されていること、そして人生に意味のある進路を描くことが人間の創造に由来する必要であることに着目した。非常に長い未来と結びつく形で創造された人間の思考は、その構造上、「どこへ行くのか？」と問う。来世の信仰を持たずに、私たちの最も深い意味への探求を満たすような人生の進路を描くことは不可能である。もしこの短い人生で死が終着点であり、再び存在し、愛する者と再会することができないなら、人生の全てが無意味に見えてくる。簡潔に言えば、人間を「意味を求める存在」として創造した神は、この探求を宗教と来世の信仰へと導いている。私たちに内在する意味探求の鍵を開ける鍵が来世への信仰であり、私たちの意味探求に関する鍵の来世という存在の証拠の一つである。結局のところ、本書でイスラムが神の宗教であること（クルアーンが神から送られた書であること）を示すすべての証拠は、イスラムの最も重要なメッセージの一つである「来世の存在」を示すための証拠でもある。この補足章では、クルアーンが来世の存在を知らせていること以

外に、宇宙や人間の本質（フィトラ）から来世の存在を示すいくつかの証拠にも簡単に触れた。ここで重要なのは、来世の信仰に関して現れる全体的な状況、すなわちこれらの異なる証拠が来世の存在を示す力を結集することである。

あとがき

誰かが「なぜあなたはムスリムなのか」と尋ね、創造主である神が送った宗教としてのイスラム教を信じる根拠を問いただすならば、この本の内容がその答えとなる。この本には予定された分量があり、したがって他に提示可能な証拠や、ここで取り上げたテーマの詳細の一部は本書から省略した。本書で提示した証拠は 10 の主要な見出しとその下位項目として提示してある。ここに示された証拠は、理神論、キリスト教の伝道活動、ニューエイジ運動、あるいはその他の形態でイスラム教が神から送られた宗教であることを否定する者たちに対する回答としての性質を持つ。イスラムが神からの宗教であることを誠実に理解しようとする者たちを助け、イスラムへの信仰の根拠を理解しようとする者たちの必要に応え、またイスラムに対する否定的な態度に答える努力のためにこの本を書いたのである。この本はイスラムの中の特定の見解や特定の宗派を基盤に書かれたものではなく、クルアーンが神からの啓示であり、ムハンマドが神

の預言者であるというイスラムの範囲内で誰もが認める基本を証明することを目的に書かれたことを改めて強調したい。

ある者はこの本で提示された証拠の中でより哲学的な「人間の本質（フィトラ）」に関するものを、ある者は物理学の領域に関するクルアーンの宇宙の記述を、またある者は歴史からの示唆を、ある者は数学的なデータを、また別の者は他の章をそれぞれより強く、より印象的と感じるであろう。誰もが全ての章の全ての見出しに同じ程度に影響を受けるわけではないことは承知している。しかし決して忘れてはならず、この本を通して常に念頭に置かなければならない点は以下である。この本で提示されたすべての驚異的な事象、全ての重要な特徴は、たった一つの書物、すなわちクルアーンに関わっている。この唯一の書物は、神を語り、神を数十億の生命の中心に据え、人生に意味をもたらし、宇宙、地球、生物について 7 世紀の人間や人間集団には到底説明できない内容を含み、歴史において比類なき役割を果たしたムハンマドを通じて人々と出会い、時代を超越した思想を構築し、数学的な構造が変わらないことを示し、唯一無二の書物である。ここで 10 の主要な見出しとその下位

項目として提示された証拠は、一つずつ評価した後、それらすべてが作り出す総合的な状況の力を必ず考慮しなければならない。この本で示されたものの真の価値を理解するためには「総合的状況」の評価が極めて重要である。

イスラムが神の宗教である証拠を確かめた者に待ち受ける二つの危険について警告したい。一つは、これらの証拠に感銘を受けるものの、その感銘が彼の人生に重大な反映をもたらさないことである。だが神はクルアーン全体を通じて信仰と行いを共に語り、私たちの信仰は行いに反映されるべきであると示している。目撃した事象は多くの事象の一つではなく、存在に関わる最も重要な事象であり、その最も重要なものの重要性を理解した証として、私たちは行動をそれに応じて形作るべきである。二つ目は、証拠を確かめた者の中でそれらの証拠の影響が時間とともに薄れることである。だが神の存在は決してその重要性を失わず、他の全ての事柄の総和の重要性は神の前では無価値であるから、私たちが神と関係を築くことの重要性も決して減少しない。「私はムスリムである」と言うことは、「私は神と関係を築いている」「私は創造主である神に向かっている」ということ

である。これらの証拠は私たちを創造主へ、そして創造主が望む形で創造主と関係を築く（これがイスラムである）よう導くので、決してその重要性を失ってはならない。

イスラムの証拠は過去に終わった、取り戻せない事象ではない。イスラムの証拠は、私たちの手に届き、7 世紀の一人の人間や人間集団が書いたかどうかを客観的に評価できるクルアーンである。

クルアーンの神聖な起源を理解した後、注意すべきことは以下である。クルアーンの起源は神聖であるが、宗派や学派、私たち自身のクルアーンの解釈は人間によるものである。したがってクルアーン自体には誤りはないが、解釈や私たちの理解には誤りがあり得ることを知るべきである。異なる解釈はズマル章 39-18 の勧告に従い聞き入れ、判断を下すべきである。異なる意見を評価する際にタクフィール（異端宣言）をせず、頑なにならず、相手を打ち負かすためでなく真理を学ぶために努めることが重要な点であると考える。

ズマル章 39-18：彼らは言葉を聞き、その中で最も優れたものに従う者たちである。彼らこそ神が導きに至らせ、事柄の本質に通じる者たちである。

人生の最も重要な問いに答えるクルアーンは、私たちの手の届く書物として、真剣に取り上げられ検討されるのを待っている。まずこの検討は単なる評価ではなく、人生の最も重要な問いに対する答えを見つけ、人生の道筋を定めるための検討であることを認識すべきである。イスラムが神の宗教であることを理解することは、単なる一つの知識を得ることではない。全てを根本から揺るがし、人生や愛する者たちへの視点を根本的に変えることである。イスラムが神からのものであることは、創造主との関係を築くことが可能であること、人生に意味があること、死が私たち自身にとっても愛する者にとっても終わりではないこと、行った行為について死後に尋問されること、そして愛する者たちと死後に再会できる可能性があることを意味する。これらよりも重要で、これらよりも心揺さぶられ、これらよりも壮大なことが存在するだろうか。まさにこの本では、この壮大な真理への信仰の根拠を提示しようと努めたのである。

イブラヒム章 14-1：アリフ、ラム、ラー。これは書物である。あなたの主の許しによって、人々を闇から光へ、すぐれた、称賛に値する者（神）の道へ導くためにあなたに下された。